

# 中学生提督日記

高菜ニーサン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この小説は『宮戸島のお気楽提督と電 (<https://syosetu.org/novel/160409/>)』と同世界線のお話です。

(38話からの分岐続編とも言えます)

先にそちらの方から見ていただけると幸いです。

### ■長編「ジレーネ編」

提督不足にあえぐ大本営は一つの無茶苦茶な決定をした。

適正のある中学生になる少女を提督に任命するという。

そんな新米中学生提督と、愉快的大人たち、そして艦娘が織りなす対深海棲艦戦記。

そして敵は深海棲艦だけではなかった。

### ■短編「ママは中学生提督」

深海棲艦と手を取り合った日本。　だが海賊化した艦娘や深海棲艦

害獣化したイ級などの知性のない深海棲艦。

まだまだ、提督はクビにならない愛ちゃんだが、なんと1児のママ。ママは提督で中学生！

1年1組は皆で生まれてくる子供を守っていけるか！

そして、提督業もうまくやっていけるのか  
改題しました

旧題「中学生提督と艦娘」

☆土曜更新（予定）

※「艦娘日和」の登場人物が出てきますが、いわゆるスターシステムというやつです。

※感想には必ず目を通し、可能な限りお返事させていただきます。

※整合性の取れない部分は後だし有効で直す場合があります。

※多少の矛盾は大目に見ていただけると幸いです

※更新が遅くても怒らないでください

※アズールレーンの設定を一部参考に取り入れています。

※いろんなゲームから名称を参考にしていきます

※アンチ・ヘイトは保険です

# 目次

## 長編「ジレーネ」編

着任初日	1
歓迎会	12
初陣くリーヴェ・サーカスく	26
学校で	44
参観日く越えられない壁く	61
青い空、白い雲、折れた翼	76
土佐へく花梨の大爆発く	95
接触と疑心	117
再起！リーヴェサーカス団	139
第1次デスペラン攻防戦	153
健太の闇と足立の真実	173
死闘くそれぞれの戦い	188
愛が勝つ！	204
短編集「ママは中学生提督」編	
警務隊長は問題児!?	214
戦死者の墓参	226
出産	234
秋也のブラック鎮守府始末記	246
深海提督とほっぽちゃんの四国訪問記	258
真愛ちゃんの大冒険	269
東京への旅く祝福の船出く	278
艦娘たちの猛特訓	289
クリスマスウエディング&バースデー	304

お引越しと年末のひととき	322
真愛ちゃんとまゆちゃんとしちゃん	338
鐵太郎さんと小夜子さんの土佐鎮守府訪問記	347
辞令	353
春は別れの季節	361
帰郷への旅立ち	368

## 長編「ジレーネ」編

### 着任初日

2011年3月11日、人々から『悪夢の日』ナイトメア・デイと呼ばれるその日がやって来た。

突如世界中の海に、『深海棲艦』と呼ばれる化物バケモノが現れたのだ。

その化物は、何故か日本を集中的に襲い、素手や武器による近接攻撃以外の通常兵器は一切通用せず、次々と護衛艦が沈んで行った。

日本はもう終わりか？誰もがそう思ったその時、

艦娘と呼ばれる存在が次々と現れて、深海棲艦と戦い始めた。

海上自衛隊は、その艦娘達かんむすに協力を約束し、全国に鎮守府ちんじゆふと呼ばれる拠点を作り、

陸海空三自衛隊自衛官の中から、艦娘と親和性のある人材。

つまりは、艦娘と共に頭れた妖精さん達が見える存在を選抜し、

「提督」ていとくとして送り込んだ。

その戦争が始まって、もう七年が経過していた。

提督と艦娘には『自由裁量』権を与えて、法整備が追い付くまで自由を与えていた。

その間に、グレーゾーンが拡大して立法が追いつかなくなって行った……

腐敗や不正の温床となっている、『自由裁量』という超法規的措置に對抗する為、艦娘と提督達を統括する統合幕僚監部直属の組織、大本営に警務隊を置いて腐敗や不正を順次一掃して行った。裏では法の裁きを逃れる、腐敗した提督を闇へと葬りながら……

結果、提督の数が足りなくなり、自衛隊ではエースパイロットから医務官、そして会計部署の自衛官まで掻き集めて、妖精さん達が見える人材を無理やり鎮守府に送り込んでいた。

そしてここに、『自由裁量』の超法規的措置の最たる人事が発令された……

そう。四月に中学一年生になる少女を、提督として送り込むと言う

のだった。

2019年三月末。

小学校を卒業したばかりの笹野 愛は、特任一等海尉・室戸鎮守府司令官として、四国の最前線室戸鎮守府に向かっていた。

艦娘を指揮統率する人間は、妖精が見えていないと務まらない。彼女は、妖精が見える人材として、艦娘と提督を統括する大本営幕僚総監大貫 悟空将直々の依頼を受諾して提督となった。

袖口に、二本ラインと桜の刺繍の付いた一等海尉のダブルの黒いスーツ型である曹・幹部用冬服を身に着けており、特任を表す徽章と提督の徽章がキラキラと輝いている。

後部座席に、愛と一緒に座っている室戸鎮守府司令官付の大石健太も、セーラータイプの黒い制服で、腕には士長の階級章を着けている。

健太と愛は恋人同士で、愛は彼の同行を条件に、提督への着任に同意したのだ。

車を運転している、室戸鎮守府司令官副官である羽佐間花梨はざまかりんは、三尉の階級章を着けた陸上自衛隊の緑の制服を身に着けている。

父親も自衛官で提督をしており、ついこの間まで父の下で副官をしていたが、この度の愛の着任により、同じく異動となった。

途中東京で一泊し、大本営に立ち寄って正式な辞令を受け、制服一式を受け取り、大阪で一泊、朝から室戸に向かっている。

室戸鎮守府に近づいた時、花梨が口を開く。

「提督、健太君、そろそろ室戸鎮守府に到着します。一昨日、大貫空将から聞いた話をおさらいしておきましょう。前任司令官は深海棲艦との戦いにより戦死……となっておりますが、実際は余りにも非道な鎮守府運営の為粛清されました。もちろんこれはトップシークレットです」

「はい、大貫空将から聞いています」

この三人は、「裏の警務隊」の存在を知っている。宮戸島騒動で出会った、村上一尉がそれだと知った時に驚きはしたが、シヨックはあまり受けなかった。

「その後、室戸鎮守府は改築され、コンクリート造りの鎮守府庁舎と男

女官舎によって構成されております。司令部メンバーは司令官である笹野 愛提督を筆頭に、参謀長大塚 武・一等海尉、副参謀長岩崎浩三・二等陸尉、陸戦隊長に小杉賢二・一等陸尉、陸戦隊は一個中隊で、深海棲艦との実戦経験のある精鋭を集めました。建設中の基地航空隊長には、艦載機・戦闘機妖精が見える大垣 翼・二等空尉。投入される航空隊は二個部隊、つまりは八機隊の陸上機を配備予定です。最後に、小官が副官として提督のサポートをします」

運転しながらスラスラと説明する花梨に、二人は大貫空将からもらった司令部プロフィールを見ながら、説明を聞いている。

花梨の類稀なる記憶力に、二人は純粹に凄い、と思っていた。「配属される艦隊は一個艦隊六名の艦娘。旗艦にはビスマルク、副旗艦にアイオワと、海外からの出向艦を用意しました。以下伊勢、鳳翔、大井、北上。ビスマルクは *dre i* 改装、伊勢・大井・北上は改二改装、アイオワと鳳翔は改装済みです」

花梨の説明は続く。

「ビスマルクは、ドイツで『艦隊運用の名人』と呼ばれていたので、実戦での艦隊運用は彼女にお任せしても良いでしょう」

「分かりました」

「はい」

一通りの説明をした頃に、漸く鎮守府が見えて来た。

鎮守府前に車を停めると、中から幕僚達が出て来て出迎える。

「降車したら、敬礼されると思いますので答礼してください。その際健太君は、彼女の後ろで答礼してください」

そう花梨が説明すると、先に健太が降りて、その後に愛が車を降りる。

健太は、愛の一步後ろに下がる。

大塚一尉の「司令官殿に敬礼！」と言う号令と共に、全員が敬礼すると、愛と健太もビシツと背筋を伸ばして、答礼を行う。

「早速、自己紹介をさせていただきます。小官が参謀長を務めます、大塚 武一等海尉であります。前任地は硫黄島要塞でした。どうぞ宜しくお願いします」



大塚一尉は、眼鏡にラウンド髭を蓄えた、年齢よりも年上に見える男である。冷静そうで物静かな佇まいは、愛を信頼させるに十分な風格を持っている。硫黄島要塞で作戦参謀をしていた優秀な男である。「ようこそ室戸鎮守府へ。副参謀長の岩崎浩三、二等陸尉であります。いやあ、若いとは聞いていましたが、大本営も思い切った人事をなさったものですな。基本的には、一尉殿のお手伝いをさせていただくことになります」

岩崎二尉は、二メートル近い身長と、恰幅のいい巨漢で、明るく陽気な男である。有事の時には守ってくれそうな男だ、と愛は考える。

移動中に確認したプロフィールには、大塚一尉と同じく、前任地は硫黄島要塞と書かれている。

「陸戦隊長の小杉賢二、一等陸尉であります。有事には一尉殿の護衛を務めさせていただきます。陸戦隊員は追々紹介して行きますので、よろしくお願いします」

小杉一尉は渋い声の青年である。引き締まった肉体と、高菜二佐も持っている格闘や体力・レンジャー徽章の持ち主で、白兵戦技は信頼できそうである。

前任地は横須賀鎮守府の陸戦隊で、深海棲艦の侵攻を水際で守っていた歴戦の勇士である。

「宜しく、司令官。基地航空隊隊長の、大垣 翼二等空尉だよ。まあ、航空隊基地が完成するまでは無任所の身だし、暇を持て余す身になるから宜しくお願いね？」

大垣 翼は全自衛隊で唯一、深海棲艦の航空機での撃沈スコアを持っているエースパイロットである。プロフィールには、元暴走族レディースからパイロットを目指し航空自衛隊に入隊、深海棲艦に主翼をぶつける、と言う頭のおかしな方法で、航空機を近接物理武器として用い、戦艦棲姫等を木っ端微塵にした女、と記載されている。しかも何度も。チャラそうで軽そうな人だな、と愛は感じていた。

そんな大垣二尉に、大塚一尉がオツホンと咳払いをすると、ビシツと敬礼をし直す。

「私は、今日よりこの鎮守府に司令官として着任しました笹野 愛で

す。皆さんのお力に頼ることになりますが、どうぞよろしく願います。」

愛は、元気に自己紹介をすると、

「自分は、司令官付きとして愛ちゃ……提督のお世話をさせていただく大石健太です。よろしくお願いします」

同じく、背筋を伸ばして自己紹介する健太に、

「ねえねえ、二人は恋人って聞いたけど、もうやったの？しちやったの？」

と、翼が指で抜き差しする仕草を見ると、大塚一尉が、

「そんな訳無いだろう。貴官の男性遍歴と一緒にするな」

と諫めるも、顔を赤くして目を逸らす二人に、

「最近の子供は早いのだな……」

と、苦笑いを浮かべる。

「ヒュウ、やるじゃん！あたしだって、初めてしたのは中二の時だからねえ。最近の子は早熟だねえ」

と、翼はケラケラ笑っている。

「着任早々、陸戦隊の若いのに手を出したそうだから、大石士長も気をつけるんだな？」

「そんなことはさせません！絶対に！」

小杉一尉が冗談めかして誂うと、愛は健太を守るように両手を広げる。

言われた翼は、ケラケラと笑っている。

「司令官殿の許可がない限りは、手を出さないやい」

車を停めてやって来た花梨が、

「私の父は、人妻でもお構いなく手を出していましたから、大垣二尉は父と同類、と言うことなんですね？紹介が遅れました、司令官の副官を拝命いたしました、羽佐間花梨三等陸尉です」

と、毒舌を言いながら自己紹介をする。岩崎二尉が笑いながら、

「とまあ、艦娘隊幕僚はこんな軽いノリなんで、提督も大石士長も、リラックスするんですな」

と、場を和ませる。

「それでは、艦娘の紹介をしますので、軍港にご案内します」

鎮守府で、一番真面目な大塚一尉が先導すると、一同は鎮守府庁舎に入り、軍港へと向かう。

「当鎮守府では、男性官舎と女性官舎兼艦娘寮と分かれており、寮長はそれぞれ小官とビスマルクが務めます。当然ながら、異性の官舎は立入禁止です。提督は、執務室隣室の提督用官舎にて生活していただきます。お食事は、駐屯地ほど広くありませんので、食堂が作れませんでしたから、近隣の提携レストランや食堂・コンビニで使用できる食事を支給、と言う形になります。提督の分は執務室に用意してあります。大石士長は、基本的に男性官舎に入ってもらうことになりませんが、司令官従卒を兼ねている為、提督官舎への出入りに関しては咎められないでしょう。節度ある生活をお願いします」

言外に、余り羽目を外さないように、と釘を刺されると、二人はちよつと顔を赤らめる。

「小官と小杉一尉、ビスマルクが同階級ですが、実質的に提督は准佐官だ、とお考えになっていただいて構いません」

「わかりました」

裏口から軍港に出ると、新しく打ち直したコンクリートの埠頭に、六人の艦娘達が水上に並んで、敬礼して出迎える。

埠頭の横では、航空隊基地が建設中であり、工事中の幕が張られている。

今日は着任日の為、工事はお休みしているようだ。

愛が健太を伴い埠頭の先まで向かうと、ビスマルクから自己紹介が始まる。

「Guten Tag、可愛い提督。私はビスマルク型戦艦のネームシップ、ビスマルク。室戸鎮守府艦隊の旗艦よ。階級は大尉、もとい一尉。艦隊運用は任せなさい」

ビスマルクは、自信満々の笑みを湛えて敬礼している。

「ハイ・ミーがアイオワよ。宜しくね、プリティアドミラル。階級はルーネテント・ジュニア・グレード…二尉ってやつね！」

テンションが高い、ジ・アメリカンな感じのアイオワがウインクス

る。

「鳳翔です、よろしくお願いしますね。前任伍長、艦娘の纏め役を仰せ付かっています」

優しそうな笑みを浮かべて、敬礼している。

「要するに、ビスマルクとミーに次ぐナンバースリーね！階級は曹長よ」

アイオワが、前任伍長について補足してくれる。

「提督！改装航空母艦、伊勢、よろしくお願いします。曹長です」

こちらは、真つ直ぐ愛の顔を見て敬礼をしている。

「大井よ、階級は二曹。提督が女の子で良かったわ。そっちの士長、北上さんに手を出したら、魚雷叩き込むわよ？」

「こちら、大井つち。私は北上、大井つちと同じく二曹、よろしくね」

敬礼したままであるが、早速健太を威嚇する大井に、それを宥める北上。二人は親密な仲のようだ。

「今日より、皆さんの指揮を執ります、笹野 愛一尉です。よろしくお願いします！」

「司令官付の大石健太士長です。よろしくお願いします！」

二人も、ビシツと背筋を伸ばして答礼を行った。

こうして、通称『愛ちゃん艦隊』が結成された。

『どうだい？艦隊司令官の椅子の座り心地は？』

支給された業務用携帯に、早速電話が掛かってきた。電話の主は、もちろん高菜直哉二等陸佐である。

「あはは、皆いい人で良かったです」

『それは良かった。そうそう、着任祝いの良いものを送ったよ。今日には届いてる筈だから、羽佐間三尉に確認してもらおうと良いよ』

執務机の、エグゼクティブチェアに座りながら電話を受ける。

執務室には、副官である花梨と、司令官のお付きである健太が脇に控えている。本当にやることのない翼も屯っていて、健太に愛との恋の進展状況を尋問していて、それを花梨がジト目で見ている。艦隊司令部では、花梨は階級が一番下なので大っぴらに注意できないのだ。

外では、艦娘達がビスマルクを中心に、近海で艦隊陣形の演習を行っており、埠頭では小杉一尉等陸戦隊員がトレーニングをしている。

隣の参謀部では、参謀長たる大塚一尉が平時の仕事である、哨戒計画の立案を行っている。

副参謀長の岩崎二尉が、書類整理の仕事をしている。妖精さん達も張り切ってお仕事をしている。

浜松での出来事等、いろいろ引き出されている間も、師弟の会話は弾んでいる。

『まあ、いろいろ大変だと思うけど、頑張りなさい』  
「はいー」

電話を切るのを見計らって、花梨が声を掛ける。

「提督、お電話の間に大垣二尉が、大石士長から浜松での『間違い』の一件について聞き出しますが、大丈夫ですか?」

「だいじよばないです!もう、何で話しちゃうの!」

頬を膨らませている愛に、健太が、

「ご、ごめん……」

と、申し訳無さそうな顔をする。

「あはは、ラブラブなのは結構結構。青春は謳歌しないとね!」

と、サムズアップする翼。繰り返すが、基地航空隊は準備中の為、本当にやることがないのだ。

航空隊基地建設を間に合わせられなかった施設科と、着任を遅らせなかった大本営人事部、そして陸上戦闘機の製造が著しく遅れている、明石等大本営工廠部のトリプルミスである。工廠部のミスの原因は、51cm連装砲ちゃん製造と、アイキャンフライ事件が九割を占めている。

「大垣二尉は、本当に暇なんですか?」

「羽佐間三尉も暇そうじゃない?」

副官と言っても、決裁文章の取り扱い方をレクチャーしたり、解らないことを答えるだけしかやることのない花梨も、実際は今の所暇なのである。

花梨を、副官として宛てがった理由は簡単である。愛の自衛隊内の後見人でもある、高菜二佐と面識のある人物でまともな幕僚が、彼女だけなのだ。

「あたしは、もっと戦闘機に乗ってたかったんだけど。あたし、戦闘機良く壊すからさあ」

「どういうことなんです？」

愛が首を傾げると、花梨が説明する。

「この人は、プロフィールに記載の通り、深海棲艦を戦闘機という名の打撃武器で撃破している、唯一の人です」

「そう書いてありましたね」

愛が頷く。

「当然ながら、頭のおかしいほどの海面ストレスの低空飛行です。撃破と同時にこの人は脱出します」

「あっ」

愛は察してしまった。健太もあー、と納得した顔をする。

「だから、出撃禁止命令が出るのよ、あたし。戦闘機つて一機の値段が億単位だから、壊し過ぎで」

にへらつと翼が笑うと、二人共呆れた顔になる。

「終いには、輸送任務をほっぽり出して、輸送機で同じことをした為、航空機搭乗禁止命令が出たそうです。でも、何度も特攻して戦死しないくらいは幸運で、優秀なパイロットには違いないから、そのノウハウを基地航空隊で役立てれば、と今回の人事になったそうです」

「あたしには、幸運の相棒が居てね」

胸ポケットからひよっこり顔を出す、ドイツ空軍の制服を着た妖精さん。当然ながら、愛にしか見えない。

「空の魔王妖精さん。深海棲艦開戦時に出会って、ずっと一緒に空で戦っててねー。他の妖精さんは見えないから提督にはなれないけど、艦載機の指揮はできるのね。それで大貫のオッサンに、所謂隊長妖精さんを連れてることがバレて。その頃あたし、航空機搭乗禁止命令が出て腐ってたところだったから、引き受けたんだけど……」

「急遽の着任で、航空隊基地も、所属航空機も間に合わず、陸戦隊の男

性相手に夜戦で連戦連勝しているそうです」

全く不潔です、とボソツと花梨は付け加える。自身の父親の女版な翼を、ジト目で見ている。

「だってさー、艦娘の艦載機運用に口出そうとしたら、ビス子に怒られるし。『艦載機は空母艦娘の領分よ!』って」

不満そうな顔をしている、本当に退屈そうなのだ。

「提督も健太君も、こんな大人になっちゃだめですよ?」

「は、はい……」

二人共、花梨の言葉に歯切れが悪い。

「まあ、二人ともケイケン済みだもんね」

「そう言えばそうでしたね。恋愛は大いに結構ですが、種は実らせないでくださいよ?」

「はあい」

わざとらしく、大きな溜め息を吐く花梨に、二人は苦笑いするしかない。

そんな中、ケラケラと笑っている翼だった。

「さあ、提督。今夜は、皆で食事会の予定ですので、早速書類を片付けてしましましょう。それに、高菜提督から届いた戦術書の勉強もあります。さすがお金持ち、大型高性能タブレットにデータがぎっしり入っていました」

「はいっ!」

「空戦指揮なら教えられるから、何でも訊いてね?」

「はいっ!」

「僕、紅茶淹れてくるね」

「うんっ、有難う」

新米提督笹野 愛の着任初日は、デスクワークに始まり、デスクワークに終わるのだった。

「ところで一尉、今日の書類、始末書ばかりなんですけど。しかもそれ、翼二尉のばっかりで、殆どが男性官舎侵入とあるんですが。残り、翼二尉を巡っての喧嘩ですって」

書類仕事を始めた愛が、始末書の束を確認し始めると、内容はだいたいの男性官舎侵入で、『致した』と言うものばかりなのだ。

「まあ、予想は付いていましたが。幕僚着任から今日までの始末書が溜まっているんでしょう。おそらく、幕僚着任から今日まで、司令官代行を置かずに放っておいたツケですね。参謀長が、初日から仕事を用意してくれた、と思いませんか、今後同種の始末書进行处理することになりますから、いい勉強と思つてその、反省の欠片もない反省文を読んであげてください」

「は、はあ…」

性的に奔放な、目の前のトラブルメーカーな女二尉を見ながら、自分達は自重しよう、と心中で決意する愛だった。



## 歓迎会

「あー！ やっと終わった！」

初日から書類仕事に忙殺された笹野 愛が大量の始末書に目を通し、全ての決裁書類を処理し終える頃には、1800を過ぎていた。全部事務員妖精に放り投げているどこかの提督と違い、律儀に仕事をすると忙しい。

それが、初日に感じた彼女の感想だった。

「てーとく、おつかれさま」

事務員妖精さんが、決裁文書の束をファックスにセットして、大本营に送信する。

「お疲れ様です、提督」

「お疲れ様、愛ちゃん」

「あー、やっと終わったんだ」

三者三様の声を掛けるのは、花梨に健太に始末書の元凶である翼。健太には、公式な場以外では「提督」や「司令官」と呼ぶのを禁じた。

何か他人行儀で嫌なのだ。

最後に、本日の業務報告を司令官コンピュータに入力し終える頃には、ビスマルクがノックもせずに入って来る。

「提督！ 仕事は終わった？」

「はい、本日の業務は終了です」

「提督、私達艦娘に無理に敬語を使わなくてもいいわよ。貴女が上位者なんだから」

腰に手を当てて、ビシツと人差し指を立てるビスマルクに、愛は笑顔で返す。

「それじゃあ遠慮なく。ところで今日は食事会って聞いたけど？」

「そうよ！ 提督の歓迎会よ！ 近くのレストランを借り切って、飲んで食べて騒ぐのよ！ 皆既にレストランに集合して、私がお迎えに来たのよ。何でも、今日の食事は当番の守備隊以外全員参加で、スポンサーがいる、って事だから」

そのビスマルクの言葉に、翼が座っていた応接用ソファーからがたつと立ち上がった。

本当に、業務終了まで暇を持って余して終わったのだ。

「マジで?! いやあ、助かるなあ。食事券はビールやタバコに使い果たしちゃったし、減給処分の常連で今月もお財布ピンチなんだよね?」

食事券は、建前上ビールやお酒には使えない。だがコンビニではレジで通ってしまう為、そのまま食事券でのお買い物が罷り通る。社会の闇である。

そんな、ダメ人間翼をジト目で見る花梨。

「繰り返しますが、こんな大人になってはいけませんよ?」

「はい、ところで……」

花梨に返事をしながら、愛はふと疑問に思ったことを口にした。

何ヶ月も、高菜二佐の許で名誉子供隊長をやっているだけあって、給料日も把握しているのだ。

「給料日は18日ですよね?」

「そうだよ?」

「今日は3月25日ですよね?」

「そうだよ?」

「もう給料ないんですか?」

「うん、ほら、デートってお金掛かるじゃない? 明日からもやし焼きそば生活かな? 近くのドラッグストアで二つで18円! それも無くなったら、陸戦隊員に奢ってもらうかな? お礼はするから」

「えっ……?」

愛は絶句した。まだ給料日から七日しか経っていないのだ。

ビスマルクは、わざとらしく大きな溜め息を吐く。

「まあ、尉官官舎には狭いけどキッチンもあるし、自炊もできることはできるけど、何の為の食事券? って話よね。建前って言う便利な言葉がある、日本の悪い癖ね。食事券で酒や煙草は買えません、って明記されてるのにな。寮長としては、曹士のお手本にすらならないライフスタイルはどうか?と思うわ」

「そうだね」

ビスマルクの言葉に、愛は頷きながら同意した。

愛の母麻衣は、生活力も非常に高く、医師・主婦の二足の草鞋をきちんと履きこなしているのだ。

看護学校時代の父宗太郎を養って来ただけはある。

「給与の前借りは司令官の判断で、大本営に申請が可……」

「駄目です、前借りは借金です」

念の為に、前借りも『自由裁量』の一つだと、説明を始めた花梨を遮って却下する愛。

「……と言うことですので、諦めてください」

「そうね。提督がNein<sup>ダ</sup>って言ってる以上諦めて。今夜は他人の財布で飲み食いできるんだから、明日から儉約生活ね？」

「へいへい。ところで、スポンサーって誰なのさ？」

花梨とビスマルクの言葉を生返事で受け流した翼は、気持ちを切り替えながら人懐っこい笑みを向けると、

「高菜直哉二佐から、本日のお食事代をお預かりしております。余った分は提督のお小遣いとして渡してください、とのことですよ」と花梨が答える。

愛は、遠く東北の地にいる師匠に、心の中でお礼をすると立ち上がり、制服の上着を羽織る。

「さあ、行きましょよう」

業務用携帯のネックストラップを首から掛けて、ワイシャツの胸ポケットに仕舞い、引き出しから出したスマートフォンとゆるキャラの『ゆとりくま』のお財布を上着のポケットに押し込んで立ち上がると、皆で執務室を後にする。

鎮守府敷地の入り口詰め所で歩哨をしている、留守番部隊の陸戦隊員に敬礼しながら鎮守府の門を出ると、すぐそばにある近くのレストラン「洋食亭」に向かう。

カラン

扉を開けると、皆既に着席して待っている。

それぞれのテーブルには、料理が次々と従業員によって並べられており、入ると従業員の「いらっしやいませ」という声が聞こえる。

「主役は一番上座にどうぞ」

ビスマルクが、空席になつてゐる司令部幕僚達が座つてゐるテーブルの、所謂お誕生日席に愛と健太を案内すると、自分は艦娘達のテーブルの席に腰掛ける。

花梨と翼も、司令部の面々が座つてゐるテーブルに着席すると、従業員がドリンクの注文を取り始める。

皆の所にお酒や、ソフトドリンクが行き渡つたところで、先任順で次席幕僚の大塚一尉が乾杯の音頭を取る。

「それでは、司令官の着任を祝つて」

『乾杯!!』

乾杯すると、一同飲み物を口にしてから、食事が始まる。

周囲を見ると、翼は早速男性陸戦隊員達と、酒盛りを始めている。

少数いる女性陸戦隊員は、女子会的な雰囲気で纏まつている。

「やして」と」

愛は、瓶ビールを片手に立ち上がる。

最初に大塚一尉のところに向かい、ビールを注ぐ。

「いや、提督……」

「はい、どうぞ。大塚一尉」

宗太郎の実家は、仙台の伊達一族系の家柄で、年末年始になると一族総出で集まるのだ。

そうになると、子供の役目は『大人達のお酌』なのだ。

所謂礼儀作法の一環で、年長者に気を使うよう躰けられている。

だが愛は、この場では『最高位者』であることを、すっかり忘れてゐる。

大塚一尉は、ありがたく御酌されるとそれを飲んでから、ちらつと花梨を見る。

花梨は立ち上がると、愛の手からビール瓶をやりわりと取り上げる。

「提督、貴女はこの場では『最年少』ですが、『最高位』です。お酌は羽佐間三尉に任せて折角の着任祝い、主賓は楽しんでください」

「そうですよ、提督。貴方は主賓なのですから、お酌は小官にお任せく

ださい」

「はいっ」

愛は花梨に笑みを浮かべると、席に戻る。

「提督！」

「健太君、ここは無礼講つてやつだよ？」

「それじゃあ、愛ちゃん、これも、それも美味しそうだよ!!」

「あはは、そうだね」

料理の大皿に目を輝かせている健太に目を向ける愛に、早速どつきりと小皿に自分の分を取り分ける岩崎二尉が陽気に笑う。

「はっはっは、育ち盛りですから、しっかり食べるんですな。今日はおかわり自由の食べ放題らしいですからね」

「二尉は沢山食べられそうですね」

「いやあ、小官は自衛官か相撲取りかと小さい頃から言われていたからな。小杉一尉もなかなかの大食漢と聞きましたな」

会話に上がっていた小杉一尉は、ローストビーフを山程取り分けながら答える。

「確かに。横須賀では夕食の後に、隊員クラブで飯を食うのがいつもの日課でしたね」

「えっ……そんなに大食いには見えないんですが……」

引き締まった体の小杉一尉と、岩崎二尉を見比べると首を傾げる。

「愛ちゃん、見比べたら岩崎二尉に失礼だよ」

「あっ、ごめんなさい」

愛にツツコミを入れる健太に、慌てて口に手を当てて謝る愛。

そんな二人に、幕僚達はどつと笑う。

「我々陸戦隊は、運動量が激しいから消費カロリーが多いんですよ。だから、食べないと体重が維持できないんですよ」

「小官も鍛えてますが、なかなか体重が落ちませんなあ」

小杉一尉と岩崎二尉の言葉に、体重が気になるお年頃の愛は、「陸戦隊の人達とトレーニングすれば、体重が減るのかなあ？」

とぼそつと呟く。伸び盛りで、体重が少し増えているのが気になっているお年頃なのだ。

「いやいや、提督の年頃なら、まだしつかり食べたほうが良いですな。小官にも娘がおりますが、食が細くて好き嫌いが激しいせいか、体が弱くて家内も食べさせるのに手を焼いておりますからな」

そう、大塚一尉が遠い東京で実質母子家庭になっっている娘のことを例に出しながら、「提督は好き嫌いはある方ですか？」等と付け加える。

「いえ、うちは母が医師、父が看護師なので、食育には厳しくて。栄養バランスの良い食事を摂るように躡けられていましたので」「なるほど」

愛が答えると、岩崎二尉が相槌を打つ。

「うちの娘に、爪の垢を煎じて飲ませたいですな。それに聞く所によると、宮戸島では高菜二佐の下で空手と自衛隊格闘術を習っていたとか?」

「はい、今はもう四級になりました!」

「それは頼もしいですな。何なら、小杉一尉に空いてる時間に稽古を付けてもらおうと良いですか?」

「小官で良ければ、提督の指導を致しましょう」

「はい! よろしくお願いします!」

愛が幕僚達と会話を楽しんでいる間に、健太はちやつかりと山盛りの料理を食べている。

「あら、健太君はまだ、色気より食い気なのですね?」

花梨が口元に手を当てて笑うと、それを見て愛もあははつと笑う。

それを見ながら、幕僚達も釣られて笑い声になる。

美味しい食事に夢中な健太は、まだそれに気づかず食事を堪能中である。

「もう、健太君ったら」

「ふぁい?」

口の中に物を詰め込んだまま、愛の顔を見る健太。

「取り敢えず、食べてから喋ろうね?」

「……うん」

もぐもぐと咀嚼して、飲み込んでから笑顔を向ける。

「育ち盛りの男の子はどんどんしつかり食べるんだね。どれ、おじさんがよそつてあげよう」

岩崎二尉が、健太の手が届かない大皿の料理を小皿に沢山よそうと、健太の前に置く。

「わあ、有り難うございます！」

「良かったね、健太君」

「うんっ！」

和やかな雰囲気の中、食事が進んで行く。

「提督！ おじさん達のお相手もいいけど、指揮する私達とも親交を深めましょう！」

「はあい」

ビスマルクがやって来て、愛の手を引いて誘うと、愛も笑顔で答えて従って行く。

健太は女子の宴には加わらず、おじさん達と会話が盛り上がっている。半分食事に夢中だが。

花梨は、幕僚達のお酌をして回りながら、会話に加わっているようだ。

艦娘達の席にやってくると、アイオワが、

「My Admiral、どうぞ」

空いている椅子を持って来て恭しく椅子を引くと、愛も腰掛ける。

「それじゃあ、改めて自己紹介するわね。私はビスマルク、この艦隊の旗艦で女子官舎寮長よ。実は、提督とは少しばかり縁があるのよ」

「どういうこと？」

「貴女のお師匠の高菜二佐……当時は三佐だったかしら？とは、連隊長公金横領事件の時に知り合ってたね。私は、来日して日本に馴染むための研修、という形で仙台駐屯地に居たのよ。そこで発生した公金横領事件で、高菜二佐と共に事件解決に動いたって訳。まあ、その後高菜提督は妖精が見えることが判明して、奪還した宮戸島に行っちゃって、私も横須賀の第11艦隊に外向配属になってしまったから、それっきりだけど」

「そうなんだあ、高菜二佐と知り合いだったんだね？」

「そうよ。まあ、軍人っぽくない変わり者の自衛官、って印象だったわね。まあ、いろいろ大変だと思うけど、一緒に頑張りましょうね？」

「うん！」

ビスマルクの自己紹介が終わると、ビールの入ったグラスを片手に、アイオワが続いて自己紹介する。

「Meはアイオワ、沖縄の在日米軍からの出向よ！ “ Miyato zima's Miracle” Admiral Takanaの一番弟子だと聞いているわ」

「戦術はまだ勉強中だけどね……」

「大丈夫よ！艦隊運用のExpertがいるから、Tacticsは追い追い勉強して行けばいいわ！」

「ビスマルクさんに頼りつきりにならないように、私も勉強しないと」

「それもImportanceだけど、Schoolのお勉強も結構好きじゃないとね！ EnglishはMeがLectureするわね！」

「うんっ！」

その様子を微笑ましく見ていた鳳翔が、飲んでいた日本酒の徳利を置くと、

「私は軽空母鳳翔。横須賀の第13艦隊から、硫黄島駐留艦隊副旗艦を経て配属になりました。先任伍長……つまりは曹の艦娘の纏め役として、この艦隊の航空戦力をお預かりさせていただきます。不束者ですが、どうぞよろしくお願いします」

「うん、よろしく。何と言うか……鳳翔さんは物静かと言うか、お母さんみたいと言うか……」

「まあ……」

そんな愛に、うふふつと笑う鳳翔。

続けて、伊勢が自己紹介を始める。

「改装航空母艦、伊勢です。東京のお台場鎮守府副旗艦でした」

「よろしくね！ところで、伊勢さんは戦艦だって聞いてたけど、今『改装』航空母艦と」



「ああ。私は、艦戦・艦爆を搭載できる、航空戦艦なんです」

「なるほど。砲撃と艦載機運用同時に出来る、つてことでいいのかな？」

「ええ」

「了解。頑張つて、上手く使いこなせられるようにするね」

「頑張つてね」

ぐっと手を握つて気合いを入れる愛に、頭を撫でる仕草をしながら微笑む伊勢。

「そんじゃ、テートク。私が北上。で、こつちが大井つち。よろー」

「提督も北上さんに手を出したら魚雷を……」

割と大雑把な自己紹介と、序に大井も紹介する北上に、やはり威嚇する大井。それに愛は反論する。

「しないよ！大事な仲間にそんな!!私が手を出したのは、健太君だけだよー！」

「わお、情熱的」

「そ、それならいいけど、ちよつと早過ぎないかしら？」

反論ついでに、つい手を出した宣言をしまい、愛は少し顔を赤らめ、北上は面白い子だと笑い、大井は苦笑いを浮かべる。

「だって、しょうがないじゃない！高菜二佐が私達の隣の部屋でおつ始めるんだから！聞こえて来ちゃったら眠れないじゃない！私だつてそういうことに興味ある年頃だし、その……初めては健太君と！つて思つてたから！」

「分かった、解つたからそう怒らないで。提督が健太君ラヴなのは、十く分に伝わつたから」

顔を真っ赤にして、涙目で少し怒つて力説する愛に、苦笑いのまま両手を上げて降参のポーズをする大井。

「大井つちと私はね、広島鎮守府に居ただけど、その提督がセクハラが酷くつてね。それで二人共転属願いを出したら、ここに来たんだよね」

「そうよ。私はともかく、北上さんのお尻を何度も触つたり、偶然を装つて胸を揉んだり、お風呂を覗いたり、下着を盗んでクンカクンカ

したり。私がしたいくらいなのに！」

「こちら。大井つちは、愛情がたまに変な方向に向くんだよね。それに、セクハラされる度に、汚れた提督の触った部分を清めます、つて大井つちが触って来るんだよね。大井つちなら別にいいんだけど」

「それもただのセクハラじゃん」

愛が呆れたようにツツコミを入れると、大井が反論する。

「いいえ、愛情表現です！それに北上さんもいい、つて言ってます！」

「まあ、北上さんが良いつて言ってるなら……それにしても、北上さんの事大好きなんだね？」

「もちろん！私、北上さんの為なら何だつて出来ます！」

はあはあと、息を荒らげると力説すると、北上をぎゅつと抱き寄せ  
る大井。

そんな二人を、艦娘達も愛も生暖かく見守っている。

「いいなあ。私も、健太君にここまでしてもらいたいなあ」

「ケンタはShy Boyなのかしら？」

そんな愛のボヤキに、アイオワも会話に乗って来る。

「シャイじゃないと思うんだけど……大井みたいに、人前でしたりすることはないかな？手を繋ぐのも、顔を赤くしちやってるし」

ちらつと健太を見ると、健太は絶賛お食事中であり、やはりまだ色  
気より食い気らしい。

「ヘタレね」

「まあまあ、大井つちほどオープンなのは……ねえ？」

「だね」

ジト目で、一生懸命お食事中の健太を見る大井に、苦笑いを浮かべ  
る北上と愛。

「まあ、恋愛は大いに結構だけど、間違っても男子官舎への侵入だけは  
やめなさいよね。子羊が狼の群れに飛び込むようなものよ。……  
まあ、司令官に手を出すアホはいないと思うけど？」

一応釘を刺すことは忘れない、寮長であるビスマルク。

伊勢と鳳翔は、そんな賑やかな皆を見守るポジションに就いてい  
る。

「そうよ！健太が司令官官舎に来ればいいのよ！ 健太、司令官付つてことは従卒でしょ!? 提督が健太を部屋に招き入れればいいのよ。従卒が司令官の部屋に入ることは、別におかしくとも何ともないじゃない?」

「それは、大塚一尉からも言われたんだけど……羽目を外すな、つて言われちゃって」

「ほら。たまにはイチヤツつかないと、翼二尉辺りに取られちゃうわよ?」

大井はガンガン愛を煽っている。愛も一瞬、翼の魅力にメロメロにされる健太を想像して……ブンブンと首を振って。

「そんなことはさせない！絶対に！翼さんなんかには、健太君は渡さない！」

テーブルをドンツと叩いて立ち上がると、全員の視線が集中する。

「愛ちゃん、どうしたの?」

「あはは、何でもないよ」

脳気な健太が訊いて来るのを見て、愛は笑いながら誤魔化する。ビスマルクとアイオワと大井は、溜め息を吐く。

愛がすごすごと座ると、またそれぞれの祝宴が再開する。

「でも、健太さんは提督のことが好きでお付き合っているんですから、そう心配はないのではないのでしょうか?」

鳳翔が、ニコニコと口を挟む。

「でも、浜松での一件以来、神谷二佐の一件とかがあったり、湊子様と高菜二佐のお兄さんの結婚のあれこれで、マスコミが来たりしてドタバタだったりで、何もなくなつて……」

顔を赤らめながら指をツンツンさせる愛に、ビールを飲み干した伊勢も、恋愛話に参戦する。

「女の子の方が、先に思春期が来るから、健太君はまだ恋愛も勉強中、つてところじゃないか?と思うのよ」

「そっかあ……そうだよね……」

はあ、と大きな溜め息を吐いて、ちらつと健太を見る愛。

「まあ、アタックを続けていれば、私みたいに北上さんに振り向いても

「らえるんですから、諦めちゃ駄目よ?」

「あー、うん。胸は触る、お尻は擦る、部屋には侵入する、お風呂は覗く、下着は盗む、その他諸々のストーキング行為の末に……だけどね?」

「北上さん!それじゃまるで、私が凶悪なストーカーみたいじゃないですか!」

「いや、酷いストーカーそのものだと思うな。私が大井つちのことが好きじゃなかったら、足立一佐に連れてってもらってもおかしくない案件だと思うよ?」

大井のストーキング行為を暴露しながらも、満更でもない顔をする北上に、愛も笑みが零れる。

「じゃあ、最初から両思いだつてことなんだね? いいなあ……」

「提督だつて、健太と両思いなんでしょう?今どきは、女の子の方から『欲しい』って言ったって良いのよ?」

「ここら。まだ女子中学生カツコカリの女の子を扇動しない」

ポツツと漏らす愛を、更にガンガン煽る大井。そして、それにツツコミを入れる北上。

その後も、艦娘達と恋愛話で盛り上がった。

「ところで、提督官舎つてもう既にご覧になったんですか?」

「うん、隣の部屋だから休憩がてら見に行ったけど、あんなに広くて良いのかな?つて。寝室と書斎はあるし、ダイニングも付いてるし、お風呂もトイレも専用のが付いてて。ベッドも、多分ダブルくらい大きかった……」

愛は、鳳翔にコクリと頷きながら答える。

健太と二人で、休憩がてら中の様子を見て回ったのだ。

家具は既に配置がされており、愛が送った荷物入りのダンボールや衣服等が入っている収納も、部屋に届いている。

そして、副官である花梨が愛の許可を得て、荷解きをしてせつせと片付けてくれたのだ。

「それじゃあ、早速健太を連れ込んで……」

「ここら。だから煽るんじゃないつて」

「寮長としては、程々にしなさい、としか言えないわ」

「Oh! HotなNightになりそうね!」

「あらあら……」

「自分の身体を大事にすることを、しっかりと考えればいいと思うわ。もう経験済みだったら」

「やっぱり煽る大井を、諫める北上。そんな二人を見ながら、愛に諭すように言うビスマルク。」

「自分のことのように楽しそうなアイオワ、それを見て笑みを零す鳳翔、愛のことを気につけて、年長者の意見を言う伊勢。」

「電さんから色々教えてもらいましたし、大丈夫です」

「今日は健太と一緒に寝ようかな?と考えながら、そろそろお開きにしよう、と考えていたところだった。」

トウルルルル……

胸ポケットに入っている、業務用携帯が鳴り響く。

「はい、もしもし、こちら司令部」

『提督、お楽しみ中申し訳ありません。笠原です。哨戒中の艦娘より連絡、ル級を旗艦とした空母打撃艦隊がこちらへ向かっている模様です』

「電話の相手は、今日の留守部隊責任者で、陸戦隊副隊長の笠原聡美三尉である。」

「分かりました、すぐ戻ります!」

電話を切ると、愛は立ち上がった。

「提督、どうしたの?」

ビスマルクの問い掛けに、笑顔を消した愛が、

「敵襲です。ル級を旗艦とした艦隊がこちらに向かっています。敵は空母打撃艦隊です。すぐに戻りましょう。大塚一尉、室戸市役所に連絡してJアラートを」

「了解しました」

「大塚一尉は立ち上がると敬礼し、携帯電話を取り出しながら店を出て行く。」

「岩崎二尉、笠原三尉と協力して、周辺の民間人の避難準備をお願いします」

ます！」

「了解！」

岩崎二尉は立ち上がると、すぐに店を出て行く。

「小杉一尉、陸戦隊の臨戦体制での配備をお願いします！」

「了解です。お前達、すぐに臨戦体制だ！」

『了解！』

「おー！」

小杉一尉と陸戦隊と何故か翼も立ち上がり、レストランを出て行く。

「羽佐間三尉、指揮艦の操縦をお願いします」

「えっ、では……？」

「はい。陸上に被害を出さない為にも、こちらから洋上に打って出て、直接戦場を見ながら指揮を執り……先制攻撃を仕掛けます。私の初陣です！」

『はいっ！』

その言葉に、艦娘達と健太も立ち上がった。

初陣くリーヴエ・サーカスく

ウーーーーーー!!!

Jアラートの国民保護サイレンが鳴り響く中、愛は埠頭にて指揮艦に乗り込む。

指揮艦は小型ボートくらいの大さきで、コンソールが用意されており、自艦隊の陣形とレーダーで得た敵の陣形を確認したり、艦娘のダメージ度合が確認できる。

通信装置も搭載されていて、艦娘達との交信も出来るし、艦に搭載されている赤外線ズームカメラで戦場の様子も確認できる。

或いは、もつと前に出れば肉眼でも確認できる。

艦娘達も、次々に艦装を展開して海へと降り立って行く。

一緒に乗り込もうとする健太には、振り向いて両手を広げて通せんぼをする。

「健太君はここでお留守番!」

「で、でも……」

「命令だよ」

「……うん、待ってる」

そう言つて愛は止めた。

健太は納得行かない顔をしながらも、小杉一尉の、

「ほら、君は執務室に戻って。司令官の帰りを待つのも、司令官のお世話をする従卒の仕事だ」

と言う言葉に促され、庁舎へと戻って行く……

何度もこちらを振り返りながら……

『本当は、貴女にも庁舎から指揮を執ってもらいたんだけどね?』

そのやり取りを聞いていたビスマルクが、愛を諭すように言うも、愛は首を縦には振らない。

「ううん。皆を率いる身としては、そんな事はできない!」

『Ailes Klear』

「……………」

ビスマルクは大きく溜め息を吐くように答えるが、それには愛は何

も言わなかった。

愛は、身体に震えが来ていることを実感した。八年前の宮戸島全島民避難の時、愛は四歳だった。

深海棲艦の進軍に怯える大人達を、幼心ながらに覚えている。

我先にと逃げ出そうとした時、それを島の長老達が宥めながら整然と脱出できたのは、愛の記憶にもすっかり焼き付いている。

そして、自分の師でもある高菜直哉二佐の言葉を思い返していた。

それは、愛が旅立つ前日のことだった。

高菜家での壮行会で愛や健太の両親を呼んで、夕食会を開いていた。

その途中、愛に話があると言い、書齋に呼び出した。

書齋に置いてあるブランデーを、グラスにトポトポ注ぎながら置くと、書齋の自分のデスクに、

愛のグラスには、リビングから持ち出したペットボトルのお茶を注ぐと、二つ置いてある揺り椅子を勧める。

愛が腰掛けると、ブランデーのグラスを持ってもう一つの揺り椅子に腰掛ける。

ギツ……ギツ……心地よく揺れる椅子の音を聞きながら、ふと高菜二佐が口を開いた

「愛ちゃん、明日から君も提督になる訳だけど、絶対に安全な訳じゃない。こっちは平穏な海だが、名古屋以西は激戦区だからね。まあそれだけ、人間の業カルマと言うやつが溜まりに溜まっているんだろぅけど……その恐怖を忘れてはいけないよ。怖いもの知らずの人間は、時には退くべき時期をも見失う」

着任前夜までの半月で、高菜二佐は愛に艦娘の運用基礎をみっちり教え込んでいた。

敵襲時の対応もマニュアルを見せて、愛の頭に叩き込んだ。司令官コンピュータでのシミュレーターで何度も対戦したり、実際に電達の出撃に高菜二佐の操縦するモーターボートで同行して、戦場を実感もした。



それでも、この平和な海では駆逐艦クラスしか出て来ず、高菜二佐も「あまり参考にはならないかな？」とぼやいていた。

「……はい」

「いいかい？ 名将と言うのは、進むべき場所や時期と退くべき方向と時期を弁えている人間の事を言うんだ。退くべき方向を解らないのは『猪武者』と言って、猟師の引き立て役にしかならないからね」

「……はい」

愛は、その言葉を真面目に聞いていた。

「愛ちゃん。本当ならば、私が室戸に赴いて、君にはここの指揮を引き継いでもらいたかったんだが、私は『宮戸島の英雄』なんかになってしまって、上も私が宮戸島から離れることを良しとしないだろう。せめてと思ひ、信頼できる幕僚と艦娘を大貫空将に要求した」

「……」

愛は、高菜二佐の話をグラス片手に聞いている。

「実際、戦場で提督のやることは多くはない。陣形を考え、進軍か撤退かを考える。細かい戦術は艦娘達がやってくれる。極端な話、庁舎で「行つてらっしゃい」「おかえりなさい」を言うだけの係、と言う鎮守府もある。武藤さんのところはその最たる例だろうね。元経理に戦術や戦略をやらせようなんて馬鹿馬鹿しい話さ。でも、愛ちゃんは自衛官を志望して提督になりたい以上、海に出て指揮を執りたいんだらう？」

「はい」

「だったら、戦場のなるだけ安全なところで、大人の言うことを聞いて、何でも副官や旗艦と相談して決めること。そして、無理な進撃はしないこと。大破したまま戦闘に突入すれば、いくら頑丈な艦娘だろうと死んでしまう。轟沈艦を出すような提督は、艦娘も幕僚も信頼しない」

「分かっています」

「給料分の仕事をすればいい、ってことさ」

愛の返事に、高菜二佐はふつと笑うとブランデーを喉に流し込む。

「提督、足が震えていますけど大丈夫ですか？やはり陸上に……」

花梨のその言葉に、はっと意識を現実に向ける。

「大丈夫です」

『室戸泊地艦隊、いつでも出撃可能よ！』

ビスマルクの通信が入って来たところで、すつと目を閉じて息を深く吸う。

そして、ふう……と息をゆっくりと吐き出す。

少し震えが止まった。

「全艦抜錨！室戸泊地艦隊、出撃します！」

『おー！』

艦娘達の声と共に、それぞれが海に滑り出して行く。

指揮艦も、後方からそれを追って花梨の操縦で岸から離れて行く。

一瞬だけ健太の待っている庁舎を見ると、再び夜闇の水平線へ目を向ける。

(ごめんね、行ってくるよ、健太君……)

心の中で、健太に連れて行かなかつたことを詫びつつ一言言っただけ、前をまっすぐ向く。

「提督、夜戦は昼戦と違い、航空戦が行えません。よって、鳳翔は今回何も出来ません。ただし伊勢は、戦艦として攻撃に参加できます」

「敵も同じということですか？」

「ヲ級フラッグシップなら、夜間航空攻撃もやっていますが、今回は軽空母又級、重巡り級2、駆逐八級2との情報が入って来ています」

「なんか、ずっこいなあ……でも今回居ないならいいかあ」

淡々と敵情説明をする花梨に、愛はぼやくように答えた。

「敵は夜目ナイトアイを持っていますから、まあ仕方ありません。ビスマルクに96式150cm探照灯を搭載していますから、大体敵の攻撃はビスマルクが引き受けます。その間に火力で押し潰しましょう」

「分かりました！」

その頃、海を走っている艦娘達も指揮艦の大型ライトに照らされながら海を走って行く。

「しっかし、今度の提督は大丈夫なんでしょうね？いい子だとは思いますが……」

大井が、ちらつと指揮艦を振り返りながらぼそつと言う。

「ここから、大井っち。提督にとつても初陣であるように、この艦隊にとつても初陣なんだよ？」

そんな大井を、苦笑いを浮かべつつ北上が窘める。

「あの『宮戸島の奇跡』高菜提督のお弟子さんなら、その薫陶を受けていると言うことも……」

「いずれにせよ、誠実な提督よ。それは信じていいと思う。私達は全力であの子を支えなきゃ」

「Weが提督のHandとなってFootとなればいいのよ！」

「そうよ。私達は室戸鎮守府にやって来た仲間なんだから、気合を入れなさい」

鳳翔が《高菜二佐の弟子》を引き合いに出し、伊勢とアイオワが大井を諭すと、ビスマルクが全員に気合を入れる。

避難して来る漁船と、哨戒に出ている他鎮守府の駆逐艦娘達が退避して来るのと擦れ違うと、全員に戦場が近いことを感じさせる。

『こちら室戸指揮艦、室戸麾下全艦に告げます。ビスマルクと鳳翔を中心に置いた『梯形陣』を敷いてください！』

愛の言葉に、

「はあ!？」

「て、梯形陣?」

「ええと……」

「What!？」

疑問の声を上げたのは、やはり大井である。北上も不思議がる。その命令に、司令官の真意を測りかねている鳳翔。

同じく、オーソドックスな単縦陣を選ばなかった愛に、アイオワも不思議そうな顔をする。

「なるほど……」

「提督、その意図を皆に話してもらっていいかしら?」

納得する伊勢に、にんまりと笑って愛に説明を促すビスマルク。

『はい、敵ははぐれ深海棲艦です。細かい戦術や戦略は立てて来ず敵に突っ込んで来ます。光源のあるビスマルクに。すみませんが、鳳翔さんも今回は敵の餌として、攻撃に耐えてください。幸い敵は、射程が中程度のり級です。敵が突っ込んで来たら、後ろ側に下がっている北上と伊勢は急進してください。これで敵を縦深陣に誘い込んで袋叩きができます。そして三角形に雷装艦がいることで、魚雷によるクロスファイアを狙えます。場合によっては、突破を許して後ろから追撃することも可能です。ビスマルクさん、以上の作戦は技術的に可能ですか？』

愛が立てた作戦は、単縦陣での撃ち合いではなく、敵を誘い込んで袋叩きにする戦法を選んだ。

広く梯形陣を敷いた真ん中に、空母と探照灯を光らせているビスマルクを配置する。

それぞれ左翼にアイオワ・大井、右翼に伊勢・北上を配置した。

敵がビスマルクに突っ込んで来たところで、右翼が急進し半包围状態に置く作戦である。

「ヤー。<sup>可</sup>前進のタイミングは私に任せてもらっていいかしら？」

『はい！お願いします！この作戦は、高菜二佐命名の『リーヴェ・サーカス』です！私がこの半月で編み出した唯一の戦術です！』

「魚雷と砲撃が飛び交うサーカスね、分かったわ」

敵は軽空母を守りつつ、輪形陣で突っ込んで来る。

指揮艇に搭載されているレーダーモニターで、敵陣と自陣の推移がグラフィ化して表示されている。

「提督……アイオワ・ビスマルク・伊勢の主砲射程距離に差し掛かります」

「……………今、敵の足を止める訳には行きません。こちらからも更に前進」

『了解よー！』

花梨が砲撃命令を促すも、愛は首を振り前進を指示する。

敵との相対距離が遠距離になった時、痺れを切らした敵のり級が砲

撃を始める。

艦娘達の目の前で、ドボンと海面に着弾する砲弾。

『提督！撃たないの!?』

大井の怒声が聞こえて来るも、愛は何も答えない。

そして、中距離に差し掛かりつつある時だった。

「目標敵前衛リ級、ファイエル！」

『目標敵前衛リ級、ファイエル！』

敵の有効射程に入る直前だった。

ビスマルクがさつと手を上げると、北上と伊勢が前進速度を加速し、それ以外が前進速度を弱める。

「主砲発射！」

先手を取ったのはこちら側だった。伊勢とアイオワ、そしてビスマルクの主砲が、クロスファイアポイントに誘い込まれた重巡リ級に向けて発射される。

「グワァー！」

リ級が、その戦艦のトリプル主砲の袋叩きに遭うと、敵のリ級は爆発しながら海へと沈んで行った。その刹那、敵の行き足が止まった。

『リーヴェ・サーカス！スターテン！』

その掛け声と共に、ビスマルクが艦娘通信で事細かに座標を指示して、半包囲を完成させる。

敵が三方に注意を向けた直後だった。

「Let's Dancing！」

「行きます！」

アイオワが、主砲を乱射し始める。

反対側からの伊勢との連携プレーで、クロスファイアポイントが生まれ、敵は身動きが取れない状態に陥っている。

「海の藻屑と……！」

「なりなよ！」

「各自、味方魚雷に気を付けなさい！」

そのまま、大井と北上とビスマルクの雷撃が始まる。

アイオワと伊勢の砲撃に気を取られた敵艦隊は、水中から迫り来る魚雷の存在を察知するのが遅れてしまった。

ズツガアン！

次々と水柱が立ち上り、水中へと沈んで行く敵艦。

残った敵の艦隊も、海の藻屑となつて行つた……

まさに、砲火と魚雷のサーカス。

愛の初陣は、華々しい勝利で終わろうとしていた。

『安芸鎮守府全滅の模様！』

土佐鎮守府の偵察駆逐艦隊からの通信に、艦娘達は背筋が凍る思いがした。

旗艦は生きているにせよ、それ以外の艦娘が海に沈んだ、と言うことなのだ。

その安芸鎮守府の艦娘が、こちらに向かって逃げて来ている。

『どうするの!?司令官!』

『見捨てる訳には行かないでしょう?』

再び梯形陣を取り直して、艦娘達がやって来るのを待ち受ける。

追いつけて来たのは戦艦棲姫で、逃げて来ているのは暁である。

暁は、轟沈寸前のボロボロの状態である。

『陣形を輪形陣に切り替えて……距離を取ったまま、応戦しながら後退します』

「了解！」

ビスマルクの指示で、鳳翔を中心とした輪形陣を取り直す艦娘達。

艦娘達は、何故輪形陣か?と言う疑問を抱いたが、ビスマルクの、

「提督を信じましょう」

と言う言葉に従う形だ。

もう、出撃から八時間は経過していた。

サーカスの仕込みに四時間、そして連戦に都合四時間ほど掛かっているのだ。

愛は、ポケットから取り出した、直哉の提督就任プレゼントの懐中時計を見ながら、時間を計っている。

『まだ撃たないの!?!』

「まだ後退!」

ジリジリと下がりながら、撤退戦を続けていた。暁も、下手に逃げると戦艦棲姫の餌食になる為、室戸鎮守府艦隊に合流しての撤退戦である。

そうして、空が明るくなり、光が差し込んで来た。日の出時間だ。

「提督。日の出です」

「よし、私達の勝ちです!」

愛は、通信機を持って叫んだ。

「今だ!航空部隊発艦!」

『今だ!航空部隊発艦!』

そして、室戸艦隊の本格的な攻撃が開始された。先制打は航空部隊が取った。

戦艦棲姫一体ではあるが、轟沈寸前の暁を抱えている状態である。慎重に慎重を期して、朝まで耐えたのだ。

「艦載機発艦!」

「こちらも発進させます!」

鳳翔が自分の出番、と艦爆と艦戦を発艦させると、伊勢も続いて艦爆を発艦させる。

慌てて、取舵で回避した先の爆撃で戦艦棲姫の足を止めつつ、有効打を与える。

『続いて、大井・北上雷撃用意』

「雷撃準備完了!」

「いつでも攻撃出来るよ」

『魚雷発射!』

爆撃に晒されて、棒立ちになっている戦艦棲姫に向けて、魚雷を発射する。

機先を制した魚雷は、戦艦棲姫に向けてシユルシユルと向かって行き……何本も水柱が立って行った。

『続いて砲撃戦、ファイエル!』

トドメと言う一撃だった。

ビスマルクはすぐに輪形陣を解除して、戦艦が左右に広がるフォーメーションを取った

アイオワの自慢の主砲とビスマルクの主砲、伊勢の主砲で再びクロスファイアポイントを作り出し、戦艦棲姫を海に叩き込んだ。

「ギャアアアア!!」

戦艦棲姫の断末魔の叫びと共に、木っ端微塵となった戦艦棲姫の艦装が飛び散って行く。

そして、戦艦棲姫は海の藻屑となった。

ザザーツつと、艦隊の前によって来た暁は寔れ切っており、疲れ切った表情で、目が死んでいた。

「大丈夫? 暁」

「……………」

暁は、何も答えなかった。答えられなかった。

「全滅したのはWhy?」

その、アイオワの質問にも答えられなかった。

「まあまあ、私達は貴女を責め立てているんじゃないですよ」

優しく、包み込むような鳳翔の言葉にも、心を開こうとしない。

「放つとけば?」

「まあまあ、大井っち。提督にも相談しないと」

突き放すような態度を取る大井に、それを諫める北上。

「提督が間もなくお見えになるわ」

伊勢がそう言うのと、暁は突然ビクツと怯える表情になった。

「て……………提督が……………来てるの?」

「そうよ。驚くわよ、うちの提督は……………」

その怯えに気づかない大井が、提督の話をしようにとする前に、指揮艦が到着した。

「安芸鎮守府の暁ですね? 私、室戸鎮守府の笹野 愛一尉です」

「え、女の……………子?」

愛がデツキに出ると、暁は驚いた顔をしていた。こんな提督、滅多



に居ないから当然であるが。

愛は、暁の寝れた顔を見て、何か違和感を感じていた。

「ご飯、食べてますか？」

「……………」

愛のその質問で、艦娘達は察してしまったのだ。

「暁、答えなさい！捨て艦戦法ね！」

「……………」

ビスマルクの問いに、暁が目を逸らした。答えられないのだ。

暁の、瞳の輪郭が赤くなつた。指揮命令プロトコルを受けている状態なのだ。

そのまま、暁が立ち去ろうとするのを、ビスマルクが捕まえた。

「待ちなさい！質問には答えてもらおうわ！」

『その必要はない』

通信機に、男の声が入ってきた。

「貴方は……………安芸鎮守府の早川提督ですね？」

『いかにも』

花梨の問い掛けに、早川は傲岸不遜な声で答える。

『うちの暁を、速やかに解放してもらおう。さもなければ、こちらにも考えがある』

「お断りします！指揮命令プロトコル、暁に催眠モード！」

「は、はい」

愛の命令に、花梨は一瞬絶句しながら命令に従う。

指揮命令プロトコルは、基本的に所属鎮守府のプロトコルが一番だが、『例外』があるのだ。

艦娘が『接触』している状態で、その指揮をしている提督の指揮命令プロトコルが『最優先』になるのだ。

これは、提督戦死等の拿捕や指揮権移譲を想定しているもので、提督のいる状態での拿捕は想定外なのだ。

『貴様……………覚えていろよー！』

「会ったこともないオジンに、貴様呼ばわりされたくありません！暁は保護しました。これは自由裁量の範疇に入っていると解釈します。

それに、喧嘩を売ったのはそっちだ！バーカ！」

一方的に通信を切ると、すぐに足立一佐の携帯に業務用携帯で電話を掛ける。

『もしもし、愛くん、おはよう。どうしたのかね？』

「おはようございます。足立一佐、お願いがあるんですが。安芸鎮守府に、緊急査察をお願いします」

『ああ、本日室戸に私が向かうことになっていて、今移動中だから立ち寄れるが。どうしてだ？』

「急いでください！捨て艦戦法と虐待の疑いがあります」

『むう、分かった』

電話を切ると、催眠モードで動けなくなっている暁を、ビスマルクが抱き上げている。

そんな彼女を見て、愛は胸ポケットに業務用携帯を押し込むと、ビスマルクにVサインを向けて笑顔を浮かべる。

「足立一佐が安芸に向かっています。この喧嘩は私の勝ちだね！」

その言葉に、目の前の少女は度胸があるな、とビスマルクは感心した。

「帰りましょう！」

『はい！』

一同は霊子のかげらを拾い上げると、夜の明けた海を室戸鎮守府に向けて引き上げて行った。

指揮艦が接舷すると、愛と花梨は埠頭に降り立った。

「はふう……」

「ナイスファイト！」

「きゃー！大井？」

陸に降り立つと、大きく息を吐き出す。

そんな愛は、大井からぽんと背中を叩かれる。

その隣りにいた、北上にも声を掛けられる。

「リーヴェ・サーカスうまく行ったね」

「はい！」

「私の活躍の場を残していただいて、ありがとうございました」

「鳳翔さんも活躍できて何よりです」

鳳翔が、控えめに頭を下げる。

「提督の Tactics は Very Good だったね！さすがは高菜二佐の一番弟子」

「派手に砲撃で、上に目を惹き付けておいて、本命は魚雷という作戦。高菜二佐と二人三脚で編み出したんだな、と判ります」

アイオワはべた褒めで、愛の今日までの努力を察していた伊勢は、その努力を讃えた。

「愛のサーカスとは、高菜二佐もいい名前を付けたものね？」

「あはは、バレました？」

愛のことを、ドイツ語でリーヴェと言う。流石にビスマルクにはバレてしまい、あははっと照れ笑いを浮かべる愛。

「取り敢えず、足立一佐がお見えになるまで、休憩しましょう……正直眠いです」

「そうですね。すみませんが、小官はお先に失礼します」

ロングドライブや副官業務の上に、指揮艦操縦で疲れ切っている花梨は、敬礼すると女子官舎へと引き上げて行った。

「私達も仮眠をとるわ。またあとでね、提督」

「提督、 Good Night ね、もう Morning だけど」

「私も仮眠を取らせていただきますね」

「足立一佐がお見えになったら、官舎の放送で呼び出してください……」

「北上さん！一緒に寝ましょう！」

「はいはい。一緒に仮眠しようね、大井っち」

ビスマルク達も、口々に愛に言葉を掛けながら敬礼をして、六人で抱きかかえた暁を連れて、女子・艦娘官舎へと引き揚げて行く。

「ああ……眠い……疲れた……」

うつらうつらしながら、司令官執務室に戻る。途中、交代で仮眠を取っている幕僚達と擦れ違いざまに敬礼しながら、重たい体を引き摺って執務室に入る。

「おかえりなさい、愛ちゃん！」

仮眠を摂って元気な健太を見ながら、

「健太君、超眠い……ハンガーに掛けておいて……」

そう言いながら、上着を脱ぎ捨て、ネクタイを外すとぽいっと捨てる。

「えっ、愛ちゃん？ここ執務室……」

「着替えるのも面倒なくらい眠い……健太君は良いでしょ、愛の大事なところまで見たんだから」

顔を赤くして、ワタワタし始める健太を他所に、服を脱ぎ始めている愛。

眠過ぎて、羞恥心までどこかに行ってしまったようなのだ。

そのままスカートを落とし、ワイシャツ一枚で隣の司令官官舎に歩いて行った。

「健太君。足立一佐がお見えになったら……起こして」

そう言い残し、司令官官舎に入って行く。

最後に、リビングでワイシャツを脱ぎ捨てると、ショーツとブラの状態で寝室のベッドにダイブして、すぐに寝息を立て始める。

健太は、床に脱ぎ散らかされた制服を集めてハンガーに掛け、司令官官舎のリビングに掛けてから、

足立一佐が到着するまでの間、執務室のソファで中学の勉強の予習に入るのだった。

足立一佐がやって来たのはお昼前だった。足立一佐から、艦娘の出迎え不要、と事前に連絡が来ていた為、艦娘達は女子官舎で惰眠を貪っている。

大きな隈を作った愛と花梨の様子に、足立一佐は真っ先に二人の労苦を労う。

「着任早々、夜戦とはご苦労だった。本日は笹野一尉に、緊急時対応マニュアル等のレクチャーをしに来たのだが、昨日の大塚一尉からの対応報告を確認したが、合格点と言っておこう」

「有難うございます。ところで、早川のじじ……提督は……？」

一瞬本音が出かかるも、足立一佐は咳払いをすると、

「公金横領、艦娘への虐待、捨て艦戦法の疑いで原隊に返すことになる。その為、暁に事情聴取を行いたい。よろしいかな？」

「はい」

有無を言わせぬ雰囲気、足立一佐の言葉に頷いた。

催眠モードを解いた暁に、足立一佐は厳しい事情聴取を行った。

その場所に愛も同席を希望し、許可された。

暁が話したのは、愛の耳を疑うことだった。

早川提督は、暁を性的に弄び、虐待していた。給料は着服して、捨て艦戦法で死んだ艦娘の給与も着服していた。それだけではなく、止めに入った響を捨て艦戦法で抹殺したのだ。

それからの暁は、早川の指示に従うだけの人形と化していた。

暁にとっては幸運、早川にとって運が悪かったのは、土佐鎮守府が発した安芸艦隊全滅の急報に駆け付けたのが愛達だった、ということだ。

「……………」

「わかった。それで、暁一士。君の処遇だが、どこか別の…………」

「足立一佐、保護したのはうちです。うちで運用します」

愛が、足立一佐の言葉を遮って口を開いた。

「確かに、君の自由裁量だが、大変だぞ？ここまで傷付いた艦娘を海に戻すのは…………」

「…………分かったわ。私は笹野提督の下で働くわ。早川のジジイと衝突してまで守ってくれたんだから」

その暁の言葉で、足立一佐も暁が室戸鎮守府の指揮下に入ることを承認した。

「ところで、それだけの為に室戸に向かったんですか？」

愛が足立一佐の顔を真っ直ぐ見ると、足立はふふつと笑って両手を挙げた。

「君には隠し事はできないようだな？丁度明日、呉に査察の予定があったからスケジュールに組み込んで、笹野一尉の顔を見に来たのだ。しっかりやっているか、高菜二佐もかく言う私も心配だね。だ

が、杞憂だったよ」

「有難うございます」

笑顔を浮かべると、足立のおじさんは苦笑いを浮かべる。

「あまり、危ないことをせぬようにな？安芸はこちらで処理して置く」  
「はい、了解です」

足立一佐が帰った後、暁には数日の休養を命じて、空いている官舎へ花梨に案内させ、そのまま休養入りを指示すると、愛は司令官執務室に戻る。

「妖精さん、書類の整理お任せします。後で私がサインをしますので。ちよつと仮眠を摂って来ます」

「てーとく、りよーかい」

妖精さんが執務を始める中、愛は健太の手を引っ張って官舎へと入って行った。

「え、提督……愛ちや!?!」

健太はその日、夕方までベッドルームでワイシャツ一枚になった愛に、抱き枕とされることとなった。

気持ち良さそうに眠っている愛に密着されて、顔が真っ赤の健太。特に胸元が見え、ちらりとショーツが見え隠れする愛の姿は、思春期の男の子には目の毒だ。

そんな様子を、睡眠欲求を満たして司令官執務室に出頭し、愛の寝顔を覗き込みにやって来た艦娘達が、にまにまと眺めているのだった。

「皆さんは何故見てるんですか!?!」

「従卒とは役得ねえ、思春期の青い果実に密着されて、顔真っ赤よ」

「こんなPretty Girlに抱き付かれてるんだから幸せじゃない!」

「あらあら、幸せそうな寝顔ですね、提督は」

「もう少し寝かせてあげましょう」

「これは私達も負けてないですね!」

「勝ち負けの問題かなあ？大井っち」

「今日からこんな良い提督のところまで戦えるなんて……諦めなくてよ

かったわ」

艦娘達は、口々に健太を誂ったりすると満足したのか、

「また後で出頭するわね」

ビスマルクが代表でそう言うと、司令官官舎を後にした。

「ちよつと、助けてくださいよ!!僕、このままじゃあ!!」

身動きが取れない健太が助けを求めるが、艦娘達は「頑張つてネ」と告げると、帰って行ってしまふ。

健太のドキドキは、夕方愛が目覚めるまで続く事になった。

愛も花梨も睡眠欲求を満たし、夕方から執務を始めたところに艦娘達はやって来た。

健太も、一度官舎に戻って何かをしてから、再び従卒の仕事に戻る。

「提督!書類仕事は終わりそう!」

やはり、ノックをせずに入ってくるビスマルク。

「Me達と、Dinnerしましょうよ!」

「暁も来ましたし、ファミレスでご飯にしましょうってことに」

「提督もお腹空いてるでしょう?」

「もちろん提督のゴチよね!」

「こらこら、女の子に集らない」

「今日はこの私が出すわ。足立一佐が、未払い給与の一部を即日で振り込んでくれたから」

暁がどんと胸を張ると、艦娘達から歓声上がる。

『おー!』

「もう少し待っててね。今朝の戦果を入力したらおしまいだから。花梨さんは一緒に来ますか?」

「いえ、同期の笠原三尉とご飯の約束がありますので。すみません、お気持ちだけ頂いておきます」

「そっかあ……分かりました」

そんな会話をしながら、1900過ぎに先に執務室を退室した花梨を見送ってから、残りの仕事を終わらせると、

健太と艦娘達と共に、ファミレスに繰り出す愛。  
こうして、波乱含みの初陣は終わった。



## 学校で

漸く四月になった。

愛と健太は、正式に『中学生』となった。

執務の傍ら、二人は花梨や幕僚達から勉強を学ぶことが多くなっていた。

中学範囲の予習は、学校を休みがちになる二人にとっては不可欠なところなのである。

意外なことに、岩崎二尉は東大法学部・法科大学院出身で法曹資格を持っているが、敢えて自衛官に鞍替えした異色の自衛官である。

本人曰く「平和になったら弁護士になる」と言っている。

彼の経歴を見ながら、愛は『見た目』でものを判断してはいけな、と感じていた。

翼が、彼のことを『引き立て役』と揶揄しているが、副参謀長として愛の提案する作戦案に、

「なるほど」と頷いて見せることで、その説得力が増していることは否定できない。

ただ、大塚参謀長のおかげで平時にやることは、あまり多くはない。そんな訳で、岩崎二尉は家庭教師役も快く引き受けてくれた。

その間にも、深海棲艦の襲来は続いていて、

愛達はリーヴェ・サーカスを基本戦術にして、対処していた。

夜戦では鳳翔と暁を入れ替えて出撃させ、より魚雷の本数を増して……

もちろん、失敗も多々あった。

近隣の、土佐鎮守府の救援艦隊のお世話になることもあり、

土佐鎮守府の坂本竜兵さかもとりよっへい一佐に、

「まだまだちびっ子は甘いぜよ。志願で入ったなら、修行不足・覚悟不足じゃき」

等と厳しく言われる始末。それでもへこたれずに午前中は書類整理、午後は学校の予習、夜には戦術の勉強と、愛は非常に忙しい日々を送っていた。

「提督、最近根詰め過ぎてない?」

ノックをせずに執務室に入ってきたのは、ビスマルクである。

そして、愛が大型タブレットで戦術戦略書を読みながら、ノートに書き纏めているのを見て、大きな溜め息を吐く。

今日も、食事はコンビニで買ってきたお弁当で済ませて、ゴミ箱にはお弁当の容器が入っている。

「あはは。私は諸提督方ほど才能はないので、もっともっと勉強しないと……サーカスのへぼ団長で終わる気はないからね?」

「中学生にしては十分過ぎる才能を持っていると思うわよ、本気で。坂本のおっさんは厳し過ぎんよ。あんまり無理すると体を壊すわよ。今何時だと思ってるの?」

その言葉に、懐中時計を取り出す。

「2345くらいかな?」

「從卒<sup>健太</sup>くんは?」

「今日は、帰って寝てもらってる。そうだ、リーヴェ・サーカスの基本陣形を、少し変更してみたんだけど……」

「どれどれ?」

ビスマルクとの議論は、朝方まで続いていた。

愛の立てる基本戦術に、艦隊側で出来ること・出来ないことを落とし込んで、愛に伝える。

そして、愛もそのビスマルクの意見に応えて、完成度の増した作战案を出し直す。

途中、ビスマルクはドイツビールを。愛はコーヒーを飲みながら、二人のサーカス作战案会議は続いて行く……

「この陣形はロスが多いわね。何も梯形陣に拘る必要はないのじゃないかしら? 単横陣から、真ん中を下げる場合も考えた方が良くはないかしら?」

「それだと、イノシシみたいに突っ込まれたら一溜りもないから。これは受け流しながら前衛部隊を急進させて、グルツと回って半包围するの役に立ってる陣形だと思う」

「なるほど、そういう考えもあるのね……しかし、サーカスは空母に弱

「いのが難点ね」

「対空母の場合は、鶴翼陣を開いてクロスファイアポイントを作り出して、各個撃破するしかないんじゃないかなあ？これもサーカスだよ。艦載機は空中ブランコでね」

「そうなるよ、梯形陣のサーカスは水上打撃艦隊向けのA、<sup>ア</sup>輪形陣のサーカスは空母打撃艦隊向けのプランB<sup>ベ</sup>ということになるわね。明日からの演習は、その落とし込みを中心に行うわ」

「Dank<sup>あ</sup>e. 艦隊運用は、ビスマルクにお願いするしかないから、無茶な作戦案があつたらどんどん言つてね？」

「こつちも、まだまだ連携が取れてない部分が多くて申し訳ないわね」「そんな事ないよ。まだまだ私が未熟なだけで！」

立ち上がりながら言う、愛の頭を優しく撫でるビスマルク。

「そうね、貴女は……半熟かしら？ 実戦は今のところ6戦4勝で勝ち越してるんだし、轟沈艦娘もいないんだからもっと胸を張っていいのよ。もう少ししたら「見習い」の一尉が取れて、三佐になるわね」

「はあい」

「ふふ、良い返事ね」

こうして連日連夜、遅くまでビスマルクやアイオワ、鳳翔等と作戦会議を開いていた。

「ところで、もうこんな時間ですけど、明日は大丈夫なんですか？」

参加していた鳳翔が、心配そうに切り出す。時間は0330。

「え？何がですか？」

「Oh! Schoolの入学式よ！」

「あーっっっっ!!!忘れてた!!!」

翌日。

学校の制服である、ワイシャツに緑のリボンに青色のブレザー、プリーツスカートに身を包み、校門の前に愛は健太と二人で立つ。

この間はビスマルクが司令官代行として、執務室で執務をしている。

その隣には、ワイシャツに緑のネクタイ、青色のブレザーとズボンの健太もいる。

二人共、ワイシャツは自衛隊第二種制服でブレザーに隠れているが、肩にそれぞれ一尉と士長の階級章が付けられている。

自衛隊制服着用義務と、学校側との協議での折衷案である。

「……皆も入学式なのかなあ?」

「遠い中学校になっちゃったから、大変だろうね」

宮戸島の中学生は、毎日七km先にある中学校へ通わなくてはならない。

お騒がせトリオの苦労を思い遣りながら、元気にしているかな?と、故郷の友人達に思いを馳せる。

校門の前に立っている、愛と健太の様子を見ている少女の姿が四人。彼女達は小学校から仲良しの地元の子達である。

「あ、噂の転校生かな!」

「みたいだね」

「声掛けてみる?」

「ですね」

『おーい!!』

「誰だろう?」

「うん」

声を掛けてやって来る、四人組の女の子。

一人は、さくらんぼ色の玉付きのゴムで両髪を縛った、ツインテールの女の子。

もう一人は、ミドルのおかっぱ頭で釣り眼の三白眼な女の子。

三人目はふっくらしていて、背丈も男の子くらいある、大柄なショートボブの女の子。

最後に、ロングの三つ編みでメガネを掛けた女の子。

「初めまして!東北から来たって言う、噂の転校生!」

ツインテールの子が、笑顔を向ける。

「あ、うん……宮戸島から来たんだよ」

「初めまして」

愛と健太がそれぞれに答えると、ツインテール少女から自己紹介が始まる。

「私は神波恵奈。よろしくね」

おかつぱの少女が、それに続く。

「あたしは大林美雪」

大柄な女の子が、美雪の後に自己紹介する。

「大野杏子だよ」

最後に、眼鏡の女の子が頭を下げる。

「伊東真由です」

「ええと、私達は……」

愛達も自己紹介しようとする、恵奈が手で遮る。

「知ってる、笹野 愛ちゃんに大石健太くん。室戸鎮守府の提督さんなんだって？皆知ってるよ」

「そうなんだあ、宜しくね」

「宜しくね」

二人揃って頭を下げると、恵奈が二人の手を引いてクラス発表のボードに連れて行く。

「皆同じクラスだと良いね」

そう恵奈が言うと、六人でクラスボードを見上げる。

恵奈と愛と美雪が同じ1組、2組に杏子、3組に真由、4組に健太だった。

「健太君と違うクラスかあ」

愛がそうぼやくと、健太も残念そうな顔をする。

「ああ、日下部燿子さんも1組だね」

恵奈が、気づいたように言う。

「日下部さん？」

「うん。室戸鎮守府の前の提督さんで、戦死されたんだって。それで公立学校に入学したんだってさ。可哀想にね、私立合格してたのに」

「ふうん………」

愛は真相を知っているが、知らない振りをして答えていた。その時は、それだけで済んでいた。

入学式が終わり、自己紹介を行い、先生が愛は室戸鎮守府の提督で、休みが多くなる場合がある、と補足説明をしてくれた。

愛は、燿子がずっと睨み付けていたのが気になっていた。

日下部燿子はポニーテールを金髪に染め、スカートも校則ギリギリまで長く改造した、不良っぽい子だった。

それから数日経った、ある日の放課後だった。

「笹野さん、ちよつと顔貸してもらえん？」

日下部燿子が、愛を呼び出した。

「え？はい」

愛は疑問も感じずに、カバンを持って燿子のあとに従って行った。到着したのは、港の廃倉庫だった。

「あの？ここで何か用ですか？」

そう愛が訊いた直後、頬に熱い衝撃を感じて、そのまま呆然と尻餅を付いた。

殴られたのだ。いきなり……

「……え？」

信じられないと言った表情で、燿子の顔を見上げる。

「あんた達、自衛隊のせいだ。パパは殺されたのよ」

「……………」

愛は何も答えない。

廃倉庫から、金髪や茶髪のチャライ男達が何人も出て来る。

「あんた達、この子をレイプしなさい」

燿子の指示に、愛は慌てて腰に手を遣った。……拳銃なんて学校に持って来てなかった。

「何が提督よ！うちではいいパパだったのに、ある日深海棲艦に殺されたって。二階級特進もなしで、市民を危険に晒した無能な提督、つてことにされたわ。あんた達がいけないのよ！」

「それと、私がレイプされることに何の関係があるの!？」

愛は立ち上がると、すぐに構える。

「復讐よ。あんたに痛い目を見せて、パパの墓前で土下座させるのよ。自衛隊の代表として……」

「私を狙ったのは、私が提督だからってこと!？」

「そうよ。何が中学生提督よ？何が初陣で華麗な戦果を収めたよ？パパだって優秀な提督だったわよ。それが無能者呼ばわりされて、遺族年金の支払いまで止まって、私は私立の中学に行けなくなったのよ!」

愛はこの場で、日下部の悪行を洗いざらいぶちまけてやりたかった。だが信じられないだろうし、逆上した燿子の命令で、本当にレイプされかねない。

ジリジリと迫ってくるチャラ男に、ジリジリと下がりつつ飛びかかってくるのを待ちながら、どんとどんと下がって行く。

「っ……!!」

愛はすかさず、廃工場の中に走って行った。

廃工場の中に入ると、コンテナの陰に隠れて、様子を窺う。

「オラア、どこだ!？」

「隠れてねえで出てこいやー!」

と言う、チンピラの声が聞こえてくる。

「笹野さん、諦めて初めてをこいつらに奪われなさい」

そう言う、燿子の声も聞こえて来る。燿子も倉庫内に入って来ていた。

初めては、『もうあげちゃった』ものの、こんな奴等にレイプされる謂れはない。

胸ポケットから業務用携帯を……取り出そうとして、重大なミスに気づいた。

今は、司令官代行たるビスマルクに預けているのだ。

たまたまスマートフォンも、官舎に置きっ放しだった。

入り口では、残ったチンピラが見張っている。

その時だった。

ウウウウウウウウウウー

『深海棲艦出現、深海棲艦出現』

深海棲艦出現の、非常警報が鳴り始める。

「し、深海棲艦だあ!!」

外から声が聞こえると、廃倉庫のコンテナから外を覗き込む。

駆逐艦イ級が陸に上がった途端、手足が生えて手槍を持った魚顔の化物に変わったのだ。

これを『成プロモーションり』と言う。

この深海棲艦一体で、ル級クラスの脅威を持っている為、陸上に上がった場合は戦死者必至の惨事になるのだ。

だから、歩が成ると『と金』に成るように、イ級であろうと舐めてはいけない強敵に成る。

「うわああああ!!逃げろおおお!!」

チンピラ達は見張りを放棄して、仲間を見捨てて逃げ出してしまった。

「チツ、と金……」

声を上げてしまった愛は、燿子達に見つかってしまったが、成イ級にも気づかれてしまった。

ノッシノッシと、廃倉庫内に入って来る成イ級。

「死ねや!!怪物!!!」

勇敢なチンピラが、特殊警棒を持って成イ級に襲いかかるも、無慈悲にも槍で腹部を貫かれてしまう。

「ぐあああああ!!!」

そのまま、頭を掴まれて放り投げられる。

チンピラの倒れたところには、血溜まりができています。

そして、燿子の方をギョロツと睨み付ける。

「ひっ……」

恐怖のあまり燿子は腰を抜かし、スカートと地面にシミを作る。

そして成イ級は、血がべつとりと付いている手槍を投げ付けた。

「危ない!日下部さん!」

愛は飛び出すと、燿子を押し倒すように庇った。

その時、右腕を槍が掠めて青い制服に血に滲んで行くのが判った。

ノッシノッシと、ゆっくり歩を進める成イ級に、チンピラ達は愛と

燿子を見捨てて、窓から逃げ出してしまった。

すぐに愛は立ち上がり、燿子に左肩を貸して、無理やり立たせて倉



庫の奥へと走って行く。

「立って！死にたくないでしょ!？」

「あ……う」

成イ級は、コンテナに突き刺さった手槍を引き抜くと、再びノッシノッシと愛達を追って歩を進める。

追い掛けるのは簡単だ。ポタポタと血が流れて、地面に跡になっているからである。

倉庫の奥までやって来ると、

「大丈夫？ 日下部さん」

「どうして……?？」

耀子は、右腕を抑えて痛そうにしながら、それでも自分を気遣おうとする愛が理解できなかった。

「どうして助けたのよ!?! 私は、あんたをレイプさせようとしたのよ!?!」

「それでも、『民間人を守る』のが私達の任務だから!」

まっすぐに躊躇なく言い切った愛に、耀子は心動かされていた。

「……」

「それよりも、あいつ倒そう! 日下部さん、手伝って!」

「えっ……?？」

倒そうという言葉に、耀子は啞然としていた。

「私の血の跡を辿って、いずれここに来るのは判ってる。私が囷になるから、倉庫のクレーンを操作して、コンテナでコンテナを押し落として、あいつを押し潰そう!」

周りに、山のように積んであるコンテナを見上げると、二人でクレーンのコントロールルームまで走って行く。

クレーンを操作すると、電気系統がまだ生きているようで、クレーンが動く。

「日下部さんは、UFOキャッチャーは得意?」

「ゲームセンターに通ってるけど……それより、待って」

耀子はそう言うと、自分のリボンを解くと、愛の傷口の上をきつく縛る。

「っ……ありがとう。合図は私がやるから……いい?」

「わ……分かったわ。あと、燿子でいいわ」

「わかった、燿子さん」

左手でハイタッチすると、愛は成イ級の前に立ちはだかった。投げて来る槍を必死に躲すと、それを奪い取って、

「やーいのろまー！」

「グルルルルルル」

唸る成イ級を挑発しながら、縦横無尽に逃げる。

その間に燿子はクレーンを降ろし、クレーンのフックにアンカーを繋ぐ。

クレーンは、ゴウンゴウンと音を立てながら、コンテナを釣り上げる。そして、愛が逃げ回っている間に、燿子はコンテナにコンテナを近づける。

愛が、そのトラップポイントを通り抜けた瞬間だった。

「今っ！」

「っ！当たれ!!」

ガツシャーン!!

燿子が操作したクレーンでコンテナが崩れ、成イ級にコンテナが降り注ぎ、

「グアアアアアアアア!!」

と言う断末魔の悲鳴と共に、血が辺り一面に飛び散った。

愛も、前転しながら地面に伏せてコンテナ地獄から抜け出すと、燿子はリモコン装置から手を離して愛に駆け寄る。

「燿野さん！大丈夫?」

「いたたた……燿子さん、それよりも……」

「呼び捨てでいいわ」

「じゃあ、燿子……携帯持ってる?」

「ええ」

「119……いや、警察を呼んで……」

それだけ言うと、失血の貧血でくらつと意識を失った。

「燿野さん!!燿野さん!!」

目を覚ますと、病院だった。

「あれ、ここは……？いたたた……」

「笹野さん、ああ、良かった……」

周囲を見回すと、ビスマルクと燿子が病室の椅子に座っていた。

「ビスマルク、あれからどうなったの？」

その問いに、ビスマルクは呆れ返ったように大きな溜め息を吐いた。

「警察から連絡があつて、駆け付けた時にはもう終わつてたわ。成イ級はコンテナに押し潰されて即死してるし、チンピラは救急搬送されて一命は取り留めたけど、重傷よ。それで、提督も七針縫う裂傷を負わされてたわ。まさか、『あんな方法』で陸上で深海棲艦を倒すなんて……話には聞いていたけど、地面が武器になり得るとはねえ……大貫空将から伝言よ。提督は、明日より三等海佐に昇進、だそうよ。そして日下部燿子さんには、提督の名前で感謝状を渡すことになったわ」

ビスマルクも、深海棲艦を崖から突き落として倒した、と言う戦果例は知っていたが、まさか地面と重量物のサンドイッチでも有効だ、とは思つても見なかった。驚きつつ呆れながら愛に昇進を伝える。

「昇進かあ……良いのかなあ？」

「感謝状なんてそんな……」

「成イ級なんて、ル級に匹敵する怪獣をやつつけたんだから立派な武功よ。もう一つ、高菜二佐より伝言よ。『危ないことはするんじゃない、と言つた筈なんだがなあ』と呆れておられたわ」

次のビスマルクの言葉には、苦笑いを浮かべる愛。

「本当よ。笹野さんがどんどん顔色が青くなっていくから、死んじゃつたと思つたんだから！」

立ち上がり、少し怒つたような表情を見せる燿子に、愛はポツリと訊いた。

「復讐は、もう良いの……？」

「……貴女には、謝つても謝り切れないことをしようとしたわね。許されると思つてないけど……笹野さんみたいな人も自衛隊にいるん

だ、って思ったら……身勝手だったわ」

「……………」

旗艦であるビスマルクも、前任者の末路を聞かされている。複雑な表情を浮かべると、

「まあ、提督。いつでも退院はしていいから、私は先に戻ってるわね。提督にもごめんなさいよね、成イ級はこっちのボーンヘッドよ」

「私こそ、何も連絡手段を持たずに外に出て、ごめんなさい」

愛の言葉を聞くと、ビスマルクは笑みを浮かべて外に行つた。

「ゆっくりね」

それだけ言い残して。

「……………ねえ、笹野さん」

「ああ、笹野さんってよして。愛でいいよ」

「じゃあ……………愛ちゃん。パパは……………何をやったの？」

沈黙が辺りを支配した。

「……………何があつても、受け止める覚悟がある？」

「どういう……………こと？」

愛の真剣な表情に、気圧されるように聞き返す燿子。

「答えて。どんなに残酷な真実でも、受け止める覚悟がある？」

「……………」

少しの沈黙の後、燿子は顔を上げて、

「分かったわ。聞かせて頂戴」

「……………日下部提督は、重巡艦娘と共謀して、捨て艦戦法……………つまり、艦娘を故意に戦死させて、それを上に報告しなかった。そして、その死んだ筈の艦娘の給料を横領していた」

「えっ……………」

燿子は愕然とした。父親である日下部提督からは「提督は給料が良い」と教えられていたからだ。

不正に得たお金で、自分もその恩恵に与っていたことに、ショックの色が隠せない。

顔色が悪くなった燿子に、愛は心配そうな顔をして、

「もうやめる?」

と愛が問いかけるも、耀子は首を横に振った。

「……駆逐艦。見た目は小学生中々高学年から中学生くらいの子かな? その艦娘に、性的暴行を働いて壊れたところで、捨て艦戦法で始末していた」

「そんな……パパ……」

よろよろつとしながら、椅子に座り込む耀子の顔を真っ直ぐ見る愛。

『戦死と相殺』で、処罰されなかったの。耀子にとってはいいお父さんだったんだね?」

流石に始末された、とは口が裂けても言えなかった。愛はそこまで残酷な事実を、伝えたくはなかった。

きつと、人間同士で殺し合っている、なんて知ってしまったら、耀子は立ち直れないだろう……

愛はそう考えて、日下部提督の死の真相を伏せて語ったのだ。

「……ええ。今日までは……ママは知ってるの?」

愛は首を横に振った。

「知らせないほうが良いと思うよ。やってることは不倫なもの」

「……そうね……本当にごめんなさい、愛ちゃん。もし、深海棲艦が来てなかったら……私、取り返しの付かないことを……」

「ああ、初めてがどうのって話?」

「うん……」

「あー……乱暴はされるのは嫌だけど、初めてはもうあげちゃったしねえ」

「へっ?」

その言葉に、顔が真っ赤になる耀子。不良なのに意外と初心である。

「4組の健太くんね、私の彼氏なんだよね」

「そ、そうなんだ……」

「ねえ、耀子。この話を聞いて耀子はどうしたい?」

「……あたし、家を出るわ。横領したお金で建てた家だなんて、もう

居たくない」

「……………家を出てどうするの?」

「考えてないけど、どっかヤン友のところに……………」

「それは駄目」

捨て鉢になり掛けている燿子に、ピシヤリと言って諫める愛。

「まあ、一旦お家に帰って。ゆっくり考えてそれで決めればいいよ」

「ええ。それじゃあ、また明日ね」

「うん」

帰って行った燿子と入れ替わりに、健太がやって来る。

「愛ちゃん!大丈夫!?お迎えに来たよ」

「ありがとう、健太君。それじゃあ鎮守府に帰りましょ」

「うん!」

右腕を吊ったまま、愛は左手で健太と手を繋いで鎮守府へと帰って行った。

その夜だった。

リュックやスーツケースに、荷物をぎっしり詰めて顔を腫らした燿子がやって来たのは…………

「ママ……………あのババアは、皆知ってたわ!知ってて犯罪の片棒を担いで居たのよ!横領の事も何もかも!」

「その様子だと、相当な大喧嘩したんだねえ。どういう事?」

今日の門の守衛担当だった笠原三尉からの連絡で、パジャマにジャージを羽織った姿で、執務室に招き入れた。

「提督の……………つまりは愛ちゃんのことを悪く言ってたから、ついカツとなつて言っちゃって……………したらそんなの知ってるわよ、贅沢できてたから良いじゃない?だって。それで頭に来て、いろんなものを壊して、あたしのもの持ち出して家を出て来たわ」

「……………」

0000前に戦術会議を終え、解散して官舎で眠っていたが、緊急の来客ということで呼び出された花梨やビスマルクも啞然としている。

時間は0200を回ったところ。二人共いい迷惑である。

「それで、鎮守府うちに来たってこと?」

「そうよ」

「そうよって言われても……」

「ねえ……」

脇に控えている花梨とビスマルクは、顔を見合わせる。

「はい、日下部さん、提督、コーヒーどうぞ」

従卒の仕事をしている健太は、折角寝たのに叩き起こされて、自衛隊制服姿でお茶汲みに駆り出されている。

「あ、ありがとう…大石くん」

「ありがとう」

「と言つても、ここも自衛隊施設でして……」

と、花梨が言い出したところで、愛は思い出した。

「あああああつ!!! あった! 『自由裁量』の裏技!」

「ああ、なるほど」

健太は、なるほど、と笑みを浮かべる。

「日下部燿子さん。本日より貴女を『名誉隊員・二等海士』として、室戸鎮守府の施設立ち入りを許可します」

「はいい!」

燿子とビスマルクは絶句であり、愛の言う名誉隊員のことを知っている花梨は、口元に手を当てて笑いを堪えている。

「という訳で、寮長。名誉隊員である日下部名誉二士に、お部屋を提供してください」

愛がにんまりと笑みを浮かべると、ビスマルクは本日最大の大きな溜め息を吐いた。

「Verst・解ndnis。では、日下部名誉二士。女子官舎に案内するわ」

「良いの!? 愛ちゃん!」

「そのかわり、構内では私は提督、燿子は名誉隊員」

「ええ、分かったわ」

ビスマルク先導の下、愛と花梨も燿子の荷物を持って、空き部屋へと向かう。

士の部屋は相部屋なのだが、丁度一杯で二段ベッドの部屋を独占、という形になる。

「あまり広くない部屋だけど我慢して頂戴。あと、男子官舎への侵入は厳禁、いいわね？食事に關しては、提督が考えてると思うから、いいわね？」

「はい」

ビスマルクは、自分の部屋から部屋の鍵を持って来ると燿子に手渡してから、部屋へと引き上げて行った。

花梨も「明日も早いのに……」と言いながら、自分の部屋へと引き上げて行った。

ばたんと扉が閉まったところで、愛は下のベッドに腰掛ける。

「二人きりの時はいいからね、燿子」

「分かったわ、愛ちゃん。……本当にごめん、ありがとう」

「いいのいいの」

「ところで……その、健太君とはどんな感じなの？」

「それはね……」

二人のガールズトークは、明け方まで続くことになった。

翌日も、三人並んで登校する愛達。

『おはよー！』

途中で、恵奈と愉快的仲間達も合流して、学校へ向かう。

愛は片手に筒を持っており、学校で燿子に感謝状を贈呈するのだ。

燿子も、髪の色をモカブラウンに染め直して、金髪よりは大人しくなった。

悪いチンピラとの付き合いも断ち切って、両親のようにはならな  
い、と心に決めた燿子だった。

「……という訳で、燿子の学費と生活費を工面するいい方法、何かない  
ですかね？」

『全く、君は無茶なことばかりするね。わかった、大貫空将に掛け合っ  
てみるよ。健太君と同じ司令官付きとして、ささやかな給料が出ない



か？って』

「助かります」

電話の先は高菜二佐である。業務用携帯電話で何とかならないか、相談を持ち掛けたのだ。

呆れ返った高菜二佐だったが、大貫空将に掛け合うことを約束してくれて、

即日大貫空将から、司令官パソコンを通じて燿子の特任士長待遇での司令官付き、と言う特例処置の通知が届いた。

お礼として、高菜二佐にはコニヤックでも贈ろう、と考えながら通販サイトを開く愛だった。

参観日く越えられない壁く

「えっ？来るの？」

ゴールデンウィーク間近になった、四月下旬のある夕方。  
スマートフォンに掛かってきた母・麻衣からの電話に驚きを隠せな  
いでいた。

執務室では、花梨は副官デスクで自分の業務を処理しており、  
ソファアーに二人で座っている従卒二名は、学校の予習をしている。  
勉強は燿子に教わる、と言う形なのだ。

曲がりなりにも、難関校の私立中学校をパスするだけあって三人の  
中では一番成績が良いのだ。

『ええ。大石家と、それから高菜さん達がゴールデンウィークの休暇  
を使って行くことになっているわ』

「師匠も来るんだ……それに電さん達も……」

『そうね。何でも高菜さんは『参観日』だと言ってたわ』

「そうなんだね、参観日って……やっぱり力量をテストされるのかな  
あ？」

『そこまでは……とにかく、仕事の邪魔にならないようにはするから』  
「分かったよ。どうせ、入構許可は宮本一佐に出してもらってるんで  
しょ？」

大きな溜め息を吐くと、麻衣は嬉しそうな声で、

『当たり前。という訳で、大石さんところと、高菜さん達でゴールデン  
ウィークに行くからね？』

「はいはい、了解ですよ」

『それじゃあね？』

電話が切れると、燿子がたち上がって執務机に近づく。

「今の、愛のママ？」

「そうだよ、これがうちの家族。出発前に撮ってもらったやつかな？」  
そう言うと、スマホで写真を見せる。

それを見ると、一瞬燿子の顔に陰りが見える。

「そっかあ。愛のところもパパ、いなかったんだね？」

「え？これがパパだよ」

「えっ？」

父宗太郎は、背が低く童顔の為、20代と言われても不思議ではない。

その為、耀子は《兄》と勘違いしたのだ。

「あの、さ……愛。ママって、年いくつなの？」

「42歳だね」

「それで、パパは……？」

「30歳。因みに、健太くんママは27歳だよ」

「まじで!?15で生んだの!？」

驚愕している耀子に健太が、

「その時、父さん二十歳だったんだけど、母さんの家で土下座して婚約して、16の誕生日に結婚したんだってさ？」

「そ、そうなのね……それじゃあ、もし今、愛に赤ちゃん出来たら……20代のおばあちゃん」

「いやいやいや、結婚するまでは作らないよ！」

その言葉に、花梨がコホンと咳払いをする。

そんな中、ビスマルクが何時ものようにノックもせずに入ってくる。

「こんばんは！提督、今日も作戦会議しましょう？」

「それなんだけど、ビスマルク。ゴールデンウィークに高菜二佐が艦娘を連れてくるみたい」

「そうなのね。そうになると……力量を見られるのは間違いないわね」

「勝てなくても、無様に負けるのは皆に申し訳ないから」

「……分かったわ。期間もあまりないけど、やるだけのことはやりましょう」

作戦会議は、全幕僚が結集して連日に亘って行われた。

翼も怠惰の衣を脱ぎ捨て、空戦オブザーバーとして幕僚会議に参加する。

時には、土佐鎮守府から坂本一佐を招いて助言を乞い、毎日夜遅くまで艦娘達は陣形チェックや、土佐鎮守府との演習を精力的にこなす。

ていた。

航空妖精も、空母艦娘と翼が編隊の演習を何度も繰り返す。空母艦娘達も、元エースパイロットの彼女の助言に真摯に耳を傾けて、何度も編隊の変更を繰り返す。

この半月間は、深海棲艦の対処を行いながら不眠不休で、対宮戸島鎮守府対策の演習を続けていた。

「大丈夫？最近学校行けてないよね」

燿子が勉強を見ながら、心配そうに声を掛ける。

見た目は不良だけど、優等生なのだ。

愛は、健太と燿子を学校に送り出して、自分は朝から戦術を組み立てては、参謀長に諮って書き直し、を繰り返している。

「大丈夫。ゴールデンウィークまでに、やれる手は全部打たないと」

目に大きな隈を作り、笑みを浮かべる愛に、

「とにかくコーヒーを淹れるわ」

そう言うと、コーヒーの準備に取り掛かる。

その頃健太は、陸戦隊員に混じって演習を行っている。

健太には従卒ではなく、護衛任務が与えられたからである。

時折やって来る、土佐鎮守府の陸戦隊長である郷里ごうり 剛三等陸佐ごうの教えも乞うている。

勿論、坂本提督の護衛として同行しているのだが、この男戦傷だから、岩崎二尉を超える大男である。

通称ミンチメーカー、上陸した成イ級をバツサバツサと薙ぎ倒す男なのだ。

先日は、演習途中にイ級が襲来した時に、艦娘達に無視をさせ、上陸してきた成イ級を何体も、バツサバツサと特大のトマホークを振り、無残にも頭から真つ二つにして行ったのだ。

あまりにも残虐無道とも言える、その怪力無双の虐殺劇に、副官である花梨は目を逸らし、健太は驚愕で目を見開き、元お嬢様の燿子はその場で嘔吐したくらいである。

そして愛はこう漏らした。

「に……人間じゃない」

「ぐわははは。毎日牛乳を飲んで、肉を食べて鍛えておれば、ワシのように強い男になれるのだ」

ゴリ……もとい。郷里三佐は、陸上での成深海棲艦撃破スコアの日本一保持者なのだ。

「はっはっは。大石土長も、郷里三佐に鍛えてもらえばいいぜよ」

そんな訳で、坂本一佐がやって来た時は、陸戦隊共々郷里三佐の教えを乞うのだ。

坂本一佐の語るところによると、地元のヤクザ同士の抗争に素手で乗り込んで、拳銃チャカを持つてる相手を全員殴り倒して、病院送りにして物理的に仲裁したただの、暴走族をバイクに乗っている状態でリアアツトを食らわせて退治したただの、イラク派兵の時に手榴弾を投げ込んだテロリストにブチ切れて、単身アジトに乗り込んでそのテロリストを血祭りに上げたただの、艦娘達と共にモーターボートに乗って出撃して、深海棲艦をミンチにしたただの、ソマリア沖の海賊対策支援に参加して、ソマリアの海賊をトマホークでミンチにしたただの、前任地の函館鎮守府では、球磨と一緒にクマ罷を退治しては焼いて食っていた等、公表したら大問題になりかねない武勇伝を教えてくれた。

「やっぱ人間じゃない……」

「……だね」

「……私、あの人無理……」

その武勇伝を聞いて、人間とは思えなくなった愛に、同意する健太、拒否反応が出てしまった耀子。

完全に、成イ級惨殺事件がトラウマになっているのだった。

だが、このミンチメーカー、土佐鎮守府の艦娘達には愛されていて、子供には懐かれ、妖精が見えていたら提督になれるのに、と坂本一佐に勿体無いと言わしめるほどの艦娘からの信頼度であり、

毎朝、鎮守府前の横断歩道で立ち番をして、小中学生の登校を見守ったりしている、《心優しい》おじさんなのだ。

「相手は駆逐艦三隻じゃき、いくら練度が高いと言っても、この作戦に瑕疵は見つからないぜよ」

漸く坂本一佐に及第点を貰った時には、ゴールデンウィーク前日に

なっていた。

とうとうやって来る。高菜二佐が。

ゴールドデンウィーク初日。

「着いたのです！」

滞在先のホテルの駐車場に到着すると、真っ先に降りたワンピースと麦わら帽子姿の電。

「久しぶりの旅行だぴょん」

「早速チェックインしましょう」

前日夕方からの強行軍で、四国の室戸に乗り込んで来た、宮戸島の愉快な仲間達。

九人乗りハイエースワゴンをレンタカーで借りて、ドライバーを交代しながらの、《超》ロングドライブである。

今回は、免許保有者が五人もいるのが強みである。

運転席から高菜二佐が降りて、助手席と運転席の間に座っていた卯月が降りる。

真ん中のシートには、チャイルドシートに収まっている未唯が乗っており、薄雲と笹野麻衣が未唯と一緒に座席から降りる。

そして、深夜運転組の大石夫妻と笹野宗太郎が、

「着いたわよ、宗ちゃん」

と言う声で、目を覚まして降りる。

アーリーチェックイン予約で、昼過ぎにチェックインすると、全員移動の疲れでボタンキューでゆっくり休む。

愛には、明日到着すると伝えておいたのだ。

まさか、前日から乗り込んでるとは思うまい。

翌日昼過ぎ、そろそろと九人連れ立ってやって来る。大石夫妻と笹野夫妻、それに未唯は入構許可証を身に着けている。

室戸鎮守府に到着すると、守衛に立っている隊員が司令官に電話をする。

「さすがにでかいなあ。急宮戸島ごしらえのうちとは大違いだ」

「なのです」

「陸戦隊くらい欲しいぴよん」

「海で防いでいるから必要ないでしょう?」

等と高菜二佐と艦娘達が語っていると、中からぞろぞろと愛を始め幕僚達が出て来る。

「ようこそ!室戸鎮守府へ!」

主要幕僚と艦娘が、並んでの出迎えである。

敬礼すると、高菜二佐と電達艦娘が答礼をし、民間人の笹野・大石夫妻は頭を下げる。

「おねえちやああああん!」

未唯が、愛のところにとてとてと歩いて抱き付く。

「わつとと、一ヶ月ぶりだね、未唯」

「えへへ!お姉ちゃんかつこいいね!」

抱き上げると、にへらつと笑う未唯。

「久しぶりね。高菜三佐、もとい、二佐」

「ああ、久しぶりだねえ」

ビスマルクが自ら歩み出て手を差し出すと、高菜二佐が握手で返す。鳳翔も後ろで頭を下げる。

「知り合いなのですか?」

「どういう関係だぴよん?」

「愛人ですか?」

そんな様子を見た嫁達が高菜二佐を見ると、ビスマルクが苦笑いを浮かべる。

「違うわよ。高菜二佐とは公金横領事件の一件で世話になっただけよ」

「そうだね。それ以来会ってなかったけど、愛ちゃん……笹野三佐のところに行ったんだね?」

「そうなのよ。」

それじゃあお互い、自己紹介をしようかしらね?」

そのビスマルクの言葉で、それぞれが自己紹介を終えると、愛と健太は両親の元に向かう。

「お母さん、お父さん元気だった？」

「頑張ってるらしいじゃない。昇進おめでどう」

「僕としては、無事でいてくれるだけで嬉しいよ」

未唯を抱っこしている愛は、そんな両親に笑みを向ける。

「健太、まだ愛ちゃんを妊ませてないだろうねえ？」

「くらくら」

「ちゃ、ちゃんと避妊はしてるよ！って言うか、そういうことをこんなところで言わないでよ！母さん！」

逃う母大石泰子に、苦笑いで諫める父の勉、そして顔を真っ赤にしている健太。

「さて。早速参観日練度チエックと行くかうか？」

「はい！」

高菜二佐の言葉に愛が答え、未唯を母に託すと軍港に向かう。

軍港では、坂本一佐と郷里三佐が待っていた。今回の演習の審判役である。

「それじゃあ、早速演習を始めるぜよ」

坂本一佐の宣言で、暁を含めた艦娘七人と電達三人が海へと降り立つ。

「ささ、お客様はこちらへどうぞ」

郷里三佐がにこやかに……と言っても怖い笑みだが、民間人の笹野・大石夫妻を用意した見物席に案内する。

未唯は、郷里三佐が抱っこしてくれている。未唯は《何故か》郷里三佐に懐いて、ヒゲをくいくい引っ張っている。

「ぐわははは、お姉ちゃんに似て可愛い子だな」

そう豪快に笑っている。

その様子を見ながら、耀子や健太は心の中で思っている。

(このおっさん人間じゃないから)

そんなことを知らない笹野・大石夫妻は、見た目怖いけどいい人だ、と思っっている。

愛達は司令官端末と無線を使って、高菜二佐は無線での司令を選択した。



艦娘達が演習の準備をしている間に、燿子と健太がお客様達にペツトボトルのお茶を配っている。

これも、従卒の仕事なのだ。

笹野・大石夫妻には、燿子は二人の学校の親友で、鎮守府のお手伝いをしてもらっている、と説明してある。

まかり間違っても、逆恨みで愛を陥れようとしたなんて、口が裂けても言えない。

艦娘達の準備が終わると、坂本一佐が手を挙げ、

「演習開始！」

そう手を振り下ろすと、坂本一佐もお客さんの方へ向かう。

民間人である愛と健太の両親に、どういう状況かを解説するのだ。

電達宮戸島鎮守府のトリオは対空陣形を取り、室戸鎮守府の七人は変形輪形陣を取っている。

中心に鳳翔、その前方に伊勢、鳳翔の左にアイオワ、右にビスマルク、更にそれぞれの外側に大井と北上。

伊勢の更に前に暁、と言う陣形である。

そして伊勢と鳳翔は、艦載機の出撃準備のまま動かない。

「なんで動かないんですか？」

麻衣が坂本一佐に質問すると、

「高菜二佐は、密集して防空陣形を取ってるぜよ。電の改三艦装には対空用ガトリング砲が四門も取り付けられていて、笹野三佐は先制爆撃は効果が薄い、と考えてるぜよ」

「……………」

「提督、航空隊を発進させて様子を見ましょう」

大塚一尉の進言に頷くと、ビスマルクに指示を下す。

「航空隊発艦、全機爆撃開始！」

『了解、全機発艦！』

鳳翔と伊勢が、順次艦載機を発艦させる。

艦載機が急降下し、積んである爆弾をばら撒こうとした、その瞬間だった。

「掛かった！全艦急進！少しばかり遊んでやれ！」

『わかったのです!』

高菜二佐は急進を命じた。

爆撃の雨霰を回避しつつ、華麗にダンスを踊るように、室戸鎮守府艦隊に迫る。

「暁! 前進して魚雷発射! 足を止めて! 艦隊はフォーメーション・Cツェーに移行!」

『了解!』

雷装ガン積みの暁が魚雷をばら撒くと、卯月の足が止まり、爆撃を受け小破まで被弾する。

その間に、陣形の幅が広がり鶴翼陣形になる。

お得意のクロスファイアである。

「リーヴェ・サーカス・ツヴァイ改、スターテン!!」

足が止まった、卯月に向かつての集中爆撃である。

卯月は、必死に戦艦の砲撃を躲し、魚雷を避ける。

まだ、駆逐艦の射程距離に入って来ないのだ。

戦艦三隻を擁する《射程の暴力》である。

「流石だ、重厚な布陣に隙のない艦隊運用。これはビスマルクの手腕かな?」

高菜二佐は、無線を片手に不敵な笑みを浮かべると、真剣な顔になる。

「本気を出しますか……一旦後退、尤もらしく慌てて逃げろ!」  
『なのです!』

尤もらしく、慌てて逃げながら一旦下がって行く電達。

『どうするの? 追撃する?』

『どう思いますか?』

『これは明らかに擬態ね。様子を見ましょう』

「了解。砲撃停止、こちらも陣形を狭めて様子を見ましょう」

『了解よ』

その直後だった、高菜二佐がニヤツと笑ったのは。

「全艦急進! レッツダンシング!」

艦隊運用の名人とは言え、陣形を狭めたその瞬間に、一気に距離を

詰められた。

『しまった！詰められるわ！』

「縦深陣に誘い込んで袋叩きにしましょう！リーヴェ・サーカス！」  
『待って！！先手を取られたわ！』

薄雲と電は両側に分かれて、最左翼・最右翼の大井・北上を仕留めに掛かっていた。

卯月は、そのまま前進を続ける。

卯月が、クロスファイアの直撃を食らって轟沈判定を食らっている間に、こちらは大井・北上に轟沈判定を与える魚雷を打ち込まれていた。

「ごめん。提督」

「やられちゃいました……」

轟沈判定を受けた艦娘は、強制的に陸上に戻される。

「すごかったぴよん……」

卯月も改二ながら、戦艦のクロスファイアにはどうしようもなかった。

本気を出した薄雲・電は、その機動力を生かして翻弄し続けていた。その都度愛は陣形を変える指示を出す、その頃には暁も轟沈判定を食らっていた。

「何なの、あの鬼畜艦？」

電の魚雷に接触して、ボコボコにされた暁が陸上に戻されて憤慨している。

残ったのは四隻である。

その間に、戦闘開始から数時間が経過していた。

その間にも、坂本一佐はユーモアを交えて戦況を解説していて、愛と健太の両親だけでなく、健太と燿子も飽きさせずに戦況を伝えている。

そして高菜二佐は、細かく指示を出して、攻撃の射角から何から《全部》指示している。

司令官と参謀の才能を併せ持った、彼ならではの《一人参謀部》である。

それに対し、愛は副官や参謀長の助言を得ながら奮闘している。しかし、その努力の陣形も綻びを見せていた。

「薄雲。敵軽空母を発艦直前に狙撃できるか？」

『やってみます』

「鳳翔、第三次攻撃隊発艦！」

『了か……えっ？』

鳳翔が弓を引いた直後だった。

薄雲は巨大砲を展開していた。件のアイキャン80センチ連装砲フライ砲である。

電がアンカーを下ろして、後ろから抱きついている。

ズッガアアアアン!!

一発だけで、尚且つ減装弾とはいえ、徹甲弾をもろに食らった鳳翔は、艦載機を爆発させながら強制的に陸に戻される。

その、艦載機の木っ端微塵が大問題だった。

密集していた隣の伊勢に、鳳翔の艦載機が墜落して、伊勢の艦載機も誘爆を始めたのだ。

『ぐっ、弾薬に誘爆……不味い!』

伊勢も轟沈判定を受けて陸上に戻された。

戦艦二隻を残して2対2になっていた。

「アンカーを下ろした二隻に砲撃集中!ファイエル!」

「了解よ!」

集中砲火を加え、魚雷と砲弾が薄雲達に襲い掛かった。

ズッガアアアアアン!!

その場所に、薄雲達はいなかった。

件のアイキャンフライ砲を空撃ちして、その反動で一気に下がったのだ。

その間にアンカーを巻き上げると、再びヒット・アンド・アウェイ戦法で翻弄し始める。

愛は電と薄雲の二人に超えられない鉄壁を感じていた。

「提督……顔色が悪いですが……」

「だめ、隙が見えない……高菜二佐は……天才です」

「提督、オーソドックスに距離を取って砲撃戦に持ち込めば、或いは」

真っ青な愛に、花梨は心配そうに声を掛ける。そして愛の言葉に大塚一尉が助言を告げる。

「だめ！電さんは一人でル級FSを沈める力量です。それに、高菜二佐の的確過ぎる指揮で、陣形の亀裂が見えませんか」

ブンブンと首を振ると、頭を掻き毟る。

戦闘開始から八時間が経過していた。

日が暮れて、軍港には照明が灯され、ビスマルクが96式150cm探照灯を点灯した直後だった。

『いない!?!』

夕暮れで視界が悪くなった瞬間、二人が文字通り闇に消えたのだ。

「よし、勝った」

高菜二佐は勝利を確信していた。そして敢えて指示を出さず、電達に一任した。

肉眼で、二人の姿をはっきり捉えられた時には、もう遅かった。

アイオワとビスマルクは、至近距離の魚雷を食らって陸上に戻されていた。

「えっ……っ？」

愛は、何があつたか理解できずに呆然として、参謀長の大塚一尉は天を仰いで溜め息を吐いた。

そして副官の花梨は、電と薄雲の特性である、夜目をすっかり伝え忘れていた自分のミスのショックで、ぺたんと座り込んだ。

電と薄雲が、ザザーツと戻って来て陸上に上がると、拍手が沸き起こっていた。

あまりの激戦に、陸戦隊も翼も見学に来ていたのだ。

高菜二佐が、二人の艦娘を伴って歩いて来た時には、愛は悔し涙を浮かべていた。

「愛ちゃん。よく頑張ったね?」

「高菜先生……」

笑みを浮かべて手を差し出すと、愛は涙をポロポロ流しながら両手で握手する。

そんな様子を見ながら、複雑な顔をする愛の両親に、坂本一佐は、

「あの悔し涙が、あの子をもっと強くするぜよ。相手が悪過ぎたぜよ。小官だって、あれに勝てる自信ないきに」

静かに、そう語っていた。

「何で、お姉ちゃん泣いてるの？」

そう、未唯が郷里三佐に訊くと、

「ぐわははは。未唯ちゃんのお姉ちゃんは、強くなる為に泣いているんだぞ。未唯ちゃんが幼稚園に行く頃には、もつとかっこいいお姉ちゃんになるだろうて」

と、豪快に笑って答えていた。

「さあ、打ち上げ残念会、しましよー！」

ビスマルクの旗振りで何時ものレストランに艦娘と幕僚達、それに宮戸島の皆で繰り出していた。

坂本一佐と郷里三佐は、満足そうに土佐鎮守府へと帰って行った。愛に、

「一先ず、及第点ぜよ」  
そう伝えて。

「しかし、艦娘同士の戦いも、手に汗握る戦いだったわね？」

「そうだね。坂本一佐の解説もあったからね」

「あの、熊みたいな郷里三佐も優しかったし」

「郷里三佐からも特訓を受けてるんだってね？頑張りなさい、健太。愛ちゃんを守るナイトになるんだぞ」

食事会が始まると、愛の両親と健太の両親が、感想を口にする。

「申し訳ありません、小官のミスでした」

「いや、私も忘れてました……」

「噂に高いチート艦とは、このことでしたな。それに、高菜二佐も噂とは違い、本気を出すと恐ろしい男でしたな」

「いやあ、東北最強の艦娘は恐ろしかったですなあ」

花梨はまだ申し訳なさそうにしているが、愛も知ってて当然の情報なのだ。

大塚一尉が素直に電達を褒めて、岩崎二尉が場を和ませる。

「しかし、リーヴェサーカスをここまで発展させるとは思わなかったよ。もうちよつと《楽に》勝てると思っていたんだがねえ、見縊つて済まなかったね」

「うーちゃん、やられ損だぴょん」

「いやいや。戦艦のクロスファイアの時、さすがの電もオワタと思つたのです。薄雲の機転のおかげなのです」

「電に褒められました、ぶい」

素直に高菜二佐が最初は舐めて掛かっていたことを詫びて、卯月が頬を膨らませる。そして電が、あの時の冷や汗を思い出すと、薄雲は無表情でVサインをする。

「今日はいいい勉強になったわ。まだまだ艦隊運用に、果てはないわね」  
ビスマルクは、全て出し尽くして負けても、満足な顔をしてビールを飲んでいる。

「高菜二佐はやつぱりMiracleです!」

宮戸島の英雄に会えて、その戦術を目の当たりにしたアイオワも、満足したと言つた感じである。

「まさか、また艦載機まで武器に使われるとは思いませんでした」

日本酒を片手に、しみじみと語る鳳翔。

「誘爆を狙つたとは、恐れ入つた」

その当の被害艦は、陸上に戻されたのが事故ではなく、狙い通りと分かつて素直に称賛した。

「あつという間に接近されて、やられてしまったわ」

「大井つちと一緒に、やられちゃつたね」

相変わらずの二人である。

「愛ちゃん提督が『どうしよう、勝てない』って、真っ青になつてたもの」

暁は、いつも元気な愛が顔面蒼白になつていたのが、忘れられない思い出となつた。

「愛ちゃんも師匠も、皆お疲れ様だね」

「そうよ。愛も、次勝てばいいのよ!」

健太と耀子が、皆にお酌をしながら声を掛ける。

「しかし、立派に提督やってるのね。これなら安心していられるわ」  
「うん！ありがとう、お母さん！」

麻衣の言葉に両家の両親が頷いて、愛が笑顔を向ける。

翌朝、高菜二佐達は宮戸島へ帰って行った。

帰り際に高菜二佐が、

「そうだ、いいプレゼントがあるよ。何日か待ってるといい」

と言っていたのが、愛は気になっていたが、そのプレゼントが数日後にやって来た。

そう。51センチメートル連装砲ちゃん改二である。背中には自衛隊ナンバーが取り付けられて、公道を走れるようになっていた《公道仕様》である。

数日後の朝、埠頭に鎮座している連装砲ちゃんを見上げる、学校登校前の愛と健太と燿子。

「どうしてこれが来た……？」

「これがプレゼント……？」

「でかいわね……」

差し当たり、連装砲ちゃんは近海防衛の移動砲台として、運用する事となった。



## 青い空、白い雲、折れた翼

「ほ、本当にやるの?」

「シッ、見つかったらまずいからね」

深夜の室戸鎮守府男子官舎前。

大垣 翼二尉は、日下部燿子特任士長を連れ出していた。

リュックには大量の缶チューハイやビール。

今夜の歩哨は小杉班……つまりは小杉一尉直轄小隊であり、副隊長の笠原三尉は今頃夢の中だろう。

女子寮では、一階に位置する曹士に割り当てられている、燿子の部屋の窓から脱出した。

燿子が入ってくるまでは、入り口に立っている女子歩哨に、賄賂を渡して見逃してもらっていたのだ。

燿子が入ってから、やりたい放題である。

女子官舎棟内の移動は自由の為、いつも燿子の部屋から脱出して、男子官舎に侵入している。

今回は、とうとう燿子を連れ出したのだ。

過日の司令官レイプ未遂事件をダシに使って、半ば強制的に連行である。

「燿子も、そろそろオトコってのを知ったほうが良い、と思うんだ」

「オ、オトコ……」

その単語と、親指を立てる翼の仕草だけで顔が真っ赤になるお年頃である。

まだ中学一年生、不良みtainな格好や言動をしているが、元お嬢様なのだ。

「今日は若手の曹だから、気に入ると思うよ?」

「あの、翼さん……私、その……」

「ああ、わかってる、処女なんですよ? 若いうちに経験しとくもんよ。司令官だって小六で処女捨ててるしさあ」

「しよっ……」

本人が聞いたなら、憤慨ものである。あんたのようなビッチと一緒に

するな、くらいは言うだろう。

暫く官舎付近に潜んでいると、二階の窓が開いて巻取り式梯子が降りされる。

「さあ、登るよ」

「え……ええ……」

ギシギシと音を立てながら翼が先に登って行き、体力のない燿子は梯子の巻取りでピックアップして行く……

中には20代の若手下士官が三人いた。相部屋の二人に別部屋の一人である。

「それじゃあ、早速飲みましょうかね?」

「大垣二尉、ゴチになるっす」

「ツマミは買っておきました」

「今日は、ウワサの燿子ちゃんも一緒ですか?」

事前にコンビニで買って来たつまみが並べられ、翼の持ち出したお酒類が出される。

「あの、ソフトドリンクは?」

「無いよ?」

「あの、私未成年……」

「だいじょーぶ。酒の一つや二つ。もし何なら、アルコール低いジュースみたいのものもあるから。ほら、チンピラとつるんでたでしょ? いずれは酒もタバコも、ってなってただろうし」

全く根拠のない説得に押し切られ、アルコール度数の低いチューハイを受け取る。

「それじゃあ、カンパニー!」

『カンパニー!』

燿子はちびちび飲んでいる中、大人達、特に翼のペースが早い早い。最初は雑談や、上官の愚痴から始まったが、だんだん猥談に移っていく。

「あ、あの……」

「ところで、燿子ちゃんは割とおつきいね?」

さわっと、下士官の一人が燿子の胸にタツチする。

「ひゃん！」

「こちら。許可のないお触りは、ご法度だよ？」

小さい声を上げて身体を縮こませると、翼がその手をペシンと叩く。

「あたしならお触り自由だからさあ」

そう言うと、上着を脱いで、ワイシャツも脱ぐ。

男性下士官の「おー」という感嘆の声と共に、上半身下着姿の翼の姿に、燿子の顔が真っ赤になる。

その直後だった。

コンコン

「あ？誰か追加で来るの？」

「さあ？」

「知らんけど？」

「俺んところの相部屋のやつに声掛けたけど、寝るって言ってたから、気変わりして来たんじゃないかね？」

その直後ガチャガチャ、と鍵が差し込まれて、開ける音が聞こえる。ボタンと扉が開かれると入り口には健太と愛、それにビスマルクの姿があった。

「げえっ！司令官!？」

そう。男子官舎侵入禁止には、《例外》が一つあるのだ。

司令官の『職権』、且つどちらかの寮長を伴えば大丈夫なのだ。

大塚一尉は本日は土佐に出張で不在、寮長代理で副寮長の小杉一尉は現在歩哨中。なので女子寮長のビスマルクを呼び出して、臨検に入ったのだ。

「やっぱり！何してるんですか、大塚二尉!?それに燿子!!何考えてるの!?それお酒でしょ!?ちよつと全員、司令官執務室に出頭しなさい!と言うか、大塚二尉!!服着て!!健太くんは見ちゃ駄目!!!」

激おこの愛に、大人の女性の下着姿を見てしまった健太は、顔を赤くして目を逸らす。

「まあ、男の子だからしょうがないわよ。しかしあんた等、何枚始末書書けば気が済むのよ?全く……燿子も、自由裁量の鎮守府内だからっ

て、法令違反は法令違反よ？」

「ご……ごめんなさい……」

愛とビスマルクのお説教に、すっかり悄気てしまった燿子を庇うように、翼が言う。

「燿子は、あたしが無理やり連れて来たんだから、燿子に怒るのは違うよ」

「その意気はよろしい、日下部士長。今回は不問にするから、速やかに部屋に戻りなさい」

その翼の言葉に、敢えて友人ではなく、上官として部屋に戻るよう指示すると、燿子は持っていた殆ど残っていないチューハイの缶を置き、立ち上がって部屋を出て行く。

擦れ違いざまに、愛は小さい声で、

「明日は、多分学校休むか午後から出るから、先生に言っておいて」  
「うん……」

と、短く会話を交わす。

「さて、皆さんは司令官執務室に同行してもらいます。いいですね？」  
その目の笑っていない笑顔の愛に、全員はすごすごと立ち上がるのだった。

愛は司令官執務室の執務机に座り、その脇に控えている健太とビスマルク。

そして、寝ているところを叩き起こされた副官の花梨に、歩哨を抜け出した副寮長の小杉一尉。

執務机の前に、四人並んで整列し、直立不動で立ってる翼と下士官達。

酔いは、もうすっかり抜けている。

「全く。掛ける言葉がありませんな？」

「本当です。全く、不潔極まりない」

小杉一尉が呆れ返っている。そして男達に、物凄い軽蔑の視線を浴びせる花梨。

二人にとっては、いい迷惑である。

愛は何も言わずに、代わりにビスマルクがお説教である。

「全く、燿子まで引き込んで。翼は服を脱いでるし、何を考えてるの？  
燿子まで巻き込まれたらどうするのよ？&quot;と言うか、燿子にもやらせる  
つもりだったの!?!まだ中学生よ？まかり間違つて、種でも実らせたら  
どうするつもりなの？」

「いや、流石に……」

「そんなつもりは……」

「……」

ビスマルクのお説教に、言葉を濁す男子達に対し、翼はケロツと、  
「駄目なの？本人がしたい、つて言えば良いんじゃないの？司令官  
だってしつぽりしてたんでしょ？」

と、悪びれずに答える。

「んなっ!？」

「きよ、今日は《まだ》してないよっ!」

絶句するビスマルクに、同じく絶句して、余計なことを言っている  
健太。

その二人に、大きな溜め息を吐く小杉一尉と愛。

「取り敢えず、お前達は今から歩哨に出ろ。まさかとは思うが、日下部  
士長に手を出したりはしてないだろうな？」

『は……はい』

ギロリと睨む小杉一尉に、萎縮する下士官達。

「まあ、今日は小杉一尉の温情に感謝してもらおうとして、罰歩哨で済ま  
せます。はい、下がってください」

目が笑っていない笑顔で下がるように言うと、下士官達は敬礼して  
出て行く。

「それでは、小官も歩哨に戻ります」

小杉一尉も敬礼して、部屋を辞する。

「羽佐間三尉も、ビスマルクもご苦労様でした。お休みいただいて構  
いません」

「こちらには笑顔を向けると、二人共敬礼して部屋を出て行く。

「健太君、そんな訳で、今夜は部屋に帰ってくれる?ごめんね」

「うん……」

健太は、少し残念そうに部屋を出て行く。

「あはは、ごめんね。甘いひとときの筈だったのにさ。で、何でバレたの？」

「耀子に用事があつて部屋に行ったら返事しないし、寝てるのかな？つて鍵を開けたらいいないし、まさかと思つてビスマルクを呼んで、明かりの点いてる部屋を調べたら、ビンゴだったんですよ」

「なるほど。あたし一人で行けばバレなかったのね、こりやこりや」

「はあ……」

悪びれない様子の翼に、大きな溜め息を吐く。

「場所を変えましょうか？どうぞ」

立ち上がると、司令官執務室から入れる司令官官舎の扉を開ける。

「お邪魔します。つて、司令官執務室よりいい部屋じゃん？」

「私一人じゃ、広過ぎるくらいですよ」

そう言いながら、冷蔵庫からペットボトルのお茶を取り出してテーブルに置くと、

翼は、持つて来たリュックからビールを取り出す。

「まだ呑むんですか？まあ良いですけど……ポテチで良かったらありますよ？」

「ポテチも良いねえ。てか、司令官は明日良いの？」

「明日は学校は休むか午後から行きます。それよりも、翼さんは何を埋めたいんですか？」

「えっ……？」

椅子に腰掛けながら、その質問の意図を測りかねている翼に、愛は棚からポテチの袋を取り出すと、

パーティ開けをしてテーブルに置くと、対面に座る。

「私の母は、研修医を精神科で受けた後、一般内科医として勤務医から開業した異色の経歴の持ち主で、先日母が来た時に聞いたんですよ。一般論で、何かを奪われた人は、何かでそれを埋める傾向がある。何かを失った人は、何かでそれを充足させたがるんですよ」

「……空、もっと飛びたかったなあ……」

愛の指摘に、悲しそうにポツリと呟く翼。

「やっぱりですか……」

「ほら、宮戸島鎮守府対策で準備してた時はまだ高揚感があったんだけどさ、終わったら何と言うか、空気が抜けちゃったな、って」

「それがお酒やセックスなんですか……?」

「そうだね……」

悲しそうに言う翼に、愛は申し訳なさそうにする。

「ごめんなさい。私の権限は、鎮守府内しか及ばないんです。航空隊に転属させてあげたいのは山々なんですが、どうも航空幕僚監部から『搭乗禁止命令』が出ていて、たかが特任三等海佐の力では、どうしようもないんです」

「いや、司令官が謝ることじゃないよ」

真摯な言葉に、翼は首を横に振る。

「まあ、私は飲みませんけど、ここで女子会を開くくらいなら大目に見てもいいでしょう。……その、できれば健太君をもっと喜ばせてあげたいから、色々教えてほしいなあ……なんて」

「あは、有難う。中学生の子に気を使ってもらっちゃって、あたしも情けないなあ」

少し妖艶な笑みを浮かべて、上目遣いで見る愛を見てポリポリと頭を搔く翼に、ふふつと笑う。

その夜は空の魅力を語ったり、航空機の動画を大型タブレットで二人で見ながら夜を明かした。

そして明け方には猥談に突入して、健太をどうやって喜ばせるか、そんな話をしながら……

結局、翌日学校はサボった。

昼過ぎに起きて来て、真つ先に業務用携帯電話で掛けたのは、高菜二佐だった。

『はいもしもし、葬儀屋』

あまり出たくない時の反応だ。きっと昼寝の最中だったに違いない。

「お休み中すみません、ちょっと高菜先生にお願いがありまして」  
『ふむ、私にできることとできないことがあるが、まあ取り敢えず聞いてみようか?』

「実は、大垣 翼二尉の事なんですが……」

愛は、翼について事細かに説明した。

「……という訳なんです、空を飛ばせてあげることが出来ませんか?」

いつもの如く、困ったら師匠頼みな愛である。

『ふむ、ちょっと待っててくれないかな?』

一旦電話が切れる。そして数分後に、今度はスマートフォンに電話が掛かって来る。

「はいもしもし」

『ああ、もしもし。待たせて済まないね』

「それで、どうだったんですか?」

『やはり無理だねえ。大貫空将にも確認したんだけど、《統合》幕僚監部ルートで航空機搭乗禁止命令が出てるみたいだね。やっぱり、航空機を破壊し過ぎたんだよ。命令違反もしている。私も流石にこれは庇えないよ。やはり、二佐ごときの権限では無理だね?』

溜め息混じりに答える高菜二佐に、愛も大きな溜め息を吐く。

「空を飛ぶことが出来れば、翼さんの品行もちよつとは改善するかな?と思うんですよ。酒浸りも改善されれば、その分だけ他に回せるし、減給もなくなるし」

『うーん……基地航空隊もまだ未編成だから、そこは明石を突っ付くが?』

「航空機妖精さんなら、何度航空機を壊しても生きて帰ってくるんですけどねえ」

『それだ!ちよつと明石を脅迫して来るよ』

ブツツ…ツーツ…ツーツ…

「あれ、高菜先生……?切れちゃった」

スマートフォンを握り締めたまま、愛はキョトンとした顔になっていた。



その翌々日だった。

目の下に隈を作った明石が、ヘリコプターでやって来たのは。

「おはようございます！お待たせして申し訳ありません。基地航空隊の航空機を仕上げました！」

「随分急いだんですね……取り敢えず、格納庫に向かいましょう？」

「いや。高菜二佐から、『借金帳消しにしてあげるから、明日中に仕上げろ』とのご命令がありますね……」

「そりや必死になりますね。百万単位ですもんね……ところで、航空機のラインナップは？」

「まず、第一中隊は陸攻で固めます。進撃時の支援に丁度良いかと。」

第二中隊は、局戦・陸戦中心に固めて、一隊だけ爆撃機を配備します。空襲時に近海を防衛してくれるのと、成イ級阻止の為の防衛隊です」

一緒に完成した基地航空隊格納庫までやって来ると、航空機妖精さんがビシツと敬礼する。

「まずは第二中隊から。一式戦 隼II型、紫電改、Spitfire Mk. IX、Ju87G。Ju87G以外は、エースパイロット妖精さんが着任します」

「次に第一中隊ですが、銀河一部隊 一式陸攻 二三型甲一部隊と、一式陸攻 三四型二部隊で固めます。こちらの方ですが、一つご相談があります……」

明石が一呼吸置くと、ゴソゴソとチョーカーを取り出す。

「妖精化できる装飾品を作れ、と言う高菜二佐の無茶苦茶な要求に応じて試作したものです。試作段階ですから、元に戻れるかは分かりませんし、最悪死ぬ代物です。これを大垣二尉に身に着けさせるかの、提督のご判断を……」

「付けるよー」

二人が振り向くと、そこには翼が立っていた。

「翼さん、良いんですか!?最悪死ぬんですよ!?!」

「それと、空の魔王妖精さん、Ju87Gに乗りたい、つてさ」

胸ポケットから空の魔王妖精さんが飛び降りると、てくてくとJu

87Gの下に向かい、Ju87Gが光に包まれると、によきつと対戦車機関砲が装備される。

「イ級に対して有効かどうかは怪しいですが、ともかく第二中隊は全員エースパイロット妖精さんで固まりましたね。それで、大垣二尉、本当に良いんですか？」

「空を飛べる可能性があるんだったら、命だつて掛けるよ！」

「……………良いんですね？」

「もちろん！」

何度も確認をする二人に、翼は強い決意で答える。

それでも何度か躊躇し、逡巡した後、明石はチョーカーを手渡す。チョーカーを身に着けると、翼の身体が光に包まれた。

翼の姿が、足元でデフォルメされた翼の姿になる。

翼はサムズアップすると、銀河に近寄る。光に包まれると、銀河に嘗ての翼のパーソナルマークである、天使の羽根が追加される。

「ここまででは上手く行ったんですが……………」

「戻れるかどうか……………ですね。私はおそらく無理だと思います」

「それでも！私は信じます！」

諦め半分の明石に、愛は強い言葉で希望を口にする。

「戻つて来て！そしたら、いっぱい女子会しましょう！」

その叫びと共に、同じチョーカーが愛の身にも着けられる。

その瞬間、翼の身体は人間に戻った。

「おっ、只今。愛ちゃんもお揃いだね、これもしかして、愛ちゃんの命令で変身できる感じ？」

翼がにへらつと笑みを浮かべると、愛は試しに、

「翼さん、変身！」

と叫んでみると、再び妖精に変化していた。

その直後だった。ビスマルクから無線が入った。

『こちらビスマルク。今土佐鎮と合流して、敵の連合艦隊を共同攻撃中なんだけど、形勢不利。撤退したほうが良い？』

妖精化していると聴覚を共有できるようで、翼妖精さんは出撃させろ、とぴよんぴよん飛び跳ねてアピールする。

「いいえ、攻撃続行。サーカス《新団員》を送り込みます」

『新団員？ 暁のこと？』

暁は、その通信を聞いて、今支援艦として出撃準備中である。

「いいえ、それはお楽しみです。攻撃続行！」

『りよ、了解』

「それでは、全部隊で支援攻撃をします。全機発艦！」

翼妖精さんが銀河に飛び乗ると、次々と格納庫からちっちゃい航空機が発進して、遠くの空に飛んで行く。

「行つてらっしゃい！翼さん！」

翼妖精さんは、その声にサムズアップで応えた。

——ありがとう、また空を飛ばせてくれて。

「明石さん、羽佐間三尉を呼んで来てください！私も海に出ます！」

「はいっ！」

その通信から、大分経った頃だった。

「ぐおお！おのれ！！ワシの大事な艦娘に！」

土佐鎮守府の旗艦天城が大破すると、郷里三佐は怒りに任せてモーターボート上から、ル級FSに斬り付ける。

専属操縦要員の成迫三尉は、モーターボートを巧みに動かしながらル級の攻撃を回避するが、被弾して二人共負傷する。

とにかく、姫が複数いる上に、成ヲ級という、砲撃空母に成った劣化レ級のような化物までいるのだ。そして、《何らかの指揮》を受けている。かなりの強敵である。

「ぐおおっ！！大丈夫か！？成迫三尉？！」

「まだ、くたばっちゃいませんよ！」

土佐鎮守府の残りの艦娘も、中破や大破になっている。

天城以下、葛城、サラトガ、川内、那珂、秋月の艦隊である。空母が機能不全に陥っている以上、川内を中心に軽巡・駆逐の部隊が頑張っている。

「那珂！秋月！まだ生きてる!!」

「な、那珂ちゃんは何とか生きてるよ！」

「でもこのままでは……対空弾幕で防ぎ切れません……!」  
「くっ、このままじゃあ……」

「何てこと!このままじゃMeたちのL o s eよ!」

「サーカスが通用しない……」

「まだ諦める時間じゃないわ。大破した北上、大井を下がらせて陣形を……」

「ごめんなさい……私達が被弾しなければ」

「しようがないよ、大井っち……沈むなら一緒に」

中破状態のビスマルクに、同じく中破したアイオワ、中破は免れているものの艦載機をかなり墜とされている鳳翔が嘆くが、それを元気づける大破している伊勢。そして、被弾を詫びる大井に、諦め始めた北上。

その直後だった。

鳳翔が、後方からのレーダー反応に気づいた。

「航空機多数!通信です!飛んでる敵機は全て叩き落とすから、攻撃に専念せよ。大垣 翼二尉からです!」

「基地航空隊、間に合ったのね……」

ビスマルクが安堵した声を漏らすと、空を見上げる。

たこ焼き型艦載機と銀河（大垣 翼隊）率いる基地航空隊が、ドックファイトを繰り広げる。

第二隊はここまでは届かないが、室戸・土佐合同艦隊を突破した敵を、暁と共に処理している。

空の魔王妖精さんは、自慢の対戦車機関砲でイ級を始末している。

明石<sup>脅威</sup>驚異の技術力か、空の魔王妖精さんの力か判らないが、もはや

《対艦》機関砲である。

発射の度にバックするほどの反動で、失速墜落しない方がおかしいのだ。

勿論、隊員達にも付いている。こちらにも操縦技術でカバーしている。

次々と墜落して行きたこ焼き艦載機。鳳翔は、再び残った艦載機を発艦させる。

そんな時、愛から艦娘達に全方位通信が入る。

『リーヴェ・サーカス第二幕開始！』

愛が、花梨の操縦する指揮艦で戦場まで急行して、出て来たのだ。  
「陣形再編。鶴翼陣を敷き、上空の爆撃に合わせてクロスファイアを  
狙うわ」

『了解！』

ビスマルクの指示に、室戸・土佐両鎮守府の艦娘達が従って、大きな鶴翼陣を敷き始める。

『郷里三佐、下がってください！爆撃します！』

「おおお、忝い。ワシは下がらせてもらおうよ」

「三佐、下がりますよ！捕まっってください！」

モーターボートは急旋回して、指揮艦のところまで下がって来る。

『全艦、ピンポイントで敵旗艦を狙撃、ファイエル！』

「フォイアー！」

ビスマルクの指示で、武装が生き残っている全艦が、敵旗艦に砲撃と雷撃の雨霰を浴びせる。

それに合わせて、基地航空隊第一中隊が爆撃を始める。

旗艦を喪って指揮系統機能不全に陥った瞬間、爆撃の嵐に巻き込まれた敵艦隊は皆、海の藻屑となった。

次々と、基地航空隊が帰って行く。

「ありがとうございます」

『いえいえ、間に合ってよかったです』

土佐艦隊を代表して、天城がお礼を言う。

「航空隊にも、礼を言っておいてくれい」

『了解です。郷里三佐も、早く戻って治療をなさってください』

「忝い」

土佐鎮守府の艦娘達が、郷里三佐を先頭に整然と撤収して行く。

それを見送る愛は、

「ああ、間に合ってよかった……」

指揮艦の中で、ほっと胸を撫で下ろした。

『提督、助かったわ。ありがとう』

「お礼なら、後で翼さんに言ってください」

『分かったわ、私達も撤収しましょう』

ビスマルクの号令で、室戸鎮守府艦隊も帰途に就いた。

その夜、司令官官舎ではささやかな女子会が行われていた。

「全員の生還と、敵攻撃隊中枢の大打撃に」

『かんぱーいー!』

参加者は艦娘達と翼に耀子、それに《何故か》呼ばれた、黒一点の健太である。

「今日の主役は翼さんだから、どんどん飲んでね!」

テーブルには、沢山のおつまみやパスタや宅配ピザ等にお菓子が並んでいる。

今日の女子会の飲み物や食事・おやつ代は、艦娘達と愛で出し合った。

翼とお揃いのチョーカーを着けている愛に、健太は翼に嫉妬してあまり機嫌がよろしくなく、むすつとジュースを飲んでいる。まだまだお子様である。

「あ、もしかして嫉妬してる感じ?」

「うっ……」

翼に、凶星を突かれた健太が二の句を告げないと、愛はくすつと笑って立ち上がり、書斎に引つ込むと、

リングピローを持って来る。

「司令官配属時に支給された、ケツコンカツコカリリング。いずれは戦力強化の為に、全員と着けることになるけど、最初は健太君と着けようかな? って持ってたんだけどなあ?」

「そ、そうなんだ……ごめん……」

自分の嫉妬に恥じ入る健太の左手をそつと取ると、リングピローを開けてペアになっている銀色のリングを、薬指に填める。

リングは、健太の指のサイズにすっぽり収まると、光り輝く。

「はい、健太君」

「うん!」

健太も愛の手をそつと取って、左薬指にリングを填めると、愛の指のサイズになり光り輝いた。

『おお〜』

人間同士でも、ケツコンカツコカリが出来ることに感嘆の声を漏らす一同に、翼は酒が進んだのかケラケラ笑いながら、

「愛ちゃんチューしちやれ!」

「そうよ、ディープなキスをお見舞いしちやいなさい」

そうガンガン煽る翼。大井も便乗して煽る。

「健太君。好きっ!」

煽られた勢いか、指輪交換までした勢いか、愛も健太を抱き寄せて濃厚なキスをする。

「んんう……………」

「んっ……………」

ゆっくり舌を押し入れるとゆっくり離れる。

「わぁ……………」

まだウブな耀子は、顔を真っ赤にして見ている。

当然ながら、健太は顔真っ赤でフリーズしている。

愛も、少し顔を赤らめている。

「いやあ、あたしもそういう相手と出会いたいなあ」

ケラケラ笑いながら言う翼に、ビスマルクがわざとらしく溜め息を吐く。

「そういう相手って、まずこの鎮守府内で、何人陸戦隊員と関係を持ったのよ?」

「なー、ビス子。あんたは毎朝食べるパンの数を数えてるの?」

「はあ?数えてないわよ。と言うか、朝食は定食屋で和食朝食よ!」

「そういうことよ」

「どういうことよ!?!」

そんな二人のやり取りに、アイオワがビールを飲み干してから、

「O h! 要すに、

An everyday occurrence ことね!」

と、陽気に会話に加わる。その言葉に、ビスマルクがふう、と溜め

息を吐きながら笑う。

「まあ、種を実らせてないだけでもまだマシね。羽佐間三尉は不潔だつて言ってるけど、あの娘は潔癖なところがあるからね」

「そうですね。でもお願いですから、男子官舎侵入だけはやめてくださいね。門限の延長は申請で何とかしますから。もしそういう場合はお外でどうぞ」

「あはは、考えておくよ」

愛のお願いに、翼はケラケラと笑いながら答える。門限も司令官の専決事項で、延長も可能なのだ。

ここまでは、普通の女子会だった。

「でさあ、この間の三曹のアレが大きくなってさあ」

やっぱり、猥談に突入である。

艦娘達も、興味津々で聞いている。

「へえ、そうなんですかあ。やっぱり、そう言うの違うんですかあ。勝手なイメージですけど、岩崎二尉とか物凄そう……」

愛は、眠気と雰囲気酔って目がトロロンとしながら、猥談に加わっている。

猥談突入直後に、健太はトイレに行くと言い残し、自分の部屋に敵前逃亡したが、

耀子は、同じ理由で退却しようとして、

「トイレ、この部屋にあるよ」

と、まさかの愛が裏切り、退却に失敗して顔真っ赤のまま、翼の語る猥談を傾聴している。

こうして、カオスな女子会は明け方まで続いた。

そしてそのまま、後片付けをしたら司令官執務室で朝礼を行って、艦娘達は仮眠の後哨戒に出て行く。

愛と耀子は、一徹のまま学校に向かうのだ。

「おはよう！あれ、その指輪どうしたの？健太くんとお揃いじゃん」「やるわね！」

「学校の先生には、どう説明するの？」



「お揃いの指輪、着られる人欲しいなあ」

恵奈と愉快的仲間達に、指輪について詭われたことは言うまでもない。

健太はどう説明していいか迷う中、愛が全く躊躇せずに、徹夜明けのおかしなテンションで、

「健太君とは許嫁だから！ケツコンカッコカリ指輪」

と宣言して、健太は堀が完全に埋まり、退路を絶たれたのだった。無論、退くつもりはさらっさらないが。

勿論、担任の先生にはきちんと説明して、周知徹底を図ってもらった。

担任の戸部先生曰く、

「取れないんじゃないやあしやうが無いねえ」

とのお言葉である。

そして四組では、健太が盛大に詭われたのは言うまでもない。

この日から、健太のニックネームは『婿殿』となった。

「ああもう！何て日だ！」

健太の叫びが、校舎に響き渡った。

「……………で、今日も朝帰りですか？」

「てへっ」

毎日のように門限延長申請が出されて、数人の男性下士官と共に朝方帰ってくる翼を、愛は呼び出した。

「お酒やタバコの量が減ったのは聞いてます。でも、抑々ホテルばかり使ってたなら、お給料足りなくなるんじゃないやあ…………？」

「大丈夫。ホテル代は、野郎負担だから」

「あの、自分より給料の安い下士官に出させてるんですか…………？」

「うん。会員カード使い回してて、安いよ？」

「安いよって…………それでも数千円掛かるでしょうに」

「まあねえ」

そんなやり取りに、執務していた花梨は、やはり汚いものを見るような目で、翼を見ている。

「大垣二尉は不潔です。ビッチです」

「うっさい！オトコも経験しないような子に、言われたかないよ！」

「なっ！そんな事は関係ないでしょう！分かりました！そこまで言うなら、私だつて恋人の一人や二人見つけて来ます！」

ガタツと立ち上がり、花梨が翼を睨み付ける。

「あのお。羽佐間三尉……貴女も、何かを埋めたかったんですね？」

「……す、すみません。つい興奮して……父のような男を見ていると、どうも男が不潔に見えて……」

「分かります……私も、羽佐間一佐は話に聞いてましたけど、あまり好きになれません……」

愛も、人妻だろうが見境なく手を出している、羽佐間一佐は好きになれないのだ。

「そんじゃあ、羽佐間三尉の為に、いい男を見繕いますかね？」

「<sup>室戸</sup>うちの司令部は、皆既婚者ですよ。笠原三尉くらいですよ、未婚なの。しかも、彼氏と遠距離恋愛中です」

「あ、階級が私より下の人は、お断りです」

「そうになると、誰もいないじゃん!？」

「いっその事、明石の秘薬で笠原三尉を男子にしますか？」

「あのだ、愛ちゃん。笠原ちゃんの彼氏が可愛そうだよ!？」

見繕ってもらつてる立場なのに、自分より階級の下は駄目だ、と言いつ放つ花梨に、堪らずツツコミを入れる翼。

そして、その直後の愛のトンデモ発言にもツツコむ。

ここ一月で、主要幹部と交流を深めている愛は、色んな情報を入手している。

岩崎二尉の奥さんは、かなり背の小さい可愛い奥様で、熊とリスの結婚だなあ、とつい口にしてしまった。

小杉一尉は国際結婚で、インド人の神秘的な女性と結婚して、既に三児のパパである。

「そうになると、土佐の郷里三佐くらいかなあ、独身なの。あと、大貫空将も奥さんに先立たれて男やもめらしいですよ。大本営副長兼警務隊長の、足立陸将補からの情報です」

「流石に、還暦超えた大貫のおっさんは紹介できないなあ。って言うか、あのおっさん独身なの？」

「おっさんって……高菜先生の後輩ですよ、あの人」

「マジで？アラファイフくらいかと思ってた」

「マジですよ。高菜先生の三期後輩、まだ30代半ばです。怖そうという理由で、モテなかったらしいです」

「怖そうと言うか、十分怖いよ。あたしも虐殺現場見てたけど、成イ級を頭からバツサバツサと……控えめに言って、人間じゃないよ」

「ですよ。あとは……艦娘達は娘のように可愛がついて、恋愛対象外らしいです。後、坂本一佐の息子さんにも懐かれてるらしいです」

「へえ、そうなんだねえ」

「……」

花梨が黙っている間に、郷里三佐の話で持ち切りになる司令官執務室。因みに、耀子と健太は今、岩崎二尉の執務室で特別授業中だ。

その会話が、後々大騒動を招くことになるのは、今の愛と翼には予想できなかった。

## 土佐へく花梨の大爆発く

最近の室戸の海は平和だ。

深海棲艦襲来は減っているし、艦娘達も近海でリーヴエサーカスの新しい仕込みに余念がない。

しかし……

その原因は、基地航空隊にあるのだ。

毎朝0430に、司令官官舎で眠っている愛の業務用携帯電話が鳴り響く。

「うー……翼さんかあ」

「また……？」

同衾していた健太も、目を覚ます。

「はあい、こちら葬儀屋……」

師匠の癖が移っているようで、寝惚け眼で電話に出る。

『もしもし、出撃許可頂戴！』

「はあい……変身」

ピカッとチョーカーが光ると、ガチャツと携帯電話が落下する音が聞こえる。

翼の官舎には、格納庫にそのまま直行できるスロープを設置したから、官舎の中で落としているから大丈夫だろう、と思いこちらから電話を切る。

「健太あ、今何時？」

「まるよんさんまるくらいい……」

「……寝よう」

むぎゅつと健太を抱き締め、再び眠りに就く。

健太も、お布団の中で抱き締め合って寝ることに、漸く免疫が付いて来たようで、そのまま眠りに就くのだ。

こうして、翼妖精さん率いる攻撃隊と、空の魔王妖精さん率いる近海防衛隊は合同で、近海を彷徨っている深海棲艦狩りを行う。

これは、哨戒行動も兼ねていて、大規模攻勢があれば、すぐに通報するようになっていたのだ。

艦娘達は、最近寝不足に悩まされることなく、朝までゆっくりおねんねできる、と言う寸法である。

問題はコストだが、大貫空将が愛の着任時に「コストは気にしないでいい」という発言をしてしまった為に、要求すれば資材は送ってくるのだ。

抑々、それに見合う戦果を出している為に、上層部も文句は言えないのだ。

まさに翼は、名前の通り空を飛ぶ海鳥の翼の如く、日課のように早朝出撃に勤しんでいる。

愛は学校から帰って来ると、執務机にある司令官用コンピュータで、艦娘と基地航空隊の戦果を確認する。

「基地航空隊が完成してからは、戦果はうなぎ上りですね」

副官デスクで、書類を処理している花梨が声を掛ける。

「戦果は上げてくれるし、艦娘達も新しい戦術を研究する余裕が生まれましたし、翼さんの始末書も減りましたし、外出申請も早朝出撃を許可してから減ってますし、いいことづくめじゃないですか?」

「もう一生、妖精のままできてくれたらいいのに。可愛いし無害だし」

花梨は毒を吐く。どうしても、父の女性版のような翼とは相容れないのだ。

「あはは、最初の一ヶ月が超過勤務過ぎたんですよ。残業代出ないかなあ……………」

「いいじゃないですか?佐官特権で食事券支給が増えて、浮いた分は貯金してらっしゃるんでしょう?」

「貯金は、健太と結婚した時の為のお金です。深海棲艦との戦いが終わって平和になったら、私もお役御免で、今度こそちゃんと防大を出て、正式な自衛官になって佐官までは昇進したいな、と思ってるんですから。できれば、高菜先生のところまで」

「……………と言うことは、陸希望ですか?」

「はいっ、普通科希望です。この黒い制服もいいんですけど、やっぱり緑の高菜先生の制服に憧れるんですよ」

この場に健太と燿子はいない。健太と燿子には部活動を許可した、と言うより推奨した。

そんな訳で健太は空手部、燿子は軽音部を選んだ。燿子は小さい頃からピアノを習っており、学校の体育館に設置してあるピアノを前に、愛が冗談でリクエストした「ラ・カンパネラ」を、即興で演奏するくらいの腕前である。

この学校の音楽系部活が、吹奏楽部と軽音部だった為、キーボード志望で軽音部を選択した。

愛は授業が終わると、真っ先に鎮守府に帰って宿題をこなしてから、司令官としての執務を始める。

「さて、コーヒーをお淹れします。角砂糖はお一つ、フレッシュ入りでよろしいですね?」

「はい、有難うございます」

花梨が立ち上がりコーヒーを淹れていると、愛がいつも携帯している業務用電話が鳴り出す。電話の主は坂本一佐だ。

「はいもしもし、笹野です」

『おー、今学校ぜよ?』

「いえ、執務室にいます」

『先日は、こちらの提案での合同攻撃の尻拭いをしてもらってすまんかったぜよ』

「いえいえ、お役に立てたなら光栄です」

花梨は、電話をしている愛の前にそっとコーヒーを差し出すと、自分分は急須にウォーターサーバーからお湯を入れて湯呑みに注ぐ。

因みに、ウォーターサーバーの天然水代は、花梨と愛と健太で出し合っただけだ。

『それで本題じゃけんど、土佐に一度来たらどうぞぜよ?先日のお礼もしたいきに』

「そうですね、艦娘達も交流できればいいですね。室戸は基地航空隊と、フルアーマー51cm連装砲ちゃん改二改もいますし」

『ふる……あーまー?ああ、明石がまた何かやったんじゃろが』

「はい。ぜかましの連装砲ちゃんをベースに開発した、自立自走砲で

すね。明石さん曰く、履帯を大型化して安定感を増やして、両腕には連装30mmガトリング砲をそれぞれ搭載して、胴体下部に12.7mm連装機関銃を装備して、追加装甲と履帯強化を施して、両腰に誘導弾を搭載した、まさに移動要塞ですね」

『まあた、明石の奴は改造狂いに走ってるぜよ』

「明石さんの事、ご存知なんですか？」

『ワシは前任地が横須賀じゃき、明石ん事はよう知りゆうがぜよ』

「そうだったんですね。以前から、あんな感じだったんですか？」

『そうぜよ。大貫空将がこつそり修理代を建て替えていたぜよ。大貫のおっさんは、明石にゃあ甘いきね』

「それで、本題なんですが……」

コーヒーを一口飲んでから、花梨の顔を見て笑顔を浮かべる。

ちやんと何時も通りのコーヒーを淹れてくれる。

因みに、コーヒーの入れ方は花梨が一番上手く、燿子が一番下手である。

お嬢様だった燿子は、花梨の指導の下、私生活絶賛修行中である。

『そうぜよそうぜよ。いつがいいぜよ?』

「うーん、それじゃあ今週の土曜日…明後日に、艦娘達と副官を連れてお伺いします」

『あの茶髪娘とか、フィアンセは連れて来ないぜよ?』

「燿子は郷里三佐がどうも駄目みたいで……健太は土曜日は空手部の部活があるので」

『おーおー、青春を謳歌しとるのう。三佐も何か部活でもやったらどうぜよ?』

「いやあ、そんな暇ないですよ。書類はあるし、減ったとはいえ始末書も処理しないといけないし」

『そんなもん、妖精さんにやらせときゃいいぜよ』

「そういう訳に行かないでしょ。事務員妖精さんは、午前中頑張って働いてもらってるんですから」

『三佐は真面目ぜよ。それがおまんさの良いところぜよ』

「という訳で、明後日土佐で」

『おう、わかったぜよ』

電話を切ると、花梨が声を掛ける。

「提督！土佐に連れて行っていただけませんか？」

心なしか嬉しそうだ。過日の翼と愛との語らい以降、坂本一佐、と言うより郷里三佐が来ると、仕事を張り切っているのだ。

率先してお茶を出したり、仕舞いには司令官を放ったらかして、接客応対と称して陸戦隊のところに行ったり。

愛は、父親への反感や敵視・憎悪は、ファザコンの裏返しではないか？と考えていたのだ。

毎日、母と夜にテレビ電話で駄弁るのも、女子会等がない日には、日課になってるのだ。

その時に花梨のことを話したら、「それは何かの裏返しではないかしら？」と言う助言をもらったのだ。

一般内科・外科医になった今も、心療内科分野の研究を続けている母・麻衣である。

「え？ええ。副官を連れて行かずにどうしますか？」

『分かりました。お供させていただきます』

「嬉しそうですね」

『いつ、いえ、そんな事はありません。提督のお役に立てるのが嬉しいだけです』

ちよつと顔を赤らめて目を逸らす花梨に、説得力は皆無である。

「という訳で、ハイエースの運転をお願いします」

「了解しました」

室戸鎮守府には、艦娘移動用の業務車として、九人乗りハイエースが配備されている。

土曜日。

耀子と健太が、それぞれの部活に出掛けて行ったのを見送ると、艦娘達を乗せて土佐へと向かう。

花梨はとてご機嫌で、制服ながらおめかしもバッチリである。

髪も丹念に洗ってリンスしたのかツヤツヤで、お化粧も普段はほぼ



すっぴんなのにきちんとしており、鼻歌を歌いながら運転している。後ろに乗っている艦娘七人は、そんな花梨を不思議そうに見ている。

ただ一人、愛はふふつと笑いながら頬杖を突いて、海沿いの景色を眺めている。

「そう言えば、土佐鎮守府は副官が私の同期で、変わった人物なので驚くと思いますよ?」

「そう言えば、坂本一佐、いつも副官をお連れになりませんでしたね。楽しみです」

土佐鎮守府に到着すると、坂本一佐と郷里三佐とその隣に、背が低く童顔で、中学生にしか見えない二尉の階級章を付けた無表情の女性、それに天城以下艦娘達がお出迎えする。

「良う来たのう。今日はお客さんじゃき、緊張せんで良いぜよ」

「ぐわはははは、先日は危ないところを助けてもらってありがとう。ワシはこの通りピンピンしているが、成迫はまだ加療中での。最近の若いもんは身体が弱くていかん」

あんた人間じゃねえよ。と、何人かの艦娘と愛は思ったが、口には出さない。

「……………」

くいつくいつと、坂本一佐の隣に立っている女性が、坂本一佐の袖口を引っ張る。

そして、坂本一佐を見上げる。

「……………ん? ああ、『紹介してください』って? こっちは、大葉葵二尉。ワシの副官ぜよ」

「この人が、副官さんなんですわね、てつきり坂本一佐の娘さんが名誉隊員とかになつてるかと思いましたが」

「そうなんですよ、この子が同期で防大主席卒業生。酷く無口で無表情で『沈黙娘』と云う異名を持っています」

愛の言葉に、花梨が説明する。葵は、視線で花梨に何かを訴え掛ける。

「何? ああ。『立ち話も何でしょうから、応接室に案内します』ね?」

花梨が翻訳すると、葵はコクリと頷く。

「えっ？何で分かるんですか……？」

何だこの謎のコミュニケーション。これで伝わるのか！?

愛は啞然としていた。

艦娘達は早速演習に入る。リーウエサーカス土佐・室戸合攻撃拡大公演の演習を、ピスマルクと天城の旗艦同士連絡を取り合って、連携の確認をしましう、と言うことになったらしいのだ。

埠頭に仲良く向かう艦娘達を見送ると、愛と花梨は葵の先導で応接室に案内される。

勿論郷里三佐も一緒である。

応接室に案内されると、坂本一佐が、

「まあ座り」

そう席を勧めると、愛と花梨は頭を下げて腰掛ける。

それを見ながら、郷里三佐と坂本一佐も腰掛ける。

葵が敬礼すると、愛も何となくコーヒーをお淹れします、と言いたいの解った。

何だろう、この謎のコミュニケーション。そう思っていると、葵は一旦退室する。

「葵の淹れるコーヒーは絶品ぜよ」

「そうなんですネ、坂本一佐は大葉二尉と親しそうですね？」

「そりやそうぜよ。姉貴の娘で姪っ子じゃき」

「叔父に自衛官がいるとは存じていましたが、坂本一佐だったのですね？」

「ぐわははは、物静かだが的確に動いて仕事をする、優秀な娘じやて」  
静かにも程があるだろう。よくこれで防大を卒業できたなあ、そう考えていると、

暫くして、葵がコーヒーをトレーに載せて戻って来る。

それぞれの前にそっと差し出すと、トレーを胸に抱えて脇に控える。

一言も発しない。初志貫徹一貫していると言うか、失語症と言うか……

坂本一佐と愛が、戦術について談義を始める。

坂本一佐は優秀な戦術家で、室戸、そして廃止された安芸鎮守府がブラックの時代から、全てカバーしていたのだ。

高菜二佐同様、戦争初期からの提督組で、高菜二佐がミラクルを起こして飛び級昇進したのに対し、坂本一佐は羽佐間一佐同様武勲のみで一尉から一佐まで駆け上がった、優秀な提督である。

近々新設される准将補に昇進か？と言われてはいるが、坂本一佐は現場に拘り大貫空将にも、

「現場から離れるなら、昇進はお断りぜよ」

と言っている為、おそらく自衛官初の、現場勤務の准将補は坂本一佐になるだろう、と高菜二佐とも話しているのだ。

その間花梨は、郷里三佐の方を見ている。郷里三佐も優秀な戦術家と言っているいい人材で、陣頭に立って艦娘を指揮している。

その為、その視線には気づかず、戦術談義に加わっている。

どちらかと言うと坂本は参謀の才能が強く、作戦を立案するのが得意で、前線指揮は郷里三佐が得意で、お互いの連携が取れている理想的な鎮守府なのだ。

愛は、どちらかと言うとまだ半熟で、器用貧乏の傾向がある。

それでも、専門家に任せられるところは、変なプライドもなく任せてしまえるところが愛の良いところだ、と坂本一佐は語る。

そんな戦術談義の間、葵は微動だにしない。存在をすっかり忘れていくくらいである。

戦術談義に花を咲かせていると、ポンポンと坂本一佐の肩を叩く葵。

「お？『そろそろ夕方です。何時ものお店に予約を入れますか？』だって？そうじゃの、あそこならWEBで予約できるき頼むぜよ」

葵はその坂本一佐の言葉にコクリと頷くと、敬礼して部屋を退室する。

「姦しい艦娘達は艦娘達で女子会を開くだろうし、ワシ等も飯にするがぜよ」

「ぐわははは。提督の行き付けの居酒屋は、チェーン店ながら美味し

い料理を出すことで有名ぜよ。勿論、笹野三佐はお酒は駄目だからな？」

郷里三佐が豪快に笑うと、愛は疑問に思っていたことを口にした。

「ところで、大葉二尉は失語症なのですか？」

「ん？《ただの》無口ぜよ。酔っ払うとよう喋るぜよ」

「私も何度か聞いたことがあります。『しまった』とか『チェックメイ  
ト』とか」

「……………」

あれでただの無口か！愛は、突っ込みたい思いを何とか我慢していた。

「それじゃあ、先日の大勝利に」

『かんぱーい！』

次々と料理が運ばれて来る。郷里三佐は姿に似合う、大食漢の大酒豪である。

乾杯からいきなり『日本酒冷、ジヨツキで』と言うおかしな注文をして、愛は唾然としていた。

坂本一佐もお酒は強いみたいで、初っ端から日本酒を頼む。

帰りに運転をするつもりだった花梨は、お酒を辞退したが、何なら空いている官舎に泊まって行けばいい、と言ってくれたので、お言葉に甘えることにした。

その為花梨は緑茶サワー、愛は烏龍茶である。

また暫し、戦術談義に花を咲かせて皆いい感じに酒が入り、愛も雰  
囲気に酔うタイプで、楽しそうに笑っている。

その間、葵は無言で指を鳴らすだけで追加オーダーを通す、と言う愛にとつて理解不能なイリユージョンを目の当たりにして絶句したりしたところで、ふと坂本一佐が口にした。

「しっかし、羽佐間三尉は話の間、ずっと郷里を見ていたが、三尉はこ  
ういうのが好みかや？」

「!？」

「ぐわはははは。一佐、それは羽佐間三尉に失礼と言うものでしょう。」

ほら、ワシのような怖い男は、女が寄り付かないでな」

「まあ、花梨は男嫌いですからね。ちよつとでも軽い男は、ゴミか養豚場に送られる豚のような目で見ると言うような娘でしたから。抑々、父親が駄目なんですよ。人妻だろうが口説いて寝取るわ、噂ではご落胤の一個中隊はいるとか、そんな噂ばかりの人ですから」

とうとう葵が口を開いた。驚愕する愛。

「喋った!?!」

「いや、私だって喋りますよ。失語症か何かだと思ってましたか? だいたい……」

そんな愛をジト目で睨みながら、そのまま数十分間喋り続けて、眠りこけてしまう。

「こ……こんなに喋る方だったんですね?」

「酒の弱い葵が、喋り出した時はレッドゾーンぜよ。そのまま喋り続けて寝てしまうきに」

「ぐわははは。すまんおう、羽佐間三尉。こんな暑っ苦しい酒席で。男嫌いだと言うと、ワシなぞ苦手の極致じゃろう?」

「い、いえっ! そんな事ありません!」

郷里三佐が豪快に笑い掛けると、花梨は慌てて否定する。

「まあ、花梨さんはファザコン気質ですからねえ。羽佐間一佐を恨んだり、それと同類の翼さんを敵視したりするのは、何かの裏返しなんですよお。それで、しっかりしたお父さん風の、郷里三佐に惚れてしまった、と」

「て、提督!?!」

「あいたっ」

雰囲気<sup>愛</sup>に酔っている愛が、烏龍茶をごくごくつと飲み干してトロンとした口調で語り出すと、花梨は顔を赤らめてバシツと提督の肩を叩く。

「ほお………」

ニヤニヤつと笑い出す坂本一佐。

「ほら、これが証拠ですよお」

「ぐわはははは。まさか、羽佐間三尉のような可憐な娘が、ワシのよう

な粗野な野獣を好きになる訳なからう?」

同じくニヤニヤつと笑う愛。二人が結託した瞬間である。

そして、豪快に笑ってジョッキ日本酒を飲み干すと、お代りをして  
いる鈍感な郷里三佐。

「笹野三佐、良いことを思いついたぜよ」

「何ですかあ?」

お酒を一滴も飲んでないのに、《一番酔っ払い》な愛が答える。

「ちよつとデートに付き合うぜよ。健坊には、後で嫁を借りる、と断つ  
とくきに」

「はあい、お供しますよお」

「チョッ、待つ……」

花梨が手を伸ばすのを、するりと抜けると笑みを向ける愛。

「あんまり自分を偽ってるよ、幸せになれませんか?」

そう言うと、二人連れ立って……葵を坂本一佐が背負って居酒屋を  
出て行ってしまふ。

「……………」

「ぐわははは。顔が赤いが、どうしたんだ?」

「……………」

超鈍感な郷里三佐が豪快に笑い掛けると、花梨はやって来たジョッキ  
日本酒を奪い取り、ゴクゴクゴクつと飲み干して、ドンツとテーブ  
ルに叩き付けた。

「お、おい、三尉」

花梨の突然の豹変ぶりに驚いて、目を白黒させてると、

「郷里三佐、私は貴方のことが好きですっつ!」

全力で、声を振り絞って叫んだ。

「えっ?」

「郷里三佐、私は貴方のことが好きです!」

ちようどその頃、同じ居酒屋の二階座敷で宴会中の艦娘達は、その

店中に響き渡る花梨の告白が聞こえると、

ビスマルクは黒ビールを嘔き出し、アイオワは持つてるお猪口を取り落とし、鳳翔ですらお箸で搦んだ唐揚げをころりと落として、伊勢はフリーズし、北上は大爆笑して、大井は聞かなかったことにした。

天城ですら啞然となり、葛城はうふふつと笑い、サラトガは笑いを堪えて、那珂ちゃんやんが野次馬に行こうとする川内を羽交い締めして止めて、秋月が口を開いた。

「郷里三佐に、漸く春が来ましたね？」

そして艦娘達は、川内を偵察役に派遣して、様子をスマートフォンで撮影して探らせることにした。

「センダイーサン、行って来ます！」

忍者のような忍び技で、しゅつと部屋をあとにして、そろりそろりと近くまで潜入する。

「おいおい、羽佐間三尉。飲み過ぎではないかな？」

困ったような顔をする郷里三佐を、じつと見つめる花梨。

「私の父は、最低な男です……だから私は、男嫌いでした」

花梨は、今まで溜まりに溜まっていたものを大爆発させた。

そして自分の生い立ちを、涙ながらに語り始めた。

自分は、数多い羽佐間一佐のオンナの一人との間に生まれた、所謂庶子。

一夜の恋の末に捨てられ、そして母親が死んだ為、仕方なく父親の下に転がり込んだ。

父との仲は最悪で、艦娘を全員嫁にしておきながら、他の女にも手を出す。

女性トラブルの後始末は、全て自分である。

「もう嫌！何で私はあんな男の子供に生まれたの!?!子は親を選べない、って言うけどあまりに酷過ぎるじゃない!だから、愛ちゃんの下で副官になる、って話を喜んで引き受けたわ。私は——」

——生んでもらった恩は感じるが、育ててもらった恩はない。

そう言い切った。

『……………』

上の艦娘達も、直接それを見ている川内も、郷里三佐ですら押し黙った。

そして、郷里三佐は口を開いた。

「それで、ワシの中に『父親』を求めたと言う訳か？」

「ごめんなさい、こんな勝手に酷い女で……私は——あの男に相応しい最低な女です。大垣 翼を罵る資格なんてない、最低な……」

「いいや、羽佐間三尉。ワシはまだ何も言っておらん。ワシはな、このような粗野な男故にこう言った恋愛とは無縁に生きて来た。だから、正直困惑しておる。君のような可憐な娘に好きだと言ってもらえるのは嬉しいが、それで君が後悔しないか、ワシはそれだけが心配だよ」  
自分を卑下する花梨に、郷里三佐は静かに語った。陽気で粗野な野獣とは程遠い、温和な一面を持ち合わせている、理想の父性。花梨はそんな印象を持っていた。

「後悔ですか？私はずっと後悔してますよ。あの男の下に転がり込んだことも、あの男の下で監視役として副官を志願したことも、そして、私が生まれてきたことすら」

「それでも、こうしてここに君がいることは、父上に感謝すべきではないかね？」

一度タガが振り切れた花梨は、留まるところを知らない。

「そんな恩を感じるのも嫌！だったら、戦場で戦死することの方が何倍もマシよ！あの男には何も残してやらない、自分自身すら。どうせ私が死んでも、あの男は何も感じないでしょうね！」

「羽佐間三尉、もしかして君は……笹野三佐が失敗することを望んでいた、あるいは期待していた……と言うことか？」

「っっ!!!」

絶句した。そのものズバリを言い当てられた。父親には何も残してやらない、自分自身すら。

「馬鹿者おっ!!!」

店中に響き渡る郷里三佐の怒声に、店中、花梨、上の艦娘達がびくつと固まる。



「お前さんは、あんな若い年でありながら提督として立つと決めた笹野三佐を愚弄しているのか!? だったら今すぐ謝罪するんだ!」

「っ……うわあああ!!」

本気で叱られる。そんな経験がなかった花梨は、酒の勢いもあり、わんわん泣き出した。

「か……花梨くん……」

可憐な女性が、わんわん泣いている姿を見て、郷里三佐は困り果ててしまった。

「……辛かったのね」

上の席で、野次馬とばかりに偵察に行かせたビスマルクは、ポツリと呟いた。

「花梨にはFatherが必要だったのよ。本気で叱ってくれるFatherが」

「そうですね……花梨さんには、悪いことをしましたね」

アイオワが、日本酒を飲みながらしみじみと言うと、鳳翔が静かに反省を口にする。

「……」

伊勢は何も語らない。

「……子は親を選べない、か。私達が提督を選べないように……」

「そうだね。前の提督は酷かったからね」

「自分のことみたいに判るわね」

前の提督がセクハラ野郎だった二人には、重い言葉である。

そして暁は、その最たる例だった為、涙を浮かべながら呟く。

「うう、ひつく……花梨さんが可愛そうだよお!!」

もらい泣きしてしまう那珂ちゃんを、葛城と天城とサラトガがよしよしと宥める。

「……もう潜入は良いよね?」

川内が戻って来た。川内も沈痛な面持ちをしている。

「わ、ワシが悪かった、言い過ぎたよ」

隣の席に座って、優しく頭を撫でる郷里三佐。ゴツゴツしたその手で、丹念に手入れた髪を撫で続けると、花梨は漸く泣き止んだ。

「つ……………ぐめんなさい……………私……………つ」

「良いんだ、辛かったな……………」

静かに頭を撫で続ける、郷里三佐。

「……………郷里三佐、ここを出ましよう……………ちよつと迷惑を掛け過ぎました」

「そ、そうだな」

店員に、お会計を土佐鎮守府に回すように告げると、ふらつく花梨を支えて、店を出て行った。

「大丈夫かね？」

「大丈夫です……………少し飲み過ぎたかもしれませんが……………」

「い、いや、日本酒をジョッキで一氣したら、誰でも酔っ払うだろう。鎮守府に戻ろう」

「嫌です。いやーですっ!」

花梨は我儘な子供のようにするりと郷里三佐から離れると、千鳥足で歩いていく。

「か、花梨くん待ちたまえ……………どこに行く気だね? 鎮守府は逆方向だ」  
「うふふつ。帰りたくないです」

捕まえようとする郷里三佐を、するりとすり抜けながらふらふらと歓楽街の方へ向かって行く。

それを、二階席の窓から眺めている艦娘達。

花梨もあんな壊れ方をするんだ、と室戸の艦娘達は思った。

ビスマルク曰く「あまり怒らせないようにしよう」

ふらふらつと歩き回る花梨を漸く捕まえたのは、ファッションホテルの前だった。

「……………郷里三佐……………入りませんか?」

「なっ、馬鹿なことを。何をやる場所か、分かっているのか?」

郷里三佐は狼狽した。狼狽し切っていた。

「私だって子供じゃないですから。それに、酔いはだいたい醒めてま

す。私を塗り潰してください」

「……………後悔はしないんだな？」

「……………はい」

決意の籠った表情で郷里三佐を見上げると、郷里三佐は花梨を抱き寄せる。

「……………ワシは、見ての通り経験がなくてな。世間で言うなら《魔法使い》じゃ」

「……………同じく。郷里三佐……………いえ、剛さん……………私が初めて身体を許したい、と思っただのが貴方です……………」

「……………」

二人は寄り添って、ファッションホテルの中へと消えて行った。

「……………でー」

パチン

師匠の影響で始めた将棋を指しながら、司令官執務室でその一部始終を聞いていた愛は、こっそり花梨のポケットに仕込んだ自身のスマートフォンをどうやってバレずに回収するか考えながら、駒を盤面に打ち付けた。

そう。あの時、自身のスマホと業務用携帯を通話状態にしてから仕込んで行ったのだ。

当然、全ての会話は筒抜けである。

勿論、今はこちらから通話を切っている状態である。

「三佐はどうする？失敗、つまり戦死を望んでいた副官を更迭するかな？」

「まさか？あんなに信頼できて正直な副官を更迭するなんて。そんなの、自分の足を食べるタコと一緒にです」

「合格点ぜよ」

ニヤツと笑って、坂本一佐はパチンと駒を打つ。盤面では、逃げ場のない愛の玉が、まさに詰み状態になっている。

「6枚落ちでこれですか……………」

「まだまだ初心者ぜよ。将棋はいい、戦術を鍛えるには頭を鍛えるの

が一番じゃき」

「師匠も同じことを言っていましたね」

「高菜二佐か。まあ、あん男は司令官と参謀の才能を併せ持つ、珍しい男ぜよ。自分は、前線指揮官の郷里を通して戦略を立てるに留まるきにな」

再び駒を盤面に戻すと、帰りの途中で買った緑茶のペットボトルから、お茶を二人分注ぐ。

「お、すまんの」

「しかし、郷里三佐と花梨さんかあ」

感慨深げに語る愛に、部下に春が来たことを素直に喜ぶ坂本一佐は、ニンマリ顔である。

「お前さんの読みどおり、父親に飢えていたって訳か。さすがは心療内科医の娘って所ぜよ」

「だいたい母の読みどおりです。そこを見抜くなんて、花梨さんが正直者と言うべきか、母が名医と言うべきか」

自分の手柄ではない部分を素直に白状すると、両手を上げる。

「まあ、めでたしめでたしって所ぜよ」

「はい」

「少なくとも、無断で門限を破った郷里には、始末書の刑ぜよ」

「ふふっ」

明日、どんな顔をして出頭するか。二人は楽しみにしながら、将棋の指導対局を始める。

愛は、戦略も戦術も将棋もまだまだ修行中の身である。

「はい!?腰を抜かしたあ!?!」

「おまん等、何をどうしたらそうなるぜよ?」

「えっ……?」

翌朝、郷里三佐におんぶされて朝帰りした花梨が開口一番、

「申し訳ありません。腰が抜けて運転できません」

と言い出した時に、司令官執務室のチェアに座っていた坂本一佐と、脇に控えていた愛と葵が絶句した。

葵に至っては、声を出して驚いている。まさにイリユージュヨンである。

「ぐわははは、何と言いますか。……なあ？」

「……はい」

顔を赤くして照れながら、豪快に笑う郷里三佐に、顔が真っ赤な花梨。

「まあ、二人の顔を見てればめでたしめでたしッてことで。運転の代行で翼さんと岩崎二尉を呼びますね？」

「なっ、何で翼さんを……あの人は、空を飛ばせておけば良いんです！」

敢えて相容れない翼を呼び寄せる意地悪——少なくとも花梨にはそう思った——に、暴言で抗議する花梨。

「こらこら、花梨さん。あれでも上官ですよ、翼さんは。今度一尉になるんですからね？」

「ぐわははは。上官に向かって、その物言いはいかな？」

「すみません……」

その大暴言を笑顔で諫める愛に、豪快に笑いながら叱る郷里三佐。そして素直に謝る花梨。

「そんな郷里三佐には、始末書と顛末書を提出していただきます。当然ながら、花梨さんも始末書を」

「ぬう」

「……はい」

そして、笑顔で二人にもペナルティという名の刃を突き付ける愛に、苦笑いで唸る郷里三佐と小さく答える花梨。

「こちらには、無断門限破りの始末書。笹野三佐には、副官を無断で連れ去った顛末書せよ」

「花梨さんは、居酒屋で大騒ぎした始末書ですね」

「ぬう……」

「むう……」

笑いを堪えながらそう告げる、坂本一佐に愛。二人共酷いやつである。

そして、足腰が立たないのをいいことに、花梨を翼の運転する業務車に押し込んで、

ハイエースを岩崎二尉に運転してもらおうと、色々なドタバタを引き起こした土佐鎮守府をあとにした。

その時、自身のスマートフォンを花梨の制服のポケットからシュルツと抜き取ると、花梨に、

「提督のド外道……」

と、ジト目で言われた。

帰りの車中、頬杖を突きながらニンマリと笑っている愛に、

「提督、何やら」満悦ですなあ」

と、ハンドルを握りながら声を掛ける岩崎二尉。

花梨の恋が実ったことを告げると、艦娘達も口々に良かったあ、と安堵する。

だが、業務車の方は最悪である。

小悪魔である愛は、花梨の恋が実ったことを翼に暴露したのだ。

「それで、あの人外とどこまで進んだ訳？」

「んなっ………いたた………もうちょつと優しく運転してください」

後部座席で横たわっている花梨は、真っ赤になって抗議する。

「それで………どうだった？」

「………愛して………頂きました」

「あははっ、めでたいめでたい。そんじや、惚気話を聞かせてもらおうかな？・室戸までの道中」

「全く………仕方ないですね。ビッチの二尉にとっては、お子様の見戯でしようけど………」

「ビッチだなんて酷いなあ。博愛主義と言ってよ」

暴言を吐かれても気にしないのが、この女である。

それでも、惚気話を聞きながら翼は、他の人には秘密だからね、と前置いて口にする。

子は親を選べないよね。と前置いてから、

「いやあ、あたしは親に勘当されてね。親は仮面夫婦で冷え切ってた

し、お金はあっても愛はない家でね。あたしはグレてレディースに入って、その時に勘当されちゃってね。その後グループ同士の喧嘩に出くわして、出会って叱ってくれたのが空自のパイロットで、その人を目指して空自に入ったら、そのパイロット死んじゃってね。市街地での墜落を避けようとして、脱出できれば助かる命だったのに、脱出せずに」

「……………」

「まあいいや、そんな事は。あたしは今になって思うのよ。子は親を選べないけど、親も子を選べないのよ」

「そう……………ね。二尉もいろんなものを失ってきたんですね」

その言葉に、あははっと笑う翼。

「でも、今のあたしがいるんだから、それは『要らなかつた』ものなんだよ。だから花梨も、そういう自分は不幸な人間だとか、最低な親の娘だとか、捨てちゃいなよ。折角クソジジイから離れて、四国に来たんだからさ」

「……………要らなかつた……………ですか?」

「そう、要らなかつたもの。冷たい家に生まれた子とか、不良レディースの総長とか、目標を見失った女とか、折れた翼とか。全部捨てたら自由に飛べるようになったのよ。何なら、一生妖精さんでも良かったよ」

「ッ……………」

自分の吐いた暴言が、筒抜けであるかのような感覚に襲われる。

「ごめんなさい……………」

「いいよ、ちよつと花梨は潔癖過ぎたんだよ。今はどう?」

「軽い気持ちです……………」

「でしよ?」

ちらつとバックミラーで後ろを見た翼の笑顔に、花梨もふふつと笑った。

室戸到着後、お姫様抱つこで花梨を官舎まで連れて行く翼に、愛も艦娘達も関係が改善されたんだ、と実感した。

こうしてドタバタ劇は終了した……………

かに思われた。

「だっ……誰がここまで書けと!？」

「すげ……」

「……………」

郷里三佐と言う男は、バカが付くほど誠実で、不器用な男である。顛末書には、その夜あったことを全て事細かにきれいな字で記入し、FAXで提出して来たのである。

その内容の凄まじさに、顛末書を読まない訳には行かない愛は、顔を真っ赤にして絶句し、覗き込んだ健太は唾然とし、同じく内容を覗き込んだ燿子は、ふらつと気絶した。

燿子は、もう絶対にトラウマである。《郷里三佐アレルギー》になりそうな勢いである。

そして、一番最悪なのは当の本人の花梨である。

身体をふるふると震わせながら、顔を耳まで真っ赤にして逃げ出したい思いを必死に堪えながら、仕事をしている。

「ねー、提督。外泊許可ちよーだい」

そして、最悪なタイミングで最悪な女が入ってきた。大垣 翼である。

その様子に、持っているFAXをバサツと取り上げると、内容を読み始める。

もはや花梨は涙目である。

「……………マジで!?!どこが児戯よ……!?!」

翼ですら、絶句する内容である。

「うわああんん!!!何て日よ!!!」

ついには机に突っ伏して、泣き出してしまう花梨。

この、垂直になってしまったご機嫌を治す為に、愛達は花梨を誘っ



て寿司屋に連れて行った。

回転しない……………

花梨は逆襲とばかりに、ウニトロ等々高いのぼっかり乱れ食いで、愛の財布を大破に追い込んだ。

不憫に思ったのか、翼も健太もある程度出してくれたが、雀の涙である。

せつかくの、一月目の貯金も放出しての大破産である。

いやはや、《時価》と言うものは恐ろしい。

「先生え……………お金貸してください。給料がなくなりました」

『はあ?』

笹野 愛、人生初の借金である。

## 接触と疑心

それは彼女が提督になる前の話だった。  
高菜提督達と浜名湖へ遊びに行った夜である。

隣で始まってしまったのに触発された愛が健太との「初めて」を終えて一眠りしたときだった。

ちよんちよん

眠っている愛の頭をなにかに突かれる。

「んあ……………」

眠気眼で目を覚ます愛は青白い妖精さんを見つけた。  
妖精さんは『ついてこい』と言わんばかりに部屋を後にしようとする。

愛は服を身に着けてジャンパーを羽織ると一糸まとわぬ姿で大の字で寝ている健太にそつと布団とかけると部屋を出ていった。

妖精さんについて行き、やってきた浜名湖畔には浴衣姿の青白い女性が付んでいた。

「貴方は……………」

声を掛けると、その女性は振り向いた。

「深海提督と申します。深海棲艦の『指揮者の一人』です」

「……………その深海提督が私に用ですか？」

真顔になりまっすぐ相手を見ると深海提督は妖艶な顔を浮かべる。

「貴方はいずれ提督となり深海棲艦と戦うでしょう。でも私と貴方は敵ではない」

「……………それは……………」

「艦娘が滅びれば深海棲艦もまた滅びるのです。私は——」

——ミライから来ました

「未来から……………」

真剣に考え込む愛に深海棲艦は語りかける。

「次に会うときの宿題としましょう、リーヴェ。次は行当岬の旧室戸鎮守府で 3, 2, 1, はい」

目を覚ますと部屋にいた。

素っ裸の健太が大の字で布団をはださせて寝ており、自分はなぜ服を着ているのか、記憶から抜け落ちていた。ただ自分はいずれ提督になる。そんな確信だけ持っていて……。

それから時は流れ梅雨の訪れる6月。

——起きなさい、リーヴェ

愛はなにか誰かに呼ばれた感覚を感じ目を覚ました。

健太が眠るベッドを抜け出し、私服を身につけると外へと向かった。

門をくぐり抜けると門で歩哨に立っている笠原三尉が敬礼する。

「提督、こんな時間にお出かけですか？」

「ちよつと、眠れなくて……お散歩してきます」

「提督、丸腰ですか？何なら警備の1個分隊はおつけしますが」

私服なのを見咎めて警備をつけようとするのを首を横に振って断る。

「ではせめて拳銃の携帯をお願いします」

自分のガンベルトを外すと、ホルスター付きの自動9ミリ拳銃を手渡す。

「多分、大丈夫ですけど、念のためにお借りしますね」

私服にガンベルトを身につけると笠原三尉に敬礼して出ていく。

海沿いを眺めながら散歩しながら向かう先は行当岬にある旧室戸鎮守府跡地だった。

花梨が「改築して」と説明したのは愛の着任のために新たに新規設置したと言っては気を使う花梨なりの配慮だった。

他の幕僚たちも旧室戸鎮守府のことは知らない。

足立ら警務隊が事の異常さに箝口令を敷いたからである。室戸の幕僚で知っているのは花梨だけである。

行当岬に謎の廃墟がある。それだけ程度のことである。

愛も知らないはずだったが、何故か足は行当岬に向かっていた。

——次は行当岬の旧室戸鎮守府で

そのワードだけを思い出していた。

その行当岬の謎の建物には削り取られた跡のある石門があり、宮戸島と同じようなコンテナハウスが置いてある。

その中に入ると錆びついた扉を引き開ける。

コンテナハウスの中は簡易な廊下と2つの部屋があり、ドアは開けっ放しになっている。

どちらも古い乾いた血が飛び散っており愛は顔をしかめる。

奥の方の部屋に向かうと、乾いた血に染まった朽ちたベッドに青白い肌の旧海軍の制服を身にまとった女性が座って佇んでいた。

「お待ちしていました、リーヴェ」

「貴方は……」

思い出した、浜松で出会った深海提督である。

「久しぶりですね、深海提督さん。」

愛は隣に座る。

「宿題の答え、出ましたか？」

「今日の今日まで記憶を封じておいてそれはいいですよ」

愛は肩を竦めて答えた。

「うふふ、それもそうですね」

「そうですね、今まで私が無意識に行ってきた作戦立案は貴方の記憶の一部だったんですね」

愛は少し顔をふくらませると真顔に戻った。

「ご明答。リーヴェ」

「愛…のドイツ語読みですね。響きはいいですね。リーヴェ」

「お役に立てたでしょう？」

「でも、師匠には勝てませんでしたよう」

「高菜二佐は天才です。きっと私でも敵わないでしょう。ですがリーヴェ、貴方には素質があります。不思議に思わなかったですか？なぜ、妖精が見えるから「だけ」で中学生をスカウトしたか」

その言葉でなにか疑念のようなものを感じ始めていた。

「その、疑念は間違ったものではないでしょう。深海棲艦と艦娘は表裏一体です。艦娘が滅びれば深海棲艦もまた滅びるのです」

「まさか、今人類に手っ取り早く深海棲艦を滅ぼす道は艦娘を滅ぼす人の手で……」

「はい、ですが艦娘が浸透した今不可能でしょう。『自由裁量』とは便利な言葉ですね」

皮肉めいた言葉に、浮かんだのは大貫悟の顔だった。

「そうか、艦娘に関する法律が進まないのは、艦娘を人類社会にこれ以上進出させないため……自由裁量の名のもとに、いずれは深海棲艦を滅ぼして、艦娘を滅ぼさせるため」

「……と云う仮説も、成立する余地はありますね」

愛の仮説に再び皮肉めいた言葉で明言を避ける深海提督。

「大本営では組織改革が行われ、足立将補は警務本部長として、各地域の警務隊長を指揮する立場となり、足立将補へのホットラインは廃止された」

「……なぜそれを」

愛は疑念を持ちながら深海棲艦に問いかける。腰の銃に触れているが、この深海提督が敵ではない事は感覚で確信していた。

彼女のリーヴェという言葉も聞き慣れた言葉に感じていた。

実際大本営では、組織改革が行われていた。

自由裁量を掣肘する警務隊が警務本部に格上げとなり、足立陸将補がその総責任者となった。

そして、東京から新設された北海道・東北・関東・甲信越・東海・近畿・中国・四国・九州及び沖縄の各警務隊を統括する事が主任務となり、各提督との直接のつながりは廃止されていた。

「こちらにも、スパイ網があります。……うふふ、どうやら大本営にも『深海棲艦を本気で滅ぼそうとする』勢力が居るようですね」

「……」

何かを試すような深海提督の物言いに愛は黙ったまま相手を見ている。

「ただの一中学生に何を期待しているんです？ ハーフエン……えっ

「？」

「うふふ、目覚めつつありますね、リーヴェ」

自分の言った言葉に信じられない、といった顔をする愛に深海提督は楽しそうに笑い始める。

「ハーフェン、私は、一体何者なんですか？」

「うふふ、それはまだまだ宿題です。リーヴェ」

「宿題が多いですねえ、ハーフェン」

深海提督「ハーフェン」に苦笑いを浮かべると愛は立ち上がり空を見上げる。

「深海棲艦は迎撃せねばならないが滅ぼしてはならない。……それに気づいているのが貴方で、大貫悟だとしたら……とんでもないマツチポンプですね」

「そういう仮説も考えられますね、リーヴェ……」

ハーフェンは明言を避けながら同意すると、立ち上がる。

「また会いましょう、リーヴェ」

「はい、高菜二佐の言っておられた、深海棲艦との共存の道が模索できそうです」

「えっ」

振り向いたハーフェンは驚きに満ちた顔をしていた。

「高菜二佐は私だけに教えてくれました。深海棲艦には二派或いは複数派居るのではないかと」

「……うふふ、高菜二佐は私の思わたくしった以上のお方でしたね」

「自慢の師匠です」

笑みを浮かべたハーフェンは満足そうな笑みを浮かべその姿を消していた。

「……帰ろう」

愛もトボトボと再び1時間半掛けて鎮守府に戻ってきた。

門で歩哨をしている笠原三尉に銃を返却して自身の官舎へと戻っていった。

異変はその翌日起こっていた。

授業前の休憩時間に校長先生が入ってきた。

「笹野さん、今鎮守府から連絡があつてすぐ戻ってきてほしいと」

「えっ、深海棲艦の襲来にしてはサイレンも……」

「副官の羽佐間三尉より、緊急でとのお話で……」

「分かりました！ 耀子、健太を呼んできて」

愛は立ち上がると、耀子は健太を呼びに走っていく。

すぐに恵奈が心配で駆け寄る。

「愛ちゃん、心配だから一緒に行くよ」

「恵奈ちゃん……」

「美雪、杏子と真由呼んできてー！」

「あいよっ!!」

美雪も2組3組に走っていった。

こうして、愛と健太と耀子と学校をサボった恵奈カルテットは学校から鎮守府へ走っていった。

鎮守府に到着すると、陸戦隊ではない隊員に銃を向けられた。

「な……何を……」

銃を向けてくる隊員に愛たちは睨みつけていると

「任務も放棄して学校に行くとはいいいいご身分だな」

そう言つて、一等陸佐の階級章を付けた片桐というネームプレートをつけたメガネを掛けた尊大そうな男が出てきた。

「片桐一佐……たしか、四国の警務隊長。これはどういう事ですか!？」

「査察である。笹野三佐、貴官は提督の分際で学校に行くとは、深海棲艦を殲滅せずに何をしているー！」

「近海防衛が鎮守府の主任務です。ところで、私の幕僚たちは？」

愛が問いかけると、

「拘束して取り調べている。容疑は利敵行為、その他不正である」

「何を証拠に……」

「証拠ならその娘だ。不正を行った日下部提督の娘を匿っている」

びしつと片桐一佐が指を燿子に向けると燿子はきつと睨んだ。

「ふざけんなよ！親の罪は子供に及ぶってんの!？」

美雪が割って出て片桐の前に立って睨みつける。

ボキッ…

「ぎゃっ！」

片桐は美雪に持っていた拳銃の銃床を振り下ろすと肩に叩きつけた。

「うああああ…痛い…つ…つ…痛いよお…」

美雪は肩を抑えてのたうち回っている。

「こいつらを『公務執行妨害』で逮捕せよ！警務隊本部で厳しく取り調べろ」

「はっ」

「待って!!」

片桐の命令に中から警務隊員がでてくると、愛を除いた全員に手錠をかけてトラックに押し込んで連れて行ってしまおう。

「どういう法的な根拠で連れて行っただんですか！」

「決まっている、自由裁量だよ」

片桐は鼻で笑うと愛を軽蔑するような目で見る。

「貴様ら提督が自由裁量で好き勝手をしているなら、掣肘する我々も自由裁量を行っても許されるだろう?」

「…何を調べたいか判りませんが、執務室に入らせてもらえませんか?」

「良いだろう」

警務隊員に銃を突きつけられ執務室に連行される。

「どういう罪で査察されているかは知りませんが、ただの査察ではないですね」

「いいや、通常査察だよ。片っ端から調べさせてもらっている。例えば、貴官の部屋に捨ててある使用済みのコンドームや、汚物捨てにある使用済みナプキン、衣類から下着までその他貴官の所持品はすべて調べさせてもらっている」

「っ…!!!」



女……それも思春期の少女としてこれ以上の恥辱はなかった、グツと歯を噛み締めながら執務机の椅子に腰掛ける。

執務室には副官である羽佐間花梨三尉が申し訳なきように俯いて立っている。

花梨は何度も殴られた跡が顔にありアザになっている。

「花梨さんに何をしたんです!？」

「司令官官舎の査察を拒んだので、自由裁量で鍵を取り上げただけだ」

「……で、私の部屋でお探しのものは見つかりましたか？」

ぎりぎり歯を食いしばりながら片桐一佐を睨みつけると

片桐一佐は鼻で笑いながら愛を愚弄するように応える。

「巧妙に隠されているので今調べているところだ」

「こんな無茶苦茶が通用すると思っっているんですか。それに民間人に手を上げて貴方自衛官ですか!？」

愛の純粋な怒りの声にも彼は見下した目で睨み返す。

「お前たちこそ、深海棲艦を殲滅せずに現状維持に甘んじておる非国民め。東北もそうだ、貴官、高菜二佐の弟子らしいな、師匠に倣って弟子も、深海棲艦に妥協しおって」

「戦果は、立てているし、私の友人たちは無関係です。ましてや燿子は父の悪事を彼の生前知りませんでした」

「……学校も監視させてもらっている。貴官に関係する友人全てに調査を行う。今学校に1個分隊差し向けている」

「どういう根拠で!？」

バンッとテーブルを叩いて立ち上がると片桐一佐は愛の眉間に銃を突きつける。

「提督!」

花梨も動こうとするも、こちらも警務隊員に小銃を突きつけられている。

「花梨さん、大丈夫です。戻ってくる途中、嫌な予感があったので坂本一佐に連絡しました」

「坂本一佐が? 余計なことをしやがって」

チツと舌打ちしながら銃を向け続けると愛は再び腰掛ける。

「この事は足立将補はご存知なのですか？」

「足立将補が腰痛でお休みのときの幕僚会議で自由裁量の掣肘に対して、自由裁量が有効なことを確認したばかりである。一々足立将補への報告は不要だ」

「……………」

怒りを噛み殺しながら目を閉じる。

「この国はいつから法治国家で無くなったんですか？」

「提督共の自由裁量を掣肘するためである」

「隊長！調査が終わりました！内通及び利敵行為に類するもの証拠及び証言は見つかりませんでした！」

隊員が入ってくる。

「うち、調べ方が甘い。官舎も調べよ、女子官舎や艦娘官舎は調べたのか！」

「いえ、笠原三尉と大垣一尉が陸戦隊と共に立て籠もって入れませんが銃火器の使用の許可をいただけたら突入しますが」

「構わん、銃火器の使用を……………」

ボタンッ！

「待たんかい！アホがあー！」

「貴様ら何をやっておるかあー！」

土佐鎮守府の天城と葛城、坂本一佐、郷里三佐が乱入してきた。

土佐鎮守府から海路で明石謹製ブースターを使って最短距離を通ってそれぞれ艦娘が背負って駆けつけたのだ。

「これは、坂本一佐」

「おまんら、これはどういうことぜよ」

坂本一佐のほうが先任者である、片桐は敬礼をすると坂本一佐はギリと睨む。

「今すぐ警務隊を引け。でなければこちらにも考えがある」

「……………分かりました。その代り学校や鎮守府の監視は続けさせていただきます」

「自由」

愛は皮肉を込めて言うのと片桐一佐はくるつと背を向けて撤収の合

凶をする。

「おお、花梨。大丈夫か」

花梨の様子にオロオロとしている郷里三佐、

「私は大丈夫です……ですが、司令官のプライベートをすべて暴かれてしまいました」

「……何だこれは」

開けっ放しの司令官官舎をちらつと見た坂本一佐は絶句した。

部屋をすべて引つ繰り返された、まさに家探しの跡だった。

「……部屋を片付けます。三尉、手伝ってください。すみません、今私は誰とも会いたくありません。坂本一佐、郷里三佐、お引取りください」

花梨を先に官舎に入れてボタンと勢いよく締めると鍵のかかる音が聞こえる。

その後、二人して慟哭のような泣き声が聞こえてくると、坂本たちは艦娘達と土佐に帰る他無かった。

未だ健太達は拘束されたままだ。

翌日から学校に行くたびに、花梨から呼び戻され、四国警務隊本部から戒告処分が下される状態で、学校すら行けなくなっていた。

愛はその不満を高菜二佐にぶつけた。

「というわけで、監視はされる、女子として見られたくない部分まで暴かれる。ひどいもんですよ。きっとこの会話も盗聴されてるんでしょうね。私は自衛隊の有り様を信じられなくなりました」

『愛ちゃん、何があったんだ?』

「実は……」

愛は高菜二佐にトラブルの内容を話した。

『わかった、宮本さんを通して副官の七原秋奈一尉になんとか足立将補の耳に入れてもらうように手配しよう』

「助かります」

『愛ちゃん、今は信じられないかもしれないけど、自衛隊そのものが腐敗しているとは思わないで欲しい』

「……分かってますよ。どうせ盗聴されるんだからわざと言ってるんです」

『申し訳ない……』

「先生が謝ることじゃないです。それに片桐とかいうやつなんか異常ですよ」

『確かに……』

「今も監視されています。学校も。この国が存在する限り、私と、私の友達に安寧の日は訪れないということですか？だとすると、私もエゴイズムの使徒になるしかありませんね。必要とあればこの国を、二束三文で深海棲艦に売りわたすかもしれませんよ。或いは艦娘を率いてクーデターでも起こしましょうか？」

『……愛ちゃん、こつちから手伝えることはあるかい？』

「いいえ、先生は関わらないほうが良いです。少なくとも、大石家と笹野家に宮本さんに警務隊の手配をお願いします。当分こちらからは連絡しませんし、それまで二度と連絡もしないでください」

『……』

そのまま愛は電話を切り、スマートフォン電源も切った。

「羽佐間三尉。たった今より副官を解任します。土佐か岩沼のどちらかに退去してください」

「提督……」

「命令です……」

目をそらしながら静かにいう愛に決意は変えられないと思い、敬礼する。

「……分かりました。土佐に行きますのでいつでも呼び戻してください」

敬礼すると、司令室を退去する。そのかわりに翼が入ってくる。

登山用リュックを背負って大荷物である。

「どうも、色んな所から監視されてるよ。コンビニに買い物行ったんだけど、どうも、何を買ったかまで監視されてるみたいだね。野郎に触られた下着なんて嫌でしょ？ついでに提督の下着も買ってきたよ。サイズはこの間揉んだから合ってると思うけど。あと、当分の食料と

飲み物も。サラ金行つてきて借りられるだけ借りてきた。最悪踏み倒しても構わんしょ。」

「有難うございます……大塚一尉と小杉一尉と岩崎二尉は拘束されたままですか？」

「たぶんね、しかし、四国警務隊もバカだねえ。自由裁量に対して自由裁量に事を運ぶなんて、私達は法令を遵守しませんって言ってるようなもんじゃない」

そう言うと、翼はポケットから盗聴器探知装置を取り出す。

「電気屋に行つてくすねてきた。ほら、普通に買うと相手方にバレるっしょ。トイレから逃げてきた」

「翼さん、それこそ窃盗犯ですよ……」

「緊急避難って奴よ。あっちが無法で及ぶなら法律なんて守つてられっかい！」

盗聴器探知機を起動すると、盗聴器の反応を確認した。

三叉の電気ソケットを見つけるとそれを取り外して拳銃で破壊した。

中の盗聴器ごと砕け散ると、盗聴波反応はなくなった。

「どうも、自衛隊内に私に対しての『敵』がいるみたいですね」

「どういふことさ?」

「まあ、今回の一件心当たりがありますからね」

「……というと?」

ソファに腰掛けながら翼が銃を戻すと愛は表情を消して小さい声で呟くように

「何日か前、深海棲艦の提督に会いました」

「えっ」

「彼女は言っていました。深海棲艦と艦娘は表裏一体。どちらかを滅ぼせばどちらか一方も滅ぶと、つまり、艦娘を完全に滅ぼすことを望んでいるのは、何も知らない人か、艦娘の社会進出を恐れて艦娘も滅ぼしたいかどちらかの勢力」

「艦娘は今のところ寿命もないし、深海棲艦のコアさえあればいくらでも作れるしねえ……そうか。わかった！」

大きな声を出してしまい、翼は口に手を当てると  
そろそろと愛の横に向かう。

「深海棲艦がでてきて、艦娘がでてきて、その仕組を知っている人間。つまりは鎮守府を開設した人間……つまりは大貫悟空将は、壮大なマッチポンプを仕掛けたわけだ。そして、艦娘の身分に関して自由裁量で法整備が遅々として進まないのは……政治中枢に『敵』がいるわけか。そうなる……誤算だったのは自由裁量を悪用して結婚なりした提督が現れたことか……」

愛はハツとなつた、一人大進撃して殲滅を模索した男がいた。神谷徹である。

人質に取られた時、神谷に問われたことがある。

「深海棲艦に指揮官がいると思うか？」

その時、愛は何も覚えておらず「解らない」と答えたのだ。

「私は、人質に取られたんじゃないやなくて、暗殺されかけた……あの時深海提督の記憶があつたら死んでいた……」

「なるほど、神谷とか言うのと片桐は同類つてことになるね。仮に艦娘殲滅派という分類が居るとする」

愛はコクリと頷いた。

「その連中は、艦娘を兵器だと考えていて、深海棲艦を殲滅してついでに艦娘も始末したい連中だ。どうしてそれを知っているかはわからないが、未来から深海提督が来たつてのが気になるんだよなあ」

翼はリュックからチューハイを取り出すと愛に渡す。

愛も、酒だと分かつて受け取り缶を開けて口をつけると翼もビールを取り出して飲む。

飲まなきややってられない気分なのだ。

「愛ちゃんは賢いし、深海提督も賢いから、互いに接触の痕跡を残さなかつた。なのに、翌日狙つたかのように査察がやって来た。この事を話したのは？」

「翼さんだけです」

「それじゃあ、それこそ拘束され損つてことだ」  
「ですね」

皮肉めいた言葉に愛も同意する。

「考えられるのは、警務隊が旧室戸鎮守府に何らかの盗聴網を張り巡らさせてままにしてあったか……」

「そこまで考えてませんでした。迂闊でした」

「或いは、深海提督が愛ちゃんをダシに敵をあぶり出してくれたんじゃないかなあ……」

「ハーフェンならやりかねませんね、その代償で女の子として見られたくないものまで暴かれたんじや報われないですよう」

大きなため息を吐いて愛はチューハイを飲み干した。

翼は「ハハッ、いい飲みっぷりだねえ」ともう一缶渡してくれる。

「少なくとも現段階で、副官をクビにしたのは正解だね。大貫空将……艦娘共存派カツコカリが敗れたら私らの取るべき道は亡命かクーデターだからね」

「そう思ったんで、こちらから高菜先生の縁を切るような言い方をしました」

「まだ自衛隊の自浄作用を期待したいけどねえ。深海棲艦と共闘する日もそう遠くはなさそうだねえ」

「……」

「少なくとも、相手の出方を見るしかないね。今笠原ちゃんが隊員の暴発を抑えてくれてるから。彼奴等、上官の奪還をやりかねないくらい怒ってたからね」

「そうなるとまずいです。私達が反逆者になってしまいます」

「うん、だから笠原ちゃんも苦労してるよ、こんな時に小杉一尉がいてくれたらいいんだけど、とりあえず、血の気の多すぎるやつは買物に行く前に一発ヌいてやったから当分はおとなしいでしょうね」

アハッと笑うとビールを飲み干す。

「私には出来ないことですね。助かります」

「いいのいいの、好きでやってんだから。笠原ちゃん達やビス子達にも手伝ってもらったから」

「……ワタシハナニモキイテマセン」

その言葉を聞いた愛は聞かなかったことにしたが、翼はハハッと笑

う

「それでも、大事な役目よ。今皆のストレスを破壊に持っていったら破滅だもん」

「……すみません、私も手伝えればよかったです」

「それは、健ちゃんに申し訳ないからだあめ。続けていい？」

「はい」

愛と翼はそれぞれ飲み物を一口つけてから翼が口を開く。

「でさあ、足立のおっさんが東京で上になっちゃったから末端まで行き届かなくなったわけだ。まあ、それはしょうがない。不正が多すぎたんだよ。自由裁量って甘い毒だからねえ」

「うん、そうなんですよ」

「その御蔭で、艦娘兵器派が自由に動ける土壌ができたわけ。それを試すために、会見を設定してリークしたとしたら……ハーフェンは容赦ない天才だね。さすが未来からきた……」

それだけ言うのとビールを取り落とした。

「翼さん？」

「なー、今恐ろしいことを思いついちゃったんだけど。そのハーフェンと大貫って深海棲艦も、艦娘も滅びた未来から来た。なんて……」  
「どっちも居なくなったら平和そのものじゃないですか」

愛は皮肉めいてそういった。艦娘達に聞かれたら殴られるくらいの暴言だ。

「違うんだよ。深海棲艦と、艦娘と共通の敵が居たら……そうさなあ。

セイレーン  
「ジレーネ」

「ジレーネ……海の化物」

「艦娘も、深海棲艦も居なくなりました。深海提督はギリ人間だから生き残りました。ジレーネカツコカリが待ってたかのように現れました。それで、深海提督とその他少数は過去へと逃げました。人類は滅びました。めでたしめでたし」

「……………めでたないです」

「深海棲艦はその深海提督⇨人間派と、ジレーネ派がいて、ジレーネ派には一っだけ特殊な能力がある」



「わかった、『成り』ですか？」

「そうそう、それな。あたしの記憶が確かなら、成らないイ級も居たわけよ、だって捕まえて捌いて焼いて食ったもん」

ケロツという翼に唾然とする愛

「食べたんですか!?アレを!？」

「美味しかったよ。話を戻そうか。深海提督派は北側、ジレーネ派は南側に位置してそれぞれ戦っていると。そうになると、北側には人類を滅ぼす理由がないから攻撃は穏やかになる。逆に、ジレーネ派は南に集まる。大貫空将も解っていて配置したならとんだ狸爺だね。そして、深海提督と繋がっていたなら愛ちゃんが中学生なのに選ばれた理由がクリアになる。高菜二佐では無理なんだよ。高菜二佐はその未来には居ないから。電や薄雲も特異点イレギュラーだから混ぜるな危険。良かったね、参観日に何もなくて。じゃなかったら大貫は高菜二佐をここにやってるよ。」

「……私が高菜先生に出会ったのは、深海提督が高菜先生を私の導き手として選んだから?」

「まあ、仮説だけどね。真実味はないし、今は机上の空論さ。でも、敵からこんにちは、敵ですよと名乗り出てくれたんだから、蓋然性は高いよね」

「うん……」

「それじゃあ、私のことをリーヴェと言ったのも、高菜先生が私の戦術をリーヴェ・サーカスと命名したのも……目覚めてきましたねって言ったのも」

翼はコクリと頷く

「そういうことさ」

「私は一体何者なんですか?」

「さあね。ああ、そうそう。ちよつと人殺し案件なんだけど、聞いてみる?」

「人殺し案件?」

「この間、新聞で行方不明になったおっさんでたじゃん。アレの犯人あたし」

「はあ？」

「いやあ、妖精変身チョーカー、他の人でも変身できるかと思ってラブホで付けたらおっさんだけ消滅しちゃった」

「……………」

「つまりは、私も愛ちゃんの同類。そうさなあフリユーゲル」

ケロツとして笑う翼に愕然としながら立ち上がりながら叫ぶ

「……………な、何てことしてくれましたか!!鬼!悪魔!ビッチ!」

「待つて待つて!!こればかりはマジで反省してるよ。でも、これと今日の話ではつきりしたじゃん!!明石は壮大なマッチポンプの主犯の立役者。艦娘システムの開発者じゃん。あの改造バカは隠れ蓑だったってこと!」

真顔になると、立ち上がる愛を押し止める。

「私達は仲間を見つけて、深海棲艦・ハーフェン派と共闘する途を模索しないとイケない。いやあ迂遠な道だねえ」

「ですねぇ」

「仮説をまとめようか。今この世界には人間艦娘共存派…つまり大貫派・人間中立派…足立のおっさんもここかな。・人間反艦娘派つまりは神谷や片桐派がここだね」

「うん」

「そして、深海棲艦ハーフェン派・深海棲艦ジレーネ派がいるわけさ」  
「うん」

「あ、大貫派には必殺仕事人が居ます。これの真意は……………」

「必殺仕事人？」

「大貫さんは裏の警務隊と言っていました、なんでこんな暗殺組織を作る必要があるのかと疑問に思っていましたけど……………」

「反艦娘派が社会に出てきて下手に動かれるのが困るから消す。ジレーネ系を増やすからね」

それだけ言うと、翼は腕を組んで考え込んで仮説を組み立てる。

「その必殺仕事人とやらも、良いように転がされてるわけか。警務隊をあざ笑うようにこんな事件を起こしたら、反艦娘派の警務隊としても苛つくわけで、過激な取締を行うようになる。提督の適性が減

る。艦娘が滅びる。深海棲艦ハーフェン派も滅びる。ジレーネ様一人勝ちよ。しかしそうなると足立のおっさんは下手に介入しすぎると、消されるね。大貫のおっさんだってそう。敵がでかすぎるわ。戦後脈々と受け継がれてきた国制そのものだからなあ。」

「見てきたような嘘。とも言えますね」  
「嘘だよ」

愛の言葉にケロツと応える翼。

「今までの話はなんだったんですか!？」

「だって、証拠はなにもないんだもん。でも状況証拠から会見の翌日に愛を潰しに来てるわけだし、相手から自白してるようなもんじゃん？」

「……私の幕僚たちは」

「大貫厳選の人材だから信用していいと思う。個人的なカンだけど土佐鎮も仲間だと思う」

「土佐鎮が敵だったら急行してこないですもんねえ。私悪い事しちやいました……」

「良いの良いの、愛ちゃんだってキレてる時はしょうが無いさね」

「後は……」

「今は雌伏の時です。仲間たちが帰ってくるのを待ちましょう」

「そうだね」

数日後、足立陸将補が動き出して、囚われていた幕僚達と友達が解放された。

「いやあ、手酷い目に会いましたな。小官だって飯くらい食べたいもんです。」

「彼奴等何を言ってたんでしょなあ。深海提督がなんだと、ハーフェンがなんだと」

「リーヴェがどうのとか。小官が言ってやりましたよ、うちのサーカスのことだと。奴ら困惑していましたな」

大塚一尉が食事も与えられずに尋問されたことを語り、岩崎二尉が相手の意味不明な尋問に困った顔をして、小杉一尉がしたり顔で応え

る。

その言葉に愛と翼は顔を見合わせると、民間人の虜囚になって仲間たちの方を見る。

「恵奈ちゃんにみーちゃんに、杏子に、真由ちゃん何かされなかった？」

「私達はご飯は出されたよ。まずかったけど」

「あたしや鎖骨折られたよ！こんちくしょー！絶対訴えてやる！！治療はしてくれたけど、酷くね!?あのくそオヤジ!!」

「私には愛ちゃんからなにか聞いてないか聞かれたよ。私は常に大盛りだった。そんなデブかな…」

「うん、何も聞いてないって答えたら、それからは軟禁状態。ご飯は出されるし、トイレもちゃんと個室だし」

恵奈たちが次々に応えると、一応はほつとなでおろす。

美雪はかなり激おこである。当然であるが。

「……で、健太と燿子は……」

この場にはいない二人を小杉一尉に聞く。

「燿子は日下部提督の娘だから、かなり酷い尋問を受けたらしくて。官舎に籠もってる。今笠原と一緒にいるから大丈夫だと思が……」

健太は行方不明になった……」

「えっ……」

愛は絶句した……

「燿子から聞いた話になるんだが『深海棲艦化した』……と言っている」

「……」

燿子から話を聞く必要がると愛は考えていると

「羽佐間三尉はどうされたのですかな？」

大塚一尉がこの場にはいない花梨について問い質す

「それも併せてこれから話しますが、花梨さんは解任クビにしました。笠原三尉に燿子を連れてきて貰えるように頼んでください」

燿子が笠原三尉に連れられてやって来た時に、愛は息を呑んだ。顔は殴られたアザがあり、目は虚ろになっている。

笠原三尉が燿子を静かに椅子に座らせると愛は笠原三尉に告げる。

「羽佐間三尉は解任しました、本日より副官兼護衛をお願いします」

「了解しました」

笠原三尉は燿子に小さい声で「もう大丈夫だから」と告げてから愛の隣に控える。

「では、この大騒動にまつわる考察をお話します。皆さんがここにやって来たのはすべて、大貫悟と言うやつの子供のせいです」

そう前置いてから告げると

「皆さんは大貫空将に近い立場にいる？違いますか？」

「違いますenna」

「ですな」

「小官も大貫空将には良くしていただいた」

「小官もです」

「ついでにいうと、あたしもだよ」

大塚一尉、岩崎二尉、小杉一尉、そして笠原三尉、最後に翼が応える。

「つまりは、こういう事です。私達は大貫派閥だということですよ」

全員が静まり返る。燿子は愛の方を見ている。

「燿子には謝りきっても謝れないのですが、あの異常な査察の原因は私です」

「えっ……」

燿子は信じられない、といった顔をして見ている。

「どういうことですか？」

大塚一尉が静かに口を開く。

「その話をする前に、私と翼さんの立てた考察を話さないといけませんね。実は私、査察の前の日に『深海棲艦の提督・ハーフェンさん』と会見してました」

「!!」

全員が息を呑む。

そしてから愛は翼と立てた考察を順を追って説明していく。  
「つまりは……敵の方から先に喧嘩を仕掛けてきたというわけですね」

小杉一尉は不可解な尋問の意図がわかり、腑に落ちた顔をする。

「証拠はありませんが、状況証拠だけでスリーアウト取れる自身はあります」

「なるほど」

岩崎二尉が頷くと、途端に説得力が増すから驚きである。

「艦娘達には……」

大塚一尉が口を開くと、扉が開かれる。

「話はすべて聞かせてもらったわ」

先頭に立っていたのはビスマルクである。

次々に艦娘達が入ってきて一列に並ぶ。

「要するに私達艦娘の敵でもあるのね、その反艦娘派とジレーネ派深海棲艦、そしてジレーネ」

ビスマルクが皆の云いたいことを纏めてくれる。

「はい、そういう認識で構いません」

「そういうことなら話は早いわね。私達は今までどおり、深海棲艦と戦う。提督は政争の中で生き残る」

その、ビスマルクの言葉に全員が頷いた。

「ですので、妊産婦の羽佐間三尉には今いてもらっては困ります。一番頼れる土佐鎮に行ってもらいました。……岩沼でも良かったんですけどね」

そう言うとお戯つぽく舌を出す全員表情が緩む。

そして耀子は立ち上がる

「愛、私も戦うわ……、健太は私が犯されるのをみて、怒りのあまり深海棲艦化してしまったの……だから……」

「分かった。健太も見つけて連れ戻さなければいけないね。耀子……」

耀子のところまで立ち上がって歩いていくと優しく抱きしめる。

耀子は堰を切ったように泣き出した。

その慟哭の声を聞きながら全員、戦いの決意を決めていた。  
そして、同級生たちもだ。

「わかった！学校では私達を守る」

「あんな片桐野郎の思う通りにさせられっかってのよ！」

「聞いたからには私達も愛の力になる」

「うん」

その言葉に愛は高らかに宣言した

「今から私達は同志です」

『おーっ！』

その深夜愛は護衛に笠原三尉を伴って旧室戸鎮守府跡地に赴いて  
いた。

「本当にハーフェン嬢は現れるんでしょうか」

「どうでしょうね……」

まだ疑念の残る笠原三尉を伴い会見場の血まみれのベッドルーム  
に向かうと、深海提督・ハーフェンが座っていた。

「やってくれましたね。ハーフェン」

「うふふ、まさか敵の方から仕掛けてくるとは思いませんでした。申  
し訳ありません」

申し訳なきそうにはしていないハーフェンを笠原三尉が少し苛立  
ちながら睨みつける。

「怖い顔をなさらないください。貴方のフィアンセの居場所を突き  
止めたんですから」

「健太はどこにいるんですか？」

まっすぐハーフェンを見つめる愛にフツツと笑ったハーフェンは  
壁にかかっている世界地図を立ち上がり指差す。

「太平洋上にある機動要塞、デスペラン」

## 再起！リーヴェサーカス団

「機動要塞デスペラン」

その名称を出したハーフェンに笠原三尉は口を開く

「機動要塞デスペランとやらの概要をお願いします」

ハーフェンは、概要ですよと前置いてから愛の方を見て語り始める。

「機動要塞デスペラン。我々ハーフェン派深海棲艦がこの数年をかけて作り出した硫黄島要塞に次いで制作した、第2の要塞。駐留艦隊であるクラリーン級深海棲艦は一隻一隻がル級と同様で、陸上にも展開可能の水陸両用艦、クラリーン級には知性はなく、ただ司令官の命令するままに破壊と殺戮を行うだけの代物。現在は突然現れた少年型深海棲艦に占領されて、我々は深海にある本拠地まで撤退しなくてはならなくなりました」

大きなため息を吐くハーフェンに愛は続きを促す。

「要塞そのものは、半球体で浮かんでいます。半径500m。要塞の武装は全て重巡クラスの主砲を取り揃えており、ジレーネ側深海棲艦と互角に戦っていた難攻不落の要塞です。ただ不思議なのは少年型深海棲艦をクラリーンが出迎えたことです。まさにデスペランに選ばれたかのような……」

「そこに健太はいるんですね。まずは要塞の陥落を考えないよいけませんね」

「どうやって?」

挑発的なハーフェンに愛は暫し考える。

「思いつくまでは先送りでしょうね。まさかデスペラン側から攻撃を仕掛けて来るとは思わないですし」

「でしょうねえ」

その愛の言葉にハーフェンも同意したが、笠原三尉は妙な不安感を感じていた。

「ともあれ、様子を見ましょう。またいずれここで……」



その深夜。

幕僚たちは寝る間も惜しんでデスペランの捜索のための緊急幕僚会議が開かれていた。

洋上を哨戒中の土佐・室戸鎮守府合同艦隊の暫定旗艦ビスマルクよりから緊急連絡が入った。

「未知の深海棲艦が大挙して押し寄せ、艦娘を無視して突破されたわ」  
Jアラートのサイレンが鳴り響く中、連装砲ちゃんも出動して高知に急行していた。

しかし全てが遅かった……。

その晩、進行線上の民間人および高知駐屯地は新型の深海棲艦に皆殺しにされた。

四国警務隊片桐一佐以下駐屯地にいた全員が虐殺され、

第50普通科連隊、第14後方支援隊、第2普通科直接支援小隊

第348会計隊高知派遣隊 第323基地通信中隊高知派遣隊

高知駐屯地業務隊

133地区警務隊高知派遣隊以全員が虐殺された。

建物は炎上し、焼け焦げた死体やらで悲惨な有様だった。

そして周囲の民家も多数被害を受け、新型深海棲艦は再び陸上を並び帰って行った。

小杉一尉・笠原三尉の護衛の元、高知駐屯地に駆けつけたときにはもう遅かった。

片桐一佐が槍に貫かれ晒された状態で死んでいた。

その周囲には逃げ遅れた隊員や、周囲の民間人の死体まで無残に切り裂かれ晒されていた。

「……………これは……………」

愛は其の惨状に絶句する他無かった。

「これが新型深海棲艦クラーリン型の威力でしょうか……………」

ポツリと笠原三尉が呟いた。

「いずれにせよ、四国警務隊は機能不全に陥りますな……………」

小杉一尉が呟いた。いずれにせよ、生存者がいない以上、ここにとどまるのは危険だと小杉一尉が判断して、室戸鎮守府に引き上げて

いった。

洋上では戻ってくるクラリーン級深海棲艦をビスマルクたちが迎撃体制に移るが、反撃も回避もせずただ帰るといっただけのクラリーン型を何隻か沈めるだけにとどまった。

まさに、やることは済んだからお前らには用はない。そう言わんばかりの態度であった。

機能不全に陥っているのも室戸鎮守府も同様だった。高知駐屯地は焼け焦げてしまつて、リーヴェサーカスの戦術案など、重要な書類から、司令官用コンピューター、司令官用携帯電話まで焼失してしまっているのだ。

司令室にあったものすべてが引き上げられていたのだった。更に厄介なのは室戸鎮守府を監視している生き残りである。

この惨事の容疑者を室戸鎮守府と決めつけ監視し、出入りを著しく制限した。全員軟禁状態と化していた。

監視のため生き残っていたのは2個中隊。こちらは陸戦隊1個中隊である。

相手はさらなる命令もないまま、片桐一佐の言い残した自由裁量で締め付けはより過激になってきていた。

室戸鎮守府に戻ってきた愛たちを犯人呼ばわりして、司令官執務室に軟禁した。

また、残っていた部隊員には女性がいなかったため、愛の着替えなども男性の監視付きである。

其の処遇に激怒していたのは陸戦隊員である。

暴発を起こさないように小杉一尉が睨みを効かせ、翼や笠原三尉、女性隊員や艦娘達が血の気の多すぎる男性隊員をなんとか慰撫し押さえつけている状態である。

愛は司令官デスクに座り、耀子は其の横に控えながら軟禁状態である。

デスペランを攻略するにせよ、何にせよこのままでは何も出来ない状態だった。

この際スマートフォンも没収され、破壊された。

愛が高菜二佐に連絡を取れる手段を完全に失ってしまっていた。

こうして監視が続いて数日経っていた。

現場の自由裁量はほとんどエスカレートしていた。

ついに女子官舎・艦娘寮の臨検が行われた。

家探しのように、証拠の品を探る連中。

だが、深海提督との繋がりはあるあの臨時会議の参加者の記憶の中だけに残っているため

どこを探しても、高知駐屯地虐殺や深海棲艦との内通の記録は見つからなかった。

何れにせよ、ついには艦娘の出撃禁止命令が出されるに至った。

基地航空隊も出撃が禁止され、室戸鎮守府は完全にロックアウト状態に陥っていた。

足立陸将補も四国に足を運びたいと常々思っていたが、副長としての仕事が多忙すぎて東京から離れられなくなっていた。

同じく七原一尉も、大本営から次々と降りてくる副長業務の手伝いで東京に缶詰状態になっていた。

結果、其のことで二人の命が救われたのが事実であるが、当の本人は四国の異常事態に結果的に何も出来ないでいた。

宮戸島の高菜二佐も、愛との連絡手段が完全に途絶えてしまったのと、

愛自身からの、関わらないほうがいいという忠告を受けて、自身の室戸行きを諦めていた。

それも、大貫空将直々に、四国への介入禁止命令がでていたのだった。

これが湊子が皇族であったならまだ打つ手はあったものの、一民間人になってしまった以上政治ルートを失った高菜二佐が取れるべき道は何もなかった。

せめてもと、自身の口座から当面の資金を振り込んで、愛の足しになれることを祈る他無かった。

愛は師匠の気遣いを感謝しながら、その資金を有効活用した。

なんとか没収を免れたタブレットで、戦術書を読みながら過ごしつつ

つ、軟禁状態にあるからと監視している警務隊員に買い物に行かせた。

其の中には女子としての必需品も含まれていたため、結局燿子の外出が可能になった。

「流石にいい男の人がナプキンやタンポンを買いに行くのはハードル高かったですね」

と悪戯っぽく笑いながら、嚴重な監視網から蟻の一穴をあけていた。

燿子は、そのまま帰ってこなかった。監視の目を振り切って土佐に走らせたのだ。

ようやく外部に室戸鎮守府のロックアウトと機能麻痺が伝わったのだ。

結果、郷里三佐率いる土佐鎮守府の陸戦隊『海援隊』が半分応援に駆けつけた。

この土佐鎮守府の『海援隊』は並の一個中隊ではなく、2個中隊で1個連隊に相当する猛者たちである。室戸鎮守府内に監視を続けていた警務隊員をすべて叩き出した。

この緊急時の間に、坂本一佐は陸准将補昇進・四国警務隊長代行の任命を受けていた。

足立は多忙すぎるスケジュールの中自身の権限で打てる最善の手を打っていたのだ。

郷里三佐はその坂本准将補の名代・警務隊副隊長代行として命令を伝えた。

曰く、四国警務隊本部を坂本陸准将補率いる土佐鎮守府に移す、というものだった。

警務隊員は郷里三佐のもと、土佐鎮守府に引き上げていった。

生き残りが2個中隊半とはいえ、この警務隊員には本来の警務隊の任務についてもらわねば困るのだ。

土佐鎮守府の陸戦隊を合わせて3個中大半で四国の警務隊任務を熟さねばならなくなった。

だが、坂本が手綱を握っている限りは暴走は起こらないだろう。ようやく室戸鎮守府に人と物の出入りが可能になった。郷里三佐から、花梨は坂本准将補の次席副官という立場で補職したと伝えられると幕僚たちの心配も一つ減った。

ようやく機能不全に陥った室戸鎮守府の立て直しが始まった。

司令官コンピュータは旧室戸鎮守府の置き去りになったコンピュータと無線装置が生きていたため、それを引き上げた。

まずは、室戸鎮守府の基本方針を決定せねばならない。

まずは耀子を自由裁量で司令官が任命できる最大の階級の曹長に任命して、次席副官にした。

これは、耀子の愛の力になりたい、という意向もさることながら陸戦一筋だった笠原三尉の負担軽減でもあった

「まずは、デスペランの位置を補足しないことには話しになりませんね。今回の一件ではつきりしました。デスペランを操っているのは健太です。でなければ艦娘を放置して高知駐屯地だけを狙った理由になりません」

愛がそう切り出すと、全員が頷いた。

「まず、ビスマルク。アレがデスペランの全戦力として、真正面から戦うことは可能ですか？」

「まず無理ね。土佐鎮との連合艦隊でなんとか拡大サーカスを決めれば勝機がある程度ね」

愛の問いかけにビスマルクは即座に首を振った。

「では、デスペランを真正面から落とす作戦は捨てましょう。よって第2の案を取ります。デスペランからなんとか土佐鎮守府に攻撃を仕掛けるよう仕向けましょう」

「どういふこと？」

ビスマルクが愛の意図を掴めないでいると、愛はふっと笑って

「高知の虐殺が健太の復讐だとするなら、私を土佐鎮守府で処刑すると喧伝してもらえば何れ健太の耳にも入るでしょう。クラーリンの全戦力を持って土佐に襲いかかるでしょうから、土佐鎮守府司令部を

無人化して、廃止された安芸鎮守府跡地に司令部を移転してもらった上で、艦娘と郷里三佐、あとは2個中隊で1個連隊に匹敵する土佐が誇る熟練陸戦隊『海援隊』に迎撃してもらいましょう。郷里三佐が本気になればクラリーリンをなんとか倒してもらえると信じています」

「なるほど」

岩崎二尉が頷く。信頼と実績の説得力上昇力である。

「それで、どうなさるおつもりですか？」

大塚一尉が口を開くと

「クラリーリンの出处をたどって、室戸泊地の艦娘でデスペランを探し当てます。私も戦場に出ます。なんとか健太に呼びかける方法があればいいのですが……今回はデスペランの位置を確認するだけでいいです。確認さえできれば監視衛星で追尾することは可能です。せつかくのアメリカさんの軍事衛星を自衛隊も使わせて貰えるのですからそれくらいの努力は大本営にしてもらいましょう」

「つまりは、提督自ら撒き餌になるということですか」

「健太にとつては、私自身が最大のご馳走ですからね。現状私達は3つの敵を抱えています。日本に巢食う反艦娘派の連中、ジレーネに感化された将棋の駒深海棲艦、そしてジレーネカッコカリ。それにデスペランが増えたら、正直生命がいくらあっても持たないです」

小杉一尉の質問に冗談めかして応える愛だったが実際の所本音でもあった。

「最終的には、我々の派閥のボスに直接面会して真意を問いたいところですが、差し当たりは、 HALFエン率いる、深海棲艦 HALFエン派を頼るほか無いということですね。高菜二佐の考えていた深海棲艦との共闘の可能性がいよいよ現実味を増してきたということですね……」

「分かったわ。私達はクラリーリン型深海棲艦のやってくる位置を分析してデスペランを見つけ出せばいいのね。ところで、攻略はしなくもいいの?」

ビスマルクの言葉に愛は首を振る。

「正直、情報不足で攻略まで至れないと思います。今回は私の愛する

健太の居場所さえOKです。それより……中長期的な戦略を考えなくてはいけないと思います。反艦娘派は倒すのは無理でしょう。戦後GHQ体制から脈々と受け継がれた日本の国制そのものですから。なので、ジレーネを滅ぼすほか有りませんね。ジレーネと反艦娘派は潜在的には敵同士なので、結託することはないかと思えます。人類は滅びたくないですもん。ジレーネさえ滅びればあとは深海棲艦とゆるゆる戦争をし続けていえばいいわけです。下級の深海棲艦はトドや海獣と同じようなものですから、災害対策としての艦娘戦力の有用性はなくなりはしません」

「なるほど」

岩崎二尉が頷く。

「そして私はもう一つ大きな仕事があります」

そう言うのと全員が集中する。

「中学生としての仕事です。反艦娘派の目を鎮守府からそらすためにも、肅々と中学生をやらなくてはいけません、ただでさえ勉強があまり好きでないのに、勉強が遅れてるんですから。そこは隣りにいる優等生と未来の弁護士に頼りましょう」

そう言うのと、燿子がクスツと笑う。あんなに酷い目にあつたのに、強い子である。

「学校にも潜在的な敵がいるでしょうね。今回の一件で迷惑をかけたので、私に反感を持つ人も居るでしょう。最悪いじめのターゲットになるかもしれませんが、そこは恵奈カルテットの力を借ります。これが私の考える基本戦略です。デスペランの位置を補足して、攻略プランを考え、ジレーネを滅ぼす。洋上に出ればジレーネと出会えるかもしれない。其の情報も得たいと考えます。其のためには皆さんのお力を借りたいと思います。宜しくおねがいします」

深々と頭を下げると小杉一尉が立ち上がる。

「私は大貫派ですが、同時に笹野派でもあります。室戸鎮守府陸戦隊ローゼンリッター「薔薇の騎士」中隊は貴方の手となり足となり提督に忠誠を尽くすことをお誓いします」

続いて岩崎二尉が立ち上がる。

「いやあ、私は笹野提督がこんな年齢で頑張っている姿を見ると、つい全力で支えたくなるものです。小官も、提督に忠誠を尽くします」

そして、ビスマルク達艦娘も立ち上がる

「私達は最初から愛ちゃんファンクラブよ」

「そうよ、Meは提督にloyaltyを誓うわ!」

「艦娘達は皆あなたの味方です」

「リーヴェサーカス団の団長たる笹野愛にはサーカスの収支が黒字になるまでは生き残っていたただかねば困ります」

「北上さんも私も同意見です」

「大井つちのいうとおり。なんとしても20代で愛ちゃんママをグラシマにさせる計画もあるし」

「レディとして、クイーンである愛ちゃんに忠誠を誓うわ」

ビスマルクから始まり、アイオワ、鳳翔、伊勢、大井に北上、それに暁が続く。

「あたしも、最初っから愛ちゃん派だよ」

会議ですつと黙っていた翼も立ち上がり敬礼する

「小官も、提督に忠誠を誓います」

「私もよ、愛ちゃん」

笠原三尉と燿子も愛に向かって敬礼する。

最後に大塚一尉が立ち上がる。

「全く困ったものだ。自衛官ともあろうものが国家にではなく個人に忠誠を尽くすなど。軍閥化の第一歩だな。だが、私も同意見だ。リーヴェサーカス団団長に敬礼!」

全員が敬礼をすると、愛も立ち上がって答礼する。

「やりましょう!まずはデスペラン捕捉作戦です!」

こうして、室戸鎮守府艦隊は『リーヴェサーカス団』となった。

「……というわけで、坂本提督の協力をお願いします」

通信では盗聴の危険があるため、愛は笠原三尉の護衛の元、土佐鎮守府を訪れていた。



「なるほど、土佐から再び維新を目指すか、面白いぜよ」

話を聞いた坂本准将補はニヤリと笑みを浮かべる。

さすがは坂本龍馬かぶれである。

「お願いですから坂本龍馬のような最後だけにはならないでくださいね。坂本さんには花梨さんと郷里三佐の仲人になってもらわなければ困ります」

其の軽口にて、副官として控えていた葵はくすつと笑い、次席副官の花梨は顔を赤らめる。

当の本人は大笑いである。

「あつはつは、了解ぜよ。では、司令部を安芸に移し、土佐を司令部不在にした上で、警務隊本部を土佐に残したまま、笹野愛を処刑すると喧伝すれば良いがぜよ？ あんアホどもには少々怖い思いをさせるべきじやき」

「はい、クラリーン型深海棲艦は一隻がル級と同じと聞きます。十分に気をつけてください」

「了解ぜよ」

「それでは、タイミングはおまかせします。盗聴の危険もあるので、通信は控えましょう。こちらは哨戒網を密にしてクラリーン型の攻撃を監視します」

「わかったきに」

「それと、先日は失礼いたしました。お見苦しいところをお見せしました」

「……いやあ、あれはワシが無神経だったぜよ」

坂本准将補は優しく語ると、ぽんと頭を撫でる。

坂本たちが準備を進めている中、愛はようやく学校に登校できるようになった。

『愛ちゃん、待ってたよー！』

1年1組の皆は全員愛を歓迎してくれていた。

「あれ、何で杏子や真由も居るの？」

いつの間にかカルテット総結集になっていた1組にキョトンとしていると

「協力者は多ければいいと思って、クラス移籍を校長先生に直談判してきた」

美雪がドヤ顔でいうと、真由が補足する。

「美雪のお父さんが教育委員会だから、それ経由で半分脅迫で実現したんだよ」

補足されると美雪は

「脅迫ゆーな、人間き悪い」

と、不貞腐れるのを皆がどつと笑う。

担任の先生が

「いろいろいう人は居るけれど、少なくともこのクラスは笹野さんの味方だよ」

そう穏やかな声でいうと、「さあ授業ですよ」

と皆を着席させる。

他のクラスや、上級生から因縁をつけられたり嫌がらせを受けたりもしていたが、

クラスみんなに対抗した。

「おう、喧嘩なら任せとけ」

大野くんが自信満々にいうと男子たちが次々に「俺も!」「俺も!」  
と言いつ出す。

「女子だって負けてないんだから」

そう恵奈ちゃんというと、杏子が

「柔道初段のデブがここにいますかなにか」

と自虐ネタを加えて前に出るとクラスにもどつと笑いが上がる。

教室移動などはクラス全員でやったし、着替えなどもしっかりガードした。

上級生からの因縁つけは主に大野くんと杏子が対応した。

物理的に説得するという方法で。

担任の先生は職員室で孤軍奮闘をしてくれて、一人、また一人協力者を獲得していった。

担任の先生の願いは「学校にいるときくらいは中学生でいて欲しい」のだった。

ある意味、1年1組もリーヴェサーカス団の一員だった。

その頃、東京では足立陸将補が大貫総監の元を訪れていた。

何時もの完全防音室で余人を交えずの会談である。

「大貫総監にお話があります」

「四国の件か……あれはそのままでもいい」

食って掛かる勢いの足立を手で制するとソファーを進める。

「失礼しました」

「足立くんの言いたいことは最もだ、だがこれは君のためでもある」

そう言うと、ソファーに足立が座るのを確認すると、大貫も腰掛ける。

「実の所を言うと、深海棲艦と艦娘の戦争は私が仕組んだものなのだ」

「んなっ!？」

足立は二の句が告げなかった。

「頭がおかしくなったと思ってくれて構わんが私は人類が滅びた未来からやって来た」

「未来……ですか?」

「そう。深海棲艦と艦娘は根源的には同じものなのだよ。だから深海棲艦のコアで艦娘が生まれるし、艦娘が沈むと深海棲艦になる」

「高菜二佐のいう通り、深海棲艦と全面戦争をするというのはナンセンスということですね」

足立がニヤツと笑いながらいうと、大貫は目をまん丸くしてから笑い出す。

「あの男は事の本質を掴んでいたな。それこそ、リーヴェの導き手に相応しかったのだな。勿論、宮戸島の一件もマッチポンプだ」

「……………」

「高菜直哉という男には、リーヴェ……笹野愛の導き手になって貰う必要があった」

「小官から直接査察の権限を取り上げたのも……」

「そう、連中をあぶり出すため。高知駐屯地の一件は私にとっては予想外ではあったが……」

足立は不快さを隠そうとしなかった。

「閣下は深海棲艦と艦娘と果てしなき茶番を繰り広げて何をお目指しになつて居るのですか？」

「その先の『真の敵』を滅ぼすためさ」

足立は敢えてそれについて何も口を挟まなかった。

「私はあつちの世界でも深海棲艦と戦う艦娘本部にいた。名前は少し違ったが。その世界からは、艦娘も深海棲艦も両方居なくなつた。めでたしめでたし、ではなかつたのだ。海の化物セイレーン。ドイツ語でいうならジレーネが突如現れ、深海棲艦以上の猛威を奮つた。前線で戦う歩兵。特攻隊のように突き進む香車。トリツキーに進む桂馬。疾風のごとく蹂躞する飛車・角行。そして、王を固める銀将に金将。そして連中は本土で化けた。『成り』だ。『成り』になつたジレーネは金将のごとく無双をし、次々と滅ぼしていった。私達は、その世界を放棄して逃げ出したのだ、平行世界の過去に。明石の力で」

「なるほど、明石の魔改造バカは擬態だつたのですな」  
ようやく納得がいった明石の暴走に足立は苦虫を噛むような表情を浮かべていた。

「我々の敵は2つある。ジレーネと日本そのものさ。イ級がと金になつたとき確信したよ。ジレーネは存在すると。」

「……なるほど、小官には納得がいきました。艦娘をこれ以上社会進出させないため、艦娘の関連の法整備が遅々として進まないということですか」

「そう、正解だ。そして君の役目は中立を保つことだ。ちなみに、提督怪死事件の主犯も私だ」

「でしような。反艦娘派の温床だつた各地の警務隊を動かすのに私から権限を取り上げたんですな。私だつてそのくらいの事はわかります、手足を当てましょうか。浜松の村上兄妹」

ほう、と漏らした大貫にニヤツと笑つた足立は一言続ける

「私の持病は腰痛でしてな。宮本くんには不快な思いをさせたが、彼

を通して誰がどういう立ち位置か把握できませんでした。まさか本当に腰痛を持病にしているとは思いませんでした」

その言葉に大貫は再び目を丸くする。

「やはり、名古屋以西にそういつた連中を固めたんですな。であれば高菜二佐には精々宮戸島で騒動を起こして、のんきに暮らして連中の目を欺いてもらわなければなりません」

「うむ、最終局面に必要な電、薄雲の指揮を取れるのは彼だけだ」  
ニヤニヤ笑いながら足立の顔を見ると、足立もニヤリと笑っていた。

「では小官は何も知らない風を装って、忙しい日々を送らねばなりませんな。どうも小官は仕事が骨休めのようにしてな。万事型通りの生き方しかできない……と思わせなければなりませんからな」

「うむ。君もあまり介入しすぎると命の危険を招く。無論私もそうだ。若人にすべてを任せっきりになるのは申し訳ないが、今は雌伏の時だ。奴らをあぶり出すまで。その時はもう一つの敵も奴らに対抗せざるを得ない。その後は……」

「まあ、ゆるゆると深海棲艦との果てしなき戦争が始まりますな、災害派遣としての艦娘の有用性。その後は自由裁量でじわりじわりと、艦娘との共存を既成事実化すればいい、ということですか。では小官はせっかく頂いた休暇ポスト、存分に満喫させていただきます」

「うむ、頼む」

こうして悪い顔をしたおっさん二人はにやりと笑った

## 第1次デスペラン攻防戦

デスペランの暴走はとどまることを知らない。

まずはクラリーン級の大群は徳島県的美波鎮守府を急襲。

出撃した艦娘を全員容赦なく轟沈させ、

鎮守府を完膚なきまでに破壊した。

陸戦隊のない鎮守府のため司令官以下全員が戦死する最悪の事態となった。

それどころかそのまま陸上を北上し阿南市に雪崩込んだ。

阿南市の逃げ惑う市民を虐殺しつつ向かう先は陸上自衛隊徳島駐屯地、

徳島駐屯地には実戦部隊が駐留していない。

徳島駐屯地にいる自衛官は為す術もなく全員がクラリーンに虐殺されていった。

リーヴェサーカス団も何もしないわけではなかったが、

徳島に急行したときにはすべてが遅かった。

阿南市の中心部。特に阿南市役所が破壊されて都市機能は麻痺していた。

そして、徳島駐屯地は既に焼け野原となっていた。

愛は、陸上の後始末を完全壊滅を免れた警察と消防に任せると、すぐにビスマルク達に撤退命令を出した。

そして、帰りは牟岐鎮守府を陸上から急襲し、司令官以下全員を虐殺した上で、

港湾内での戦闘で所属艦娘を完膚なきまでに轟沈させ、海へと出ていった。

ビスマルク率いるサーカス団艦隊は阿南市の惨状を放置して急行したため、クラリーンが海に戻る前に牟岐町沖に部隊を展開し迎撃体制をとっていたが。

クラリーンの軍団は、ビスマルクたちサーカス団を無視した。

一方的にサーカス団の攻撃を受けながら撤退していった……。

やはり、サーカス団には用はない。と言わんばかりのように……。

ここで失敗だったのは迎撃体制をとったことである。最初から追尾体制を取っていればデスペランの位置を把握できたかもしれない。とにかく、ビスマルクたちの追尾は振り切られてしまい、ジレーネ深海棲艦との交戦で見失う羽目になっていた。この攻撃の結果四国に置かれている陸上自衛隊の駐屯地は松山駐屯地、普通寺駐屯地だけを残すことになった。この攻撃で官民併せて1万人弱の犠牲者を出してしまった。

「由々しき事態ですね。早く準備を進めませんと」  
副官の笠原三尉が報告を受けて額にシワを寄せている愛に声を掛ける。

そもそも、準備を中断して陸戦隊『薔薇の騎士団』と、艦娘達を差し向けたのである。  
こちらの準備も大幅に遅れる結果となった。

愛はそれだけではなく、健太の怒りに思いを馳せていた。民間人も無差別に殺して自衛隊施設を破壊する。最悪、健太が破壊の権化になってしまったならば

『健太を倒すことも視野に入れないといけない』  
そう悲痛な決意を込めていた。  
その間にも坂本准将補による安芸への司令部移転作業は着々と進んでいる。

安芸は小規模鎮守府のため、改築増築が必要だが、高知の施設科が全滅してしまった以上、民間に委託する他無かった。

ただ、彼らにとって救いだっただのは、  
クラリーン級は海上でも無差別な破壊を繰り返しており、  
ジレーネ派深海棲艦を駆除も同時に行っており、  
施設移動と、艦娘達の迎撃準備に専念できる。

「しかし、普通寺駐屯地を狙われたら民間人の死者は今回の比では

ないぜよ」

「ぬうう、『海援隊』を配置しようにもどこからくるか判らぬ以上、手の打ちようがありませんな」

民間工業者が安芸鎮守府の拡張工事をしているのを眺めながら、坂本准将補と昇進して2佐になり、正式に土佐鎮守府陸戦隊『海援隊』を一個連隊に増強し、連隊長となった郷里二佐が厳しい顔をしている。

そして、警務隊も1個連隊にしてこれを『陸援隊』と名付け、坂本准将補が直接指揮を取った。

海援隊と陸援隊の一個連隊化は許可を取るのに苦労の連続だった。だが、徳島駐屯地の破壊で、危機感を持った第14旅団が第15即応機動連隊の精鋭を差し向けてくれたのだ。

これで、海援隊・陸援隊の戦力は4個連隊に匹敵する戦力に増強していた。

対クラリーリンの対策は万全になってきている。  
艦娘達も、防衛に特化した陣形の練習を日夜行っている。

今回自分たちは『エサ』である。

それも、食べつくされてはいけないエサ。

海・陸援隊もなるだけの犠牲を出さないよう、郷里二佐のもとで、訓練が続けられる。

訓練のために、東富士の魔王と呼ばれている教導隊長七原准将が招聘され

徹底的なシゴキが行われた。

その訓練は尋常ではなく、あの郷里ですら音を上げかけるハードモードである。

「貴様らはその程度か！それではクラリーリンの餌食で終わるぞ！声出せ！」

『サーイエッサー！』

「自衛隊の責務はなんだ！」

『守れ！守れ！守れ！』

「貴様らは国民を愛しているか！」



『ガンホー!! ガンホー!! ガンホー!!』

彼らの叫びは土佐鎮守府に響き渡っていた。

その頃、室戸鎮守府でも連日早朝会議が行われていた  
0400からの会議であり、愛はその後登校なのだ。

「由々しき事態ですな……………」

サーカス団総参謀長の大塚一尉が徳島駐屯地の被害状況をプロ  
ジェクタに写しながら深刻な顔をしている。

「申し訳ありません。せつかく機械化機動中隊にいただいたのに  
もかかわらず、間に合わずに」

愛たちは、徳島駐屯地跡地にあった、無事だった戦車や装甲車・弾  
薬などをすべて引き上げ……………と言えば聞こえはいいが、

自由裁量の名のもとに強奪して連装砲ちやんと併せて薔薇の騎士  
団に配備、薔薇の騎士団を機械化機動部隊にしていた。

薔薇の騎士団隊長の小杉一尉は申し訳無さそうな顔をする。

「いえ、まさか直接の恨みの高知駐屯地だけではなく、徳島駐屯地……  
実戦部隊のいない駐屯地まで標的にされるとは考えていませんでし  
た。これで、通善寺も狙われるとするならば、どこから上陸するかに  
もよりますが、想定される死者は今回の比ではないでしょう。」

愛は胃をさすりながら応える。

「愛、大丈夫?」

次席副官の燿子が青い顔の愛を見咎めて心配そうに声を掛けると  
悲しそうに首を振る

「健太が、本当に破壊の権化と化してしまったなら、私達は健太を殺す  
ことも視野に入れなくてはなりません」

その愛の一言が、幕僚会議に参加している幕僚や過娘たちを沈黙さ  
せた。

この年齢で愛する人を殺すことを覚悟しなければならぬ状況に  
追い込まれた愛の心を慮ったのだ。

だが、ビスマルクはクラリーンの行動に不自然さを感じていたのも  
事実だった。

「まだ、破壊の権化と化しているとは考えにくいわね。もし完全に破壊の権化になっているのだったら、サーカス団麾下の艦娘達を放置……或いは無視することは考えにくいもの」

「そうよ！まだ健太がDestroyerになつたとは限らないわ」「クラーリンへの攻撃は回避も反撃もしない印象です。罪もない他の鎮守府の艦娘はひとり残さずに沈めているのに」

艦隊のトップスリーが共通の見解を出している。

「まだ、健太が心を完全に失つたというのは早計ですな。ともあれ、我々は後手後手に回つた以上、例の作戦の決行をに専念しませんといけませんな」

岩崎二尉が大きな体でみんなを安堵させるように語ると全員は頷いた。

「作戦決行までは学校に行つてください」

そんな幕僚たちの配慮に甘えて、学校へ登校する。

学校へは恵奈カルテットと燿子の護衛で、特に燿子はH&K USP45拳銃コンパクトの携帯を制服の裏隠しホルスター銃でしている。担任の先生の黙認である。

担任の先生は責任はすべて取ると教師生命を賭けてくれているのだ。

「おっす！団長」

「おはよう、大野くん」

途中大野くんら男子と合流して、次々と1組の連中が集まり、集団登校の様相を呈していた。

靴箱に封筒は入っていて、中を開けるとカミソリだった。

「またカミソリレターか」

大野くんが取り上げると、手紙を取り出す。中に入っている手紙には真つ赤な字で

——この人殺し

と書かれている。

「まったく、陰険なやつだな」

正義感の塊大野くんは大きなため息を吐いた。

手紙の乗っていた下の靴はズタズタに切り裂かれている。

「まあ、そんなような気がしたから、ダミーなんだけどねそれ」

耀子が腰に手を当てながら、スポーツバッグから愛の上履きを置いて履き替えると下駄箱に入れずにバッグにしまう。

「さて、GoRroバレてないかな」

耀子がズタズタになった靴の奥に仕込んでおいたカメラを弄ると、カメラは無事に動いていた。

「あとで動画解析して先生に提出しようか」

「そうだね」

愛と1組軍団——サーカス団学校支部は愛を輪形陣で囲みながら教室に向かう。

教室の前の壁には『人殺し笹野愛』とスプレーで塗られた。た。

それを担任の先生が一人でせっせと消していた。

「ああ、おはよう皆さん」

『手伝いますー!』

授業開始までみんなでせっせと消していく。

担任の先生の授業はまだマシだったが、体育は大変だった。

体育教師通称「ゴリ」は反1組筆頭派で、雨の日も、炎天下の日も、ひたすら校庭を走らせ続けた。

休むやつは罵声を浴びせて水分補給も許さなかった。

着替えも男女更衣室をロックアウトしてしまうため、教室で男女合同で着替える羽目になった。

雨の日は耀子と

「ブラ透けるよね」

「うん」

「ゴリのやつガン見してたよ」

「水泳とかヤバイかな」

「ねー」

という会話をしながら女子たちと着替えをする。

男子たちはそれを取り囲んで外から見られないように配慮する。  
男子たちにとってはご褒美だが本人たちはそれよりも女子たちや  
何より愛が大事だった。

愛たちの笑顔が下着姿より男子たちにはご褒美なのである。  
とはいえ、思春期の男子たちには目に毒なものも間違いはない。

それでも体育はまだ授業をするだけでしたが、授業をしない移動教  
室の授業はこちらから拒否をした

家庭科・技術・音楽といった類だ。

自主自習で教室に籠もって勉強をする。

岩崎二尉の手ほどきを受けて一番勉強の進んでいる燿子が教壇に  
立ってテスト対策を行う。

その結果6月の中間テストは学年上位者を1組全員が占める事態  
にまでなっていた。

アンチ1組派の教師が記述問題で難癖をつけて△を付ける中でも  
……である。

愛は学年上位者の真中から上で燿子は500点満点である。

燿子は「ケチのつけようもない完璧な」回答を行い、△もつけさせ  
る余地も与えなかった。

崩壊寸前の学校の授業を終えると、カルテットを従えて燿子と愛は  
鎮守府に向かう。

途中までは大野くん率いる1組男子ーズが務めるが、途中で笠原三  
尉率いる陸戦小隊が引き継ぐ。

「笠原三尉、司令官の護衛を引き継ぎます！」

「ご苦労さま、それではみんな気をつけて帰りなさい」

『了解！』

司令官引き渡しの儀式が行われると、カルテットと燿子と愛は陸戦  
隊の護衛の元鎮守府に帰り着くのだ。

反艦娘派は、今度は公安警察を使って監視に乗り出した。

周囲には公安の拠点が出来るようになり、愛たちは息苦しさを感じ  
始めていた。

「自衛隊への掣肘に公安さんとはねえ」

笠原三尉が皮肉めいて口にする。

「これではつきりしました、私達はジレーネしか倒せません」

「そうね……」

こうして、各々が準備を進めて、ようやくデスペランおびき出し作戦の準備が整った。

四国警務隊は坂本准将補の名前で『笹野愛特任三佐』の逮捕を公表した。

容疑は『外患誘致の罪』であり、死刑しかない罪状である。

自由裁量の名のものと逮捕であるが、当の本人はカルテットしかない室戸鎮守府に居る。

ビスマルクら艦娘と、薔薇の騎士団は土佐に移動させて、司令部幕僚はデスペラン補足作戦司令中枢の安芸鎮守府跡地に集結させている。

基地航空隊もいつでも出撃スタンバイ可能であり、デスペラン……：クラリーンの来襲を待つだけである。

カルテットが無理やり乗り込んだ理由は簡単である、命がけで健太の目を覚ませたい、それだけである。

愛は何度も止めたが、それでも乗りたいという熱意に負けて仕方なしに許可をしたのだ。

その代り、燿子は安芸司令部に残留させた。

合図を愛に送るためであるが、燿子も狙われているうちの一人なのだ。

漆黒の化物、クラリーン艦隊が押し寄せてきた。

すぐさま、基地航空隊がスクランブルを掛けて先制攻撃を叩き込む。

今度のクラリーンは今までと違い、室戸鎮守府所属の航空隊にも対空攻撃を叩き込む。

それを見て翼は確信した。健太は愛以外を全て敵と認識したと。

『こちらフォーゲル、リーヴェ、作戦成功だよ。奴さん、囚われてる』笹野容疑者』以外、敵だと思ってる』

「こちらリーヴェ、了解！」

通信には変わりに恵奈が出る。妖精化した通信ができるように明石に密かに頼んでおいたのだ。

愛は影武者役で、変装までしている。今作戦の意図を健太に気づかれるわけにはいかないのだ。

土佐鎮守府港湾内ではワラワラと押し寄せるクラーリン型深海棲艦をクロスファイアで仕留めながら航空攻撃で数を減らしている。

突破されたクラーリンは坂本命名の『大海援隊』の連合部隊で食い止める。

連装砲ちゃんが初めて実戦に投入された戦いである。

クラーリンと伴って飛んできたデスペラン基地航空隊は

艦娘の対空砲や、艦載機、基地航空隊、連装砲ちゃんの30ミリ連装ガトリング砲で航空部隊を叩き落とすし、

郷里二佐は羽佐間准将補より届けられた海上スーツアーマーで艦娘のように海に出てバツバツサとクラーリンを超大型トマホークでなぎ倒していく。

艦娘達は一隻つつ仮眠と補給を行いながら無限に迫ってくる“無敵艦隊”クラーリンの数を減らすのに専念している。

深い深い縦深陣を取ってクロスファイアポイントに誘い込んで袋たたきにする。

基本的なリーヴェサーカスを連合艦隊で行っている。

戦闘開始か10時間ほど経過していた。

日が暮れだした頃、坂本は『笹野愛はここにはいない！』と全周波通信で呼びかけた。

クラーリンやデスペラン基地航空隊は攻撃を中止する動きを見せたためそのスキを見逃さなかったビスマルクは一気に包囲状態においた。

クラーリン自体は目的以外の行動はできないため、命令が一時止まっている今。包囲されたら最後、海の藻屑となる外無かった。

この戦いにおいて、艦娘の轟沈はなく、陸上での死者も十数人である。

後退して行ったクラーリンを追撃しながら愛は艦娘と合流する。

基地航空隊第二中隊が残りのクラーリンや基地航空隊の始末をする中、航続距離の長い第一中隊は艦娘達のエスコートに入る。

そして、愛も、指揮艦を笠原三尉の操縦で動かして、艦娘に合流した。

『デスペラン自体日本近海に来てるかもね』

という、翼の予想通り、デスペランは日本近海にまでやってきていた。

基地航空隊は航続距離が長くない、翼は航空隊としてのカンで確信していたのだ。

「愛ちゃん、燿子……敵を討つたらずぐ助けに行くよ、裏切り者のみんなを皆殺しにしてね」

デスペランの司令官席に座っている深海棲艦化した健太は暗い笑みを浮かべていた。

その傍らでは深海棲艦化した駆逐艦娘が悲しそうな顔をしていた。

「さあ、デスペランをお休みさせようか……」

「ケンタ、テキ、キタ……」

深海棲艦駆逐艦娘が指をさすと艦娘部隊が撤退するクラーリンを艦娘部隊が追いかけてきた。ビスマルクを旗艦としたリーヴェエサーカスの一団である。

土佐の艦娘達は念のために残っていたのだ。

「くそっ、裏切り者め！全員海の底に沈めてやる！砲撃用意！艦載機発進準備！リーヴェエサーカス開始！」

ぎりぎり顔と顔を怒りに歪ませると立ち上がりモニタに浮かび上がるビスマルクらの顔を睨んでいた

「まずいわね、これは……」

ビスマルクは相手がピンポイントによるクロスファイアを狙っていることに気づいた。

こちららも、リーヴェサーカスの陣形のままにらみ合いが続く。航空戦は関係なしに続いたため、空では機関砲の撃ち合いが繰り広げられている。

愛は指揮艦で指揮命令プロトコルを使って戦術を組み立てていた。非・強制のプロトコルは艦娘達に、こういう動きをしなさい、と指示をするだけが可能なのだ

その応用で、文字を艦娘に送ることが出来る。

これで愛は喋らずに指揮命令を行える。

相手がコの字型で要塞を背に展開している。

デスペラン捕捉作戦は成功したものの、ここから撤退するのは容易なことではない。

クラーリン艦隊の追撃を振り切るためには一戦して相手の出方を挫くよりほかないのだ。

それに、デスペラン要塞は戦力未知数である。

そして、仕掛けてきたのは敵の方からだった。

陣形を密集陣形にして突っ込んでんできたのだ。

「一点突破ね！どうするの!?!」

『トツパサレタラハサマレル』

「了解、こちららも密集隊形に……」

包围をやめて密集隊形にした瞬間、クラーリンの動きが変わった。

再び鶴翼体型を取ったのだ。

「しまっ!!!」

ビスマルクはそれこそ敵の仕掛けた作戦だった。

フェイントを掛ける健太発案の『リーヴェサーカス・ファイア』

「しまったー!」

愛はつい口にしてしまった。

リングが鈍く光る……。すると健太の声が聞こえてくる。

みんなに聞こえてくるが他の人間の声は届きそうもないと不思議とみんな確信していた。

『君も裏切ったんだね、愛ちゃん……』

「違うよ！帰ってきて!!」



『駄目だね……それより、愛ちゃん、こっちにおいでよ、こっちは……寂しいよ』

「つつっ!!!」

『待っててね、愛ちゃんに綺麗なサーカスを見せてあげるから』

ビスマルクの艦隊運用を上を行った展開でビスマルクたちはクロスファイアポイントに押し込まれていた。

無慈悲にクラリーンや要塞が砲撃を開始する。

砲撃の雨霰が艦娘達に襲いかかる。

『ぐうっ!!!』

「ビスマルク！ 損傷具合は!?」

「私・アイオワはまだ大丈夫よ、鳳翔・伊勢が小破、大井・北上が大破  
暁が兵装破壊……ヤバイわ」

兵装破壊とは轟沈寸前のことである。

「撤退しましょう!」

『無理よ!ここは私が残るからアイオワを連れて逃げて!』

「何をバカなことを言ってるの!」

『殿で敵を引きつける役目は必要よ……提督だってわかってるはずよ』

「……………」

『そのお役目、私が行いましょう』

通信が入ってくると、ル級FSの大軍と戦艦水鬼を従えた深海提督  
ハーフェンが海を滑って救援に駆けつけてきたのだ。

『ちっ、深海棲艦が!何で人間なんかに味方するんだ!』

苛立ちを隠せない健太の声が聞こえる。

ル級艦隊が一気に艦娘達の前に割り込むと集中砲火をまともに喰  
らいはじめ、次々と沈んでいく。

その間に戦艦水鬼が指揮艦に横付けする。

「テイトクヲタノム ワタシモシンガリスル」

「死なないで、水鬼」

指揮艦に降ろされたハーフェンは心配そうな顔をして戦艦水鬼を

見上げると水鬼は笑顔を浮かべて頭を撫でる。

「ハーフェン、指揮はこちらで行います。いいですね」

愛の言葉にコクリと頷くと、戦艦水鬼も戦場へ急行する。

「ビスマルク、そつちに戦艦水鬼が向かいました。敵は極端な鶴翼陣形を取っているのです、ただ後ろに下がれば敵的のです。ですので、大破艦を内側にした密集輪形陣を取って敵の最も薄い部分に集中砲火、一点突破を図ります。急いで！」

愛がビスマルクに指示を下すとコクリとハーフェンも頷いた。

恵奈カルテットはそんな様子を心配そうに見つめている。

『了解よ！』

「シンガリハ ワタシ スル オマエ トツパ イケ ルキユウ ツレテイケ」

「了解したわ。申し訳ないけどル級も外側に配置させてもらうわ」

『ワカッタ』

ル級たちが密集輪形陣の外側に配置し始めると、ビスマルクは手を上げて敵右翼の最も薄いクラールンに一点突破を図る。

攻撃力と防御力の厚いル級FSが外にいるお陰で、暁などは艦砲から守られる。どんどん砲火・魚雷を敵全面に打ち込んでいく。

先頭のビスマルクが至近距離での魚雷を撃ち込んだ瞬間、一瞬だけ敵の陣形に穴を開けることが出来た。

「突破!!戦艦水鬼もついてきてー！」

ビスマルクの叫びに、戦艦水鬼は悲しそうな笑みを浮かべた。

「イマワタシウゴクト オマエタチ クロスファイア ウゴケナイ」

「私が戻るわ!一緒に!」

「ソナナコト ムリ オマエガ イチバンワカッテル」

「つ……突破継続、そのまま……撤退よ……」

唇から血が出るくらいに噛み締めながら涙をこぼし命令を伝える。

戦艦水鬼がじわじわと廻り殺しに遭うように沈んでいくのを尻目にビスマルクたちは敵陣を突破し、要塞からの砲撃に晒されながらもル級を数隻犠牲の元要塞からの離脱に成功していた。

「タノシカッタ アリガトウ ソシテサヨナラ ミナ……」

最後の言葉を口にする前に、要塞砲で爆発しながら海へと沈んでいった。

それと同時に後退を始めた指揮艦ではハーフェンが必死に叫んでいた。

「待って！水鬼!!!逃げて!!!死なないで!!!ずっと一緒だったじゃない!!!」

「ハーフェン！どこに行こうとしてるんですか！」

海を降りようとするハーフェンを羽交い締めにする愛。

「リーヴェー！水鬼を助けてください！」

「もうムリです！水鬼は……自分から殿になったんです……」

「うう……うわああああ!!!」

ハーフェンの慟哭が夜の海に響き渡った……。

ビスマルクがル級の残り8隻と共に指揮艦に合流した時には、ハーフェンはぺたんこ座り込んで泣き続けていた。

それを愛が優しく抱き寄せて頭を撫でていた。

「提督……艦娘轟沈なし、ル級轟沈16……戦艦水鬼……未帰還」

ビスマルクも涙を流しながら水上から敬礼してデッキに居る二人に報告する。

敢えて、『轟沈』という言葉を避けたビスマルクだったが、再びハー

フェンの嘆きに近い慟哭が上がると

艦娘達も涙を零し始める。

深海棲艦だからとか、艦娘だからとか関係なかった。

大事な人が死んだのだ……。

「う……う……うわああああ!!!」

愛もハーフェンを抱き寄せて慟哭の声を上げ始めた。

笠原三尉もカルテットも涙が止まらなかった。

それでも、今この場に留まったら戦艦水鬼の犠牲が無駄になる。

ビスマルクは涙を零しながら

「撤収しましょう、笠原三尉」

「……はい」

葬列と言ってもいい艦娘と深海棲艦の列は室戸鎮守府に向かって行った……。

泣き疲れて眠ってしまったハーフェンを自分の官舎の執務室に寝かせると

ル級3隻を彼女のお守りとして側にいさせた。

それ以外の深海棲艦と艦娘達は執務室にいた。

「私のせいよ。私がもう少し艦隊運用が上手ければ……」

自らを責めるビスマルクをル級の一人が優しく抱きしめる

「ソレチガウ ダレデモ ムリダツタ スイキイガイ スグニシズン  
デタ」

「深海棲艦と手を取りあえた、嬉しいことなのにこんなに sorro  
wful なことはないわ」

「ワタシモ カナシイ」

アイオワは沈痛な面持ちで壁にもたれかかる。

「私のために……ごめんなさい」

「オマエ モロイ ワタシ カタイ テキザイテキシヨ」

鳳翔がかばって大破したル級に高速修復材を染み込ませたガーゼを傷口に当てて包帯を巻いている。

「こんな不景気な顔をするために出撃したんじゃないのよ……」

「そうです、健太は何を考えてるの！」

「大井つち、司令官のことも考えてあげなよ」

「オオイ リーヴェテイトクモ カナシイ ワカツテアゲル」

伊勢が怒りを噛み殺し、健太への怒りが収まらない大井、そして北上とル級がそれを諫めると申し訳なさそうに大井は頭を下げる。

「申し訳ありません」

「いいえ、健太は何があつてあのようになつてしまったか判りませんが、デスペランを止めねばなりませんね。まずはそれが第一です。た

だ、デスペランの位置は軍事衛星で補足しました。今は沖に出てこつちへは来ない状況です。しかし痛いのは、未完成のフィードが完成されたことですね」

指揮艦席の背もたれに身体をもたれさせながらビスマルクを見ると悔しそうに頷く。

「正直、健太を舐めてかかっていました。健太は私より先に高菜二佐の弟子で、私の一番側でサーカスを見ていたことを忘れていました。正直今の私では勝てる見込みは方に一つありません」

そんな暗い雰囲気を漂わせた司令室にサーカス団の幕僚たちが帰ってきた。

大塚一尉、小杉一尉、岩崎二尉である。

深海棲艦達がいるのに驚きを隠せないでいたが、愛の幕僚である。順応力は高い。

「艦娘と深海棲艦の共闘とは歴史的ですね……良い歴史になればよろしかったが」

戦艦水鬼轟沈の一報を聞いている大塚一尉も戦艦水鬼への哀悼を込めて言葉にする。

「ですな」

「海援隊で戦死者も出た。我々は重傷者だけだったが、犠牲も大きい戦いだった」

岩崎二尉と小杉一尉もそれに続く。

「そうですね……。方向転換です。難攻不落の要塞はまともな方法では落とせません、クラリーンに関しては衛星監視で先に対策を打てるようになりました。デスペランは様子見です。今は、健太を説得することも、倒すことも出来ません。差し当たりル級の皆さん含めて順次入渠してください。当面の指揮は私が取ります」

「ワタシたちハ ジカンガタテナオル アトマワシデイイ。サシアタリ リーヴエイトクニ シタガウ」

ル級のリーダー役である改FSが入渠をやりわりと謝絶しながら指揮下に入ることを了承する。

「今日のところはお疲れ様でした。皆さんゆっくり休んでください。」

私も……疲れました」

そう言うと、自身は司令室の扉をあけて中に引っ込んでいく。

艦娘達はドッグにル級と向かう。

幕僚たちはそれを見送ってから官舎へと戻っていく。

「リーヴェテイトク テイトクメヲサマシタ」

官舎に入るとお付きのル級が敬礼して出迎える。

それに答礼すると、共にベッドルームに入る。

ベッドルームにはル級二隻が壁際に立っていてハーフエンがベッドに腰掛けている。

「お目覚めになりましたか？」

愛が声を掛けると、青い瞳を真っ赤に腫らしたハーフエンが頷く。

「とつても大事な……方だったんですね」

そう言うと、隣に腰掛ける。

「はい……私がこの世界にやってきた時、初めてであったのが彼女でした」

深海棲艦としてこの世界にやってきたハーフエンは戦艦水鬼と出会い、行動を常にもにしていた。

そして、北日本ですつとジレーネ化した深海棲艦と戦い続けていたのだ。

「ジレーネとは一体何者なんですか？」

「……判りません。量産型の桂馬 香車 歩兵 飛車 角行 銀将

金将…… それを指揮するそして玉将そこまでしか解っていません、彼らは突然現れました。アイアンボトムサウンドから」

アイアンボトムサウンドと云うキーワードから愛は考える仕草をして……

「……では、やはりアイアンボトムサウンドの第二次世界大戦の日米艦艇の負の意思……」

「と云う仮説も成り立つでしょう。姿形は艦娘と同じ人間型。制服は旧日本軍の制服を身に着け、歩兵は駆逐艦タイプ。香車は高速駆逐

艦 桂馬は重巡 飛車・角は空母 銀将は戦艦 金将は雷装戦艦の艤装を身に付けていました。将棋の形に例えたのも、桂馬 香車 歩兵 銀将は成れば雷装戦艦に。飛車角は成れば雷装航空戦艦に化ける特性から、『彼』が名付けました」

その仮説にハーフェンはうつむいたまま明言を避けた。それは判りません、と言えない彼女なりの言葉だった。

「彼、とは大貫悟ですね」

「……はい」

「彼と私達は壮大なマッチポンプを仕掛けました。この世界で艦娘と深海棲艦が戦争を行わせている中で、ジレーネをあぶり出し、一緒にこの世界にやってきた リーヴェ フェーゲル そして電 薄雲を探しながら……ジレーネの玉を潰せるのは『別の理の世界から来た』二人にしか不可能ですが、用心深いジレーネは二人がジレーネの存在に気づいたら姿を見せないでしょう。それまでは宮戸島で遊んでいてもらいたいのです」

静かに語るハーフェンにようやく自分が提督に要請されたのか、そして高菜二佐が宮戸島の英雄になったのかがわかった。

「宮戸島もマッチポンプだったんですね」

「はい、高菜二佐は聞いたら呆れるか怒るかでしょうけどね」

「師匠ならこう言うでしょう。『余計なことをしないでもらいたいのだ』とね」

「はい……」

肩をすくめる愛にようやく悲しみの顔が薄れたハーフェン。

「水鬼さんの代わりではありませんが、今日は一緒に寝ますよ」

「……ありがとう。リーヴェ、この寂しさを埋めてください……」

「はい……」

お付きのル級が気を利かせて退出する中、二人の影が一つになった。

「結局、翼さんの予想は大体あたってましたよ。」

「だろっねえ」

「フォーゲルがここまで読んでいたとは……」

翌朝学校を休むと、司令官私室で翼を交えて密談をしていた。

「ジレーネを引きずり出すにはどうすればいいんでしょうね」

「そこを色々調べていたんですが……」

「やつぱり、デスペランが必要かあ……」

ジレーネをどう引きずり出すか考えている二人の提督に、翼は頭をかきながら答える。

「ところで、ハーフェン派は大丈夫なの？」

「はい、今は北方<sup>ほつ</sup>棲姫<sup>ほ</sup>ちゃん<sup>ほ</sup>が全体の指揮を取ってミッドウエー当たりジレーネ派とで睨み合ってますよ。ジレーネ派深海棲艦は、事実上ほつぽ軍、デスペラン、日本反艦娘派、それに日本艦娘共存派と四正面作戦を展開しているわけです。ほつぽ軍はゆるゆると東北以北・関東でゆるつと戦争をしていますが、いくらでも補充できる量産型しか出してません。一度謎の砲撃で姫をやられましたか……」

「……………」

ああ、あの事件だなと推測しているが口にしない愛。  
「デスペランを後回しにして、ジレーネを引きずり出すか、デスペランを占領してジレーネに攻撃を加えるか……。悩ましいですね」

愛は紅茶を飲みながらため息を付く。ブランドーはもちろん入っていない。

「とりあえずデスペランは先読みできるから航空隊がなんとかする。問題はジレーネよ。どうやって引きずり出せば……」

翼の口にしたことは二人も十分わかっていた。

「仕方ありませんね。神谷のようなことを私自ら演じましょう。南方へとアリュウシヤンへの総攻撃案を政治ルートで提出します」

「政治ルート……？」

「第13艦隊に居る大淀の夫は防衛大臣です、鳳翔を通じて大淀さんに防衛大臣に作戦案を見てもらいましょう。これで様子を見ます。通れば私達は楽ができます。総攻撃は大規模な陽動ですから。私達は参加しません、命令を無視します、もうタッチダウンするためならサーカス団そのものが日本の敵でも構いません。ジレーネ派深海棲



艦と戦ってもらって、目をひきつけているスキにタッチダウンして引きずり出します。肝心の東北・北海道艦隊はアリュウシヤンでほっぽ軍と茶番をしてもらいましょう。」

「あたしはいいと思う」

「……それが一番早道だと思います。ただ通るかどうかは……」

「大貫悟次第ですね」

三人は顔を見合わせてニヤリと笑った。

## 健太の闇と足立の真実

第1次デスペラン攻防戦は大敗北に終わった

デスペランの位置を軍事衛星にマーキングさせるといふその戦略的目的は達成したものの、

戦術的には大敗北を喫した。

リーヴェサーカス・ファイアを先に完成されてしまい、ビスマルクの艦隊運用の先をいかれた、艦隊運動で全滅もあり得た。

すんでのところを深海提督“ハーフェン”たちの救援によって救われたが、

何より、その彼女の側近中の側近だった戦艦水鬼を喪う結果となつてしまった……。

笹野愛はリーヴェサーカス団に、『自由裁量』で正式にル級を組み込んだ。

ビスマルクを旗艦に伊勢と大井・ル級FS3隻 第1艦隊

アイオワとを旗艦に鳳翔・北上・ル級FS3隻 第2艦隊

そして改ル級FS・ル級FS・暁の補助艦隊である 第3艦隊

クラリーンの攻撃は依然続いている。

だが、軍事衛星からの監視で出撃を先に察知できるため、どこへ向けての攻撃か分る点こちらが有利である。

やはり普通寺駐屯地を狙っているようだ。

クラリーンの攻撃は再三土佐鎮守府艦隊とリーヴェ・サーカス団の出撃で阻んでいる。

陸が上がったクラリーンは海援隊・薔薇の騎士団によって阻む二段階方式だ。

こちらの移動砲台連装砲ちゃんも、機動的に海岸防衛を行つてい

る。  
激発した提督たちはデスペランへの攻撃を行うが、

クラリーンは『提督』のコントロール下にあるときには恐ろしく有

機的な艦隊運用を行い

激発して突っ込んできた艦隊を縦深陣に引き込んでから、丁寧にすりつぶすように海の藻屑にしていた。

第二・三次デスペラン攻防戦だけで20隻以上の艦娘が犠牲になってしまった。

そのため、坂本陸軍准将補の名前で「デスペランへの先制攻撃厳禁」命令が通達された。

「防ぐだけでいいんですか!？」

と抗議する提督もいたが、

「あほかい！難攻不落の要塞をまともにやって落とせるわけがないぜよ！」

と抗議しに来る提督を都度追い払っていた。

その頃、リーヴェ・サーカス団では作戦会議が開かれていた。

全国の艦隊を陽動にして南方を進撃してジレーネ深海棲艦の数を減らしながら、

サーカス団でミッドウエーヘタッチダウンする作戦である。

その作戦案を提示した時、大塚一尉が反対した

「小官は反対であります」

「どうしてですか？」

「この作戦では四国防衛がおぼつかなくなります。我々には敵としてデスペランがいることを忘れないでいただきたい」

岩崎二尉も

「小官も反対ですなあ。これだと、提督一人悪者になってしまう。ミッドウエーへのタッチダウンはもうちょっと違う方法を考えましょう。急げば回れと云う格言もありましょうしなあ」

と温かい言葉で大塚二尉に賛同する。

その二人の言葉に、愛は腕を組んで考えながら会議室の対面に座っている顔を見る。

「客員提督のお考えは？」

ゲストアドミラル

対面居座っていた深海棲艦・ハーフェンが立ち上がって口を開く。  
「幕僚の皆さんが揃って反対されているのであればお止めになたほうがよろしいかと思えます」

そう言ってから幕僚達に頭を下げて腰を下ろす。

「分かりました。この案は却下にしましょう」

愛はそう言ってから大きなため息を吐いた。

結局はこの会議ではなんの決定を見られぬまま登校時間になっていった。

「燿子、今日は学校を休んでちょうだい」

「えっ?」

「ちよつとお話があるんだけど」

資料の片付けをしている燿子を呼び止めると司令官私室に先に入る。

燿子は首を傾げながら愛のあとをついていった。

司令官私室に入ると、鍵を締めてもらって奥のベッドルームに向かっっていく。

燿子は訝しげにその後をついていく。

燿子がベッドルームに入ると、ダブルのベッドに横たわってる愛の姿があつた。

「燿子、隣座りなよ」

「う、うん……………」

それだけ答えると愛の隣に座った

「ねそべってもいいよ」

「うん……………」

燿子には愛の意図が分からなかったが愛は天井を見たまま

「健太と燿子に何があつたの?」

一番聞かれたくない質問だった。

「話さないと、だめ?」

「話せないことなのは十分理解している、だから」

愛は燿子の目をじーつと見つめた

「……愛……健太と……私……」

燿子は話し始めた。

健太は刑務官に暴行を受けてなにか知っているか問い質されたのだ。

事前に調べた愛のプライベートを暴露して精神的に揺さぶりをかけていた

それでも健太は何も知らなかったから何も答えなかった。

次に燿子が調べられた、

父親からなにか聞いているんだろうと、

まず、衣類を脱がされた。脱がされた衣類は下着までに及び、何か隠していないか身体検査を受けた。

そう犯罪者かのように膣や肛門まで丹念に調べられた……健太の前で。

そして、燿子は初めてを奪われた。

「……無理やり……健太君とさせられたの……」

「つつっ！」

愛は絶句した、それと同時に怒りが沸き起こっていた。

「ゴメンね……愛……ごめんね……」

そんな燿子を抱き寄せて頭を撫でる。

「その後は、私が大人たちに犯される様を見せつけられてたら……突然深海棲艦化して……牢屋をこじ開けて……」

「……………」

「お前ら大人たちみんなぶっ殺してやるって」

愛は優しく燿子を抱きしめたまま何も言わない。

「大石くんはね……お引越してきたの」

ポツリと呟くように語り始めた。

大石健太は別の学校に通っていた。そこでは母親の年齢が発端でひどいいじめを受けていた。

物を隠されるなんて当たり前、服を脱がされたりするのも、しよつちゆうだった。

もう一人いじめられてた女の子がいた、その事無理やり行為に及ば

されたのだ。

そして、健太がその子をレイプしたとまことしやかに喧伝した。

健太はその街にはいられなくなった。

そこで泰子の実家である宮戸島にやってきた。

それでも健太はいじめられていたが、今ではその子と仲良くなっている。

「健太君と初めてした日ね、初めてじゃなくてごめんと涙ながらに語ってくれたんだ……押し倒したら異常に怯えだしたから、おかしいなって思ってた」

「そっか……」

「健太君はずっと心に闇を抱えてたんだね……私じゃ不足だったのかなあ」

寂しそうに言う愛に耀子は首を振る

「足らなかったら私も居るし、みんなも居るわよ」

「……ありがとう」

今度は耀子が頭を撫でる番だ。

優しく撫でて……優しく抱きしめて……

「それでトラウマが再燃して更に……何もかも絶望しちゃったんだ、健太は……」

「……」

「でも健太は優しいからいつかわかってくれるよ……ねえ、耀子……」

「なあに？」

「今寂しいよ……埋めてくれる……？」

「うん……」

お互い抱きしめあって……

その頃デスペラン内部……

謎の旧日本軍の元帥階級の制服を身にまとった女性がだだっ広いデスペラン司令室にやってきていた。

「お初にお目にかかります、大石健太様」

恭しく礼をするその女性に指揮座についたままの健太は何も言わ

ずに見下ろす。

「私は、<sup>わたくし</sup>そうですわね、『玉将』とお呼びいただければ結構ですわ」

「……………デスペランのデータベースに載っていた。ジレーネの首魁が何の用だ」

その言葉にうふふつと笑いを浮かべて楽しそうにする玉将

「昔々あるところに、艦娘と深海棲艦がいました、両者は表裏一体、沈んだ海の思いから生まれました。人間たちはその艦娘を研究し、兵器として使うようになりました。人間たちは艦娘も、深海棲艦も居なくなるように戦争を仕向けました。やがて、深海棲艦と艦娘はその世界から消えてしまいました、めでたしめでたし」

そういうと、すつと表情を消す。

「そんなある日、人々はそんな事も忘れて過ちを繰り返そうとしていました。火を騙り、空を穢し、地を屠り、水を腐す、そんな人類はちよつと居なくなつて地球はお休みしたいと考えるようになりました。それが我々ジレーネです」

「人類殲滅装置……………」

「はい、人類以外の生物にはなるだけ迷惑をかけずに殺していきます」

「傲慢だな、神になつた気分で居るのか？」

「そつくりそのままお返ししますが、<sup>わたくし</sup>私は神そのものですわ」

「神そのものか……………」

健太は少し考えるように腕を組む。

「僕は、四国の丸亀つてところに生まれたんだ。母が僕を生んだ時15……………それが原因でよくいじめられたよ。今でも鮮明に思い出される。あの悪夢がね……………もう一人いじめられてた子がいたんだ。『垂衣』《アイ》ちゃんつて子。二人して服を脱がされたり、物を隠されたり、ある日彼奴等は僕たちに無理やりセックスを強要したんだ」

「……………」

「その子はその後、死んじゃつたよ。首を吊つてね。僕はその犯人として学校に居られなくなった。だから母さんの実家である宮戸島に逃げてきたんだ。そこでもいじめられた……………高菜先生が居なかつたら僕は死んでたかもしれない」

「……お辛かったですね」

玉将は哀れみを向ける笑みを浮かべながら指揮座に座っている健太を見上げる。

「それで、今度は燿子とだ。こんな連中なら自衛隊なんて要らない、みんな居なくなればいいんだ、愛ちゃんや燿子まで裏切って……」

「いいえ、愛ちゃんに背を向けたのは貴方様ですよ、うふふ」

「何っ」

不愉快な顔を貼り付けた健太に笑いながら話題を変える玉将

「ところで、デスペランに私達が『教化』した深海棲艦の駐留を許可いただけですしょうか」

「デスペランには無限にも居るクラリーリンや各種砲台がある。お前たちの力を借りるなんて必要はない」

「ですが、貴方の愛さんと燿子さんを手中にしたいなら万全を期しませんと、ただでさえ軍事衛星で監視されていますのに……」

「だろっうな、貴女がこの要塞の深海出入り口からやってきた理由がよくわかったよ。ジレーネは恐れているんだろっう艦娘を、人間を」

「うふふ、あはははは。そのとおりですわ。正確には『諦めない人間と艦娘』に」

「……………それで、僕に要求しているのは深海棲艦の駐留だけかい？

玉将

「はい、そして指揮権もお譲りします。王たる私がここにいることに気づいてもらうと困る子たちが居るんです」

「……………」

「まずは、四国を焼け野原にしましょう。みくんな人間を殺して、そして深海棲艦の恨みで徹底抗戦論が巻き起こるでしょう。そうなれば、この茶番を仕組んだ人間の作戦は水泡に帰します。その上で愛さんと燿子さんを頂いてくればいいでしょう。ペットにするもよし、死体として愛でるのもよし、生殺与奪は想いのまま」

「黙れ!!」

立ち上がり健太は玉将を睨みつけた。

「っー」



「愛ちゃんと燿子ちゃんを愚弄するな。なんならデスペランでジレーネと直接戦争をしてもいいんだぞ」

「申し訳ございません。口が過ぎました。お許しください」

恭しく頭を下げる玉将に、健太も座り直し大きなため息を吐いた  
「わかった、ジレーネ派深海棲艦を預かる」

「有難うございます。健太様」

こうして、デスペランはジレーネ派の深海棲艦の拠点となった  
その動きは当然ながら人間側にもキャッチされていた。

「どうも、深海棲艦がデスペランに出入りしているようぜよ」

坂本准将補が郷里二佐、葵と花梨を伴いその情報を持ってきたのは  
それから数日後だった。

「どうやら健太さんはジレーネと手をお組みになったようですね」

皮肉めいて言うハーフェンに愛は腕を組んで考え込んでいた。

左手小指の指輪はまだ輝いて居るが少しづつ色が鈍くなってきた  
いる。

「坂本准将補、貴方の権限で四国の艦娘を全て四国南岸に結集でき  
ますか？」

「大貫総監から貰った『臨時司令長官』の権限を使えば不可能じゃない  
が」

「健太の次の一手は総攻撃です。四国を焼き払って人間と深海棲艦を  
不倶戴天の敵にしてしまふんです。そうしてから、艦娘は深海棲艦と  
表裏一体と公表すれば民衆の憎悪は全て艦娘と提督に向かいます。  
そうなったら……」

そう言うとき愛は坂本を見る。

「おしまいぜよ」

坂本は大きなため息を吐いて見る。

「私はその間に艦隊を率いて、敵陣を突破。各地で燃料を調達しながら  
アイアンボトムサウンドへ向かいます。明石のブースターを使う  
ことも計算に入れて、2週間、現有戦力で耐えきってください」

「わかったぜよ。最悪近畿や九州の艦娘を増援に呼んでも現状を死

守するぜよ」

その言葉に、郷里や花梨、葵もこくりと頷いて

大塚一尉、小杉一尉、岩崎二尉、それに翼、笠原三尉、燿子も頷く。「そこで、うちの幕僚についてですが、ハーフェン、燿子は連れて行きます。笠原三尉には指揮艦の操縦を」

そう言つて三人を見ると、三人共敬礼する。

「小杉一尉には薔薇の騎士機動隊の指揮のために残留を」

「かしこまりました」

小杉一尉は敢えて心臓を捧げるポーズを取る。

「司令部からもう一人連れていきたいんですが」

その言葉に大塚一尉がヒゲを弄りながら

「常識豊かな小官が」

「残つてお目付け役をしていただくということで、司令部からは小官が同行いたします」

言い終わるのを遮つて岩崎二尉が同行を申し出ると愛は頷くという形で従うと

一同はどつと笑う。

「艦娘・深海棲艦は全員連れて行きます。それと私は生きて帰るつもりですが、相手にも都合もありますから、次のサーカス団長を妖精の見える大垣翼一尉に指名します」

「あちゃあ、バレてたか……」

「というわけで、大垣一尉も残留してもらいます。そのチョーカーは自分の意志で使えるようになってはいるはずですが、基地航空隊をお願いします」

「で、私達は？」

何故かこの場にいる恵奈カルテットである。

「連れて行くわけじゃないじゃないですか。1組のみんなと最悪避難してください」

『はいー』

元気よく手を挙げる恵奈カルテット。

そんな様子を見ながら坂本が笑みを浮かべる。

「剛、お前さんは花梨を連れて岩沼に行け」

「なんですと!?!」

驚愕した顔で坂本を見返した郷里三佐だが、坂本は笑みを浮かべたままである、

「海援隊はワシが直々に指揮をするきに。おんしは花梨を連れて岩沼に行け、命令ぜよ」

「しかし、小官がいれば戦力としてはうなぎ上り、安全な場所より戦場となるこちらで……」

その言葉を愛が遮った。

「ところが、安全な場所にはならないんです。花梨には重要な任務を与えます。今の段階で、人材を東北に動かした場合、反艦娘派によって消されるでしょう。郷里三佐にはその護衛役をお願いします」

「むう……」

「私達の敵はGHQ体制から脈々と受け継がれてきた日本の国体そのものとアイアンボトムサウンドのジレーネです。もう、終わりにしましょう、戦後を」

顔を上げてみんなを見回す愛。

「高菜二佐にお伝え下さい。「すべての準備ができた時、電と薄雲にこう語ってください『こデーゼン・愛リーヴェ・世デア・界ウエルト』と」

「………了解しました、その後は父に保護していただければ良いのですね」

「はい、皆さんによろしくお伝え下さい。あと、母に『ありがとう』と伝えてください」

その言葉だけ花梨は強い瞳で見返すと首を振った

「それはご自身でお伝え下さい。では早速移動を開始します」

「うむ、善は早ければ良い」

そう寄り添いながら去っていく二人を見ると、再び全員に向かい直す。

「さて、具体的な戦術ですが大貫さんに依頼した明石と建造に必要な資材が届き次第、建造し続けます。それで、捨て艦戦法で一挙に特攻させて穴を穿ちます。装備は、ブースター自爆装置」

その言葉に絶句したのは燿子だった

「あんた、艦娘をなんだと思ってるのよ！」

「よしなさい」

「STOP！燿子」

食ってかかろうとする燿子を止めたのは艦娘代表で出席していた  
ビスマルク・アイオワである。

「提督は、ハリボテ艦娘を作るというわけね」

「はい、艦娘の素体に魂を入れる前の状態。これなら道義的には大問題でも、深海棲艦化は避けられるでしょう。それを自爆させて次々と敵艦と相打ちの形で沈めていきます。底にできた穴で、私達は、基地航空隊の援護の元一点突破を凶って太平洋に脱出します。四国の艦娘の皆さんは文字通り、命をかけて四国の地を守っていただきます」

その言葉にハーフェンが説明を引き継ぐ

「引き継ぎますわね。アイアンボトムサウンド殴り込み艦隊は同地でアイオワの隠し装備『核弾頭』を使ってアイアンボトムサウンドに核攻撃を行います。これで、ジレーネの封印が解かれます、この時点で殴り込み艦隊は用済みです。ここで戦死してもよし。再び撤退戦をしてもよし」

その言葉に複雑な顔をする同行幕僚達。アイオワがバレちゃったかという顔をしている。

「うふふつ、では撤退戦をなさいませうか。敵の性質は深海棲艦と言うより艦娘に似ています。保護機能はあまりあてに出来るとは思わないほうがよろしいでしょう。そしてジレーネそのものが出てきた瞬間、私の予測ですが、深海棲艦の「教化」は解かれます。そうすれば厄介なのはクラリーンだけです。デスペラン要塞を押し戻すことは可能でしょう」

ハーフェンがそう語ると扉が開かれる。入ってきたのは明石である。

「明石です！大貫総監からのご指示で資材と大量のブースターをお持ちしました！大貫総監からの借金2500万円をチャラにしてくれ

ると言うので死ぬ気でやってきました」

「では、明石、魂を入れる前の素体艦娘に自爆ブースターを取り付けてください」

「了解です！」

その直後だった、艦娘通信が入った

『こちら暁よ、デスペランが動き出し出したわ！今までに見たことのないほどの大量の深海棲艦よ！ブースターで逃げるわ！』

全員が顔を見合わせた。

「さあ、作戦開始です」

そのころ東京で

「では、閣下はジレーネの開封と同時に、真実を国民にお話になるので  
すか？」

「うむ、その際、私は暗殺されるだろう。大本営の幕僚総監代行を貴官  
に委ねる」

話し合っていたのは黒幕たる二人の自衛官だった。

「そうすれば、深海棲艦と手を取り合うものも出るかもしれないなあ。  
下級の深海棲艦は仕方があるまい。トドや害獣の扱いをしてしまっ  
のは忍びないが……」

「そうですね……」

大貫がヒゲを弄りながら続ける。

「私には愛する人が居てな、その人間と共に逃げてきたのだよ。その  
愛する人はハーフェンと名をつけた。それぞれ相對する側の指導者  
となって永遠に続く茶番を続けて、ジレーネの出現をなんとしても阻  
止し続けて、じわりじわりと艦娘を社会に融合させて、何れは深海棲  
艦とも手を取り合える社会を夢想していた。だが、ジレーネのほうが  
上手だった。そこで、私は日本を東と西に分けた。関東以东を平穩な  
エリアにして、ハーフェンがそこで勢力を固めるのを待った。硫黄島  
要塞や硫黄島の悲劇は茶番を悟られないためのもだった。こうし  
て膠着状態になった深海棲艦を見かねたジレーネは深海棲艦の一部

をその勢力に取り込んで仕舞っていた。」

その言葉に足立将補は

「では何故、閣下は『必殺仕事人』なる毒を用いたのですかな？」

「!!」

大貫の目はまん丸く見開いていた。足立将補はしてやったりのよ  
うな顔をしている。

「伊達に捜査一筋数十年やっておりません。こうやって全体から見渡  
せるようになって統計上の不祥事を洗いざらい調べていたらその存  
在に気づいていたんです。原隊に何度戻そうが、何度逮捕しようが不  
起訴で、大貫閣下以外のルートで提督や警務隊員として舞い戻る事案  
が何度もあり、こうなったら確かに殺すほかはないでしょうなあ」

「……………」

「そして、笹野愛を提督に迎える口実として提督を意図的に不足状態  
に置いた。そして、笹野愛とハーフェンを会見させた。それを意図的  
に警務隊にリークしたのは貴方ですな？ それに、神谷をそそのか  
し、無謀な作戦案を政治ルートへ出したのは、防衛大臣の首をはねる  
ためだったのですな？」

「……………」

「閣下、小官をあまり舐めないでもらいたい。小官が何も知らずに閣  
下の招聘に応じて警務隊にやってきたわけではありません。実のと  
ころ、私は閣下の監視役として招かれたのです。ですが、私も色々な  
事象を調べていくうちに、なにか違和感を感じていました。戦力バラ  
ンスや、不祥事率、その他色々。疑惑が確信に変わったのは笹野愛を  
提督に迎えたことでした。貴方はなにか隠している。そして私は  
監視役として知っておきながら側においておられると。要するに私  
はダブルスパイだったわけですな」

ニヤリと足立が笑うと、大貫が大きなため息を吐いた。

「政府はやはり、艦娘の社会進出を恐れています。艦娘基本法が遅々  
として成立しないのは艦娘を滅ぼすため、ジレーネと云う存在は知っ  
ているのでしょうか。ですから、今室戸で行われているであろう作戦は  
邪魔はしないでしような。そうそう、大石健太について、一度自殺未

遂をしています。救われています。今回の深海棲艦化となにか関係があるのでしょうかねえ？」

「ふふふ。敢えてニーコメントと言っておこう」

お互い腹の探り合いである。

「それより私は腹の探り合いに飽きたよ。君の正直な気持ちを聞かせてもらいたい」

「私は人類が存続すればそれでよし、と考えておりますが。ジレーネに管理される社会は御免こうむりたいですな」

足立の正直な心情だろう。

「では、あともう少し短い間、君の力を借りることになる。よろしく頼む」

「かしこまりました。閣下」

二人はニヤツと笑って握手した。

ウウウウウウウウウウ!!!

四国全土にJアラートが鳴らされる中、四国の全鎮守府の艦娘達が四国南岸に集結していた。

そこには急遽ブースターでやってきた大和・大淀を擁する第13艦隊の姿もあつた。

遠くからやってくる深海棲艦の群れ……。

「いいー海2深海棲艦8よー」

ブースターで逃げながら敵の多さを物語る暁の言葉が全員に響き渡る。

ブースターを切り離して振り切った暁は待機中のリーヴェ・サーカス団に合流していた、

その様相は巨大な陣形だった四国そのものを包囲しようとしている鶴翼陣だった。

それが却って愛の作戦を容易にしようとしていった、

「特攻隊発信！」

物言わぬ自爆兵器たちが戦端を開いた。

同じ場所に過剰に特攻してくる爆弾を積んだ量産型艦娘とも言える存在にクラー林たちは対応できなかった。

そして、最後に出撃した特攻隊が発進した直後だった

「密集隊形維持、火力を集中！敵陣突破後追加ブースターで戦場離脱！」

密集で第二警戒航行序列で前方に火力を集中していく。笠原三尉の操縦する指揮艦も第3艦隊の護衛の元突進していく。

自爆特攻で木っ端微塵になった素体が浮かんでいく中、ビスマルクたちは砲雷撃を密集して打ち込み、薄くなった鶴翼陣に穴を開けていく。深海棲艦たちも打ち返していくが外側に配置しているル級FSがその攻撃を阻んでいく。

そして、陣形を突破した直後ビスマルクが手を上げてさつと前へおろした。

各艦娘のと指揮艦のブースターが点火すると一気にサーカス団は戦場を離脱した。

「さあ、戦闘開始ぜよ」

『オー!!!』

ここに、艦娘史上最大の戦役と呼ばれる『艦娘大戦』が始まった。

総司令官は坂本准将補、そして前線には『不敗の女神』大和が居る。

「さあ、抜錨します！」

「おー！」

艦娘達は次々とクラーリンやジレーネに教化された深海棲艦へと向かっていった。

「さあ、愛ちゃん……迎えに来たよ」

その戦場に愛はすでに居ないことを知らない健太は歪んだ顔をして戦況を見ている。

その側には悲しそうな顔の駆逐艦型深海棲艦・アイが傍らに居た……。



死闘くそれぞれの戦いく

「戦闘開始せよ！」

土佐鎮守府改め四国連合艦隊総本部の司令室で窓から港を見ながら無線機で告げた。

数的にはかなり不利な四国艦娘連合艦隊だったが、士気はすこぶる高かった、

あの伝説の『不敗の女神』超弩級戦艦大和が前線指揮官としてやってきたのだ。

第13艦隊と土佐鎮守府艦隊はそれぞれの艦隊に別れて坂本提督の指揮命令を伝える役目を担っている。

「さあさ、大海戦だよ!!オカワリはいっぱいあるからね！」

『はいっ!!』

川内が駆逐艦達水雷戦隊を率いていく

那珂ちゃんは中央でクロスファイアポイントを分析して

「そこだめ！」

「左翼はもつと前！」

「右翼下がって！囲まれちゃう！」

などと、大和の横で指揮命令を無線で中継する役である。

艦隊のセンターの役である。

この戦闘に参加しているのは水雷部隊だけではない。

航空隊のドッグファイトも行われていた。

今度はこちらが受けてである、基地航空隊は細かく出撃できる。

『ひゃっほうーどけどけコノヤロウバカヤロウ!』

無線からは第一航空中隊長の翼妖精さんの軽快な声が聞こえてくる。

そして第二中隊の中隊長は静かに対艦機関砲で戦艦を叩き落としながら、

後部座席の機銃手妖精さんがパラタタタと軽快に敵機を落とし  
ている。

空の魔王の活躍に艦娘達も負けてなるものか!と積極的に前に出

始める。

葛城・天城は低空で艦娘の援護爆撃を担当した、制空権はじわりじわりとこちらが取りつつある今、艦娘の轟沈者を出さないようにするのが土佐鎮守府の役目なのだ。

サラトガはもう少し前に出てF6F―5部隊を発進して要塞の頭を抑え始める。

要塞航空隊は爆撃機なども出撃しているため、遅い爆撃機に襲いかかるのだ。

デスペラン艦載機軍団はクラーリン級よりは地味だが、艦載数が膨大のため叩けるものは叩いておけという作戦なのだ。

リーヴェ・サーカス団の特攻作戦から始まった防衛戦は、艦娘達も順番で一旦下がり仮眠や休憩をしながらの戦闘である。

クラーリン級はともかく、ジレーネ教化深海棲艦は燃料切れになった瞬間艦娘の集中砲火を受けて沈んでいく。

明石は各鎮守府を飛び回り、沈んだ艦娘の再建造や高速修復材の配布を行いながら無限にも等しい敵との戦いで、有限に近い過娘たちの損耗に対応するために必死になっている。

突破されてしまった敵は2個連隊になった陸援隊・海援隊の出番である。

こちらは、坂本の盟友先輩の普通寺駐屯地で第19旅団長になっていた中岡慎之助准将が、残りの部隊を引き連れて指揮をしている。

「地上の敵は任せろ！明石開発の霊子弹頭をお見舞いしてくれる」

明石も工廠部で試作していた5.66ミリ霊子弹を全放出したのだ。

そのために一旦ケツコンカツコカリリングの制作と配布を中止してまでリングまで融かして霊子結晶弾を持ってきたのだ。

そして地上で特筆すべきは連装砲ちゃんである。

武器のデパートと化した連装砲ちゃんは海岸線を右往左往して上陸した敵を軽快なガトリング砲撃で木っ端微塵にしてい

それでも残った敵は、周囲の巻き添えを承知で51センチクラスター弾の出番である。

ズドーン！ズドーン！

クラスター団は空中で子弾になりバラバラと降り注ぐ。

もはや海岸の家屋は破壊するものと云う状態になっている。

「どうせ、保証は国がするー！」

中岡准将はそう言い放って躊躇なく部下には爆発物の使用も許可している。

爆発物それ自体ではダメージを与えられないが姿勢を悪化したり、動きを止めたり出来る。

そんな中、バイクの音が聞こえてくる。

鉄パイプを持った四国連合の皆さんである。

「おらおらあー！お国のために暴れっぞオラア!!」

『オラア!!』

鉄パイプを持ってクラリーンをボコボコに袋たたきに始める。

これというのも、抗争相手のチームがクラリーンの進路上に居て全滅してしまったため、

四国全部の暴走族、そして暴力団が立ち上がってしまったのだ。

特に、神戸に本拠地のある日本一の暴力団組織は警察の監視承知で兵隊を四国に送り込み始めた。

これも。四国の二次団体がクラリーンによって全滅した報復なのだ。

チャカは警察に摘発されるので、全員ドスを持つての参戦である。

「オラア！叔父貴の敵じゃあー！」

「コイツラみんなぶち殺したれ!!」

「ヤーさんなんかに負けるな!!俺達四国大連合の力見せてやれ!!」

「なんだと！極道が日本一ってところを見せてやる!!」

ヤクザの皆さんはどすをクラリーンの頭に刺したり、どこから持ち出したかわからない日本刀などで大暴れである。

それを監視しに来た公安や暴力団対策課の機動隊員もこうなったら戦闘に参加する他ない。

「警察がヤクザなんかに負けてたまるか！」

「お前らあとで銃刀法違反で逮捕だからな！」

「桜の代紋なめんじゃねえ!!」

彼らの武器は警棒である。盾で囲んで警棒で乱打しまくるのだ。水陸両用艦とはいえ、アドレナリンがドバドバ出て、死ぬのを恐れない連中に一体、また一体倒されていく。

暴走族は新しい戦術を編み出した。

バイクでダッシュしての鉄パイプリアットである。

クラリーンの首が吹っ飛んだが、当然バイクに乗ってたやつもタダでは済まない。

それに対抗して暴力団は防弾仕様の高級車でクラリーンを次々轢いていく。

理論上は、翼と同様人間の意志の籠もった近接攻撃扱いなのである。

それを見た小杉一尉は装甲車で特攻作戦を真似てみた。

装機装甲車の履帯にぐしゃぐしゃと押しつぶされていくのを見ると、車両攻撃が有効だと感じていた。

ともかく、正規兵だけではなく、暴走族の集団から。ヤクザの集まり。そして、警察官や消防隊などが戦場にやってきた。

医師などが自主的に駆けつけ、近くの病院が野戦病院と化していた。

医療者が集まる一方、戦闘員はどんどん四国に集結してきた。

九州からは日本一危険なヤクザと言われる集団が駆けつけ、次々と上陸した深海棲艦に襲いかかっていった。

「お前ら不正規兵ばかりに良いところを見せさせるな!!」

中岡准将の激が飛ぶ。

戦闘としては最早メチャクチャである。

指揮統率が全く取れなくなった状態で、陸上の暴れ者たちは上陸してくるクラリーンを殺しに立ち向かっていく。

地面には死んだ仲間たちが転がっており、それを片付けるのもおぼつかない状態である。

道路や地面はクラリーンの地や人間の血が混ざって塗装されており、

それをドーザー装備の連装砲ちゃんが機関砲をうちながらどけていく。

海上の艦娘達も、一隻、また一隻と沈みながらも襲来するクラーリンへ立ち向かう。

明石は各地に飛んでは足りないところに新造艦娘を投入しては装甲車に飛び乗って次の場所に向かう。

完全に捨て艦戦法である。

戦闘が始まってまる1日が経過した。

相手も一旦兵を引いてにらみ合いが始まる。

その間に、死体や救助不能の人たちを次々にトラックに搬入させながら、

ヤクザもんや暴走族を臨時の戦闘員として中岡准将は認めることにした。

指揮系統は建前上は自分だが

「もう、皆さんのご自由にしてください。但し死んでも責任は取りませんよ」

と有志の皆さん（武闘派）のフリーハンド裁量 即ち自由裁量で片付けた。

中岡はこの戦闘が終わったら引責辞任する覚悟で、霊子弹などをヤクザにも配って回らせた。

明石は「えっ、良いんですか？」とかなりドン引きした顔をしているが、

「私はもう知らん。これで四国の非戦闘員が守られるなら私の首など安いもんだ」

と、達観した目で答えていた。

この休息の間に、艦娘の数を揃え直した坂本提督は順次艦娘達に仮眠と食事を許可していた。

「しかし、このままでは消耗戦ですな」

参謀の大塚一尉がそれを告げると坂本は握り飯を食いながら

「まずいぜよ。早く笹野三佐たちがジレーネとやらを開封しないこと

には……」

「明石謹製のブースターでも数日はかかりますから……」

「今デスペランが仕掛けてこないってことは、再生産中ってことぜよ。或いは司令官が休息をとっているか……」

「いずれにせよ、こちらも再準備しなければ戦線が崩壊しますぞ」

「解つとるわい、大塚一尉はここじゃなくて西の方に行つて負傷した提督の支えに行つてくれ」

「承知いたしました」

大塚一尉が去ると、坂本提督と副官の葬だけになった。

「ぐっ、何だこの体たらくは」

仮眠を終えて司令室にやってきた健太はこの様子を見て顔を歪めていた。

「テキ チジョウニ イッパイ」

駆逐艦型深海棲艦・アイがその歪めた顔に怯えて答えると

健太はそのアイを優しく抱きしめる。

「大丈夫、もう死なせたりしないから」

このアイは沢山の駆逐艦の無念と、死んでしまった亜衣の無念が混ざり合わさって出来た存在だと健太は気づいていた。姿かたちが亜衣とそっくりだったからだ。

デスペランが迎え入れたのも、アイがハーフェンの留守のときに乗っ取つて迎え入れたのだ。

アイの頭を撫でると、再び航空機で敵の艦娘たちの様子を偵察させる。

「愛ちゃん……燿子ちゃん……どこだ……」

再び復讐者の顔になると、手を上げ振り下ろした。

第二回戦の開始である。

再生産したクラーリンが順次デスペラン要塞から出撃していく。

「皆さん、砲雷撃戦準備ですよー！」

各自緊急修復と補給を終えて戦場に舞い戻ってきた。

士気は最初よりは下がっているが、不敗の女神の凛々しい表情を見ると、

負けない！絶対に負けない！と決意を込めて前を見る。

陸上では自衛隊と有志の皆さんで武器を構えていつ抜かれても良いように待ち構えている。

自衛隊はその休息の間に増員をし、九州の各鎮守府、東海の各鎮守府から回せられるだけの艦娘を派遣したのだ。

勿論陸上部隊も、隣接する九州・中国などから次々と普通科連隊を送り込み、第1空挺団など中央即応集団も集結してきた。

まさに自衛隊と民間有志のオールスターである。

その戦火の火蓋が再び切って落とされた瞬間だった。

二人だけの司令室に何者かが忍び込んだ。

パシユン パシユン

銃声が二発した。

その凶弾は坂本提督と葵を貫いていた……。

そしてその謎の暗殺者は何食わぬ顔をして去っていった。

「葵……どこを、やられた……」

「……」

「そうか『胸をやられた』か……ワシは頭じゃ……もうあかん……」

「……」

坂本提督が息絶えると葵は最後の力を振り絞って指揮命令システムのもとに行き

大和に「ゼンケンイニン」と通信文を送ると、やり遂げた顔をしながら崩れ落ちて息絶えた……。

戦闘が始まったところで全権委任の通信文

大和は坂本提督に何かあったと感じて、自身が司令官代理として采配を取り始めた。

「さあ、私が指揮を取ります。絶対に四国を焼け野原にはいけません!!」

「おー!!!」

再び基地航空隊の出撃から戦闘が開始される。

空の魔王部隊がガンガンクラリーリンを落としながら爆撃をすると、翼部隊が第一中隊を引き連れてデスペラン要塞航空隊とのドッグファイトに入る。

この1日の戦闘で、ジレーネ玉将が預けていた空母は全て使い果たしてしまったため、

制空権は優勢のまま事が運んでいた。

だが無限に増殖するクラリーリンに対し、有限の艦娘が押されているのも事実である。

次々来援する艦隊に一時期は要塞まで肉薄されるも、大和の後退命令で下る。

大和は要塞の攻防戦をするつもりは一切なかったのである。

デスペランを叩き落としながら、艦娘が沈んでいくのを目の当たりにしている。

「大変です、坂本提督戦死の様様……」

大淀が小杉一尉からの連絡を伝えると大和は顔面蒼白になっていた。

何かあったとは思っていたが死んでいたとは思ってなかったのだ

だが、総司令官になった自分にはそんな動揺を見せることは許されない。

グツと歯を食いしばると、前の戦場を見据えていた。

「みんな大丈夫かなあ……」

避難所に指定された高校の体育館でカルテットは寄り添いながら一夜を過ごした。

「愛ちゃんと燿子ちゃんなら絶対無事だって!」

恵奈の心配に美雪が力強く答える。

「そっだよ、あんな強い子いないって」



「そうだね……」

続けて杏子と真由も答える。

「そうだ!」

恵奈が立ち上がった

「みんなに頑張れってここから応援しようよ!」

大きな声で言うと、カルテットだけではなく、皆が立ち上がった。

「せーの!」

『頑張れ皆!頑張れ艦娘!!』

—— 『頑張れ皆!頑張れ艦娘!!』

大和は突然聞こえた名もなき力なき者たちのエールが聞こえて気分が高揚している思いだった。

「小杉一尉!各避難所に回ってください!皆さんの応援をください!今解りました、皆さんの思いが力になります!」

『了解した!おい、お前ら、行くぞ!』

「よし、大和推してまいります!」

高らかに宣言すると、装填していたアイキャンフライ砲こと80cm3連装砲改“ツールハンマー”を敵に向けて放った。

大和は改装を受けて改二大和型になっていた、薄雲飛翔事件のデータをも用いて大和専用改良されたのがこの80cm3連装砲改“ツールハンマー”である。

ズドオオン!

ズドオオン!

ズドオオン!

その強烈な砲弾はクラスター弾であり、敵の艦隊の中心部で炸裂し、航空部隊もろとも敵中心部のクラーリンを木っ端微塵に引き裂いていく。

勿論、アンカーを下ろした大淀が後ろで抱きしめて抑えているが三連装で数十体のクラーリンを屠っていた。

—— 『頑張れ皆!頑張れ艦娘!!』

その声はだんだん大きくなっていった。

被弾して艦載機も飛ばせなくなった空母も空母を飛ばせるようになり、

沈みかけていた艦娘も最期の一矢とクラールリンと刺し違えて沈んでいった。

想いは力になる。

そのキーワードが艦娘を動かす原動力となっていたのだ。

「那珂ちゃんセンター行くよー!」

中心司令部を大淀に引き継ぐと那珂ちゃんも水雷戦隊を率いて細かく細かくクラールリンを倒していく。

川内も同じである、駆逐艦の子を率いて酸素魚雷攻撃でのクロスファイアを行う。

リーヴェ・サーカスを使うのはデスペラン側だけではない。

土佐鎮守府の面々は坂本提督戦死の報を聞きながらも、涙を後ろに隠して戦い続けていた。

四国の戦闘が開始して数日経っていた。

愛達リーヴェ・サーカス団はブースターのお蔭で何回かの寄港の補給の末、

フロリダ諸島のアイアンボトムサウンドまでたどり着いていた。

「ここが……アイアンボトムサウンド……」

「では、Keyを差し込みましょう」

アイオワが隠していた核弾頭を装填するとアイアンボトムサウンドに向かって核弾頭を撃ち込んだ。

チユガツ!

きこの雲が上がると同時に海面から沈んだ船たちが浮かび上がってきた。

その船たちが形を変え、城のようなものになっていた。

……まさにアイアンボトムサンドキャツスル。

城の門が開くと、旧日本軍の制服を身にまとった艦娘達のような存在が次々と現れてきた。

そして、元帥の軍服を身にまとった女性が現れた。

「やってくれましたね、笹野愛」

「貴女が……ジレーネ」

「はい……人類殲滅装置です。人類はやりすぎました。ここらで滅びてもらわねば困ります。……残念ながら、艦娘も深海棲艦も滅びませんでしたが、私達が裁きを下します」

すつと手を上げると綺麗な所作で振り下ろした。

「ぐうっ!!!」

まずは『歩兵』……つまりは駆逐艦型の砲撃雷撃は始まる。

それだけで前で庇ったル級は大破に追い込まれていた。

「だ、駄目です……一旦退却しましょう」

その直後だった、指揮艦に魚雷の流れ弾が飛んできたのは……

「危ない!!」

ドカーン!!

指揮艦のコンソールが爆発すると燿子と愛の二人に立ちほだかつてかばう岩崎二尉。

「ぐうっ……」

「岩崎二尉……っ!!!」

愛と燿子の叫びがアイアンボトムサウンドに響き渡った。

岩崎二尉は自分の胸に手をおいてその手が真赤に染まっているのを見ると

「よせよ、痛いじゃないかね……」

そう、目の前の戦場の『歩兵』に眩くように言うそのまま崩れ落ちた。

「岩崎二尉!!!」

崩れ落ちた岩崎二尉を揺する愛だが燿子が「ヒッ」と悲鳴を漏らす。

操船していた笠原三尉はあちこち切り裂かれて即死だった。

ハーフェンはその衝撃で海に投げ出されていた。

燃え上がる船体から救命胴衣を付けながら二人の遺体に涙を浮かべて敬礼をすると愛と耀子は海に飛び込んだ。

その直後指揮艦は爆発炎上して沈んでいった……………。

「提督!!」

指揮艦が爆発炎上したときにビスマルクは悲鳴をあげたがすぐに耐水性のパーソナル通信装置に切り替えた愛からの

「私は生きてます……………この戦いはまずいです、逃げましょう」

と言う言葉にビスマルクはどう退こうか考えていた。

敵も一線級の指揮官なら未完成のファイアも通用しない。

ビスマルクたちはジリジリ下がりながら逃げ出すスキを探していた。

後退砲撃戦を行いながらル級を3隻失いながら戦闘は6時間超を経過していた。

愛は水面に漂泊しながらの指揮であり、魚雷が飛んできたらサヨウナラである。

耀子は怯えながらも愛に抱きついて一緒に漂泊している。

それを流れていかないようにハーフェンが抱きしめながら一緒に下がっていく。

ジレーネの『玉将』は余裕を持った笑みを浮かべていた。

歩兵の陣形を広げて包囲しようとしていたその瞬間だった、

後方から高速に近い速度で飛んでくる物体が飛んできた。

「愛ちゃん!空から女の子が!」

「えっ……………あれは……………」

その女の子カッコカリはパラシュートを使ってゆつくりと舞い降りて着水した。

そして、浮かんでいる二人と水面に立っているハーフェンの側まで滑ると笑みを浮かべた。

「待たせたのです。リーヴェ、ハーフェン」

「新アイキャンフライ砲とブースターで6時間で飛んできました、ぶい」

電と薄雲だった。

その瞬間『玉将』の顔が驚きに歪んだ。

ビスマルクはその瞬間を見逃さなかった。

「よし、逃げましょう！」

ビスマルクたちは一気に急速反転し逃げ出した。

その途中、改ル級FSがハーフェンを、ビスマルクが愛を、アイオワが耀子を抱き寄せて所謂お姫様抱っこでブースターに点火して一気に離脱を図った。

薄雲と電も、残っているブースターに点火してその後を追いかけていた。

その6時間前、緊急で防衛省の記者会見が行われていた。

大貫悟が事前に緊急記者会見の可能性を示唆し、記者たちは連日防衛省記者クラブに集まっていたのだ。

そして、アイアンボトムサウンドに核攻撃が行われたそのときに、緊急記者会見の通達を大貫が行った。

「諸君、本日の記者会見ですが私は重大な真実を伝えねばなるまい」

その直後だった、自衛官の服を着た男が飛び込んで大貫に銃を発砲した。

銃は胸を貫通して大貫は青い血を吐いた。

記者たちは騒然とするのを手で制した。

すぐに銃撃犯は取り押さえられて、大貫は言葉を続ける。

口元から血が溢れているが毅然としている。

「みでの通り私は人間ではなく、深海棲艦である……。まずは国民の皆さんに侘びねばならない、深海棲艦との戦争は私と、深海棲艦の提督とのマッチポンプだったのだ。それには理由がある。私は人類が滅びた未来から来た未来人なのだ。深海棲艦と艦娘は表裏一体であり、何れかが滅びればもう片方が滅びる。私はその両者が滅びた世界からやってきた大垣守と言う人物だ。私達は、深海棲艦と艦娘が共に居なくなった時、ジレーネという海の魔物に世界を滅ぼされた。ジレーネとは……」

再び別の自衛隊員が飛び込んで大貫に銃を打ち込む。

左胸が貫かれて「うぐつ」と血をこぼす。

すぐに銃撃犯は取り押さえられて記者クラブの扉が閉じられる。

「ジレーネ……とは……日本軍の制服を着た艦娘……まさに、人類に罰を下さんとする……神……。深海棲艦は敵ではない……知性のないものが害獣と化すのは仕方ないが……心も……感情も……ある……我々の仲間……だ……そしてもう一つの敵は……艦娘の身分を……遅々として……進ませない……この国の政治中枢そのもの……どうか国民の皆さん……艦娘を受け入れ……共に歩んで欲しい……この国の政治家は……長寿不老の艦娘の社会進出を……恐れ……艦娘を社会から……排除……しようとしている……この国は……民主国家だ……皆さんが……考え……決めて」

その続きは放送されなかった。

爆弾を持った自衛官が記者クラブの会見場に飛び込んで部屋ごと自爆したからである。

その様子をテレビで羽佐間一佐・郷里三佐と観ていた花梨は宮戸島鎮守府に居た。

勿論高菜二佐や卯月、薄雲や電も一緒だ。

「電さん、薄雲さん『ディーゼン・リーヴェ・デア・ヴェルト』」

花梨はハーフェンから託されたキーワードを告げるとふっと二人は笑みを浮かべた

「記憶を封印していたのですか。思い出しました、電は別の世界から来たのです。そして、ジレーネという海の魔物はアイアンボトムサウンドに居るのです」

「新井田博士は違う世界に逃げ出しましたが、博士の助手としてはジレーネを破壊しなければなりません」

まっすぐ直哉に告げると

「それがあのブースターと艦娘新・アイキャンフライ砲投射機か」

明石が何も言わずに置いていった装備と装置を見遣る。

「直哉、ちよつと弟子を助けに行つてくるのです」  
「行つてきます」

そんな二人の頭を撫でると  
「行つておいで」

そういうと、投射機に入つて空を舞つていく二人を見送ると振り向いた。

「さあ、卯月、どうやら最終決戦のようだね」

直哉の表情は真剣そのものだった。

羽佐間一佐と郷里三佐は頷いた。

そして東京の国会前でも戦いが起こっていた。

怒れる市民たちである。

「政府は艦娘を国民として受け入れろー!」

「政権を明け渡せー!」

「ジレーネと結託している政府を許すなー!!」

「大貫悟の暗殺の真相を話せ!!」

市民の数はどんどん増えていった。

全国から集つた市民たちは数十万人にのぼっていた

そしてその先頭には高菜直樹・湊子夫妻や三友龍太郎・優衣夫妻も居た。

国会前デモ活動は政府を連日どんどん圧迫していった。

マスコミはついに政府と決別し、今まで闇に葬つてきたブラック鎮

守府やその他をどんどん取り上げるようになった。

そしてデモに進んで協力をするようになった。

経済界も戦後は艦娘を労働者として受け入れる声明を発表した。

そして、政権は市民からの圧迫という憲政史上初めての理由で解散総選挙に追い込まれた。

GHQ体制から脈々と受け継がれてきた日本という国に、新しい風が吹き込まれた瞬間だった。

ジレーネの追撃をようやく振り切つた愛たちはようやく日本に

戻ってきていた。

日本に戻ってきた愛たちを待っていたのは  
坂本陸将補と大葉葵一尉の戦死と二階級特進の一報だった。  
そして、政変が起きていたのも聞かされていた。

日本国民の各地のデモで衆議院は解散に追い込まれていたのだ。

四国での戦闘は、クラールリンとの消耗戦が続いていた。

慢性的に数日間掛けて行われている消耗戦に次ぐ消耗戦、

すぐに愛達も実戦に参加するも、このままダラダラやっているとジ  
レーネが日本に先に到着してしまう、そう愛は感じていた。

ジレーネの動きは監視衛星で座標指定してアイオワが連絡したた  
めすぐに追ってくれるだろう。

とにかくデスペランとの戦いをなんとか終わらせねば……そう思  
い悩んでいた時、

「愛ちゃん！」

懐かしい声が聞こえた。師匠である高菜直哉の声である。

「お久しぶりです！先生！」

両手で握手をすると顔を上げる

「健太君がデスペラン要塞で……」

「難攻不落の要塞なら取るべき道は一つだね……」

愛が直哉にそう言うと、直哉は悪戯っぽくウィンクして見せた。

「要塞司令官を落としてしまえばいいのや」

「はあ？」

愛は目をまん丸くしていた。



愛が勝つ！

「要塞司令官を落としてしまえばいいのさ、真正面から」  
「はあ？」

直哉の言葉は愛は目をまん丸くしていた。

「つまりはこうさ、健太君がどういう状況でこうなったかは知らないけど、その指輪、まだ輝いているだろう？」

そんな彼の指摘に指輪を見る。鈍くなってきたが愛の左薬指の指輪は輝いている。

「つまりは心が通じているという証左だよ。だから、この指輪を媒体に出て呼びかけるんだ。とにかく呼びかける。呼びかけるんだ。この世界は想いで出来ているんだろう？信じることは決してやめちゃいけないよ。愛はね、ちよつとほろ苦くて甘いものなんだよ」

直哉は愛と燿子の頭を優しく撫でながら

「事情は大石さんから聞いたよ。それにここでの出来事も生き残った警務隊員に聞いた。健太君はひどい思いをして、つらい思いをして、またひどい思いをして、君たちを傷つけて自分からはもう戻れないんだね。だから、愛ちゃんも燿子ちゃんだけ、君たち二人で……」  
『チョット待って！』

やってきたのは恵奈カルテットだった。

「私達も、健太くんの友達だよ！」

「そだよ！」

「デブだけど、声量は大きいからね」

「想いは通じるんでしよう!？」

恵奈、美雪、杏子、真由がそれぞれ口にする

「そういうことなら俺たちも負けてらんねえな」

圭一が車から降りてきた。

次々に降りてくる番長と愉快的仲間たち。

「いじめてた僕たちだけど、それでも、健太に戻ってきて欲しい」

「あのバカヤロウにカツを入れてやんよ」

寛太と慎である。

「圭一のお友達の足しになるのなら」

史絵もやってきてくれた

「けんちゃんにめつつテしてあげるの」

優花ちゃんも喜んできてくれた

「慎のたのみだからさあ」

「それな」

「うん」

ギャルズたちも笑顔でやってきた。

そして、皆で手を繋ごうとするとビスマルクたちがやってくる。

「ちよおっと待ちなさい！」

「Meたちも健太のFriendよ」

「すみません、勝手に戦場離脱しました」

「私達も健太に声を届けたい」

「北上さんも健太に声を届けましょう」

「そうだね」

「レディとして健太にカツを入れなきや」

そして後ろに止まる装甲車

降りてくる薔薇の騎士団の面々と、大塚一尉に小杉一尉、それに飛んできた航空機から人間化して飛び降り着地した翼

更には花梨と郷里二佐

「私達も忘れないでいただきたい」

大塚一尉がニイッと笑う。

「小官はこっちの健太の師匠だからな」

小杉一尉も輪に加わる

「健太の事私もちよつとスキだったんだよね」

翼も輪に加わる。

「健太君に声を届けませましょう」

「うむー」

郷里夫妻も輪に加わっていく

そして

「私達もなのです」

「うーちゃんも」

「私も参加します」

宮戸島トリオも輪に加わる。きっと宮戸島では両親も祈っているだろう。

「セーの」

『健太——！』

『健太——！』

「この声は……皆……でも皆が僕を裏切ったんだ！」

「違うよ」

アイが悲しそうに言った。

「健太君、違うよ。私が死んだことで重荷を背負っちゃったんだね……ごめんね、健太君。皆が裏切ったんじゃない、健太君が皆から背を向けちゃったんだ……」

「でも、もう後戻りできないじゃないか！あんなにいつぱい人を殺して、僕はもう……」

「健太君。やり直せるんだよ。ふふ、私が健太君を操ってたの。それで全てまあるく収まる。」

「アイちゃん……」

『健太——！』

「ほら、皆呼んでるよ。クラーリンの機能、止めていいかな」  
「……………」

アイは何も言わない健太に悲しそうに呼びかける

「健太君、皆呼んでるよ。愛ちゃんが呼んでるよ、燿子ちゃんも呼んでるよ」

「僕はそんな権利なんてない。そんな権利なんて」

『そんな事ないよ、健太。辛かったんだね、愛情が欲しかったんだね、ねえ健太。私じゃあ満たせないかな、その傷……』

愛の声が聞こえてくる。

『満たせなかったら私も居るわよ。愛と決めたの。あんたは二人で一生かけて愛していくんだって。ちゃんと言責任とってもらおうよ』

燿子の声が聞こえてくる。

「いいのかい、僕は燿子を傷つけた……愛ちゃんを裏切った……皆に背を向けた……取り返しの付かないことを」

『いいかい。人間はいつでもやり直せるんだ。それに自ら死ぬことは逃げだ。絶対に君に逃げるような真似はさせないからね、忘れないでおいでもらおう。生き続けなさい。』

師匠である高菜直樹の厳しい声が聞こえてくる。

「師匠……」

「さあ、機能を停止したよ……みんなを迎え入れていいかな？」

アイが静かに言うとかくりと頷いた。

愛は気がついたらただっ広い部屋に入っていた。

愛だけではない、手を繋いでいた全員である。

「健太君。迎えに来たよ」

「健太、迎えに来たわよ」

愛と燿子が二人並んで手を差し出す。

「愛ちゃん、燿子ちゃん……」

フラフラと近づくと二人は優しく抱きとめた。

それを見て、ふっと立ち去ろうとするアイを愛は

「待って、おいでよ、アイちゃん」

そう呼び止めた。

その笑顔には驚いてから健太に抱きついた。

「健太くん……」

抱きしめてる3人から離れると

「ごめんなさい……」

皆口々に温かい言葉を掛けてくれる。

その暖かさに健太は涙がこぼれ、堰を切ったように泣き出して、そのまま意識を失った。

意識を取り戻した健太は、深海棲艦化後の記憶を持っていなかった

た。

「やれやれ、これで、健太がデスペランを操っていた証拠はなくなってしまったなあ」

直哉が肩を竦ませて笑みを浮かべると指揮座に腰掛け足を組んだ。

「さて、デスペラン要塞起動」

ウィーンと要塞のモニタが光り始めた。

「さて、デスペラン始動。アイオワ、奴らはどこまで来ているかね？」

「WAO！マリアナ諸島まで来ているわ」

「よし、こつちから打って出よう。その前に、基地航空隊を收容しよう」

翼が妖精さんになると、次々とデスペラン艦載機收容口が開き、基地から発進した艦載機を收容していく。

艦載機を收容し終わると、デスペランはゆつくりと海を航行し始める。

艦娘と深海棲艦達は数隻残ったクラリーンと共に薄暗い收容庫に移動する。

正直気持ち悪いがここからしか出撃できないので仕方がない。

現状再生産は不可能だとハーフェンに告げられた

デスペランのモニター席には耀子と恵奈カルテットが座っている、愛は直哉の横に。そして、健太は隅っこでアイの膝枕で眠っている。

そんな様子を番長と愉快的仲間たちが見守っている。

「さて、艦娘の指揮統率は愛ちゃんに任せるよ」

「はいー」

ジレーネたちは大型な輪形陣を組みながら20隻の大艦隊で迫ってくる。

「艦隊出撃ー」

愛の号令で艦隊出撃口がパカッと開くとビスマルクを先頭に、リーヴェ・サーカス団の愉快的仲間たちが次々と出撃していく。

そこには電、薄雲、卯月も一緒である。

「さあ、航空支援をしてあげよう。要塞航空隊発進」

要塞航空隊は翼の第1航空隊に続いて、空の魔王の第2航空隊、そしてデスペラン第3航空隊と順次出撃していく。

敵も『飛車』『角行』『金将』が順次艦載機を発進させていくが、そこに鳳翔、伊勢の航空隊が加わると、一気に優勢に傾いていく。

「いいこと思いつきました」

薄雲がデスペラン要塞に背中を預けると、アイキャンフライ砲こと80センチ三連装砲を発射させる。

常識外の威力で直撃した歩兵が3体木っ端微塵に沈んでいく。

「リーヴェ・サーカス・ヒュンフ」

愛の指示で艦娘達が解散して

「わー…にげろー!」

とわざとらしく言いながら逃散ようにバラけていく

「何をしているのやら、各個撃破の好機」

『玉将』はそう言いながら密集して各個撃破を狙おうとする。

「残念、それは毘だね」

指揮座に腰掛けたまま手を上げて振り下ろす。

耀子と恵奈カルテットが砲塔発射画面から密集した敵艦に向けて

集中砲火をする。

その後ろではハーフェンが使い方を丁寧懇親に説明している。

そんな素人の砲撃でも、デスペランの自動補正機能によりどんどん

追い込んで足を止めていた。

「未だ、反転!」

逃げ散っていた艦娘達がくるつと引き返すと、次々と砲雷撃を打ち

込み始めている。

どんどんジレーネたちが沈んでいく中で、『玉将』一人バリアを張っ

て攻撃を防いでいる。

「まだだ。私は地球の神……」

そう『玉将』がうそぶいたその直後だった。

——『お前なんか神じゃない! 頑張れ艦娘!! 頑張れ深海棲艦!!』

そう声が聞こえていた。

『玉将』は背筋が凍る思いがしていた。そして、電の砲撃がバリアを素

通しして艤装に直撃していたのに気づいた。

「えっ……」

バリアが展開できなくなっていた。

「ファイエル!!」

愛が手を上げ振り下ろした。

その直後クロスファイアを受けた『玉将』は脆くも海に崩れ去っていった……。

「えっ……」

前回戦ってきたときよりかなり弱くなっていた。

愛はあっさり片付いてしまったジレーネ戦に唾然としていた。

「人の思いが力になる、その前には神も無力なんだろうね、でも、何れはいつか第2第3のジレーネが現れるかも知れない、人類はそう心がけて生きていかないとね」

「……はい」

季節は流れ7月になっていた。

総選挙が行われて現職議員がバタバタと敗れていく前代未聞の選挙となっていた。

選挙公示後立ち上がった市民派の議員候補が現職議員に勝利し、議席を奪い取ったのだ。

そのトップには艦娘と人間の融合の象徴だった高菜湊子が自ら立ち上がり、東京1区で大勝利を収めた。

そして、東京2区には妊産婦ながら立候補した三友優衣が大勝利を収めたのを皮切りに、

『日本国民艦娘会議』と言う政党が立ち上がり、党首に高菜湊子、幹事長に三友優衣を据え置いて、

高菜湊子は史上初の女性かつ元皇族の総理大臣である。

高菜湊子政権初の大仕事は、艦娘・深海棲艦基本法の制定である。湊子はずっとこの7年間温めていた、

お付きの法学者を招いて、法案をせっせと作りずっと温めていたのだ。

いつかこの法案を託せる人に渡せる日まで。

これが彼女の所信表明演説である

「さあ、皆さん。艦娘や深海棲艦と手を取り合って歩いていける時代がやってきました、人間にもいい人や悪い人が居るように、艦娘にも深海棲艦にもいい人と悪い人が居ます。深海棲艦の一部は動物と同じものですから、迷惑をかけたら退治しなくてはなりません、人間と同じ心を持った個体には人間と同じように接するような社会がやってきます。これから、私達国民の手で。さあ、戦後は終わりました。これからは——」

——明るい未来です

世間はそんな騒動の中、リーヴェ・サーカスご一行様はあまり変わらなかつた。

「……………でー、翼さんは何でまた男子寮に侵入したんですか。しかも、健太まで誘うとか何考えてるんですか！」

「そうよ！ 私達の健太よ。冗談じゃないわよ！ 何で致したのよ！」

「駄目じゃない！ 翼さんー！」

「ま、まあ、翼さんも反省してるようだから……………」

激怒している司令官デスクのチェアに座っている笹野愛特任二佐に、隣に立って腰に手を当てて怒っている日下部燿子特任三尉、そして深海棲艦のアイ改めリーヴェちゃん。

そんな横で、副官デスクのチェアに座って自分の仕事をしている花梨二尉。

正座させられているのは大垣翼三佐である。

そして、二人を宥めているのは大石健太特任曹長である。

外では、海援隊副隊長の小杉三佐と同隊長郷里二佐が陸戦隊『海援隊』をしいている。

ここは土佐鎮守府。

深海棲艦と和解はしたものの、害獣化している深海棲艦退治や海の



ギヤングや海賊化した艦娘や深海棲艦の取締のために大本営は残されることになった。

参謀長は大塚三佐、副参謀長は空位のままにしてある。

笠原三尉と岩崎二尉、それに坂本陸准将補、大葉三尉はそれぞれ二階級特進が決定した。

それぞれ一尉、三佐、陸将補、一尉となった。

少し寂しくなってしまった司令部だが、艦隊は少々賑やかになった。

ビスマルクら率いる旧室戸鎮守府艦隊　そして、天城率いる旧土佐鎮守府艦隊

そして、旗艦の改ル級FSこと、ジェニファア、新参者の副旗艦のレーちゃんことレ級の率いるル級隊である。

ハーフェンはデスペランに戻って、日本に溶け込めない深海棲艦を引き連れて静かな太平洋のど真ん中に浮かべて静かに暮らしている。

そして大きな違いが一つある。愛も燿子もリーヴェも三人共お腹がぽっこり大きくなっている。

深海棲艦に雄の個体が存在してなかったのが初めてわかったことだが、結局健太は人間に戻れなかった。

そのため、深海棲艦化したまま二人を妊娠させたら、深海棲艦の子は妊娠速度が5倍になるという特性分かって

このような有様になってしまったのである。たったの56日間の妊娠期間である。

これは深海棲艦が数を増やす生物的特性があると考えられており、実は第3艦隊のジェニファアは陸戦隊の宇津井曹長との間の子供が出来ており、こちらも5倍の速度で妊娠するため産休中である。

そのため現在はレ級が旗艦代理を務めている。

「まさかとは思うけど、ナカダシしてないわよね」

「あつは、あたし避妊手術済みだから大丈夫。卵管結紮術してるからさあ、お腹ポッコリするくらいどばつと貰ったけど」

「あ、あの、ごめん……」

そのような特性のため燿子が確認すると、翼はケロツと答える。

それに、申し訳無きそうな顔をする健太。以前より青白い肌で瞳は青いが元気になった。

元気になったと言うより中学生離れした肉体を持ったと言うべきだろう。

あと精力も……。

そんなわけで、欲求不満に陥ってる健太君は風俗に行けないために、翼が侵入しては遊んでいってくれるのだ。

そして、大抵はこうなる。

「本当に健太もしっかりしてくださいね」

「ほんとよ。パパになるんだから」

「大丈夫？これ以上ママを増やさないでね」

そう、残念なお知らせである。

大石泰子は20代でお祖母ちゃんとなってしまった……一気に三人も。

短編集 「ママは中学生提督」 編  
警務隊長は問題児!?

東京の統合幕僚本部内の大本営幕僚総監執務室……

足立昭彦が、総監席で執務を行っていた。

「いかがですか？幕僚総監の椅子の座り心地は」

大貫暗殺後、幕僚総監代理として間を取り繕っていた足立昭彦は、正式に第二代幕僚総監として補職され、陸将となった。

声を掛けたのは、同じく幕僚総監副官として三等陸佐に昇進した、七原秋奈である。

「うむ……大貫前総監の残してくれたノートを元にやっておるが、前総監がここまでのものを背負って孤軍奮闘していたか、と思うと、部下の我々は情けない限りだ」

足立は、秋奈の淹れたコーヒーを口にすると、大きな溜め息を吐いた。

「今度の騒動では、戦死者や暗殺被害者が多数に上りましたからね。例えば、笹野 愛なんかを提督に残しておかなくてはならない訳ですから」

少し皮肉っぽく言うと、トレーに載せたケーキを二つ、足立の執務机に置き、副官デスクから自分のコーヒーを片手に、椅子を引っ張って来て足立とおやつの時間を始める。

「うむ、四国が大変だな。戦死者多数、提督の戦死者も多い。轟沈艦も多数に上り、新規艦を集中配備しているが練度は低い。練度が高いのは、新・土佐鎮守府くらいだろう。差し当たり、横須賀第13艦隊を室戸に移す人事案を承認した」

足立は、大好物のモンブランケーキを一口食べながら、副官に語る。

秋奈は、コーヒーを一啜りすると、口を開く。

「ところで、空席の警務本部長と東北・四国警務隊長の人選ですが……」

そう。現在、東北・四国は警務隊長が、東京は警務本部長が空席状

態なのだ。

「うむ。警務本部長は、七原准将をスカウトするように、陸幕と話を付けてある。東北警務隊は、幸田一尉を特例昇進で二佐にして、警務隊長にするよう統幕と話を付けた。問題は、四国警務隊長の人選だが………坂本がああなつてしまったからな」

足立は、その任務を坂本に任せるつもりでいた。

しかし坂本は、過日の戦闘のさなか暗殺されてしまったのだ。

「坂本准将補はお気の毒でしたね。そっちの方は、既に必殺仕事人<sup>村上兄妹</sup>が片付けております」

ウィンクして足立を見遣る秋奈に、ぎよつとした目で見返す。

「しかし、『武器』を始末したところで、裏にいる連中を検挙しないことには………まさか？」

足立ははつとした。最近、参議院議員の今回の非改選組や、過日の総選挙での落選議員の不審死が相次ぎ、世間を賑わせていたのだ。

「はい。証拠はありませんでしたので、新総理のお邪魔になるような《艦娘殲滅派》の危険な方々には、ご退場いただきました」

美味しそうにケーキ——秋奈のはいちごのショートケーキ——を頬張る娘の笑顔に、冷や汗を流す足立であった。

「話を戻そうか。四国警務隊長の人選だが、秋奈は誰かいい案はないか？」

「そうですね、秋也兄さんは如何でしょうか？」

「秋也か……」

足立秋也は、現在大本営北海道地区警務隊副隊長として、二等陸佐の階級を持っている。年齢は39で、高菜二佐の同期である。

警務隊員ながら気さくでフランク、やる気をあまり感じさせない態度、と警務隊員らしからぬ問題児である。

口癖は「ばつか」で、提督受けは良いが上官である警務隊長の受けは著しく悪く、何度も転属願いを出していた。

ただ転属希望理由が、『頭の固いオッサンの下は嫌だ』と言う、あまりにもろくでもない理由の為、足立が却下し続けていたのだ。

「これで12回目の転属願いです。転属希望理由もとうとういい加減

になって、「やるかじじい」です」

「……………後で説教しておこう。だが、やはり四国警務隊には外の血が必要のようだ。そのように手配してくれ」

「かしこまりました。足立秋也二佐を昇進させて、四国警務隊に異動するよう、人事異動を発令しましょう」

「…………あのバカは、喜び勇んで四国に乗り込むだろうな。だから四十前で独身なのだ」

「うふふ、四国も楽しくなりそうですね？」

息子が未だ独身なのを愚痴りつつ、モンブランを食べる足立を見ながら、秋奈は楽しそうに笑っていた。

それから数日後だった。警務隊員を引き連れて、足立秋也《一佐》が乗り込んで来たのは。

「突然、何の用件ですか？」

副官の郷里花梨二尉が、土佐鎮守府陸戦隊「海援隊」と共に門を塞いで、警務隊員達を睨み付けている。

「査察だよ。定期査察つてやつだ」

「査察は事前に連絡を頂かなくては」

「ばっか。事前に査察をします、つつつたら査察になんねえだろ？」

秋也の言うことは尤もであるが、旧室戸鎮守府の隊員は、査察にいい思い出がない為、睨み合いは続いている。

「そうやって、司令官のプライベートまで暴くつもりでしょう!？」

花梨が秋也を睨み付けて怒鳴ると、秋也はキョトンとなって後ろを見る。

「何？お前等、そんな事やったの？」

《増員前》の警務隊員達が目を逸らす。その反応に、秋也は大きな溜め息を吐く。

「ああ、それで。こういう対応なのか。旧高知駐屯地が燃えて、報告書も灰だったからなあ」

「お分かりいただけたなら、お引取りください」

「ばっか、こつちも仕事で来てんだよ。ハイそうですか、って帰れるか

い？」

秋也の態度は、終始軽い調子である。父を思わせるその態度に、花梨は苛ついていた。

「何の騒ぎか!？」

そんな中、海援隊の隊長郷里 剛二佐がやって来た。

「おお、足立先輩ではないですか」

「おっす、おっさん」

秋也の姿を見つけると、海援隊員を掻き分けて笑顔になった剛に、秋也が軽い感じで手を挙げる。

そんな夫の様子を見て、花梨は首を傾げながら剛に問い掛けた。

「あなた、お知り合いだったのですか？」

「うむ、高菜先輩と同期だな。足立兄妹の兄の方だ」

「足立ってあの総監閣下の？」

「うむ、息子さんだ。足立秋奈先輩と足立秋也先輩には、色々良くして貰ったもんだ。ところでこの騒ぎは？」

「それが、事前予告なしに定期査察だと……」

花梨の物言いに、秋也が口を挟む。

「ばっか。定期査察に事前予告なんてしてるから、ブラック鎮守府が残ってたんだろがよ。いいから査察！今日は査察終わったら風俗行くんだよ、はよ！何なら、オッサンも行く？」

「ふ、風俗……小官は行ったことないので……」

「妻の目の前で、風俗なんか誘わないでもらえますか？」

今度は、ジト目で秋也を睨む花梨。

「ま、まあ、司令官に確認を取って来よう」

明らかに、妻が怒っているのにちよつと困った剛は、逃げるように司令官執務室に走って行った。

出産を控えて、身重の妊婦トリオは学校を休み、司令官私室のソファでテレビを見ながら、お茶菓子を食べていた。

普通の妊婦より一回り大きいお腹で、とうとう執務も覚束なくなつたので、《産休状態》なのである。

コンコン

「どうぞー?」

ノックに愛が答えると、剛が「失礼します」と入室して来る。

「どうかされましたか?」

「司令官、実は警務隊が査察に来たのですが……」

「ああ、通してください。只今、足立総監からお電話をいただきました」

「了解しました」

漸く、渋々通された警務隊員達は、秋也の的確な指示通りに査察を開始する。

「司令官の、笹野 愛特任二佐です。部下達が失礼しました」

「新しく四国の警務隊長になった足立秋也一佐だ。噂には聞いていたが、本当にJC妊婦だったんだな。やるな」

真面目に敬礼する愛に、ケラケラと笑いながら答礼する秋也。

愛は、何かノリが翼に似ているな、と感じていた。

「まあ身重だから、どっか座んなさい」

「はい、それでは失礼します」

愛が執務机に向かうと、健太が椅子を引き、愛が座ると、健太はその脇に控える。

「で、君が噂の深海棲艦ボーイか?」

「はい、大石健太特任曹長です」

健太がびしっと敬礼すると、秋也がケラケラ笑う。

「やめい。形式張ったのは、あのじじいだけで十分だよ」

「「じじい?」ですか?」

愛と健太が首を傾げると、花梨が横から口を挟む。

「足立総監の事ではないでしょうか?」

「それな」

40前にして、今どきの言葉を使う。茶髪で童顔の為、もっと若く見える。

「隊長!始末書の束が出て来ましたが、いかがでしょうか!」

「そう言えば、四国警務隊は機能不全に陥ってたな。確認するか

……」

秋也はポケットから眼鏡を取り出すと、ソファに腰掛けて足を組んで、始末書を眺め出す。

愛は、どんな反応を示すか花梨を見ながらワクワクしている。一方花梨は、さっと目を逸らして自分の執務に戻ってしまう。

「何だこれ!?全部男子寮侵入じゃねえか!大垣 翼に郷里花梨……て言うか、既婚者が何で官舎にいるんだよ!?!」

そう。翼と花梨は仲が良くなって、結託しては二人で男子寮侵入を行っている。

相変わらず、燿子とリーヴェの二人部屋を橋頭堡にして脱出し、翼は若手の下士官と遊び、花梨は婚約者の元へと夜這いを掛けるのだ。

基地航空隊が土佐鎮守府に設備移転するまでは暇なので、元に戻ってしまったのである。

その疑問に、花梨が顔を赤らめて説明する。

「その……陸戦隊長は寮に常駐……となっております……」

「んで、夜な夜な通ってビッグマグナムにやられてる、と」

「つつっ!!」

花梨は、耳まで真っ赤になる。

「ビッグマグナムって何ですか?」

愛が首を傾げると、秋也はケラケラ笑う。

「郷里とは、同じ寮でフロも一緒だろ?当時からデカかったのよ、ち〇こ。防大って、男子は野郎ばっかの寮だろ?当然だけど、男子校のノリになってアレのデカさ測ろう、つてことになんどのよ。郷里のに比べたら、俺のなんかポークビッツよ」

「そ、そうなんですか……」

愛も健太も、ちよつと顔を赤らめる。

バタンツと、扉が開かれる。

「なー、今丁度聞いてただけど。郷里二佐のアレって、そんなに大きいのか?健太のも、めっちゃ大きいよ?」

噂の問題児、大垣 翼である。

「コレが、問題児の大垣 翼三佐です……」



顔を赤らめたまま、額を押さえて紹介する愛。

「ほー、こいつが土佐鎮の始末書クイーンか？」

「てへ、大垣 翼三佐です。で、あんた誰？」

「あー、四国警務隊の新しい隊長の足立秋也」

警務隊という言葉に、さつと顔色を変える翼。

「また、監視にでも来た訳？」

「定期査察なんだけど。抑々何があったか、聞かせて欲しいんだがな。どうして、ここの連中が過剰反応するのか」

「実はね……」

翼が、事の詳細を丁寧に話すと、秋也は「ふむ……」と言って考え込んだ。

「なるほどな。司令官、生き残ってるその該当の警務隊員、お前さんの好きにしていいわ。ここは自由裁量の治外法権だしな。銃殺刑もよし、海に沈めるもよし、艦娘の艦砲で吹き飛ばすもよし」

「いや、流石にそこまで……」

過激過ぎる秋也の言葉に、苦笑いを浮かべる愛。

「恐らくは、会見を警務隊にリークしたのは、大貫のオッサンだな。深海提督と繋がってたらしいからな。炙り出しを狙ったんだろうよ、笹野二佐を利用して。ほんで実際、予言どおりジレーネとやらも出てきたし、深海棲艦も海賊化や害獣化した連中以外は、人間社会に入り込んで来ているしな。或いは、《本来の》大貫のオッサンは疾うの昔に死んでいて、大垣守と言う深海棲艦に《取って代わられていた》のかもしれないな？」

「……………」

バカそうに見えて、鋭い考察をする秋也に、愛と翼は感嘆の声を漏らしていた。

「結局民衆が立ち上がった。オッサンにとつてはギャンブルだっただろうがね。民衆が立ち上がらなかつたら、この計画はおじやんな訳だし。その為に予め湊子さま……もとい。高菜総理が皇籍離脱したと考えると、迂遠で壮大なプロジェクトだっただろうね。さて、この次は何か？日本にも、漸く国防軍議論が持ち上がってくるんだろうな。俺

達は、それを勝ち取る為にあまりにも血を流し過ぎてしまった」

その言葉に、全員が頷いた。

「まあ結局、これで艦娘と深海棲艦を減ぼすことは、事実上不可能になってしまった訳だ。今度国会に出される艦娘・深海棲艦基本法で、その流れは一気に加速するだろうね。何せ、人間の妊婦が一人出産するのに対し、深海棲艦は五人も産める訳だしね。人的資源という意味合いでは、人口減少に歯止めが掛かって、少子高齢化時代も終わりを迎えるかもしれないな。艦娘もそうだが、力持ちの人材はどの業界でも、喉から手が出るほど欲しい。ゆくゆくは、大本営機能も民営化して海の安全や保安は、P M S C S民間軍事警備会社に移管される時代も来るかもしれないな？」

秋也はそう言いながら、出されたコーヒーを口にする。

「んで、五倍の速度で育つて、人間の母体の影響は大丈夫なん？」

お腹を擦っている愛の姿をちらっと見ると、問い掛ける秋也。

「はい。毎日産科医が往診に来てくださってるんですけど、お腹が張って痛いときはありますけど……今のところ大丈夫です」

「そうかそうか、深海棲艦と人間のハーフなんて初だもんな。医学的に研究したいんだろうね？」

「はい。先生は、これを学会に出すんだ、って張り切ってますけど……」

「そんなに速い速度で育つて、体力とかはどうなん？」

「私も耀子もリーヴェも、食べる量が戦艦並みになっちゃって……産後太らないかなあつて心配で……」

あははつと笑いながらお腹を擦る愛に、秋也は次々出される報告書に目を通しながら、

「ダイエットの基本は、筋肉を付けて体脂肪を減らす。女の子は減らし過ぎたら拙いから、ちよいふつくら目が健康範囲。エアロビクスは割とお勧めよ。あと、あのなんたらブートキャンプもな」

と、アドバイスをする。

「産後は胃が拡張してるから、食事制限はしたほうがいいなあ。食べ過ぎはカロリーオーバーの原因だからね。後は体を動かす。これは

先生にも言われてるかな？」

「はいっ！」

「しかし、何だな……」

立ち上がると、秋也は司令官チエアに座っている、愛のお腹を撫でてあげる。

その瞬間、秋也は急激な疲労感を感じていた。

自身の霊子を奪い取られた、と言うことに気づいていた。

「っ……この子、霊子欲しい欲しいってなっつぞ。俺の霊子奪い取られた……」

「霊子……ですか？」

「前に、大貫のオツサンから聞いたことがあってね。霊子とは、《人の霊的エネルギー》のことだっつて。想いやその類い」

「そうなんです……それじゃあ……」

「愛情を注いでやれば注いであげるほど、いい子に育つてことじゃないかな？」

そう言うと、秋也は再びソファに戻って、財務資料に目を通す。

「財務状況は健全、不正な使途不明金もなし。で、男子寮侵入については、提案があるんだが？」

その言葉に、愛はお腹を擦りながら首を傾げる。

「提案ですか？」

「女子寮の立ち入りは今までどおり禁止。男子寮への夜間立ち入りは許可制。その代り、深夜外出は原則禁止。いくら何でも許可制とは言え、門限なしは駄目だろ？」

秋也は、更に出て来た外泊許可申請書の束をぱしんと叩く。

「そうなんですけど……」

「ばっか。結局ホテル代が嵩んで、男子寮侵入になっつてんだろがよ？この外泊理由も「エッチする為（はあと）」とか大概だろ？もつと取り繕えよ」

その言葉に、翼がテヘツと笑う。

「テヘツじゃねえよ、ばっか。仮にも佐官なら、自由裁量でゆるゆるな分、ちゃんと最低限のルールくらい守れ」

そんな翼の態度に、父親似らしくビシツと諫める秋也。

「ばっか、考えても見ろよ司令官。このルールなら、理論上この始末書の束はほとんど無くなる訳だ。基地内秩序云々を言う又何だが、野郎も溜まつてるものがあるだろうし、お前さんも欲求不満を解消できる、んで郷里二尉も夫婦の営みが出来る。一石三鳥だと思っただがね？」

「っ……………!!!」

「あはは。では、一佐のご提案を採用させていただきます」

そして、悪戯っぽい笑みで花梨をチラチラ見ながら言葉が続けると、花梨はまた顔が真っ赤になり、愛は笑いながら提案を受け入れた。「やったー！でー、一佐はそっちの方いける口？」

「まあねー」

翼は秋也に撓垂れ掛かると、それを気にせず書類に目を通す。

「はい、これで完了。お前等先に帰ってろ」

書類の箱を詰めたものを、警務隊員に引き渡すと、先に帰るよう指示する。

隊員は敬礼すると、引き上げて行った。

「さて……………笹野 愛ちゃん。それに、日下部燿子ちゃん、大石健太くん。先日の室戸鎮守府事件で、酷い思いをしたと聞いている。申し訳なかった。自衛隊警務隊を代表して、お詫びさせてもらいたい」  
びしっと、両手を足に付けて深々と頭を下げる。

燿子も健太も、それに愛も、そのチャラく見える中の誠実さを感じ取っていた。

「面を上げてください。私はあれが、ジレーネや反艦娘派の策謀だ、と思っことにしています」

「そうよ。足立隊長のせいじゃ、ないじゃない」

「そうですよ」

愛と燿子と健太が口々に言うと、頭を上げて、

「一つだけ覚えていて欲しいのは、室戸鎮守府事件の首謀者として片桐の名前が公表されてしまったことだ。彼にも妻子がいたけど、四国

を石もて追われ、どこに行くんだらうね」

『……………』

妻や子には罪はない！とは、ここに居る全員が言うことは出来なかった。

「正直な気持ちなんだらうね。被害者感情としては、許せないもんなあ。それは当たり前のことだと思うな。さて……………」

立ち上がると、

「さて。門限設定は明日以降と言うことにして、大垣三佐を借りて行くけどいいかな？」

「えっ？」

キョトンとしている翼に、悪戯をした子供みたいな表情を浮かべた秋也は、

「何、モーシヨンを掛けて来ておいて冗談じゃ済まさない、ってことさ。デート代は俺が奢るから、大人しく付き合いな」

「おー、夜は寝かさないパターン？」

「だといいいけどねえ……………ああ、愛ちゃん。俺達が明日戻って来なかったら有給、ってことで処理しといてね？」

「？ 分かりました」

「何々？明日もどっか連れて行ってくれる系？」

愛が首を傾げながら了承すると、翼はワクワク顔で秋也の腕にギュツと抱き付く。

こうして二人は、夕暮れの街へと消えて行った。

「……………で、どうでした？」

三日後、帰って来た翼を見ながら、司令官の代筆で書いた有給申請書に判子を押しながら訊く愛。

「いやあ、朝も寝かしてくれなかったよ。何と言うか、ポークビッツって言ってたけど十分大きい方だよ。健太とタメ張るくらい……………その後デートして、楽しく過ごして夜戦して、って感じかな？」

その言葉に、皆の視線が花梨に集中する。

「そんなに大きいんですか？」

割と興味のあるお年頃の愛が代表で問うと、花梨は顔を真っ赤にして、

「他の人と……比べたことないから……何とも言えません……」

と、蚊の鳴くような声で答える。

そんな中バタンと扉が開かれ、足立秋也がやって来た。

「おっす、茶を飲みに来たよ。赤ちゃんの様子はどう？」

こうして、四国警務隊長足立秋也は土佐鎮守府に入り浸るようになる。

## 戦死者の墓参

出産を控えた愛達は産休体制に入り、鎮守府司令官代行に大塚三佐を任命して、司令部が運営されていた。

艦隊司令官代行は、ビスマルク。

妊娠中は、大石家から泰子さんがやって来て、三人の妊婦の世話をしている。

妊娠後期は体を動かしてください、と言われていたので、愛がふと思いついたように、

「坂本将補のお墓参りに行きませんか？」

「そうね。葵さんも一緒に葬られてる、と聞いてるし」

「うん……そうしよう」

三人の意見が一致すると泰子は、

「それじゃあ、車の準備をして来るわね」

そう言つて、司令官私室を出て行く。

それを見送ると、耀子がポツリと思いつくように呟く。

「あれから、もう一ヶ月以上、経ってしまったのね……」

「そうだね……」

「うん……」

愛とリーヴエも、それに続く。

『艦娘大戦』そう呼ばれた大規模戦闘では、実に多くの戦死者を出していた。

サーカス団でも、岩崎三佐・笠原一尉——それぞれ二階級特進——を始め、何人も戦死者を出した。

葬儀の相談をしようとしていた所に現れたのが、大崎勇次郎だった。

「あの、笠原聡美の恋人の大崎と言います。聡美が亡くなった、と連絡を受けまして」

歩哨に立っていた小杉三佐が、司令官執務室に通した。

コンコン

「どうぞ」

愛の声が聞こえると、扉を開ける。

執務室のソファには、赤子を抱き抱えた小さな女性が、スンスン泣いて座っている。

岩崎三佐の妻で、悠里さんと言う。

「取り敢えず、お掛けください」

そう言うと、愛もソファの対面に腰掛ける。

「この度は、誠に申し訳ございませんでした。偏に私の力不足……でした」

手を突いて、頭を下げた。

「……笹野さんの責任じゃありません……うつ……」

「そうですよ。聡美は、司令官をお守りして死んだ、と聞いています。名誉の……戦死だったと思います。だから、面を上げてください」

悠里夫人と勇次郎の言葉に、沈痛な面持ちのまま顔を上げると、

「……御遺体は先日、現地ダイバーによって回収、こちらに安置させていただきます。ありがとうございますか？」

「……はい」

「………お願いします」

その言葉に愛は立ち上がると、遺体のボデイバッグが安置されている、工廠に案内する。

現在、新基地航空隊長として待命中の翼等、遺体回収班が敬礼して出迎える。

「まずは、岩崎三佐の御遺体です」

翼がそう言うと、ボデイバッグのジッパーを下ろす。

ところどころ焼けているが、損傷は比較的少ないものだった。

数日間水の中に浸かり、少し膨張して更に大きくなっている遺体は、悠里夫人にとってはショックだっただろう。

「浩三さん………痛かったでしょう………辛かったでしょう………ご苦労さまでした」

悠里夫人は傍らに座り込み、涙をボロボロ流しながら、冷たくなっている岩崎三佐の遺体を撫で続けている。



それを見ながら、翼は勇次郎に向き直る。

「……………笠原一尉の御遺体ですが、損傷が激しくご覧にならないほうが良いと思います。どうなさいますか？」

翼が問い掛けると、勇次郎は、

「大丈夫です。お願いします」

勇次郎の答えに、翼がボディバッグのジッパーを下ろす。

戦死直後でもズタズタに切り裂かれた聡美の身体は、更に原型を留めていないものになっていた。

愛ですら息を飲み、口に手を当てていた。

「聡美……………聡美いいいい!!!」

がくんと膝を突いて、変わり果てた恋人の姿を見た勇次郎は慟哭した。

案内した愛や翼も、涙していた。

「……………もう大丈夫です」

悠里夫人が静かにボディバッグを閉めると、慟哭している勇次郎の側に行って、

「勇次郎さんでしたっけ……………？葬儀の相談をしに戻りましょう……………」

そう言って、ボディバッグを閉めると慟哭している勇次郎を立たせてから、愛の方を見て頷く。

「はい。戻りましょう……………」

司令官執務室のソファで、漸く泣き止んだ勇次郎が、

「聡美ですが、施設の出身で天涯孤独なんです。ですから、ここ土佐に葬ってあげたいと思います」

そう意向を伝えた。

続いて悠里夫人も、

「私の両親は、自衛官との結婚に反対でした。それで家を出て来たので、実家には頼れません。それに浩三さんの遺言に、任地で埋葬されたい、と言うものがありました。叶えてあげたい、と思います」

小さいながらも芯の強い悠里夫人の言葉に、愛は頷いた。

「それでは、室戸鎮守府の合同葬と言う形でもよろしいですか？ご異

存がお有りでしたら、日をずらして行いたいと思いますが……？」

二人は、首を横に振った。

二人や亡くなった薔薇の騎士団隊員の葬儀は、鎮守府合同葬となった。

中心に二人の遺影が飾られ、その周囲には戦死した陸戦隊員の遺影が飾られる。

各地から友人知人が詰め掛け、ホールを埋め尽くしていた。

健太は、デスペランを操っていた記憶がないながらも、出席を辞退した。

愛と燿子とリーヴェは、葬儀委員長という形で葬儀を取り仕切った。

「車の準備できたわよ」

泰子の言葉に、三人の妊婦は立ち上がり車に向かう。

執務中の大塚三佐の「お気をつけて」と言う言葉を背に受けながら、同行した、副官の花梨と三人はまず、岩崎三佐のお墓に立ち寄った。そこには、悠里と勇次郎の姿があった。

「お久しぶりです。愛さん、皆さん」

「どうも、ご無沙汰しています」

埋葬地の問題で、岩崎の両親と大いに揉めて断絶状態になっていた悠里と、聡美と同じ施設を出て天涯孤独の勇次郎は、お互いを支え合ううちに、交際が始まっていた。

まだ交際半月と少しだが、まだお互いの傷を舐め合い、支え合う仲間である。

ここ土佐の地に、アパートを借りて同居している。

岩崎三佐の遺児浩乃ひろのちゃんは、勇次郎が抱き抱えている。

「どうも、ご無沙汰してます」

「こんにちは」

「……」

愛と燿子は挨拶を返し、リーヴェは頭を下げた。

「しかし、話には聞いてましたけど、愛ちゃんも燿子ちゃんもリーヴェ

「ちゃんももう、ママの顔ですね？」

悠里が、愛達のお腹を撫でながらニコニコしている。

お腹に生命を宿した者は、霊子が強まる傾向にある。奪われない、と言うことはそう言うことなのだろうが、ここに居る人間で気づいている者は、誰もいない。

「そうですか？まだこの年の出産で、しかも深海棲艦とのハーフですから……」

「そうよね……」

「……私も初めてだから、心配」

「妊娠期間が1／5でしたっけ？そりゃあ、心配になりますとも。でも大丈夫、お医者様も初めてのケースだから、いつでも来てくださるんでしょ？」

悠里の言葉に愛が頷く。

「わざわざそんな時に、聡美と浩三さんのお墓参りに、有難うございます」

勇次郎が、深々と頭を下げる。

「お二人共、この先どう生きて行くかは判りませんが、ご無理をしないでくださいね？」

「はい」

三人共、それぞれのお墓に線香をあげて、お酒の大好きだった笠原一尉にお酒を、甘い物の大好きだった岩崎三佐にお供え物用菓子をお供えすると、立ち上がる。

「確かこの霊園に、坂本将補のお墓もある、って聞いたんですけど？」

愛の質問に悠里が、

「はい、知ってますよ。案内しましょうか？」

そう言って、案内してくれる。

泰子は三人を気遣いながら歩き、勇次郎は浩乃を抱っこして一番後を従って行く。

坂本将補の墓の前で、一人の女性と子供に出会った。

「笹野 愛さんですね？」

はつきりした言葉で、まっすぐ愛を見ていた。

「はい、笹野 愛特任二佐です」

深々と頭を下げると、その女性は頭を上げたところで、

「私は坂本竜兵の妻、龍子りょうこと申します」

「もしかして、龍子さんの龍は……？」

「龍宮城の、龍です」

坂本将補は、本当に『坂本龍馬の生まれ変わり』だったのかもしれない。愛は、そう考えながら頷いた。

「ぼくは、坂本龍之介。小学四年生です」

「初めまして。笹野 愛って言います、《一応》中学一年生です」

「ええっ!? 中一でもうママなの!？」

目をまん丸くする龍之介に、龍子はくすつと笑って、

「だから、パンチは駄目よ?」

そう言ってから、

「この子、いっつもあの人や郷里さんにパンチするものですから」

「女の子にはしないよ!」

「ふふ、ありがとうね」

そう説明する龍子に、龍之介は頬を膨らませる。そんな龍之介の頭を撫でる愛。

「隣には葵ちゃんも眠ってます。どうかお線香を上げてあげてください」

その為に、副官の花梨を連れて来たのだ。

花梨が持っていたお花を捧げると、お線香を灯す。

その様子を見ながら、龍子はポツリと語り出した。

「あの人は、大貫前総監からジレーネの存在を告げられていました。

そして、反艦娘派の存在も。四国の大戦の指揮に出掛ける時、あの人は

は言っていました『坂本龍馬の跡を準るようになるかもしれない』

……結果、暗殺されました」

「……………申し訳ありません……………私の……………」

「いいえ、愛ちゃん。貴女の責任じゃありません。こんな小さい子に、《そんなことを言わせるほどの責任》を負わせた連中と、前の選挙で落

ちて行った人達のせいです。どうか、そこを誤らないでください」  
「……………はい」

「しかし、深海棲艦のハーフって、こんなにすぐに育つんですね？」  
龍子がお腹をナデナデしながら笑みを向けると、自然と愛も笑みが浮かぶ。

そして同行していた泰子を見ると、若そうに見えるので、龍子は愛に訊いてみた。

「お母さんですか？」

「ええと、この子の父親のお母さんです。まだ20代で《祖母》になる予定です」

「あらあら、それは大変ですね？」

「そうなんですよ、それも三人」

苦笑いを浮かべる泰子に、龍子は一瞬目を丸くするも、笑みに戻る。  
「この子達のダンナさんは、随分とモテるんですね。かくいうあの人も、艦娘にはモテていましたから……………あの子達の事も、お願いしますね？」

「はいっ！」

元気良く答える愛に、龍子は笑みを浮かべ、

「またいつでも、お参りに来てあげてくださいいね？」

そう言うと、辞去していった。

「それでは私達も……………」

そう言うと、悠里と勇次郎も去って行った。

「さて、私達も帰りましょうか……………」

「そうね」

「うん……………」

そう言うと、愛達も霊園を去って行った。

それから一時間位して、一人の男と七人の女性がやって来た。

羽佐間眞一郎陸准将補と、艦娘達と紗花である。

眞一郎は持っていた酒瓶を供えると、手を合わせてから墓前にどっかりと座り込んだ。

「よお、坂本。久しぶりの再会が墓石とは、人生分からんもんだなあ」  
そう言うと、ポケットからウィスキーのポケットボトルを取り出して、一気に飲み干す。

「白兵戦と銃剣道の試合138勝139敗。何れ、暇になったら再戦をしよう、と言っていたが、勝ち逃げはするんじゃないか？それに、戦死するとしたら私のほうが先だと思っていたんだがなあ」

『眞一郎！』

咎める嫁達の声を手で制すると、眞一郎は続ける。

「お前さんを死なせた連中は、排除されたよ。お前の言う《二度目の日本の夜明け》は迎えた。お前さんが、それを生きて見届けられなかったのは残念でしょうがないが……こうなったら仕方がないな。お前さんの分まで、150まで生きて孫や曾孫達に迷惑がられながら死んで行くとするか」

そう言うと、立ち上がって敬礼した。

その手が震えていることに、嫁達は気づいていた……

## 出産

幕僚達や坂本将補等の墓参りから、数日遡る。

大石健太の母親・泰子が、新米医師倉田めぐみを伴い、四国の土佐にやって来た。

最初は、三人も一気に孕ませた息子へ、お説教をしようと思気込んでいたが、

「羽佐間准将補と関係を持った、ってどう言うこと?」

深海棲艦化したことにより、変化したアイスブルーの瞳で一睨みされた泰子は、ぐうの音も出なかった。

「そ、それは……その……流されて……」

「呆れた。全く、父さんが心の広い人でよかったね?」

「本当にそうね……」

全く母親の威厳が発揮できない泰子は、肩を落としている。

そんな泰子に、援護射撃をしてくれたのが、燿子だった。

「あのねえ、健太。12歳でパパになって、20代のお母さんを祖母にさせるのも、ソーター問題がある行為だと思っただけど?」

「うぐっ」

今度は、健太がぐうの音も出なくなる。

そんなやり取りを、愛はニコニコと見守り、リーヴェはどちらの味方をしようか、ワタワタしている。

因みに、当のリーヴェは、死んだ時に年齢が停止したとしたら、推定年齢一桁である。

何れにせよ、深海棲艦になった時点で、年齢なぞあつてないようなものである。

「全く、健太と言ひ、慎くんと言ひ、師匠のこういうところを真似しなくてもいいのにねえ?」

泰子が溜め息を吐くと、健太も苦笑いになる。

「健太は、深い傷を負い過ぎたんです。だからその傷を、三人で埋めようって決めたんです。だから……」

愛はそう泰子に言うのと、ふっと思ひ出したように、一言加える。

「健太のハーレムじゃなくて、私達の健太です」

その言葉に、泰子はキョトンとしてから笑い出す。

傍に控えていためぐみも、笑いを堪えている。

「めぐみさんもお久しぶりです」

「愛ちゃんも元気そうですね。新米ですけど、産科医としてお手伝いに来ました」

「診察は、皆お年の医学博士とか、ナントカ大教授とかで、皆男の人だったから、女医さんが一人でもいてくれると、ホッとします」

そう。診察は、産婦人科医師界の大御所が総結集して行われているのだ。

主治医の先生は学会に出すんだ、と張り切っていたが、その前に先に、学会の大御所達が、四国は土佐に総結集して主治医の先生を指導しながら、経過を見守っている。

そして主治医同伴の下、代わる代わる大御所の医師達が診察するものだから、思春期の女子としては、複雑な思いなのであった。

「あー、確かに。でも産科医って見慣れてるから、何とも思っていないと思いますよ?」

めぐみが、ふふつと笑いながら愛のお腹を優しく撫でると、急激な脱力感に襲われた。

「っ!!」

「大丈夫ですか?」

愛が心配して声を掛けると、めぐみは苦笑いを浮かべる。

「これが、『靈子を奪われる』ということなんです。科学者である医師としては、オカルトチックなサムシングにはちよつと抵抗がありました。が、実体験すれば分かります。この赤ちゃんは、生命力エネルギーを欲しています」

「足立一佐も同じような事を言っていました。この子は靈子欲しい欲しいって言ってる、って。燿子やリーヴェはそんな事ないのに……」

自身のお腹をナデナデしながら、「困った子だね」と語り掛ける愛を見ながら、泰子はとんでもない孫ができるんだなあ、と実感を新たにしていた。



入院前のやることである幕僚達や坂本将補等の墓参りを済ませると、三人は入院態勢に入る。

土佐の総合病院の特別室に、それぞれ入院することになる。めぐみも医師団の一人として、研修するという立場で、診察を任せられることも出て来た。

如何せん、皆未経験のことなので、手探りでの診察である。

連日会議が行われ、診察を元にした出産計画の策定が、夜遅くまで連日行われている。

主治医である医師は、大御所の医師達を前に恐縮していたが、大御所中の大御所である医学博士の老医師の、

「皆未経験の立場だ、そういう意味では平等だ。恐縮しなくてよろしい」

との言葉で、活発な意見を出し合える場になっていた。

まず最初に、リーヴェが産気付いた。

リーヴェの身体の小ささを考えて、帝王切開術が選択された。

急遽、外科の名医が招聘されて、丁寧に帝王切開手術が行われた。

術中、急激なバイタル低下が見られたが、泰子の持つて来た霊子のコアで持ち直したリーヴェは、無事帝王切開での出産が果たせた。

やはり青白い肌、そして青い瞳の赤ちゃんは、通常の赤ちゃんより大きかった。

何より、首が座っている事に医師達は驚愕していた。

「やっぱり成長が早い分、これは推定的に一歳くらいだ、と判断すべきだな？」

老医師の発言に、医師団の医師達は頷いた。

派遣された自衛隊の医官の提案により、高速修復材を用いた回復が行われた。医官の言葉どおり、縫合を用いなくても高速修復材を掛けただけで、傷口はみるみるうちに塞がって行き、傷口が綺麗に消えていた。

これは、深海棲艦だから出来ることで、後に続く燿子達には通用しない。それは、医師達の共通認識になっていた。

すぐに産声を上げると、意識を取り戻した母リーヴェエに抱き抱えさせた。

出産直前に駆け付けた深海提督ハーフェンが、「この子は駆逐艦級の子ですね」と、医師団に説明した。

霊子を与え続けければ、すぐに五〜六歳になるが、リーヴェエの希望により、普通に成育させることになった。

早速、リーヴェエのお乳を飲んでいる女の子の赤ちゃん。リーヴェアネス：愛称リヴァは、母親に縋り付いて一生懸命母乳を飲んでいる。

「美味しそうに飲んでる……」

慈しむような笑みをリヴァに向けながら、リーヴェエは授乳をしている。

そんな様子を二人は、

「次はどっちかなあ？」

「どうだろうねえ？……っ、あいたたた……」

燿子の陣痛が始まった。慌てて、愛がナースコールを押し呼び寄せると、

燿子はすぐに、分娩室に運び込まれた。

身長が高くて体格のいい安産体型の燿子は、自然分娩で行う選択をした。

リーヴェエの前例から、霊子のコアを与えて生命力が高い状態での出産を行う。

「!!!」

こちらにも、通常の赤ちゃんより大きい赤ちゃんである。

産道を通る為、骨盤が開くのに激痛が走る。

「大丈夫、燿子ちゃん、頑張って」

「燿子！頑張って！」

めぐみがギュッと燿子の手を握り、反対側では健太が燿子の手を握り元気付ける。

健太がそばに居てくれるだけで心強いのか、歯を食い縛って出産の痛みに耐える。

数時間の苦闘の末、漸く赤ちゃんが産み落とされた。

産声を上げる赤ちゃんの泣き声を聞きながら、燿子は意識を手放した。

「死ぬかと思ったわ」

意識を取り戻した、燿子の第一声がこれである。同じく授乳をしている。

人間と深海棲艦のハーフ赤ちゃんは、やはり通常の成育で育てる、と燿子は決めていた。

名前は陽ひなた。やはり女の子で、人間の肌に青い目に白い髪色の女の子。

健太は、名前は母親に任せることにしていたのだ。

そんな様子を見ながら、愛は自分の赤ちゃんはどんな感じなんだろう？

そう考えつつ、二人の先輩ママの様子を見ながら、自分のベッドに腰掛けている。

特別室には三つベッドを並べて、皆一緒の病室である。

代わる代わる、幕僚達や艦娘達がお見舞いに来てくれる。

スマホからは、宮戸島の仲間達がビデオメッセージを送ってくれていた。

「おっす、愛。頑張ってるか?」

番長の圭一が、いつもの学ランのボタンなしスタイルで、画面にフレームインする。

「愛ちゃん、安産のお守りを泰子さんに預けたからね」

次に、寛太がひよっこ顔を出す。

「よっす、愛ちゃん。ギャルズ達がお守り、ってミサンガを皆で付けて、こっちで応援してるよ」

慎がそう言うと、三人でお揃いのミサンガをカメラに見せる。

「愛ちゃん、元気な赤ちゃんを生んでねえ」

優花がミサンガを見せながら、横から顔を覗かせる。

映像が横にずれると、史絵とギャルズ達が千羽鶴を見せる。

「今日宅配便で送ったから、明日には届くと思うよ!」

望がサムズアップして見せると、史絵が控え目に、

「皆で作りました。……私達も応援してます」

「それな」

「だね」

史絵の言葉に、奈緒子と櫻子も同調する。

「おい、誰かカメラ代わってくれ」

直哉の言葉から少し後に、更に映像が横にずれる。

お揃いのミサंगाを付けた直哉に電、それに卯月に薄雲が映し出される。

「愛ちゃん、そっちには宮戸島を代表して泰子さんとめぐみ先生を向かわせたから、私達はこっちで愛ちゃんの安産を祈念しているよ」

「絶対に、いい赤ちゃんを産むのです」

「うーちゃんは、毎日神社に行つて安産祈願してるぴよん」

「愛さんならきつと大丈夫。頑張ってください」

その言葉の後に、皆集まってミサंगाを見せる。

『頑張れ愛ちゃん！』

「いい友達に巡り逢えたね」

「そうだね……」

そう言った直後、ガラガラツと扉が開かれる。

恵奈カルテットの面々である。

「愛ちゃん、お見舞いに来たよ」

「お腹もものすごく大きくなっちゃって」

「私より大きい……あ、私は太ってるだけだから」

「クラスの皆で、千羽鶴を折ったんですよ」

そう真由が言うと、病室に千羽鶴を吊るす杏子。

「私は早々と出産しちゃったから、間に合わなかったんだよねえ」

そう燿子が言うと、恵奈が、

「出産の日は授業中断して、一組は皆で安産を祈ってたんだよ」

そう言ってくれる。

「そうなんだ。それじゃあ、私もいつ出産になるか判らないから

……っ」

愛が、激痛に顔を歪めた。

すぐに、分娩室に運ばれて行った。

愛は難産だった。

「赤ちゃんが大き過ぎて、産道を通れなさそうだったのだ。かと言って、帝王切開も腹腔破裂の危険があつて選べない。

生命力は、靈子のコアで充分ある筈なのに、バイタルがどんどん低下していく。

名医達は頭を悩ませ、緊急会議が行われている。

取り敢えず、強心剤を投与して生命活動だけは維持して、分娩室横の部屋で医師達が顔を突き合わせている。

腹腔破裂、つまりは母体を犠牲にする覚悟で、出産を強行すべきという意見や、出産を中止して赤ちゃんを犠牲にする……つまりは母体を優先にする意見も出された。

侃々諤々とした会議は、会議が踊れど結論は見い出せなかった。

大御所中の大御所である老医師は、静かに口を開いた。

「倉田先生はどう思うかね？」

めぐみは、まさかこの医師団で、意見を求められるとは思ってもみなかった。

俯いて、暫し考えてから顔を上げた。

「分娩を続行しましょう。バイタルの低下は、強心剤と栄養剤輸液でガンガン栄養を取らせて、対処しましょう。出血しているようなら輸血を、心臓が止まったらカウンターショック、人工呼吸を行いましう。とにかく母体の生命を優先にしつつ、出産を継続させます」

「帝王切開は……？」

医師の一人が口を開くも、めぐみは首を振る。

「もう遅いです。さつきも先生が仰った通り、腹腔破裂の危険があります。母体の生命があるうちに、引き摺り出しましょう」

めぐみは、一番乱暴で過激な方法を提案した。

産道を可能なだけ拡張させて、まずは頭を引っ張った。そこから、愛が激痛でのたうち回るのを、複数の医師で体を押さえ付ける。

「モルヒネを投与しましょう」

鎮痛にモルヒネが投与される。それでも激痛は、愛を襲い続ける。

「バツツンと意識がなくなり心停止した瞬間、赤ちゃんが漸く愛の体内から出たのだ。」

「カウンターショック！」

電極板を胸に当てて、カウンターショックを行う。

愛の身体が跳ね上がると、心臓の鼓動が再開して、呼吸も弱々しくも元に戻る。

赤ちゃんは、本当に赤ちゃんとしては大き過ぎて、

「ママ……」と、意識を失っている愛に擦り寄って行く。

「喋った……」

修羅場とも言える出産を終え、ぺたりと座り込んだめぐみが、ポツリと呟いた。

めぐみが分娩室を出ると、健太が高熱を出して倒れていた。

深海提督曰く霊子の枯渇で、ケツコンカツコカリリングを通じて愛に霊子を奪い取られたんだらう、と。

「しっかり栄養を摂れば、一週間ほどで改善しますよ？」

との深海提督の言葉に、特別室のベッドがもう一つ増えた。

分娩室から出て来るぐつたりしている愛と、その横で愛に擦り寄って行く赤ちゃんを見て、深海提督は目を丸くしていた。

「これは……棲姫か水鬼クラスの霊子を持っていますね……」

そう。複数人が、お腹を撫でたのが原因だった。

大量の霊子を与え続けた結果、ここまで育ったのだ。

勿論女の子である……

病室まで運ばれた頃、愛は漸く意識を取り戻した。

「う……ん……川の向こうで、岩崎三佐が手を振ってました……」

完全な臨死体験である。

この愛達の体験が後々、深海棲艦の産婦人科分野の基礎となって行った事で、

四国に結集した産婦人科医の著明医達が編纂した、深海棲艦出産マ

ニユアルとなって世に送り出され、  
深海棲艦と人間のハーフが増えていくことになるのだが、今は誰も  
知らない。

漸く二人の体調が戻ったところで、名前について話しあいが持たれた。

「名前、どうしよつか？健太」

「うーん。愛が決めてもいいと思うんだけど、一つ考えてた名前があるんだ」

その頃には、特別室のベッドは二つになって、水鬼クラスの赤ちゃ  
ん——と言うより幼児——は、もう既にハイハイを卒業して、とてと  
て歩いている。

青い瞳に白い髪、そして、白人程度の肌の白さ。額にちっちゃな角。

「どんな名前？」

「真愛<sup>まな</sup>って名前。デーゼンリーヴェ、真実の愛」

そう真面目に答える健太に、ふつと慈愛に満ちた笑みで、とてとて  
歩行の練習をしているモンスターベイビーを見遣る。

言葉も、恵奈カルテットが喋ってる言葉を真似したりしている。

「真愛、おいで」

「はい まあま」

とてとてベッドの横に歩いて来る真愛を、愛が抱き上げる。

「ねえ、真愛。こっちは？」

健太の方を向かせると、ぱあつと笑顔で、

「ばあば」

と答える。そして健太の母、泰子の方を向かせて、

「じゃあ、こっちは？」

「ばあば」

と答える。答えられた真愛の祖母泰子は、早くも「ばあば」呼ばわり  
されたことに、苦笑いを浮かべている。

めぐみの判断で、離乳食をいきなり食べさせても大丈夫だろう、と  
いう提案でいきなり離乳食スタートである。

離乳食をスプーンで掬って食べさせると、美味しそうに食べる。

「おいち」

そんな、辿々しいワンフレーズな言葉も、この子があらゆる意味で規格外だ、と言うことを示している。

八月中頃、漸く退院が許されて、健太を愛でる会の三人は、土佐鎮守府の司令官官舎に戻って来れた。

それぞれの赤ちゃんを抱き抱えて、女子会が始まる。

「まあ、一番のお姉ちゃんはりヴァで、その次が陽、そして妹が、おつきい真愛ちゃんね？」

燿子が生まれた順番での姉妹を提案すると、二人はウンウンと頷いた。

「そうだね。しかし、12でママかあ……お母さんを追い抜いちやったね？」

「泰子ママは15歳で産んだって……」

「それも大概よね」

そう言うと、三人はうふふつと笑っている。

出産を見届けた泰子は、めぐみと共に帰途に就いていた。

健太は強いパパになる為に、郷里二佐の下で体を鍛えている。

何れ、陸戦隊員に加入するだろう、と言っている。

勇次郎と悠里が、結婚しました。と、はがきを送って来たのは、その頃だった。

それぞれ最愛の人の亡骸を抱えながら、二人三脚で前へと歩き出す、と綴られていた。

そろそろお盆の季節。死者達が帰ってくる時期だ。

きつと優しいあの二人のことだから、新しいカップルをあつちで出来た新しいカップルで、見に帰って来るだろう。

そんなことを考えながら、育休を過ごしている。

各方面から、出産祝いが沢山届いた。

足立秋也は、子供が三人並んで眠れる、特注のベビーベッドを送り付けて来た。



「ばっか。現金だと、査察する側とされる側で贈収賄になんだろ？」  
と、言うのは本人の弁である。

いきなり扉が開かれると、入って来たのは艦娘達である。

旧土佐鎮守府の艦娘達は、手薄になった四国の教導の為に、各地に  
転属になっていた。

やはり土佐の地は、悲しい思い出が詰まった場所なのだろう。

「提督、赤ちゃんを見に来たわ」

「MonsterBabyは元氣？」

「哨戒も終わりました。今日も異常なしです」

「しかし、真愛は本当に規格外ね………水鬼クラスっていうだけある  
わ」

「北上さん、一緒に抱っこさせてもらいましょ」

「そうだね、大井っち」

皆が順番に、赤ちゃんを抱っこしている。

真愛は、艦娘の皆の名前を覚えたようで、順番に抱き抱えられると、

「びすこねーたん」

「あいおわねーたん」

「ほーしよーねーたん」

「いせねーたん」

「おおいっち」

「きたかみたん」

と、舌っ足らずな声で呼んで来るのだ。

それが堪らなく可愛くて、北上一筋の大井もキュンキュン来るらしい。

愛は、真愛がいきなり卒乳してしまった為、胸が張った時には、リ  
ヴアや陽にお乳をあげたりしている。

真愛についても、いきなりブーストスタートではあるが、通常  
の速度で育てるつもりで居る。

「よっすー！」

翼も、ちよくちよく見に来る。

漸く航空隊基地も完成して、出撃三昧の日々である。

「つばたたん」

真愛も、翼には懐いて来る。

父と母達以外で、一番懐いているのは郷里二佐、と言う不思議である。

「ごりたん」

と言う、ドストレートな名前で呼ばれることになるのだが……

「そうですか。無事出産されましたか」

三人と子供を伴って、坂本家に挨拶に出向いていた。

仏間には、坂本将補と葵の遺影が飾られており、坂本将補の姉でもあり葵の母である、大葉 忍にも出会えた。

若くしてこの世を去った娘のことを、どうか忘れないでやって欲しい、それだけ言うと、

「龍子さん、私はご遠慮して席を外すわ」

そう言って、座を外す。

「あ、お構いなく……」

そう愛が言い終わる前に、忍は隣室に下がってしまった。

「義姉さんも、まだ気持ちの整理が着いてないんです」

そう龍子が言うと、困ったような笑みを浮かべる愛。

「失われた生命があつて、そして生まれた生命があつて、世の中はそう回って行く、と思います」

その龍子の言葉を噛み締めながら、三人は縁側から見える空を見上げた。

——そのとおり、おまん等は前に進むぜよ。

——応援しています。

愛は、そんな声が聞こえた気がした。

今はお盆、死者が家に帰ってくる時期だ。

そして生者は前に進まなくてはならない、やがて命数を使い果たして死者に合流する日まで。

三人のママ達は改めて、この子達を守り育てて行こう、と強く死んで行つた者達に誓った。

## 秋也のブラック鎮守府始末記

八月も下旬のある日、足立秋也は激怒した。必ず、かの邪智暴虐じゃちぼうぎやくの提督を除かなければならぬ、と決意した。

それは、高菜直哉一佐からの連絡だった。四国の鎮守府から、売り飛ばされた子日を保護した。と言うのは。

保護からここまで、連絡が遅れた理由は簡単である。宮戸島鎮守府が、メカいなづまちゃん事件で壊滅していたからである。

『四国に、艦娘を裏風俗に売り飛ばした鎮守府がある。調査を依頼したい。子日は、どこの鎮守府か覚えてない、と言っている。新規建造後、そのまま売り飛ばされたらしい』

「はあ!？」

『東北の方で、反艦娘派の議員が利用していた裏風俗に私達が踏み込んだ時には、艦娘は子日しかいなかった』

「マジで言ってるのか!?!高菜!?!」

『マジだから困ってるのさ。運良く、制服に四国方面隊の腕章を着けていたから、四国だと言うことは分かっている』

「分かった。調べる」

『頼んだよ』

電話を切った足立秋也一佐は、本当に激怒した。まず持っていたマグカップを、壁に叩き付けた。

「ふ……………ふざけんなあああああああ!!!!!!」

ガシャーン

「ひっ」

副官の佐伯汐奈さえきさな三尉が、小さな悲鳴を上げるくらいだった。

「佐伯!警務隊員を緊急動員しろ!副隊長の円城寺と小隊長達を緊急呼集だ!!急げ!!」

「は、はひっ!」

すぐに佐伯三尉が連絡を取って、警務隊員を全員集結させた。

「警務隊員全員、待機状態です。いかがなさいましたか?」

副隊長の円城寺隼人三佐以下、警務隊員幹部の小隊長クラスが執務

室に集合した。

「いかなさいましたか？じゃねえよ!!お前等!!何を見てやがる!!」

ドンツと、机を叩いた。

その殺気染みた気迫に、円城寺以下警務隊幹部が怯んでいる。

脇に控えている、副官の佐伯は最早涙目である。

「円城寺い！今すぐ、四国全ての鎮守府に査察を入れる。緊急査察だ！」

「な、何がありましたの？」

「いいか、よく聞け。俺達の手落ちで、四国の鎮守府の何処かの新規建造艦娘が、裏風俗嬢として売られてたんだよ！」

「んなつ!？」

驚く円城寺三佐に、机を叩いた拳をぐつと握り締めながら、秋也が睨み付ける。

「警務隊に喧嘩売るなんざ、いい度胸じゃねえか。緊急査察して、ケツの毛一本残さず調べ上げろ！いいか!?!徹底的に調べ上げろ！自由裁量で、あらゆる手段を用いて不正を暴け！ブラック鎮守府は容赦なく潰せ！抵抗するやつは武力を以て叩き潰せ！」

「はっー！」

「俺は土佐を調べる」

「かしこまりました！」

次々と、査察に向かう警務隊員達を見送りながら、秋也は土佐鎮守府に向かった。

「どこの鎮守府だよ？マジふざけんなってーの。見つけたら、その鎮守府に核爆弾を撃ち込んでやる」

やって来た土佐鎮守府で、不満をぶちまけた。

副官の佐伯三尉と共に、顔パスで司令官執務室に上がり込んで、丁度いた翼相手に、文句をぶつけたのだ。

「何があったの？秋也さん」

応対した翼がキョトンとしていると、秋也は畳み掛けるように事情を説明する。

「四国のどこかの鎮守府が、艦娘を売りやがった。という訳で、全鎮守

府で緊急査察だ」

土佐鎮守府「うちが、艦娘を売る訳無いじゃん？」

尤もな意見だが、秋也は翼をデコピンする。

「あいたつ」

「アホたれ、そんな事は百も承知二百も合点じやい。全鎮守府で緊急査察だからな。ここを拠点に指示を出すから、会議室を借りるぞ？」

と無理やり会議室を借り切って、警務隊員達の指揮を、ここ土佐鎮守府で執ることになった。

「あ……あの……司令官決裁で止まってる大量の始末書を発見しました……数が異常なので……隊長のご判断を……」

土佐鎮守府での緊急査察の結果、佐伯三尉が譴責処分で済ませた警務隊に報告不要の、大量の始末書を発見した。

理由は、男子寮での騒ぎ過ぎや廊下でおつ始めたりしたことが原因だ。因みに、全部翼である。

「お〜お〜が〜きい!!!」

翼の頬をムニツと掴んで、両側に引っ張りながら説教を始める秋也。

「いひゃいーいひゃいって!!」

「全く、何考えてんだ!?!節度を守れ、節度を!いくら何でも、廊下でおつ始めるな!」

愛達が、学校から帰って来たところで、警務隊員が出入りする物々しい雰囲気にも包まれた鎮守府に、愛は首を傾げた。

「何か有ったのかなあ?」

「まあ、あのアホ隊長だし、大丈夫でしょ?」

「そうだね」

そんなことを言いながら執務室に入ると、秋也が翼を正座させての説教中だった。副官の佐伯三尉は隊長である秋也の代わりに、会議室で花梨と査察結果を取り纏めている。

「ああ、お帰り。愛ちゃんに燿子に健坊」

「また入り浸りですか?」

「違うんだよ。このアホタレが、また始末書を量産して……じゃなくてだな」

秋也は、ことのあらましを三人にも説明した。

健太は激怒した。必ず、かの邪智暴虐じやちぼうぎやくの提督を除かなければならぬ、と決意した。

「絶対許せない。僕が、その提督ぶつ殺して来る!!」

そう言っつて、深海棲艦の鉤爪を出して激怒している。

そんな健太を、二人の嫁がまあまあと宥めている。

「ところで、嫁三号はどこよ？」

「はあい？」

司令官私室から顔を覗かせるリーヴェ。扉が開かれると、真愛が中からトテトテ歩いて来る。

「まあま、ぱあぱ、ねえね、おかえり」

「キエエエエエ!? シャベッタアアアアア!」

真愛と初対面の秋也は、驚愕した。

「でけえな。俺のことは、秋也様と呼ぶんだぞ？」

「あい、あきやたま」

「よし、偉いぞ」

秋也は真愛を抱っこする。何故か、秋也にも懐いているようだ。

「俺は、昔っから小さい子には懐かれてたからな」

そんな、しょうもない自慢をしつつ、真愛を抱っこしながら頭を撫でる。

頭を撫でられると、真愛はニコニコしている。

再びリーヴェに子守を任せると、愛は司令官執務室の椅子に腰掛ける。

「それで、売られた子は怎么样了ですか？」

「うん。子曰は、高菜つげもんが保護したから大丈夫だ、と思うんだけどね？」

「つけもん？」

「ああ、高菜一佐の俺的ニックネーム。同期だしな？」

「ああ、先生のところですかあ……また嫁が増えそうな予感」

「結局よ、艦娘つて妊娠しねえじゃん？今のところ、妊娠の例が確認で

きてねえ訳だ。深海棲艦の健坊は、三発三中なのに」

秋也がそう言うのと、健太の顔が真っ赤に染まる。愛と燿子も顔を赤らめる。

「それで、風俗嬢として売り飛ばされることも、昔から無くはなかったんだよね、残念ながら。身を持ち崩して、自らその道に進む子も居る訳だ、脱柵して。大抵連れ戻されるけどな？」

「と言いますと?」

「ほら、俺北海道で警務隊やってただろ?ホストに入れ込んで、闇金で借金拵えた艦娘が…ってケースも見て来た訳よ」

『…………』

「まあ、艦娘も本質的には女の子だからねえ。チャホヤしてくれる存在が欲しい訳よ」

秋也がソファアーにどっかかり座り込むと、燿子がコーヒーを淹れて持って来る。

そのコーヒーを飲むと、にいつと笑った。

「努力の跡が顕著だね、及第点」

「ふふ、有難うございます、足立一佐」

燿子の頭をぽふつと撫でると、秋也は真顔に戻り話を続ける。

「何故、艦娘は子が成せないのか?これは大貫さん亡き後、明石を締め上げて訊くしかねえが、今は関係ない話だな?」

その言葉に、三人が頷く。

「このジレーネ戦争で、提督も艦娘も多数死にしまったし、何より坂本のとつつあんが死にしまった。結局、ただでさえ足りない提督を、よその鎮守府から引つ張って、新造艦娘を配備して、旧土佐鎮艦隊を各地に分散配置する。ここまでは良かったんだ。坂本のとつつあんなは、警務隊を増やしたのはいいんだが、警務隊としてはトーシロを入れちゃった。坂本のとつつあんとしては、後々教育していくつもりだったんだろうけどね。そんな訳で、警察力が落ちた矢先のこの出来事だ。円城寺を中心に、警務隊を立て直している最中だったんだけどなあ」

秋也は、大きな溜め息を吐いた。

実際、警察力の低下は深刻だった。追加配属した警務隊員は陸戦隊

である。確かに、突入捜査には役に立つ連中だが、捜査で言えば素人である。

もう、提督裏の警務隊の怪死事件という裏技が使えなくなった今、警務隊がそう言うブラック鎮守府を潰して行かなくてはならない。

秋也は、頭痛を感じながらもコーヒーを飲み干す。

「さて、長々と愚痴を聞かせてすまんね」

秋也は、溜め息を吐いてから三人に笑みを浮かべる。

「いえ、私達に協力できることなら、言ってください」

「そうよ！いくら何でも酷過ぎるわ。艦娘を裏風俗に売るなんて」

「そうだよ！僕が八つ裂きにしたいくらいだよ！」

三人共、秋也を見て頷いた。

そんな所に、警務隊員が入って来た。

「隊長！査察拒否をしている鎮守府がありました！艦娘から砲撃を受けて、死傷者多数です！」

「どこの鎮守府だ!？」

「壊滅して、九州の提督が入った美波鎮守府です」

「しかし、あの鎮守府は艦娘ごと移籍して……わかった。均等配置して、美波に新規建造配備された艦娘が売られたのか……クソが！艦娘もグルか!？」

そのやり取りに、愛は意を決してビスマルクを呼び出した。

「提督、緊急の用件って何よ?」

「今から、美波鎮守府を攻略します。……出撃準備をお願いします」

「は……はい!?!何を言ってるのよ!?!」

ビスマルクは、愛の言っていることが分からなかった。

「美波鎮守府が、査察拒否をしています。どうもブラック鎮守府化したらしいので、攻撃を加えます。所属艦娘も提督と共犯関係にあるようです。艦娘同士の戦闘になります。よろしくお願いします」

「わ、分かったわ……すぐに艦隊編成を行うわね」

秋也と愛が指揮艦に乗り込むと、秋也がエンジンを掛ける。

「よっし、戦闘指揮は愛ちゃんに任せるぜ」



「了解です。リーヴェ・サーカス団第1艦隊出撃！」  
『了解！』

初の艦娘同士の戦闘に、旗艦のビスマルクは厳しい表情で、アイオワも普段の陽気さはなく、真剣な表情である。

鳳翔は仲間同士が相討つことを悲しみ、伊勢はブラック提督へ加担した艦娘達への怒りを滲ませている。

そんな中、大井と北上は「これも任務」と、いつもの様子を崩さない。

因みに暁は、只今第2艦隊所属として、改ル級FSとレ級と、改ヲ級、ル級二隻の中に混じって入って、遠征に出掛けている最中である。今頃お使い任務を終えて、東海沖辺りを航行中だろう。

先に、艦娘達が先行して室戸岬を通過し、美波を急襲する作戦である。

室戸岬を超えたところで、鳳翔が異変に気づいた。

『美波鎮守府基地航空隊が接近してます！迎撃しますか!?!』

「基地航空隊!?!美波にはない筈だが……まさか、艦娘を売った金で……!?!」

秋也が、ギリつと歯を食い縛ると愛が、

「迎撃してください！第2艦隊をすぐに呼び戻しさなくては！」

『了解です』

『こちら、土佐本部。第2艦隊は今和歌山沖で、そっちに向かってるわ』

耀子からの通信が割り込んで来る。それに一安心すると、航空戦の状態をモニタで確認する。

鳳翔と伊勢が、群れをなして襲い掛かって来る基地航空隊を迎撃する。

基地航空隊と言っても全て艦戦で、陸戦や陸攻がないのが救いである。

敵艦隊は戦艦2、重巡2、空母2の艦隊である。

とは言え、基地航空隊の空襲に阻まれて、進めないでいる。

「どうする!?! 一旦撤退して、こつちも基地航空隊を出すか?」

「いいえ、今後退いたら敵の思う壺です……!」

『敵艦見ゆ、基地航空隊の後方から接近中。美波鎮守府艦隊です。こちらへの攻撃態勢を取ってます』

鳳翔の報告で、愛と秋也の顔が険しくなる。

「実弾装填。……美波鎮守府艦娘艦隊を敵と認定。轟沈を許可します」

愛は、苦渋が滲んだ声で命令を下す。

『りよ、了解……!』

ビスマルクも、緊張感を漂わせた声で返事を送る。

制空権は取られつつあった。

必死に、艦娘達が爆撃して来る航空機を撃ち墜としている。

敵空母から発進した艦載機も加わって、こちらの艦載機の損害が大きくなって来ている。

「第二次攻撃隊発艦!」

ビスマルクの指示に、伊勢と鳳翔はすぐさま、残りの艦載機を発艦させる。

しかしその直後、撃ち漏らした爆撃機が急降下して来る。

「きゃあああっ!!」

艦娘達の悲鳴が響き渡る。

『損害は!?!』

愛の通信が聞こえて来る。

「旗艦ビスマルク、小破よ」

「アイオワ、無傷ね」

「鳳翔、小破です」

「伊勢、小破よ」

「大井、中破食らったわ」

「北上、同じく中破、いや参ったね」

基地航空隊は引き返して行くが、遠くからおかわりの基地航空隊が

飛んで来る。

「あれ、拙くない?」

北上がおかわりの基地航空隊を指差すと、ビスマルクの顔が青褪める。

「ま、不味いわよ。これは……撤退も出来ない……詰んだわ」

「ここでDeadなんて嫌よ」

「ここまで……ですか」

「……………くっ」

「死ぬ時は……」

「一緒だね、大井つち」

そんな、悲壮な覚悟を固めた艦娘達に通信が聞こえて来た。暁の声である。

『まだ諦めちや駄目よ!』

基地航空隊の後方から、たこ焼き・トビウオ艦載機が追い縋っている。

そしてこちらに到達する前に、後背に追い付いて次々と墜として行く。

その間に、ビスマルクは陣形を再編させて、一旦距離を取る。

「いやいや、待たせたわね」

「これの借りは、形のあるもので返してもらおうか?」

宇津井<sup>改</sup>ジエニ<sup>ル</sup>フア<sup>級</sup>ーとレ級の声と共に、第2艦隊が美波鎮守府艦隊の後方からやって来る。

一気に距離を詰めて、第1艦隊との挟撃態勢を取った。

「君達は包囲された、大人しく降伏しなさい」

やる気のない声で、レ級が降伏勧告をするが、敵旗艦戦艦娘の、「誰が降伏するのですか!?!」

と云う言葉に、レ級の顔が残忍な表情になった。

「じゃあ、シネ」

『ビスマルク、反撃です。こうなったら仕方ありません。全艦撃沈してください』

愛の冷酷とも言える命令に、ビスマルクはぐつと目を閉じながら、

手を上げ振り下ろした。

前方と後方からの砲撃雷撃の雨霞により、美波鎮守府艦隊の艦娘は、一隻残らず海の底に沈んで行った。

艦娘達と深海棲艦達に護衛されながら、指揮艦を美波鎮守府の埠頭に横付けすると、

庁舎から、自動小銃の銃撃が届き、秋也と愛は屈んで身を隠す。

「ひえっ!!」

「彼奴等、お構いなしか……」

庁舎の向こう側でも、銃撃戦が始まっている。

「くっそ！彼奴等、市街戦始めやがったか……住民を巻き添えにする気か!?!」

「ど、どうしましょう!?!」

「愛ちゃん、小銃撃てつか?」

「やったことはありませんが……」

「そこに、M4カービンを二挺積んである。ちよつと取ってくんね?」

「は、はいっ」

そろそろと床を這って、船室に立て掛けてあるM4を取ると、一挺を秋也に渡す。

もう一挺は、ストラップを掛けて自身が保持する。

ドガガガガガガガガ

「ひいっ!!!!」

大きな音がして、愛が頭を抱えて隠れると、船室上部に大穴が開く。

「野郎、キャリバーファイフティM 2まで持ち出しやがった……愛ちゃん、そこを動くなよ?。」

艦娘達は、陸地に向けて砲撃を放っている。いくら艦娘でも、M2が直撃したら怪我では済まない。

散開して、距離を取りながらの砲撃戦である。

そして、M2の砲撃が鳴り止んだ瞬間、愛がバツと立ち上がってM2の再装填をしている隊員に向けて、トリガーを引いた。

タタタン

「ぐわあっ!!」

頭を撃ち抜かれた隊員は、そのまま即死する。

「ばかー撃たれるぞー!」

秋也がすぐに愛を引つ張り込むと、再び小銃の弾幕が張られる。

銃撃戦開始から、数時間が経過していた。

愛も秋也も、遮蔽を取りながら応戦していた。

キュラキュラキュラキュラ

聞き覚えのある、キャタピラ音と共に、

ヴィーンとガトリング砲の音が聞こえて、悲鳴のような声がかかる。

おそらく、連装砲ちゃんと『海援隊』が到着したんだろう。

「勝ったな」

「はい……」

「しかし、愛ちゃん強いな……初めての白兵戦だろ?」

「母は強し、です」

指揮艦の壁に、二人凭れ掛かりながら郷里二佐の『制圧完了』と云う通信に、ほっと安堵する二人だった。

死体が運び出され、生存者が次々逮捕されていく中、愛と秋也は司令官執務室にいた。

司令官の中村二佐は、抵抗の末に射殺され、鮮血に染まった執務室である。

それと同時に、駆け付けた円城寺等が捜査を行う。

艦娘の売り飛ばしだけではなく、麻薬の密売や武器の横流しの証拠まで出て来た。

直ぐに警察にも連絡して、売り飛ばした先には捜査が入るだろう。

「艦娘の売り飛ばしだけじゃない、麻薬の密売に、武器の横流し……何て連中だ」

「……もう二度と、艦娘同士の……自衛隊同士の戦いはゴメンですな?」

「全くだ。人間同士殺し合いはかかねーよ」

この一斉査察により、今まで摘発を逃れていたブラック鎮守府は、相当強引とも言える捜査で検挙・解体され、これを機に足立幕僚総監の手により、鎮守府の再編が行われた。

信頼できる旧土佐鎮守府の艦娘を、教導艦娘から大和のように司令艦娘に補職して、

瀬戸内海側の鎮守府を全廃して、中国地区鎮守府に瀬戸内海の守りを任せ、四国<sup>太平洋</sup>南岸に集中配備した。

こうして、秋也の大仕事『ブラック鎮守府殲滅作戦』が終了した。

「あー、やれやれ。親父と七原のマッチョじいにめっさ叱られたよ」  
秋也は、あまりにも非常識且つ強引過ぎる捜査と、鎮守府同士の内戦に関して、減給処分を食らっていた。

勿論、加担した愛達土佐鎮守府の面々も、全員揃って減給処分である。

当然ながら、検挙したブラック提督達は懲戒免職の上で収監され、ブラック提督に加担した艦娘は解体処分となった。

「足立将補も七原准将もマジ怒りしてましたね……」

無論、叱られたのは秋也だけではなく、愛もである。

「まあでも、これで四国からブラック鎮守府が一掃出来たなら、安いもんよ」

「そうですね」

秋也と愛は、顔を見合わせると頷き合った。

## 深海提督とほっぼちゃんの四国訪問記

四国大戦争から少し経った九月頭。

秋也は重大決定を行った。

「各鎮守府にも法務士官を置くべきだ」

とのことである。

そんな訳で、艦隊の常識番こと大塚三佐が三ヶ月間、警視庁捜査一課に出席研修となった。

「岩崎くんが生きていれば、私なんぞが警視庁に出席研修しなくても良かったのになあ……少し寂しくなっちゃったよ」

「そんな事言わないでください。東京には、ご家族がいらっしやるんでしよう。久しぶりに家族孝行してください」

寂しそうに言う大塚三佐を、愛は激励の言葉で送り出すと、大塚三佐は東京に旅立って行った。

「やっと、あの小煩いオッサンが居なくなる」

と言うのは、鎮守府一の始末書クイーン“永世始末書女王”の大垣翼である。

最近は、空を飛ぶ任務も減って来てしまった上、

先の美波鎮守府との抗争でも、出番がなかったのが不服で、男遊びに精を出している。

そんなある日だった。

今日も、学校が終わると早々と帰って来て執務中の愛に、入り浸つてる翼と秋也、それに真愛。

耀子の陽ひなたとリヴァは、リーヴェが私室の方で面倒を見ている。

「今日は、言葉のおさらいだ。俺様は？」

「あきやさま」

「じゃあ、あたしは？」

「つばさちゃん」

「あれは？」<sup>愛</sup>

「ままあ」

「健太君は？」

「ぱぱあ」

「愛のお母さんは？」

「ぱぱあ」

「愛のお父さんは？」

「じじい」

「おー、えらいえらい」

二人で、真愛の頭を撫で繰り回している。

推定三歳の真愛。すすくと成長中である。

もう既に妖精さんを認識できている為、将来の有望株である。

尤も、母親の愛としては、「同年齢の男の子には近づけません！女子校に通わせませす！」

と、どこかの誰かさんみたいなことを言っている。

そんな訳で、初等教育は防大出の翼と秋也の担当である。

最近、鉛筆を握ってお絵かきも始めている。

二人も、(岩崎三佐が生きていれば、こう言うのは彼の仕事なんだけど、)と、思っている。

そんな様子を、微笑ましく見ている母親の愛が書類を片付けていると、

電話が鳴り出す。

ハーフェンからの電話である。スピーカーモードで応対する。

「はいもしもし？」

『もしもし、ご無沙汰してますね。ちよつと急なんですけど、やのあさって弥明後日四国の視察序に土佐に寄ろうか、と思います。坂本さんのお墓にもお線香を上げませんと』

「ああ、そうですね」

『一応、参事官のほっぼちゃんを同行させますので、お願いしますね？』

「分かりました」

『それでは弥明後日に』

と電話が切れた。



「なー、深海提督遊びに来んの?」

「みたいですね。秋也さんは来られますか?」

「ぼっか、円城寺が頑張り過ぎて俺の仕事が回って来ねえんだよ。来るに決まってるんだろ?」

円城寺三佐は、あの事件の後再編された鎮守府を巡回しては、規律を説いて回っている。

中国人ぽい丸メガネを掛け、若白髪の強面の男だが、優秀な男である。

そんな訳で、警務隊長殿は土佐鎮守府に入り浸っている。

名目は、若い司令官が間違いを犯さないように見張っている、と言うものである。

「ですよ?」

「俺はつけもんと違って、ちゃんと仕事はやってっぞ?」

「はいはい、そうですね」

実際、午前中は《勝手に》司令官執務室を借りて、書類を決裁している。

と言うのも、高知駐屯地は仮設中で、コンテナハウスの執務室で一人執務をしているのも、秋也はあまり好きではないのだ。

話し相手の円城寺は、普段から現場に行っただきりで、なかなかやって来ない。

そんな訳で秋也は、ここ土佐鎮守府に入り浸って仕事を終わらせると、翼と共に真愛の教育をして過ごしている。

副官の佐伯三尉は、円城寺と共に各地を回っている。

「そう言えば秋也さんは、最近翼さんとセットで居ることが多いんですけど。付き合ってるんですか?」

愛が、書類からは目を上げずに、最近の疑問を訊いてみる。

「ぼっか、恋人じゃねえよ。友達だな?」

「うん、セフレ」

「……………」

愛のペンの動きが止まって、顔を上げた。

ケロツと笑ってる二人に真愛が、

「ねー「せふれ」ってなに? たべもの?」

と、訊いて来る。

「それはねえ、「せつくす」する「ふれんど」……あいたつ! 何すんのさ秋也さん!?!」

「ばっか、推定三歳児に教える言葉じゃねえよ」

悪乗りで教える翼を、チョップで叩く秋也。

そんな二人を見て、真愛が口を開く。

「あきやさま、ぼーりよくはよくないんだよお? ママが言ってた」

「そうだな。でも、悪い子を叱る時に「めっ」ってするだろ? 今俺様は、こいつに「めっ」ってしてやったんだ」

「おー……つばささん悪い子なの?」

「あははっ、そうみたい」

「めっ」

「ごめんちゃい」

そんなやり取りを見ながら、愛はふふつと笑って再び執務に取り掛かる。

「ところで「せつくす」ってなに?」

『……………』

視線が翼に集中する。真愛は純粋なおめめで、秋也と愛はジト目である。

「そりゃあ……」

そう言い掛けて、殺気を感じた。

愛が立ち上がり、拳銃を持ってニコニコしている。

「翼さん「めっ」ですよ」

「ごめんなさい」

「ままあ、「せつくす」ってなに?」

「えっとね、その言葉は秘密の言葉だから、あんまり言っちゃいけないんだよ。もっと大きくなったら教えてあげるから、それまでは言わないようにね?」

「はあい!」

にぱつと、笑みを浮かべる真愛に笑顔を返すと、愛は椅子に腰を下

ろして拳銃をデスクの引き出しに戻す。

四日後、深海提督が北方棲姫を伴って四国歴訪にやって来た。

そして、最後に立ち寄ったのが土佐鎮守府だった。

それまでは、外務省の担当者を伴ったの表敬訪問だが、

土佐鎮守府は私的訪問と前置いて、外務省の担当者を先に帰らせての訪問である。

「お久しぶりです。皆元気でした?」

「はじめまして、北方棲姫です」

執務室に顔を出した、ハーフェンと北方棲姫。

執務室でお出迎えなのは、愛に秋也に翼と花梨と言う、いつもの面々に耀子と健太、そしてリーヴェに三人の子ども達、それに秘書艦のビスマルクである。

最近、艦娘達は練度確認と称して、鎮守府に日夜急襲を掛けている。これは七原式訓練法で、東京に呼び出されて七原准将に二人仲良くこつてり説教された時に、

四国の練度向上の為にはどうしたらいいか?と言う相談を持ち掛けた上で、編み出した方法である。

という訳で、ペイント弾を装填して日々海賊のように暴れ回ってる第1艦隊と、深海棲艦なのにお使い任務ばかりの第2艦隊と、何か逆じゃね?と言う状態になっている。

そんな中、今日はビスマルク以外は、海賊の扮装をして急襲している。

「それじゃ、自己紹介をした方がいいかな?」

「そうですね」

と、早速自己紹介が始まる。

その頃には、耀子がコーヒーを淹れて、皆に配り終える。

真愛も、ちゃんと名前を覚えた。

「しんかいていとくさんにー、ほっぽー……ほっぽちゃん」

「うふふ。やっぱり、規格外の子供ですね?」

「うん、とっても可愛い子……とっても強い霊子を感じる」

深海提督と北方棲姫が頷き合う。

「ところで、「せつくす」ってふたりとも……あつ、言っちゃいけない言葉だった、ままごめんなさい」

初めてのお姉さん達に、知らない言葉を訊こうとして、あつとした顔をして両手で口を塞ぐ。

そんな姿に、皆はどつと笑い、ビスマルクは額を抑える。

「原因は翼ね……?」

「まあ、そうですね」

当の本人は、そんな可愛い真愛を笑っているし、お客の二人も微笑ましく見つめている。

「真愛ちゃん。おいで」

とてとてと歩いて来る真愛のおでこに、そつと触れる。

ぽうつと光ると、真愛は少し顔を赤らめて愛の元に戻って来る。

「提督、何をしたんですか?」

「うふふ、ちよつと知識と羞恥心を授けてみました。翼さんが余計な発言をしても大丈夫でしょう?」

「さすがは深海棲艦の支配者……で、真愛どうしたの?」

真愛を抱き上げると、耳打ちされた。

「ままも、ぱぱと夜、してたの?せつくす」

「あー……起きちゃってたのね。真愛には、ちよつと早いかな。ちよつと翼さんに、メツってしておいで?」

苦笑いを浮かべながら耳打ちし返すと、真愛は壁に立て掛けてある耀子謹製のハリセンで、翼をばしんと叩く。

「つばささん、めっ」

「あたっ、ごめんなさい」

そんな様子に、大受けしてるのが秋也である。

ビスマルクは、

「この子の教育、大丈夫かしら……?」  
と心配をしている。

「びすこちゃん、頭痛いの?」

「いいえ、大丈夫よ」

しやがむと、真愛の頭をナデナデする。

「うふふ、皆に愛されてるんですね?」

深海提督が、笑いながらコーヒを啜る。

「そうなんですよ。陸戦隊には、既に『真愛ちゃんファンクラブ』まで立ち上がってて、会報もできてるんだそうです。勿論その主犯は、そのこの翼さんと秋也さんなんですけど、秋也さんの撮る写真が上手で」「一応俺様、写真が趣味なんでね。もしよかったら、お二人もヌードを撮ってもいいぜ?」

そんなセクハラ攻撃に対して、顔を赤くするのが深海提督、自分にそんな需要はない、と思っっている北方棲姫。

ばしん

「はだかの写真はメツなの!」

真愛が、秋也をハリセンでぶっ叩く。

「はっはっは、冗談だよ」

「ほんとうに……?」

じーつと見つめる真愛に、秋也は笑顔で頷いた。

「ならよし」

そう言うと、ハリセンを元の位置に戻す推定三歳。

ママの元に戻る。

愛は真愛を抱っこすると、

「デスペランの方はどうですか?」

「ええ、摩耶や多摩、それに神通ちゃんも、毎日楽しく暮らしていますよ」

「えええ?神通さん、未だに家出中なんですか?」

「今は、桐山さんと和解して単身赴任中で、週一回通い妻をしていますよ」

「そうなんですわねえ……」

「さて。ちよつと深海提督に話があるんだが、場所変えね?そうだなあ、愛、それにビス子、従いて来な?」

「何でしようか?」

真顔で切り出した秋也に、真顔になった深海提督。

「ちよつと気になったことがあつてよ。ジレーネ戦争について」  
「……………分かりました」

土佐鎮守府の地下倉庫。

防音が為された静かな場所。

そのコンテナに、愛とビスマルクが腰掛けて、深海提督は立ったままで、秋也は壁に凭れ掛かる。

「ハーフェン、とか言ったか。大貫 悟は本当に死んだのか？」

「えっ？」

「足立一佐！大貫さんは殺されたのよ！国民の目の前で！」

秋也の言葉に愛は絶句して、そしてビスマルクが咎めるように言う。

「俺は、あの用意周到なオツサンが、あつさりくたばるとは思っちゃいねえ」

「確かに……………」

「そうかも知れないけど……………」

愛が頷いて、ビスマルクは困惑した顔になる。

「もし、全てを覚悟した上で死んだのなら、後継者を置いたことになる。容疑者は、一人上がつてんだよ」

「と言いますと？」

愛が問い掛けると、

「高菜直哉」

その言葉に、全員がシーンとなる。

ハーフェンは、其の場に座り笑みを浮かべる。

「まず、一つわかったことがある。宮戸島の奇跡、あれは茶番だろ？」  
「ええ」

ハーフェンが答えると、愛は「ああ」と納得した思いだった。

「高菜直哉は、『導き手』として選ばれたんだろうよ。まずは、愛ちゃん  
の師匠だろ？ それに、『不敗の女神』の黒幕だろ？ 大ちゃんから聞  
いてんだぜ。ジレーネ殲滅の為の重要なピースを集めながら、何年も

茶番をし続けてきた。そして大貫の預言どおり、ジレーネが出て来て倒された。俺様はこれで終わり、なんて思っちゃいねえ。其の為の艦娘融和政権だ。高菜家の長男が経済を、そして長女と其の学友が政治を支配し、いずれ次男が軍事を握る」

「流石にそこまで行くと、仮想戦記の気がします」  
「そうね」

秋也の言葉に、苦笑いを浮かべる愛とビスマルク。

「かもな。ここから先はおれの想像でしかないが、何故高菜源一郎はまだまだ働き盛りの年齢で引退して、家に引き籠ったのか？これも大ちゃん情報だが、かなりの書物を集めている『読書狂い』だそうじゃねえか。言い方を変えれば、知識の蒐集者。スフィックス。高菜の親父さんが、何か知ってるかもしれないねえな。この世の中の理を」

そんな秋也の物言いに、満足の行つた笑みを浮かべるハーフェン。  
「それで、もう一つ訊きたいことがあってな。ここからは、明石を締め上げて訊いてもいいんだが、艦娘の妊娠能力は封印されてるな？」  
「ええ」

その言葉に、強い衝撃を覚える愛とビスマルク。

「おかしいんだよ。避妊とかせずに、艦娘と同衾して妊娠例がこの七年以上の間で一例もない、つてのは。これはあれだな、反艦娘勢力の不信・疑惑を逸らす為だな。これで子供が出来たら、きつと不幸なことになる。子供は研究材料にされるだろうな。それこそ、モルモットとして」

「……………」

ビスマルク自身、好きな人がまだいないが、他の鎮守府の僚友には提督と恋仲の艦娘も居る。

子供の望みが絶たれたことは、ショックではあるだろう。

「まあ、明石を締め上げるしかないが、ビス子？デリケートな質問だが、生理はあるか？」

「ええ、あるわよ」

「と言うことは、生物的機序は機能してる、つてことだな？」

「それじゃあ……………」

「うん、封印を解くことは可能だと考える」

自身の仮説を述べると、ちらつとハーフェンを見る。

ハーフェンは、満足そうな笑顔で頷いた。

「なら良かった。高菜つげもんのところにも、子供は生まれて欲しいもんなあ？」  
「先生が、それを望んでるとはあまり思えないんですがね？」

秋也の言葉に、愛が苦笑いを浮かべる。

「まあそれでも、南三陸鎮守府の武藤二佐なんぞは大喜びだろう。あのオッサンは、日本一の艦娘ラヴァーだからな？」

その言葉に、全員が頷いた。

「さて、大貫 悟の件は宿題だ。俺達は、大貫 悟にどこかで見守られている、或いは見張られている、と思っ行って行くべきだろうな？」

その言葉に、ハーフェンが立ち上がった。

「私も、大貫さんの『死後』どうされてるかは判りません。もしかしたら、どこかで見守っている可能性はあるかもしれませんが……」

「全く。生きてれば生きてたで、死んでれば死んでたで、俺達を苦勞させるオッサンだぜ」

そんな秋也を、皆苦笑いで見ていた。

戻って来ると、真愛はほっぴちゃんのスマホで、大人しく『それいけ！ワンパンマン』を見ていた。

耀子とリーヴェは自分の子供を抱いているし、健太はそんな二人の傍らにいる。

副官の花梨は、せつせと自分の仕事をしているし、翼は漫画を読んでいる。

そんな所で、軍港が賑やかになる。

海賊船が帰還して来たのだ。

「おっ、土佐海賊団のお帰りだな？」

海賊に扮した艦娘達が、庁舎に入って来る。

「ただいま!Heeeyooーテートクー！」

「本日は、安芸鎮守府を襲撃して来ました」

「旧土佐の艦娘がいない鎮守府は、まだまだ対処が遅いですね」



「愛ちゃんの為に、いいもの分捕って来たわよ」

「愛ちゃんと言うより、健太君と言ったほうがいいかも……」

大井が、背負ってるズダ袋から、無修正のエッチな本やDVDを取り出す。

「健太君と真愛は、見ちゃ駄目！」

そう言いながら、ズダ袋に戻す愛。

「ええと、要するに官舎まで押し入った、と？」

ジト目で見ている愛に北上が、

「うん、ついノリで」

「……後で、安芸に行って返して来ます」

其の愛の行動が、安芸鎮守府の提督（40代男性）に取って最大の恥辱になるとは、愛は思ってもいない。

「まあ、皆帰って来たところで飯にしようぜ。俺様の奢りだ！」

『おー！』

第2艦隊の皆も連れての食事である。

ハーフェンも北方棲姫も、艦娘達との親交を温めて帰って行った。

## 真愛ちゃんの大冒険

それは、九月のとある昼下がりの事だった。

『真愛がいなくなった!?!』

学校帰りの愛と燿子と健太は、半泣きのリーヴェエの言葉に絶句した。

「ごめんなさい……わたしがトイレに行つた隙に……」

「秋也一佐と翼さんは!?!」

「翼さんは、海賊団に加わつて、秋也さんは……」

愛の詰問に、丁度戻つて来た秋也は、

「すまん、急な連絡が来て席を外してた」

と、申し訳なさそうに言う。

「正門には、歩哨が立つてる筈だよね!?!」

「それがなあ……まあ従いて来いや」

秋也が先導して、敷地内を歩いて行く。

リーヴェエは、陽ひなたとリヴァを抱っこしながら従って行き、

愛と燿子と健太は、そのうしろを従って行く。

土佐鎮守府の敷地の塀は、コンクリート壁ではなく

金網で、上部は有刺鉄線になっており、

一部に『何らかの強い力で広げられた』跡がある。

「多分、ここから出たんだと思うが、おっそろしい馬鹿力だよな?」

『……………』

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

リーヴェエが本格的に泣き始めたので、陽を燿子が、リヴァを健太が抱き抱えて、

愛がリーヴェエを慰めている。

「それで、捜索隊は?」

「郷里のオツサンが一個小隊を差し向けてると思うが……土佐も広いからな……GPSでも付けときやよかつたか?」

秋也は再び、大きな溜め息を吐いた。

そんなママ達の心配も知らず、推定三歳児の真愛は、海岸線をとて歩いていく。

「♪」

秋也が子守唄に歌っている「U. S. A」を口ずさみつつ、U. S. Aダンスをしながらとつとこ歩いている。

海岸沿いの歩道を歩いているが、車がビュンビュンと走っているのも新鮮な思いがして、

お目々をキラキラさせている。

「ぶーぶーだー」

秋也は、結果的に一つ大失敗を犯していた。

言葉の練習も兼ねて、笑点のビデオを見せていたのだ。しかも昔の

……

そう。

手を上げて、横断歩道を渡りましょう

——松崎 真——

という訳で、横断歩道で元気良く手を上げる真愛。

両方の車が停まる中、とてとてと内陸部に歩いて行ってしまったのだ。

『横断歩道を渡る』とは考えていなかった捜索隊は、海岸線を集中的に探していた為、

結果的に、これで郷里二佐の捜索を振り切ってしまった。

交差点を渡って、商店街を一人練り歩く真愛。

商店街のおばちゃん達も「はじめてのおつかい」的なものか、とスルーしている。

真愛はてくてくと、どんどん内陸部に歩いて行く。

郷里達捜索隊と、どんどん離れて行く。

真愛は、児童公園にやって来た。

児童公園では、保育園終わりの園児達が遊んでいた。園児のうち、女の子が駆け寄る。

「知らない子だ！」

「おなまえなあに？」

二人の女の子が駆け寄って来る。

「わたしおおいし大石真愛まな」

自己紹介をして、ペコリと頭を下げる推定三歳児。

「まなちゃんね。私山田麻友良やまだまゆら」

「あたしはね、いまだ今田とし子としこ」

ぎゅつと握手をすると、二人共元気が漲って来る。

靈子を分け与えた感じなのだ。

「なんか、まなちゃんと居ると元気が出てくる」

「いっぱい遊べるね！」

まゆちゃんととしちゃんは、真愛の手を引いて遊具に連れて行く。

全てが新鮮な真愛は、楽しそうに従って行く。

「ブランコだよ、こうやってやるんだよ」

まゆちゃんが腰掛けて、んしょつとブランコをスイングさせると、真愛もよいしょつと腰掛けて、ブランコを揺らし始める。

ぶらーんぶらーんと、三人で無心にブランコを漕いでいる。

そんな様子を、まゆちゃんのお母さんが微笑ましく見ている。

「次はすべり台に行こう！」

「まなちゃん一緒に滑ろう」

「うんっ！」

そんな感じで、きやいきやい笑っている。

とし子ちゃんが勢いよく滑って、顔面からつんのめって転んで泣き出すも、真愛が頭をナデナデすると泣き止んで、傷も塞がった。

「いたいのとんでけー」

「あっ……痛くなくなった」

それを、異常事態に思わない麻友良ちゃんのお母さんは、天然である。

『真愛ちゃんが居なくなつたあ?!』

学校で「倶楽部」と言う名の、TRPG同好会を開催していた恵奈

と愉快的な仲間達は、慌てて学校に戻って来た愛の言葉に耳を疑った。  
「待って！歩哨はいるんでしょ!？」

美雪のツツコミは尤もであるが、この場合常識が通じる相手ではないのだ。

「あのね、金網がこじ開けられて、そこから」

『はあああああ!?!』

全員絶句である。

「愛ちゃん、何言ってるの?」

「訳解らないんだけど!？」

「あの、愛さん。何を言ってるか分からないんですけど……?」

「うん、『お前は何を言ってるんだ?』なんだけど……?」

「論より証拠!従って来て!」

愛は倶楽部の恵奈、美雪、真由、杏子を引き連れて鎮守府にとんぼ返りである。

「大野くん!従って来て!」

「お?あ?おう!」

丁度、サッカーをしていた大野くんも引き連れてである。

脱出現場にやって来た全員は揃って、

『うわあ』

と、声を漏らした。

「今、陸戦隊が一個小隊、海岸沿いを探してるんだけど……」

愛が説明すると、大野くんが、

「まさか、海に落ちたりしてねえだろうな……?」

と、不用意な発言をしたた為、金網の反対側に居たリーヴエが錯乱し始める。

「うわああああ!!!!ごめんなさい!!!!ごめんなさい!!!!」

ぼろぼろ泣きながら、ぺたりと座り込む。

「縁起でもないこと言わないで!!もしかしたら、横断歩道を渡って行ったかもしれないし」

愛が怒りながらに言うのと、冷静な大野くんが指摘する。

「それじゃ、捜索隊無駄じゃね?もつと、捜索範囲広げようぜ?」

『…………』

その指摘に、全員が沈黙した。

お家に帰ると言う、としちゃんとまゆちゃんと別れた真愛は、ずいずいと住宅街を歩いて行く。

行き交うおばさん達に、

「こんにちはー」

と頭を下げる。

まさか、零歳児とは思わない推定三歳児。何の疑問も抱かれずに、

「あら、こんにちは。挨拶できて偉いわね、どこの子？ママはどこ？」

「えっとね、お散歩してるのー」

「そう、おばちゃんのところでおやつ食べる？」

「たべりゅー！」

そう答えると、おばちゃんの家に入って行く。

その直後、そこを愛と娯楽部と大野くんが走って行った。

おばちゃんのお家には、仏壇が置いてあった。

小さい子供と、おじさんの遺影が飾られてあった。

「おばさん、あれなにー？」

「あれはねえ、この前死んじやったうちの子とパパよ」

困ったように話すおばちゃんに、聞いちゃいけなかったことだ、と

直感で感じた真愛は、

「ごめんなさい」

と、頭を下げて謝った。

「いいのよ、ゆっくりして行きなさい。そしたら、まっすぐお家に帰る

のよっ…」

「はーい」

美味しい水ようかんとお茶を楽しんだあと、真愛はおばちゃんの家を後にした。

「おうち、どっちだっけ？」

漸く、自分が迷子になったのに気づいた真愛だったが、

海の方に戻れば帰れる、と呑気だった。

「真愛ちゃんが居なくなつた!? フェンスをこじ開けて脱柵した!?」  
海賊行為練度確認をして、戦利品を担いだビスマルクが戻って来たのは、そんな頃だった。

「WOW! SUPER GIRLね」

「そんな事言ってる場合ですか?」

「そうよ、私達も探しましょう?」

「そうですよ」

「そうだね!」

艦娘達も、真愛ちゃん捜索に乗り出した。

翼も航空隊を出撃させて、捜索を始めた。

そんな大事おわじとになつているとは全く知らず、海を目指していた真愛だったが、海とは逆方向に向かつていた。

「どこどこだろ……?」

ちよつと不安になつたところで、オジさんが通り掛かった。

真夏なのに、コートを着ている……

「あ、おじさん、こんにちは」

「はあはあ……」

オジさんは息が荒く、顔も上気している。

そして、コートをばつと開いた。

オジさんは、コートの下には何も身に着けていなかった。

「?おじさん、なんで裸なの?」

「はあはあ、おじさんのお○んちんどうだい?」

「うんっ、ぱばよりちっちゃい!」

オジさんは、精神的に大ダメージを受けた。子供は残酷である。

オジさんは一瞬蹠跟けると、路地裏に歩いて行く。

真愛は不思議がつて、その後を従って行く……

路地裏では、コートを脱ぎ捨てたオジさんが立っていた。

そして、裏路地に入った真愛に抱き付いた。

「!?」

真愛は、水鬼クラスの深海棲艦である、推定三歳児だが。霊子を操ることが出来、敵意や害意を純粹に感じ取ることができ

る。下着の中に手を入れて、胸や股間を触り始めたオジさんに、真愛は自身への悪意とオジさんに対する嫌悪感を感じていた。

真愛は、絶叫とも言える悲鳴を上げ、更に赤い瞳がギラリと光った。

「いや……いやあああ!!!」

「うわ、うわあああああ!!!」

オジさんはみるみるうちに干からびて行き、ミイラと化していた。

真愛が、霊子を全て奪い取ってしまったのだ。

生命を奪うレベルまで……

霊子とは、生命を構成しているエネルギーで、全て吸い取られると生物は生きて行けない。

ミイラ化したオジさんは、サラサラと砂になって風に舞って行った……

漸く、その悲鳴に気づいた搜索中の愛と倶楽部 with 大野くんが、真愛を見つけた。

真愛は更に成長して、もうちよつと大きくなっていた。推定四歳児である。

服が、パツツンパツツンになっている。

「真愛!! よかったあ……」

「まあー!」

漸く緊張の糸が切れた真愛は、ボロボロと泣き出した。

「ママを心配させちゃ、めっでしょ?」

恵奈が、愛の代わりに腰に手を当てて叱ると真愛は、

「まあ、ごめんなさあい……」

「いいのよ、無事見つかったから」

漸く泣き止んだ真愛は、

「いま、変なおじさんいたの。お○んちん出して裸で、真愛のお胸とかお股とか触って来たの」



その言葉に、全員がぎよっとした。

「で、そのオジさんは？」

「砂になっちゃった。れーし全部吸い取っちゃった」

『……………』

早速、『キルカウント』1である。

「真愛、霊子を全部吸い取るのは、もうやっちゃダメよ。おじさん死んじやったでしょ？」

「ごめんなさい……」

愛に叱られてショボーンとしている真愛に、大野くんは、

「変態ロリコン犯罪者に人権なし。よくやった」

と、頭を撫でて褒めている。1年1組の面々も、異常事態の連発で感覚が麻痺している。

一応、人が死んでる案件である。

「でもね、ぱぱの3分の1も無かったよ！お○んちん！」

にぱっと言う真愛に、娯楽部の面々は顔を赤らめる。

「そ、そんなに大きいの？」

「マジで!？」

「真愛ちゃん、そういうのは人に言っちゃ駄目です」

「そうだよ」

「まあ、健太のはでかいからな。ははは」

水泳の着替えで見ている大野くんだけは、呑気に笑っている。

「分かった。変質者の一件は、警務隊で手を回して、海に落ちたことにしとくわ……」

霊子吸い取り事件を聞いた秋也は、大きな溜め息を吐いた。

「すみません、お願いします」

愛が、申し訳なさそうにする。

真愛は、各部署の心配掛けた大人達に、ごめんなさいをしに娯楽部の面々と回っている。

リーヴェは、真愛が無事戻って来たことに安堵して、倒れて寝込んでいる。

「しかしこうなると、GPS装置の取り付けが要るな？」

「そうですね……………」

こうして、真愛の小さな大冒険は終わった。

変質者を一人退治した、と言う結果と共に……

その後、麻友良ちゃんとし子ちゃんとはお友達となり、

毎日リーヴェの同行で、児童公園に通うようになった。

麻友良ちゃんママからは「仲のいい姉妹」と思われているが、

義母だとは思えない。

愛は、お菓子を食べさせてくれた小母ちゃんの家にも、お礼に立ち寄った。

そこで、デスペラン戦で子供と夫を失ったことを聞かされた。

敢えて自分が、当時室戸鎮守府で戦っていたことを告げると、

小母ちゃんは、優しく抱き締めてくれた。

よく頑張ったね、と。

そして、推定三歳児の自分の娘が深海棲艦のハーフだ、と告げると、

「こんなちっちゃい身体で、すごいお産だったんだねえ」

と、感心された。

その後、脱柵事件は何度も起こることになるが、

身に着けさせたGPS装置で、鎮守府から離れると警報が鳴り、

怖い怖い郷里おじさんがお説教をするから、だんだん数が少なくなっ  
て行っった。

尚、秋也達警務隊の調査の結果、真愛が消滅させたオジさんは、残  
されたコート上の指紋から、

連続幼女暴行殺人事件の犯人だと判明した為、秋也は自業自得だ、  
と事件を秘密裏に処理した。

連続幼女暴行殺人事件は、迷宮入り不可避だろう。

## 東京への旅く祝福の船出く

大崎勇次郎と岩崎悠里が『結婚』した、とハガキで連絡を受けてから一月。

四国での艦娘相討戦ブラ鎮滅や脱柵事件等真愛ちゃん迷子があり、漸く落ち着いたところで住所を見直してみた。

二人は、東京に移り住んでいた。

浩三や聡美は、ここ土佐の地で眠っているが、遺骨の一部を持って東京に移り住んだそうだ。

やはり、ここ土佐の地で暮らすには辛過ぎるのだろう。

それに、浩三が買った持ち家も東京にある。

そこに勇次郎が転がり込む形で、生活がスタートした。

「そうなんですネ……入籍はされたんですか？」

『いいえ。当分は籍は入れずに、事実婚と言う形で過ごそうと思っています』

愛が悠里に電話を掛けたのは、九月も中旬の頃だった。

いろんな人から、霊子を分捕つてすすく成長する真愛は、推定五歳くらいまでに大きくなっていた。

戸籍上は、まだ0歳の赤ん坊である。これに関しては、現在国会で法的な解釈をどうするか、議論の最中である。

「……お式は……そうですね？」

『勇次郎は初婚ですけど、私は再婚ですし、岩崎家の家族とは断絶状態ですので、刺激しないように式はしない方向で……』

「そうなんですネ……悠里さんのご両親は……？」

『前にもお話しましたが、家を出た以上は……』

「すみません、そうでしたネ」

愛は、沈痛な面持ちになる。

『あまり、お心を病まないでください。私達は浩三さんと聡美さんの亡骸を抱いて、浩乃ともう一人育てて行くつもりですから』

「あら、それはおめでとうございます。父親は……？」

『多分、勇次郎です』

「そうですか、生活の方はどうですか？」

『はい、賞恤金と遺族年金で……勇次郎も働いていますし、十二分に頂いています。提督も、政府に賞恤金の上限を上げていただけるように足立一佐と働き掛けてくださったと聞いています。本当に申し訳ありません』

「いえいえ、私にできることなんてそのくらいしか……」

言葉が詰まる。二人の死を看取った者として、それ『しか』出来なかった、と言うのが本当の思いだった。

できれば生かして帰してあげたかった……その言葉を、愛はぐつと喉の奥に飲み込んだ。

「今度、東京に行く予定がありますので、顔を出しますね？」

『はい、是非立ち寄ってください』

「それでは、失礼しますね？」

『はい、長々とすみませんでした』

「いえいえ、こちらこそ、それでは」

電話を切ると、溜め息を吐いた。

「悠里さんは強い人ですね。私も、同期と先輩を一気に二人も失いましたから、その辛さは分かりますが、最愛の人ならばもつと辛いでしょう」

電話が切れたタイミングを見計らって、執務の手を止めた副官の花梨が顔を上げる。

「葵さんに笠原さんですね……そう言えば、妙高さんから聞いたんですが、羽佐間准将補と坂本将補は戦友という間柄だったそうで、白兵戦で勝ち逃げされた、と嘆いていたそうです」

「おそらく、父が戦死していたら、私は取り乱していたと思います。私は、あの男に復讐してやるつもりでしたから。お腹にいる赤ん坊を産んだら、突き付けてやるんです。『あんたの孫よ、お祖父ちゃん』って」  
その言葉に、くすつと愛が笑った。

「同じことを、高菜先生が言ったそうですよ？」

「高菜一佐も、面白いことを言いますね。ですから、父には後100年ばかり生きてもらって、孫から迷惑がられながら死んで行ってもらい

たいものです」

「大丈夫ですよ。貴方の継母達が絶対に死なせません……………とは言え……………」

妙高から聞かされたのは、それだけではなく愚痴なのだ。

「妙高さん曰く、自分達の練度が低いから羽佐間准将補は前線に出てるんじゃないか?と嘆いていらっしやいました。どうも、メカいなづまちゃんと、デビルメカいなづまちゃんに二度もボコボコにされて、自信を失ってる様子でした」

「あれは、事故だったと思います。あんな化物、そうそう出て来られたら困ります」

花梨は、きつぱりと言い切った。

「明石さんも、何て馬鹿なことをしたんでしょうねえ?」

「全くです」

「それで、本題なんですが……………」

「大崎さん達についてですね?結婚祝いはご辞退いたします、と書かれた手前、お祝いを送るわけにも行きませんし」

「……………うーん」

二人して、考え込んでしまう。

耀子と健太は、倶楽部に移籍してまだ学校だし、リーヴェは赤ん坊二人と真愛を連れて、児童公園に行っている。

いつも入り浸っている秋也は、今日は忙しいと来ないし、翼はいつもどおり海賊団に参加している。

海賊団は、土佐海賊団の仮称から会議の結果、「鉄血海賊団」Eiserner Blutpiratenに決まった。

その際、翼から「パイレーツ・オブ・カリビアンコム」にしようと提案があつて、郷里二佐と小杉三佐がコーヒーを嘔いて、花梨から「不潔です!」と言われ、少しの間口を利いてもらえなかった、と言う逸話が残っている。

その際「花梨ちゃんが知ってるの、何でかなあ?」と、ニヤニヤと煽ったのは翼である。

愛達は「カリビアンコム」と言う、アダルトサイトがあるとは知ら

なかった為、後から聞かされて、花梨の言動に納得したのである。

そして、会議の場で不用意な発言をした、という理由で、翼に反省書を書かせた。

結果、品性の問題から却下して、ビスマルク提案の鉄血海賊団に決まったのである。

丁度二人が頭を悩ませているところに、艦隊の常識番長代理であるビスマルクがやって来た。

「あら、二人揃ってどうしたの?」

「それが……」

「そうね、デリケートな問題だものね……」

ビスマルクも、考え込んでしまう。

「どうかしら?ここは、高菜一佐のお力を借りる、と言うのは?」

「と、言いますと?」

「あの人、金持ちじゃない?日本有数の。コネも沢山持つてるし。三高ワンダーランドのペア入場宿泊券と、例の優衣さんプロデュースの株主向けイタリアンレストラン貸し切って、ささやかな食事をする、ってのはどうかしら?」

「うーん、悠里さんが受け取ってくれますかね?」

司令官チエアに凭れ掛かりながら考えると、花梨が少し笑みを浮かべる。

「あげると言えば辞退されるでしょう。ですから、皆で遊びに行った時に渡して拒絶するほど、常識のない方とも思えません。受け取ってもらえると思います」

「なるほど……」

愛は今は亡き、この口癖の男を思い出しながら頷く。

と言う訳で、師匠のコネクションを使い、然り気無く悠里と勇次郎の予定を聞きながら、計画を推し進めて行った。

東京に向かうのは愛と健太に耀子、リーヴェに子ども達。それに第1艦隊の艦娘達である。

その間の守りの為に、暁は進んで任務を優先してくれた。

と言うより、暴走癖のあるレ級を制御できるのが、暁しか居ないからである。

最初、海賊団もレ級達がやったのだが、ジェニファーとレ級がメインであまりにもやり過ぎて、提督の心を根元からへし折る行為を繰り返し、

何人もの提督を精神科送りにしてしまった為、第1艦隊が海賊、第2艦隊は暁制御の下お使い任務、と言う風になったのだ。

当然ながら、防衛任務以外の出撃禁止命令を下しての出発である。いざと言うときの為に、臨時司令官代行を秋也にお願いして、しっかり見張ってもらうことにした。

移動は、もちろん新幹線である。

「わー、新幹線だー」

新幹線に爆いである真愛を静かにさせたりしながら、東京への旅は始まった。

東京に到着した愛達は、早速ホテルにチェックインすると、愛と健太と燿子とビスマルクは、子守をリーヴエ達に任せて大本営に出頭した。

大本営幕僚総監の足立陸将——先日昇進した——の呼び出しだったのだ。

四国騒動の時に、説教を食らって以来の東京である。

「失礼します。笹野 愛以下四名、入ります」

「うむ」

幕僚総監執務室では、マタニティドレス姿の副官の秋奈と足立陸将が執務していた。

「遥々東京まで、よく来てくれた。君達に渡したいものがあつてな？」  
そう言うと、ソファを勧める。

四人は敬礼すると、ソファに腰掛ける。

「さて、君達は訓練に精励している、と聞いているから、昇進が決定した。

笹野 愛は今日より一等海佐となり、大石健太、日下部耀子の二人は海准尉となる。ビスマルクに關しても、二等海佐に任ずる」

「はい。謹んで、お受けいたします」

自衛隊内でも数少ない、信頼できる大人である足立の昇進辞令は、素直に受け取る愛である。

「さて、高菜くんから話は聞かせてもらった。何かと使うだろうから、パーティ代の足しにしてくれ」

「遠慮はしないでくださいよ。これは、警務本部長うちの夫からも少しばかり入ってますから」

二人の言葉に、愛は恐縮しながらお金の入った封筒を受け取るのだった。

その足で、一旦ホテルに戻ろうとした時だった。

統合幕僚監部の庁舎から、四人で出ると……

「艦娘はんたいーい！人道を守れー！」

「戦争はんたいーい！軍国主義を許すなー！」

庁舎前では、多数の人間がプラカードを掲げて、デモを行っていた。

「どう言うことですか？」

愛が首を傾げると、ビスマルクが説明する。

「あれはね。艦娘が人道に反している、或いは軍国主義の復活だから、艦娘制度を撤廃せよ、と主張している、有志の市民の方達よ」

「私達は、そんな人達のために血を流してきたんですか!？」

「そうよ、それが自衛隊なもの」

「私は納得できません。ちよつと行って来ます」

「あつ、待ちなさい！」

ビスマルクの手をするりと抜けると、愛がデモ隊の前に立ちはだかった。

「私は、特任一等海佐の笹野 愛です。このデモの意味を教えてくださいー！」

キツと睨みながら、デモ隊に一人立ち向かった。

「それは、軍国主義の復活だから、艦娘の制度をやめよ、と言っているのだ」



「艦娘がやらなかったら、誰がやるんですか？あなた達ですか？害獣化した深海棲艦や海賊化した連中を、あなた達が取り締まるんですか？」

「それは、お前達の役目だろうか？」

「あまりにも無責任過ぎませんか!？」

「何だ?! お前四国の提督だろう?! 土佐の英雄坂本将補も守れずに、何が提督だ!？」

「その批判は甘んじてお受けしますが、それと話が違います」

「違うものか!? そんな連中に任せておけるか!? だから、艦娘は解体すべきなんだ!!」

「さっきの質問の回答を頂いていません。唯一、深海棲艦に対処できるのは艦娘で、それが居なくなったら、誰が海の安全を守るんですか？」

「……………」

「お答えください。若輩で無学者なので、どうかご教示ください」

慇懃無礼な物言いに、デモ隊がざわつく。

デモ隊の一人が、ポロツと口にした言葉で、状況は一変した。

「それにしても、坂本提督も暗殺されるなんて、そんな無様な死に方があるか!?! 華々しく戦死なら、土佐の英雄の生涯を全うしたと言うのに、とんだ恥晒しだ!!」

その直後、健太がキレてその一人に掴み掛かっていた。

「もう一度言ってみろ!?! 暗殺された人間は、戦死した人間より格が下だとしても言うのか!?!」

「待ちなさい! 健太!」

「止めなさい! 健太!」

耀子とビスマルクの二人掛かりで、健太を止める。

「…………」

「…………」

デモ隊の代表と愛は、睨み合いを続ける。

「対案もない癖に、安全な東京で声を上げる他に、やることはないのかね!?!」

「貴様！」

「双方やめい！」

庁舎から出て来た七原准将が、警務隊と共にやって来た。

デモ隊は解散させられ、愛達はお説教を食らって、ホテルに帰って来た。

「まあ、東京にはそういう連中もいる、と割り切った方がいいわ」

「すみません、熱くなり過ぎました」

「ごめんなさい」

愛と健太は、「反省モードである。」

「まあ、あとは楽しいことを考えましょう。せつかく東京に来たんだから」

「はいっ」

「うん、切り替えの早いのは、いいところよ」

「まあ、納得はしてませんがね？」

苦笑いを浮かべてそう言う愛に、ビスマルクは窓から東京の街を見下ろして呟く。

「それでいいのよ。矛盾を抱えながら存在するのが自衛隊だから、その意義は皆が考えるものよ。いつか国防軍に改組される日まで。まあそれも、遠くじゃないと思うけど」

「そうですね」

同じく東京の窓を見下ろしながら、愛もまた頷く。

翌日、朝一番。

「と言う訳で、遊びに来ました！」

「はい、いらっしやい。愛さん達に艦娘の皆さん」

「早速、聡美と浩三さんにお線香上げてってよ」

勇次郎と悠里が、笑顔でお出迎えする。

「すみません。お祝いをご辞退することだったので、何の用意もできず」

愛が申し訳なさそうになると、悠里がブンブンと手を振る。

「とんでもない、そのお気持ちだけで十分です」

「……と言う訳ではありませんが、お中元でこれを受け取ってください」

ポーチから出したチケット入れから、三高ワンダーランドの入場券を取り出す。

「お二人共、子育てやお仕事で忙しいと思いますので、浩乃ちゃんのお世話を私達が引き受けますから、遊びに行つて来てください。18時にエントランス前にいらしてください。それまでは、ゆっくりとデートして来てください」

悠里と勇次郎は顔を見合わせると、ふふつと笑った。

「それじゃあ、ありがたく愛さんのお言葉に甘えさせてもらいますね？」

「ありがとう、皆」

悠里と勇次郎が「お留守番お願いしますね？」と、出掛けて行つたのを見送ると、

ホテルで、浩乃ちゃんの面倒を真愛が見る、という可愛い光景を、愛達が眺めていると言う昼下がりを過ごした。

そうして、18時にエントランスに戻つて来た悠里と勇次郎は、ワンダーランドのマスケットであるワンダくんの着ぐるみに先導されて、株主向けのイタリアンレストランまで案内されることになった。

もちろん、出入り口には関係者以外立ち入り禁止のゲートがある。そこを通過すると、二人は愛達に一計用いられた、と気づいた。

中に入ると、綺麗に飾り付けがされた上に、立食形式のバイキング料理が並べられた店内だった。

「お二人の船出を祝福しますー！」

愛は、敢えてこの言葉を選んだ。

悠里は感動のあまり涙を流し、勇次郎もホロリと涙を零す。

もちろん、浩三と聡美の遺影も飾られていて、二人に見守られる形になる。

「今日は私達のプロデュースです。ゆっくり楽しんで行つて下さい。ああ、お酒もご用意しましたので」

そう言つて、敷地内のワンダーランドホテルのカードキーを渡す。

「今夜は、家族でラグジュアリーな夜を過ごしてください」

「本当に……有難うございます」

「ありがとう……皆……」

この日は、皆で浩三と聡美の思い出話を語り合つた。

勉強を教えてくれたこと、弁護士を目指していたことや真面目だった聡美のこと。

話題は尽きなかった。

ワンダーランドのクローズ時間まで語り合つてから、エントランス横のホテルに入つて行く三人を見送りながら、全員いたずらっぽい笑みを浮かべていた。

悠里と勇次郎が驚愕するのは、時間の問題だろう。

何せ、予約した部屋は高菜一佐の手配で、エグゼクティブスイートルームなのだから。

翌日は、今度はせめてものお礼にと、大崎家でランチを御馳走になつた。

悠里の手料理は美味しいもので、齒が生えてきた真愛も美味しく食べていた。

この日は泊まつて下さい、との申し出で、一日帰るのを延期して大崎家にお世話になつた。

この日も、愛は夜遅くまで浩三達の思い出話をしていて。そして、ついに言つてしまった。

「できれば、私がお守りできればよかったです」

その悔恨の言葉に、悠里はふわっと抱き寄せた。

「辛かったですね……愛さんがお二人を看取ったんですから……」  
「つうつ……ああああ!!」

愛は漸く、戦死者に対して心の底から泣くことができた。ずっとずっと我慢して来たものを悠里の胸で……

落ち着いたところで、悠里は静かに口を開いた。

「浩三さんも、聡美さんも、貴女をお守り出来てよかった、と思つていきますわ。ですから貴女は、長生きしてくださいね?」

「はいっ！私は曾孫ひまじと玄孫やしやじに囲まれながら死ぬ、と言う夢ができましたから」

「ふふっ、素敵な夢ですね。陰ながら応援していますわね？」

「はいっ、土佐でお二人のお墓は私達が守って行きます。ですから東京で、新しい船出を『六人』で過ごしてください。貴女と、勇次郎さん、浩乃ちゃんに、お腹の赤ちゃん、浩三さんに、聡美さん」

「もし、男の子だったら浩三。女の子だったら聡美って付けよう、って決めてるんです」

「あら、もし双子だったら……うふふっ」

「そうですね、その可能性もありますね」

悠里と愛は、二人で笑った。

後に、大石 愛大尉の前に、部下として大崎聡美・浩三と言う双子の姉弟が、少尉として現れることになるのだが、遠い遠い先、20年以上先の話である。

## 艦娘たちの猛特訓

時は少し遡り、九月頭になる。

土佐鎮守府では、会議が開かれていた。

「如何にして、再編された鎮守府の練度を上げるか？本日の議題はこれです」

これはジレーネ戦争以降、暇を持て余したレ級達が、害獣達を始末してしまつた為、

今度は、DSビーストの流出と残存深海棲艦の多い、東北北海道エリアの方が前線になってしまつた為である。

ただ愛は、第二・第三のジレーネやその他脅威に対応する為に、練度を上げる必要があつた。

そこで、七原将補の提案通りジエニフアー達深海棲艦に任せて、各鎮守府を襲ってもらつたのだが、そこに一つの誤算が生じていた。

「はいはいはい。今までどおり、アタシ等が抜き打ち試験するんじや駄目なの？」

レ級が手を上げると、愛は大きな溜め息を吐いた。

「七原式訓練法、つまりは海賊を装つて各鎮守府を襲うまでは良かったんです。が、レーちゃん<sup>級</sup>がやり過ぎて、司令官の心までへし折つて、その……既に三人ほど精神科に入院してまして……」

「何だ、ボコボコにして裸にひん剥いて、あんなことやこんなことやそんなことや色々しただけじゃん？」

「十分やり過ぎよー」

暁が、模擬弾でボコボコにした新米艦娘達に説教をしている間に、そんなことを平然としているレ級に、暁がツツコミを入れて、愛は大きな溜め息を吐いた。

「と言う訳で、第二艦隊は以後、お使い任務に専念してもらいます」

「えーっ、やだよ。戦闘したい、虐殺したい！アイラブデストロイ！」

駄々っ子のように駄々をこねるレ級に、愛はニコニコと笑みを向ける。

「いやあ。お使いと言っても、北極海と南極近海に出現しているビー  
ストハンティングも、お仕事のうちですよ。ケツコンカツコカリリン  
グ待ちの提督もまだいますから」

「マジで!?!やるやる! DSタイラントレグレクスも殺っちゃう! 何な  
ら、極最上位のDSウルトラトレイドンも頑張る!!」

「良いから座りなさい、OK?」

「ママ、イエスマム」

「よろしい」

ガタツと立ち上がると、大燥ぎするレ級。

根っからの戦闘狂である。

それにツツコミを入れる暁。暁とレ級はボケとツツコミで仲良  
くなって、レ級も暁の言うことは聞いている。

レ級が、暁の寢床を襲ってそういう関係になった為、お互いにケツ  
コンカツコカリリングを着けている。

その結果、暁の霊子は極限まで増大して、駆逐艦ならぬ鬼畜艦と化  
している。

「と言う訳で、ビスマルク達と翼さんの航空隊、郷里二佐の陸戦隊で海  
賊行為を働いてもらいますが、何か名称が必要でしょうか?」

その愛の言葉に、真っ先に手を上げたのがレ級である。

「ビスマルクと愉快的海賊達」

「却下! 私ってバレバレじゃない! 嫌よ、そんなの!!」

その名称を、ビスマルクが却下する。

「それじゃあ、著作権侵害王と仲間達」

「何ですか? その再翻訳したようなふざけた名前。もつと真面目に考  
えてください、却下」

レ級が第二案を提案するが、愛が却下する。

その次に手を上げたのが、翼である。

「はいはい、『パイレーツ・オブ・カリビアンコム』」

その言葉に、ブハツとコーヒーを噴き出したのは、郷里二佐・小杉  
三佐である。

副官の花梨は、その夫の反応を見て、バンッと机を叩く。

「剛さん、不潔です！私に何か不満でもあるんですか!?私じゃ色気がないんですか!？」

「い、いや……………その……………」

郷里二佐がしどろもどろになる。

その反応に、翼とレ級がニヤニヤする。

「あれえ、花梨ちゃん？何で知ってるんだろお？」

「そうだそうだ、ムツツリスケベ」

「っ!!!」

その二人の煽りに、顔を真っ赤にして肩をワナワナと震わせる花梨。

「その、カリビアンコムとやらは何ですか？」

「ああ、こういうサイトだよ」

翼が愛の所に来てサイトを開くと、愛の顔も真っ赤になる。

「エロサイトじゃないですか!?て言うか、モザイク掛かってない!？」

「うん、掛かってないわよ。全部丸見えね」

「そうだね。でも、愛と燿子のアソコのほうが綺麗だ。何かグロくて汚いね」

愛のツツコミに、冷静なのが次席副官の燿子で、天然の健太がとんでもない発言をする。

「あのね健太、そういう事は言わなくていいから?」

「そうよ。喜んで良いのか恥ずかしがって良いのか、判らないじゃない?」

顔を赤らめた二人がツツコミを入れ終わると、翼は席に戻る。

「と言う訳で、その名称は品がなさすぎるので却下です。翼さんは、後で始末書を提出すること」

「ですよねえ」

翼の苦笑いに、全員が頷く。

「そうね、鉄血海賊団はどうかしら?」

鉄血宰相ビスマルクから取った名前を、ビスマルクが披露する。

「いいですね」

「かっこいい感じだね」



愛とレ級が賛成すると、全員が頷いた。

こうして、鉄血海賊団が結成された。

そして、海賊らしく金品を強奪しては、後日愛が「鉄血海賊団」名義で宅配便で送り返すのだ。

悪乗りした、大井北上のカップルとアイオワが、司令官の私物まで奪うからである。

最初は、愛自らが届けに行っていたが、安芸鎮守府を急襲した際、司令官の私物を返却に行ったら泣かれてしまったからである。

そりゃあそうである。秘蔵の日本やビデオを、うら若き少女が返しに来たのだ。

いい年の男にとっては、最大の恥辱である。

それ以来、宅配便（着払い）で送り返すことにしたのだ。

そして時は流れて、10月中旬になった。

郷里二佐は、海賊団から解任された。

郷里二佐に、暇を持て余したレ級達が、ビーストハンティングで獲得したG<sup>グリズリー</sup>級霊子結晶を与え捲った上に、明石のアルティメットいなづまちゃん細胞を移植したのだ。

その結果、身長は2m20cm、そしてその肉体は、5.56mm弾なら、筋肉で止めて自己修復する、と言う人間から懸け離れた生物になっってしまった。

最早人外、漫画やアニメの住人である。もしも、範馬勇次郎がこの世界にいたら、タメ張れるかもしれない。

そんな訳で、郷里二佐はもう一人<sup>こいつ一人で良いんじゃないか</sup>一個連隊状態になっってしまったのだ。海賊団陸戦隊長の任務は小杉三佐が引き継いだ。

更に、それに一番迷惑しているのは花梨である。

元から激しかった夜の生活が一段と激しくなつて、花梨が気を失うことも多々あった。

そしてレ級は、更に冗談でG級霊子結晶を花梨に与えた結果、いきなり臨月まで一気に赤ちゃんが成長してしまったのだ。

一気に赤ちゃんの成長が来た為、あまりの激痛と霊子不足に気を

失ってしまい、大騒ぎになった。

慌てて、レ級が口移しで霊子を与えて事なきを得たが、レ級達はまず愛達から大説教を食らう羽目になった。

「何てことしてくれやがったんですか!？」

「い、いやあ。まさか、こんなことになるとは思わなかったんだよ」

愛の後に、耀子と健太と花梨からのお叱りである。

「馬鹿なのあんた!？」

「何かあったらどうするつもりだったんだ!？」

「本当に死ぬかと思いました!」

その後、郷里大魔王がやって来てガシツとワンハンドでレ級の頭を捕まえて、

「レ級、ゆつくり話をしようではないか？」

と連行され、そのアイアンクロー宙吊りの状態で、数時間の説教に及んだことは言うまでもない。

と言う訳で、それから数日で花梨はもう出産に漕ぎ着け、男女の双子の赤ちゃんを出産した。

入籍は、足立秋也が警務隊長就任前後に果たしていたものの、結婚式より先に出産をしてしまったのである。

出産の連絡に、父の眞一郎と継母の紗花は、急遽駆け付けてくれた。

そう、花梨は復讐を果たしたのだ。双子を見せ付けて……

「あんたの孫達ですよ、お祖父ちゃん」

勝ち誇ったようなその笑顔に、二人は笑みを浮かべて祝福した。

「ふふ、おめでどう」

「おめでどうございます、花梨さん」

「私はともかく、紗花は19でお祖母ちゃんか。しかも加速とは………霊子と言うのは、不思議なものだな」

その指摘に、花梨はハツとして申し訳無さそうな顔をする。

眞一郎の男絡み以外はとつても優しい紗花は、それにニコニコ笑顔を浮かべる。

「あつ………そうでした。すみませんでした、無神経なことを言って」

「うふふ、それもいいじゃないですか、眞一郎、花梨さん」

「いやはや申し訳ない……」

そんな二人に、恐縮しているのが郷里二佐である。

眞一郎は次は紗花の番だな、と紗花のお腹を擦りながら、笑っている。

「予定日は一月ですから、お正月に生まれたりするかもしれないですね、うふふ」

名前は、眞一郎と郷里二佐の提案で、亡くなった坂本竜兵将補と大葉 葵一尉から一字づつ取って「竜馬<sup>りょうま</sup>」と「向日葵<sup>ひまり</sup>」と名付けた。

もちろん、普通の新生児である。おそらく剛の遺伝子は多分に入っていないそうだが。

そんな訳で、花梨は育児休暇に入り、現在副官の任務は燿子が代行している。

郷里二佐も育児休暇を取得して、二人で赤ちゃんのお世話に掛かりつきりである。

結婚披露宴も、挙行することに決まった。

当初は、一年は喪に服したい、と言う意向だったが、出産までしてしまつて、相談した相手の坂本龍子の、

「夫に遠慮せず、早く式をなさいます！竜兵も天国で焦れたくお思いでしよう」

と言う後押しもあり、皆の意見でクリスマスイヴに挙行することになった。

「クリスマスにWeddingは、USAではよくあることよ」

「それ、すごい素敵です」

「クリスマスウエディングで行きましょう」

と言うアイオワの意見に、愛と花梨がノリノリだったのが決定打である。

紗花にも電話で相談したが、お医者さんから許可を貰つて是非行きます、とのことだった。

もちろん、岩沼と宮戸島の愉快的仲間達も、祝福に駆け付けてくれる、とのことだった。

そんなある日、海賊団が横行している中。旧土佐鎮守府の艦娘達が久々に再集合した。

天城以下、葛城、サラトガ、川内、那珂、秋月が再結集したのだ。全員、海上自衛隊の制服に身を包んだ司令官兼任艦娘で、全員三佐である。

「鉄血海賊団が各地で暴れ回っていますね」

天城が、大きな溜め息を吐いて話を切り出す。

「模擬弾で艦娘を陸地に送り返して、陸戦隊が強行突入して司令官の私物を強奪しては宅配便で送り返す、と言う手口……土佐鎮守府ね。愛ちゃんの『ごめんなさい、アレ見ちゃいました』って手紙付きで……」

先日被害に遭った、四万十鎮守府司令官サラトガが大きな溜め息を吐く。普通に海賊姿ではあるが、リーヴェ・サーカスを惜し気もなく披露しているのと、陸戦隊に小杉三佐が居る為、バレバレなのだ。

アレとは、もちろん女性向けのBL本（18禁）である。

「那珂ちゃんなんか、自作のミュージックDVDを強奪された挙げ句に、勝手にMeTubeにアップされたんだよ！もう「恋の2―4―11」のMVなんか、50万再生超えちゃったよ！嬉しい悲鳴だよ！晒されたツイッターやインスタもフォロワー爆増だよ！メジャーデビューのオフア―来ちゃったよ！今冬のコミケでDVD委託販売決まっちゃったよ！嬉しい悲鳴過ぎるよ！何てことをしてくれたんだよ!?!」

那珂ちゃんは、喜んでるのか憤慨してるのか判らない。

因みに、愛は収益化しないでアップロードしている。SNSアカウントも、押収したパソコンからアカウントを確認して、動画ページに張ったのである。

コミケは、愛の要匠の同期の元部下の旦那のサークルから、手を回してもらった。

その後、那珂ちゃんは艦隊のアイドルから本当のアイドルになるのだが、まだまだもう少し先の話である。

「と言う訳で、新規艦娘の教導をどうするか、だね？」

「そうですね」

川内が切り出して、秋月が同意する。

「やはり、連合演習をするしかないわね」

葛城が最後に言うのと、全員が同意した。

「整列!!」

『はい』

サラトガの友人の、在日米軍海兵隊教官のハートワン軍曹が、沖縄から招聘された。

ハートワン軍曹の号令に、新規艦娘達は緩やかに整列する。

その瞬間、ハートワン軍曹はブチ切れた。激怒した。

「何だこのザマは!?! 貴様等それでも艦娘か!?! この腐れビッチが!」

ハートワン軍曹の怒声に、艦娘達は怯え竦む。

「良いか、ビッチ共! 話し掛けられたとき以外は口を開くな。口でクソたれる前と後に、”サーあるいはマム” と言え。分かったか、ビッチ共!?!」

『サーイエスサー』

怯えながら小さい声で返す様子に、ハートワン軍曹は更に激怒した。

「声が小さい! クソ\*\*\*共!」

『サー! イエス! サー!』

埠頭を右往左往しながら、拡声器でハートワン軍曹の演説が始まる。

その度に、艦娘達も大きな声で返す。

「貴様等ビッチ共が俺の訓練に生き残れたら、各艦娘が兵器となる。戦争に祈りを捧げる死の司祭だ。その日までは貴様等は艦娘ですらない。地球上で最下等だ。イ級以下の物体だ! イ級の足元にも及ばないゴミだ! このクソ\*\*\*共!」

『サー! イエス! サー!』

「陸に上がれ! 今の貴様等に、海に出る資格はない! 海賊ごときにやられおつて!」

『サー！イエス！サー！』

艦娘達が、次々と陸に上がって整列する。

「いいか？俺は厳しいが公平だ。艦種差別は許さん。駆逐艦、巡洋艦、空母、戦艦いろいろいるが、おれは見下さん。全て平等に価値はない！」

『サー！イエス！サー！』

「では、早速ランニングだ、走れ！走って走り続けろ！脱落者は置いて行く。そしたら自分で帰るんだ、帰ってF\*\*Kでもしてろビッチ共！」

『サー！イエス！サー！』

こうして、基礎練習が始まった。

ハートワン軍曹は、とにかく素体の練度向上の為に、ランニングばかりを課した。

もちろん、旧土佐の艦娘達も最後尾から脱落者が出ないように追い駆ける。

もちろんハートワン軍曹も、艦娘相手に横で並走している。

この訓練の為に、霊子結晶を沢山取り込んでいるのだ。

「遅いぞ！ビッチ共！手を抜くな！」

『サー！イエス！サー！』

艦娘達は、毎日ヘトヘトでぐったりしている。

練度の高い土佐鎮守府の面々は、郷里二佐の猛訓練で慣れっこである。

次に、埠頭に特設した訓練設備で体幹トレーニングが始まる。要するに、高難易度アスレチックである。

「進め進め進め!!」

『サー！イエス！サー！』

もちろん、ムチばかりではない。

訓練が終わると、ハートワン軍曹は途端に優しくなる。

「ビッチ共！間宮アイスだ！整列して受け取れ！」

『サー！イエス！サー！』

あまり器用な人間ではない為、口調は厳しいが顔はしかめっ面では

なく、ニカツと笑顔である。

那珂ちゃん曰く、そつちはそつちで怖い、とのことである。

そして教官に、暇を持て余したレ級と暁が加わった。

「アヒヤヒヤヒヤ、この雑魚が！もつと走れ!!」

『mam！イエス！mam！』

「遅いわよ！この私の後ろの子はアイス抜きよ！」

『mam！イエス！mam！』

「クソツタレ深海棲艦とチビ艦娘に馬鹿にされて、悔しくないか！もつと速度上げろ！声出せ！」

『サー！イエス！サー！』

「誰がチビよ！言ってみなさい！私のこと!?!」

『mam！ノー！mam！』

チビ呼ばわりされてブチ切れた暁には、艦娘達も恐怖でノーと答えるしかなかった。

厳しい厳しい厳しい猛特訓は一ヶ月続き、11月半ばになった。

艦娘達は、漸く海に出ることを許された。

そして、旧土佐鎮守府艦娘達の出番である。

ハートワン軍曹は、埠頭から艦娘達の訓練を監督している。しかもっ面で腕を組んで。

逃げ回る、旧土佐鎮守府の艦娘達を追い回して、ペイント弾を当てる訓練である。

「あつ、身体が軽い……」

「艀装が重くない……」

この訓練の意味を、漸く実感した艦娘達だった。

この一ヶ月の厳しい猛特訓で、練度が向上していた艦娘達は揃って改装を受けていた。

それでも、ケツコンリングを付けた艦娘達にペイント弾を当てること無く、日々が過ぎて行く。

司令官が亡くなっても、そのリングは永遠なのである。

「もつとしつかりなさい！」

『mam！イエス！mam！』

痺れを切らした天城が、怒声を放つ。

「この那珂ちゃんに当てられないなんて、皆努力が足りないよ！」

『mam！イエス！mam！』

「足りぬ足りぬは工夫と努力が足りぬ！」

『mam！イエス！mam！』

那珂と川内も罵声を浴びせる。

猛特訓は続いていた。

「キャハハハ！遅い遅い！この雑魚め！」

『mam！イエス！mam！』

レ級も、挑発しながら追い回されている。

「遅い！全然レデイじゃないわね！」

『mam！イエス！mam！』

いつものレデイ理論だが、暁も叱咤激励する。

ハートワン軍曹は、ここからはただ見守るだけである。

いつものしかめっ面で、何も言わない。

逆にそれが怖いのだ。

艦娘達も、対抗心をメラメラと燃やして、必死で葛城達を追い回す。

自然と、クロスファイアを狙うようになっていた。

だが、リーヴェ・サーカスの完成度が低く、突破されてしまう。

「遅い！連携が甘い！低速空母に当てられないで、何が駆逐艦よ!?!」

『mam！イエス！mam！』

いくら艦載機を全部おろしているとは言え、低速の空母である葛城

に罵声を浴びせられると、対抗心がどんどん燃え上がって行く。

「くっ、今度こそ当ててやる！」

駆逐艦の一人が高速で追い縋って、那珂に着弾予測をして撃ち込ん

だ。

「ぎゃん！顔はやめて！」

那珂ちゃんの顔面に、ペイント弾が着弾したのだ。

「よし！そこのビッチ！お前は今日から艦娘だ、訓練を終了してよし

！——よくやった！」

「サー！イエス！サー！」



「とでも言うと思ったか!? お前も逃げる側に回れ!」

「サー! イエス! サー!」

一人、また一人と、逃げる側に回って行く。

そして、レ級は飽きたようで、何処かに行ってしまった。

最後の一人が、那珂ちゃんの顔面にペイントを撃ち込んだところで訓練が終了する……筈だった。

「皆、DSレグレクス連れて来ちゃった♪」

『مام! イエス! ……え?!?』

と、レ級が笑みを浮かべて戻って来なかったら……

レ級の後ろから、恐竜のような大きな怪物が追い掛けて来ている。

DSタイラントレグレクス級よりは小柄だが、こいつもグリズリー級を超える化物である。

「じ、実弾装填!」

天城が、実弾装填を命令するとハートワン軍曹が、

「教導艦は手を出さず、大破艦回収に専念せよ!」

との指示で、艦娘達に任せることにした。

突進して来るDSレグレクスから、駆逐艦隊が必死で逃げ回り、それを巡洋艦や戦艦が追い縋って実弾を放つ。

駆逐艦は逃げるのが早くなっており、体が軽く怖いとは言え、DSレグレクスの突進を何とか追いかかれない距離で保っている。

巡洋艦娘や戦艦娘は、着弾予測で狙ったところに面白いほどに当たる。

「グオオオオオ!!」

DSレグレクスは、ドスドスドスと尻尾を振り回す。

その攻撃に逃げ遅れた駆逐艦を中心に、大破艦は出てしまう。説教しながら、大破艦を陸に戻すのが、教導艦の役目である。

「キャハハ、雑魚め。ゆっくり治療してやるから覚悟しな」

レ級に回収される艦娘が、一番精神的に刺さる。

空母艦娘は、絨毯爆撃で後方から支援する。

たまに誤爆するが、それは仕方がない、と言わなければならない。

まだ、宮城の精銳には程遠いのだ。

とにかく、駆逐艦が惹き付けている間に砲撃・爆撃する、という方法でどんどんDSレギレクスを弱らせて行く。

そしてトドメは、全員でのリーヴェ・サーカスである。

クロスファイアポイントに追い込んで、駆逐艦娘を含めた集中砲火を浴びせる。

DSレギレクスは、

「グオオオオオオ!!」

と断末魔の叫びを上げて、その巨体を横たわらせる。

「おお、マジで殺っちゃったよ」

レ級が感嘆の声を漏らすと、艦娘達は全員、

『やったああああ!!』

と歓喜の声を上げる。

「全員、陸に上がって整列!」

ハートワン軍曹が拡声器で怒鳴ると、艦娘達は顔をキリツとさせて、陸に上がって整列する。

「本日を以て、貴様等はビッチを卒業する。本日から、貴様等は艦娘である。艦娘達は姉妹だ。貴様等は沈むその日まで姉妹だ。———よくやった! 貴様等は最高の艦娘だ!」

『サー! イエス! サー!』

「ハートワン軍曹殿に敬礼!」

最初にペイント弾を当てた艦娘が号令を掛けると、全員一斉に敬礼する。

『ありがとうございます!』

「うむ! 私は満足だ、満足してアメリカに帰る。そしたら退役だ」

『退役なさるのですか!?!』

「うむ、貴様等の訓練で体はボロボロ。霊子結晶で無理をしたが、もう限界だ」

ハートワン軍曹は艦娘の教導に、軍人生命を文字通り賭けていたのだ。

郷里二佐と違い、アルティメットいなづまちゃん細胞のないハート

ワン軍曹は、ランニングやその他の訓練の教導で、無理に無理を重ねていたのだ。

『そんな……!』

「悲しそうな顔をするな、海兵は死ぬ。死ぬ為に存在している。私も例外ではない。ただ喜ばしいのは、ベッドの上で死ぬることだ」

そう言っつて、ハートワン軍曹は四国を去って行った。

その後、沖繩の病院で心不全で亡くなった、と知らされたのは、12月に入ってからのことになる。

最後の言葉は、

「私が愛した日本で死ぬ。それはそれで幸せなことだろう」

だった。その翌日、彼は眠るように息を引き取ったそうだ。

訓練に貢献したということで、在日米軍司令部より二階級特進が決定された。

通夜・告別式は、大の親日家であったハートワンの希望により、ジャパニーズスタイル式で営まれた。

教え子だった艦娘全員で、ハートワン軍曹改め、ハートワン曹長の通夜・告別式に出席して、自分の父親が亡くなったかのように全員で号泣した。

きつとハートワン曹長は、天国で微笑んでいるだろう。

そう思いながら、旧土佐鎮守府の艦娘達は空を見上げた。

そしてそのまま、生前のハートワンの希望により、遺体は四国の海に水葬に付された。

その水葬には、四国の全ての艦娘と司令官が集まって、ハートワンが海に還って行くのを見送った。

壮絶な訓練の話聞いた愛は、自分達の海賊行為のおかげで、艦娘達の目が覚めたことを実感していた。

「ハートワン曹長は、満足だったんでしょかね?」

「いや、満足だったと思うよ?ほら、あのオッサン、訓練が生き甲斐で昇進を拒否してるほどの、現場屋だったからね」

水葬されるハートワンを、敬礼で見送りながら呟いた愛に、隣で敬礼するレ級が答える。

鉄血海賊団達も、海賊衣装を脱ぎ捨て、普段どおりの制服で参列した。

アイオワと大和が、代表で弔砲を放った。

教え子達は涙を零しながら、キリツとした顔でハートワンを見送っていた。

愛は訓練の総仕上げに、鉄血海賊団に各鎮守府に対して、海賊行為を命じた。

本気モードではないとは言え、悉く退けられて帰ってくる艦娘達を見て、愛は満足そうに、

「本日を以て、鉄血海賊団を解散。第1艦隊に戻ります！」

そう宣言した。

各地の艦娘達は、今日も訓練に明け暮れている。

再び、第二第三のジレーネがいつ現れても良いように。

## クリスマスウエディング&バーズデー

四国艦娘達の猛特訓の裏で、土佐鎮守府は忙しいスケジュールに翻弄されていた。

花梨と剛の、結婚式の準備である。

プランナーの方が毎日訪れては、これはどうする、予算はどのくらいか、料理の質は、招待するお客さんの数は。様々な打ち合わせに忙殺されている。

結婚式当日までが普段より短い為に、プランナーも大変である。

その間の育児は、リーヴェが一手に面倒を見てくれることになり、小さい体で五人の育児に掛かりつきりになっていた。

その中で推定六歳の真愛も、一緒に赤ちゃんの面倒を見てくれる。

剛が、汗を拭きながらぼやいた。

「結婚式が、こんなに変だと思わなかった」

「そうですね」

花梨も、副管業務を燿子に丸投げしての打ち合わせの日々で、苦笑いである。

「ところで、新婦側の招待客はどうする？岩沼鎮守府の面々と高菜先輩は呼ぶとして、その嫁艦の四人も呼ばねばならんだろう？紗花さんの妹の優花ちゃんも呼ぶとして……」

「いっそ、圭一さん達も全員呼びましょう」

その一声で、新婦側の出席者が大幅に膨れ上がった。

新郎側の出席者は、田舎の両親や同期の大村奈々海夫妻や友人等を呼んで、丁度良くバランスを取った。

最終的に、宮戸島の愉快的仲間達を、共通の出席枠で真ん中に配置したのだ。

招待状を送った相手は、急な結婚式ながら出席をしてくれることになった。

そして愛は、まさかの重責を担うことになった。

そう、上司としての乾杯の音頭である。

「えー、この度は……」

作った原稿を、一生懸命読んで練習している愛。

もう一人、大変な役目を仰せ付かった奴がいる。

大垣 翼である。司会を頼まれたのだ。

最初は断ろうとしたが、親友の真摯な眼差しに折れて、司会を引き受けたのである。

そんな中、花梨と剛は京都で暮らしている両親の元を訪れていた。

「親父、お袋。報告が遅くなって申し訳ないが結婚した。霊子加速でもう子供もいる」

「申し訳ありません。戦役とその後の混乱で遅くなってしまいました。花梨と言います」

剛の両親の鐵太郎てつたろうと小夜子は驚いたが、祝福をしてくれた。

「何と。この猛獣のような男が結婚するとは、めでたいめでたい。それに赤ちゃんも生まれたとか。霊子何とかとか軍のことはよく判らんが、孫ができて安心しておるよ」

「そうですね。結婚式は一家総出で顔を出しますからね。花梨さん、世間じゃ嫁姑がどうのと言いますが、私はそういうのは好きではありませんので、実の母と思ってくださいいね」

小夜子が、にこやかに言うとは花梨が、

「有難うございます。母は早くに亡くなりました、今は父と19の継母しか親族はおりませんので、ありがたくお言葉に甘えさせていただきます」

「まあ。10代で、義理とは言え祖母になられたのですね。あらあら小夜子が笑いながら言うと、花梨は剛の両親に子供を見せる。

「剛の亡くなった上官と僚友から、一字づつ頂いて、竜馬と向日葵と言います」

「いい名前を付けてもらったな。ほれ、じいじだぞ」

「ばあばもいますよ」

『だあ』

双子の赤ちゃん達は、祖父母に手を伸ばす。

何とか挨拶回りを済ませた二人は、再び結婚式の準備に取り掛か

る。

土佐の、一番大きな結婚式場を借り切つての、結婚式と披露宴である。

結婚式は、人前式でやることにした。

会場も押さえ、招待客のリストも出揃つた。引き出物や料理も試食したりサンプルを確認したり、艦娘達や愛達のアイデアも取り入れながら、オリジナリティ溢れる結婚式を創り上げて行く。

丁度、参謀長の大塚三佐も出向が終わり戻つて来たので、大塚三佐にはハメを外し過ぎないようにチェックも入れてもらった。

こうして、皆で準備して創り上げた結婚式当日。12月24日・クリスマスイヴである。

愛は、仲人控室で右往左往していた。

もう一つ重責を担っていたのだ。

上官と言うことで、仲人を健太と二人で引き受けたのだ。

と言う訳で上司の祝辞は、部署違いだが、提督を統括する足立秋也一佐が、快く引き受けてくれた。

もちろん、大本営の七原夫妻や足立夫妻も出席してくれる事になっている。

秋奈は、まさかの紗花と同様で、妊娠九ヶ月目の一月予定日、と言う予定日間近での出席である。

そんな訳で、宮戸島からの招待客は念の為に、産科医の倉田めぐみを加えた。

急遽のオファーに、めぐみは快く引き受けてくれたのである。

余談だが、直哉の姉の優衣は10月に早々と出産を済ませ、政務に復帰している。

お手伝いさんに子育てを手伝ってもらいながらであり、名前は優菜ゆうなと名付けた。優衣の優に高菜の菜である。

---

列席者は、受付を済ませてから会場入りする。

人前式だが、チャペルでの挙式である。

会場にはクリスマスツリーが並べられており、緑と赤でコーディネートトされている。

更に陸自出身者の多い、土佐鎮守府陸戦隊員の緑の制服も、クリスマス色のように際立っている。

龍子も、小さな竜兵と葵の遺影を持って列席してくれた。

陸自の制服姿の翼が司会席に立つと、軽く息を吸ってから少し吐いて、マイクの電源を入れた。

「本日はお忙しい中、また遠方よりクリスマススイヴに、郷里 剛さんと羽佐間花梨さんの結婚式にご列席いただきまして、誠にありがとうございます。只今より新郎が入場します。正面入り口にご注目ください。どうぞ、盛大な拍手でお迎えください」

翼の言葉で、結婚行進曲がオルガンの演奏で流れる中、入り口が開くと、儀礼服を身に纏った剛が、一人歩いて来る。

盛大な拍手に包まれて真ん中まで歩き、後ろを振り向くと演奏が止まる。

「只今より、父親と共に新婦が入場します」

再び演奏が再開されると、純白のウエディングドレスに身を包んだ花梨が、将官儀礼服を身に纏った真一郎と共に入場して来る。

一歩一歩、ゆっくりゆっくりと歩いて行き、真一郎は剛の前までやって来ると、

「娘を頼んだぞ」

そう声を掛けて、自身は新婦側の列席者に加わる。

二人は前を向くと、ゆっくり手を携えて壇上まで歩いて行き、参列客の方を向いて一礼する。

「それではこれより、郷里 剛さんと羽佐間花梨さんの結婚式を始めさせていただきます。この結婚式は人前式となっております、日頃お世話になっている皆様の前で結婚を誓うスタイルとなっております。本日お集まりいただきました皆様全員が、結婚の証人となります」

そう言って、ニカツと笑うと翼は、

「まあ、二人の赤ちゃんも生まれちゃったし、後には退けないもんね！」



と、アドリブを入れる。

皆どつと笑うと、剛と花梨も顔を見合わせて笑い出す。

「さてさて、ご静肅にお願いします」

自分から笑わせておいて、皆を静まらせると、

「申し遅れましたが、私は本日の司会を仰せ付かりました大垣 翼と申します。新郎とは職場の部署違いの部下、新婦とは親友で部署違いの上官となります。不慣れな為、行き届かない点もあるかと思いますが、精一杯務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。原稿にないこと喋りますんで」

そう言つて一礼すると、一同もどつと笑う。

苦笑いしているのは、常識番長の大塚三佐とビスマルク、それに足立総監だけである。

「えー、お二人のプロフィールから。新郎郷里 剛二等陸佐。京都市に生まれ、陸上自衛隊に入隊。その後は各地で勇名を馳せ、イラクにも派遣経験のある勇者。土佐鎮守府で陸戦隊長も歴任して、何と深海棲艦撃破スコア・人間ダントツ一位の生きる人型最終決戦兵器。人類最強の男と言えましょう」

最早、完全にアドリブである。

皆がどつと笑う中、剛は妻の心配をするが、花梨も爆笑している為ほつと胸を撫で下ろす。

「新婦の羽佐間花梨一等陸尉。仙台市に生まれ、母の亡き後父親のいる羽佐間家にて、艦娘と共に過ごす。防衛大学校卒業後三尉として任官。父の補佐をして、現在の上官である笹野 愛一佐の副官として室戸、土佐と歴任した事務処理の達人です。えー、ただいま原稿にないことを言うな、との視線が送られましたので、出会いの馴れ初めについてお話しします」

皆は大爆笑である。やはり翼は、場を盛り上げる達人である。

人前式ならではの自由さで、花梨からはアドリブもどんどん入れてくれていい、との許可済みである。

「出会ったのは今年、ジレーネなんぞが現れる少し前の話。その頃は父親とは不仲な花梨さんは、強くてカッコイイ野獣の、父性溢れる剛

さんに一目惚れ。お酒の席で叱られたことから二人は急接近、結婚に至った、と言う訳であります。まー、一発命中したわけですが」

急に砕けた物言いになる翼に、どつと笑いが巻き起こる。

流石に花梨は、顔を赤らめて俯く。

「ご覧の通り、私は真面目が大嫌いな訳で、新婦から司会を引き受けるなら好き勝手やってよし、とご許可を頂いておりますので、楽しい結婚式にしたいと考えております。どうぞ皆さん、にこやかにお願いします」

翼がニコニコ顔でいうと、皆ニコニコしている。

常識大王の足立陸将も、その言葉に甘えて楽しそうに笑っている。

「では次に、新郎新婦より結婚の誓いの言葉を述べさせていただきます。剛さん、花梨さん、お願いします」

陸戦隊員が抱っこしていた子供をそれぞれ受け取ると、子供を抱き抱えたままで、

『私達は、本日ここにご列席いただきました皆様の見守る中、家族となりました。これからの人生、いかなる時も生涯変わらぬ愛を約束し、生涯家族として生きて行くことを誓います。そして、子ども達に精一杯の愛情を注いで育てて行きます』

「新郎 郷里 剛」

「新婦 羽佐間花梨」

『だあ〜』

赤ちゃん達の声に、会場は笑いに包まれる。

再び陸戦隊員が預かると、翼がコップの水を飲んでから、再び『ご静粛に』と言ってから、

「それでは、指輪の交換に入りたいと思います。指輪はご両人の希望により、ケツコンカッコカリリングをご用意しました。これは『靈子の結晶』によつて精製されます。靈子とは人間の生きる意志や力、生命力そのものであり、艦娘にとつての力の根源であります。今は海の怪獣DSビーストから得られ、とても貴重なものとなっております。リングガールは、司令官の笹野 愛一佐にお願いしました」

愛が立ち上がると、リングピローを持って二人の前までやって来

る。

剛の前でリングピローを開けると、銀色のペアのリングが入っている。

「まずは、新郎から新婦へとリングを贈ります」

その言葉で、剛は指輪を花梨の左薬指に填めて行く。

「次に、新婦から新郎へとリングを贈ります」

その言葉で、花梨は剛の左薬指に指輪を填めて行く。

「さて、皆様ご注目ください。今、私カツコカリと言いました。とある魔法のことばで真のケツコソリングとなります。ドイツ語で『この真実の愛、ここに』と言う意味だそうです。唱えよ！真実の言葉を！」

その翼の言葉に、二人は同時に唱える。

『D i e s e w a h r e L i e b e , h i e r ! 』

その瞬間、銀色のケツコソカツコカリリングが輝くと、ブラチネ白金色のリングに変わっていた。

そして指輪は、キラキラと綺麗に輝いている。

「二人の愛情ある限り、この結婚指輪はこのように美しく輝くことでしょう。だから皆さん、今後二人に会う時には、指輪に注目。キラキラ輝いてることを確認してくださいね？愛情センサーだからね！」

その言葉に、会場はどっと笑い声上がる。

「本日のリングガール、笹野 愛司令官でした。ありがとうございますました」

二人も楽しそうに笑っているのを見ると、愛は列席者に一礼して新婦側の列に戻って行く。

「皆様、二人の結婚を承認いただけますでしょうか？承認いただけるようであれば、盛大な拍手をお願いいたします」

全員が立ち上がり、盛大な拍手で迎えた。

「おーい！キスはないのかー!?キスー!?」

「アホか!？」

レ級が野次り始めると、暁が頭を引つ叩く。

その言葉に反応したのが、翼である。

「おっと、忘れておりました。原稿には書いてなかったんですが、誓い

のキスをしてもらいましょうか？」

その翼の言葉に、剛は花梨を抱き上げる。お姫様抱っこで見せ付けるようにして、口づけを交わす。

『んっ……』

「それでは、ご参列の皆様のご承認と誓いのキスを得て、ここにめでたくこの家族の縁えにしが成立となりました。ご結婚おめでとうございます」

一同が、再び拍手の嵐で迎えた。

「えー、これより披露宴会場にのご案内となります。その前に新郎新婦は、一度お色直しをさせていただきますので、先に退場いたします」

再び結婚行進曲が流れる中、お姫様抱っこのまま二人が退場する。

それを拍手の嵐で送ると、扉が閉められる。

「ああ、緊張した」

翼は、マイクを切るとぼそつと呟いた。

そして、全員が披露宴の席にやって来て、披露宴が始まる。

「さて、披露宴でも引き続き司会を務めさせていただきます。新郎新婦入場いたします」

披露宴は、仲人である健太と愛、それに招待客が見守る中、二人がタキシードと真っ赤なウェディングドレスで入場して来て始まる。

披露宴会場もクリスマス色一色で、トナカイの絵等が飾られている。

各テーブルにも、小さなツリーが飾られている。

「それでは、乾杯の音頭を、土佐鎮守府司令官で仲人でもある笹野 愛一佐にお願いいたします」

翼の紹介に、愛はグラスを持って立ち上がるとマイクまで向かう。ガツチガチに緊張している。

「ただ今ご紹介にあずかりました、新郎の剛さん、新婦の花梨さんと同じ職場の土佐鎮守府司令官の笹野 愛でございます」

深々と頭を下げると、

「このような若輩者が僭越せんえつではございますが、ご指名いただきましたので、乾杯の音頭を取らせていただきます。剛さん、花梨さん、並び

にご両家のご親族の皆様には、心よりお祝いを申し上げます。それでは、乾杯の音頭を取らせていただきますので、ご唱和をお願いします。お二人の末長いお幸せと、ご両家並びにご臨席の皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたしまして、乾杯！」

『乾杯！』

一同、コップのお酒やジュースを空けると、拍手が巻き起こる。

愛は、一礼して仲人席に戻って行くと、大きな息をついた。

健太が耳元で、

「大役お疲れ様」

と言ってくれた。

「それでは、艦娘と提督を統括いたします、四国地区警務隊長の足立秋也一佐より、祝辞を述べさせていただきます」

そう言うとき秋也が立ち上がり、原稿を取り出して、マイクの所に向かう。

新郎新婦と両家の家族が立ち上がる。

「えー、只今ご紹介いただきました、お二人の勤務先の上司の上司に当たります、足立でございます」

そう言うとき、一礼する。

足立総監にとっては、ヒヤヒヤものの時間が始まるだろう。

秋也は二人に向くと、

「諸先輩方を前に、誠に僭越ではございますが、ご指名を賜りましたので、一言お祝い申し上げます。剛君、花梨さん、ご結婚おめでとうございます。そしてご両家ご親族の皆様、心よりお祝い申し上げます。本日は、この素晴らしい披露宴にお招きいただき、誠に光栄に存じます」

そして、両家に向き直り一礼しながら祝辞を述べる。

「皆様、どうぞご着席ください」

秋也の言葉で、一同着席する。

そして、原稿をポケットにしまい込む。

「えー。私も、司会同様堅苦しいのが嫌いなので、以後砕けます。郷里のオッサンはこう見えますが、私の防衛大学の後輩でして、陸地に

足を付けていれば最強の強者です。武勇伝は数知れず。深海棲艦をミンチにしたり、イラクではテロリストを返り討ちにしたり。まあ、この人に勝てるのは、地上にはいないでしょう。核爆弾でもぶっ込まない限りは」

その言葉に、全員がどつと笑う。足立総監はしぶい顔をしているが秋奈の、

「お父さん、スマイルスマイル」

との言葉に、苦笑いになる。

「花梨さんは、女好きの父親をよく制御して岩沼鎮守府の規律を守り、四国に転属してからも若い司令官をよく補佐して、ジレーネ事変では大事なキーパーソンの一人でした。その事務処理能力と冷静な判断力と誠実さは、監査する私にとっても信頼できる存在です。これからの活躍も大いに期待しています。早速二児の母としての自覚も芽生えて来て、艦隊の、鎮守府の母としても、大いに活躍すると思われる。そんな二人が結婚するきっかけは、司会が先程述べました通り、父性に飢えていた花梨さんががっしり捕まえた結果だろうな、と思っています。猛獣を捕まえたのは、実は花梨さんの方だったと言う訳で、美女と猛獣ではなく、猛獣使いと猛獣と言う訳ですね」

再び会場からは、どつと笑いが溢れる。

「まあ……私は警務隊長という役目上、規律を正す役回りではありませんが、この二人については、安心して司令官の補佐を任せられる、と思っております。えー……私自身は独身ですが、姉夫婦や親父やおふくろを見てみると、あたたかい家庭には会話がつきものだ、と考えさせられます。意思疎通と言う意味では、ケツコンリングは生命力と意思の源でありますから、共に命と心を共有し、未永くあたたかい家庭を築いて行って欲しい、と願っています。少々長くなりましたが、これを以ちましてお祝いの言葉と代えさせていただきます。本日は誠におめでとうございます」

深々と頭を下げると、会場からは拍手が沸き起こる。

足立総監も、苦笑いの度合いが減って拍手になる。

「秋也君も良い祝辞をした……秋奈、どうした？」

「ごめん、控室に連れてって……陣痛来ちゃった」

秋奈が苦笑いすると、春人が肩を貸して一旦退場する。

それとほぼ同時に、紗花も痛みを訴える。

「眞一郎……拙いです……」

「那智、ここは任せる」

眞一郎が、紗花の肩を貸してそつと退場する。

それぞれが向かったのは、新婦控室である。

それを見ためぐみも、そつと抜け出す。

「今から病院に行っても間に合いません！ここで出産させます！」

めぐみにとって、初の同時複数出産である。

救急車を二台呼んで待機させ、ここで分娩させてすぐに救急搬送の

判断をした。

足柄と妙高もそつと抜け出して、出産の手伝いをする。

「秋奈、頑張れ！」

「紗花、しっかりとるんだ」

「これはおそらく、霊子の余波で出産時期が早まったんでしよう……」

めぐみはそう結論付けて、二人の体調管理を行う。妙高と足柄に、

赤ちゃんを取り上げる際の注意をしながら、助産をやってもらうこと

にした。

会場では余興が続いており、楽しく賑やかな披露宴になっている。

そんな中、ついに赤ちゃんが生まれた。

秋奈は男の子、紗花は女の子が生まれた。

めぐみはへその緒を切ると、待機させていた救急車に乗せて、病院

に向かわせた。

「母子共に健康だと思いましたが、病院に行かせました。向かった先は、

あの大出産をした病院ですから、お任せしましょう、私も同行します

から。眞一郎さん達は会場に戻ってください。春人さん、同行をお願い

できますか？」

「うむ、分かった」

春人が頷くと、めぐみと春人は救急車に乗り込んだ。

余興が終わったところで、妙高が翼にそつと耳打ちする。

「えー、皆様。只今喜ばしいニュースが入りました。新婦の妹に、赤ちゃん達の叔母が誕生しました。もう一人、七原家に新しい家族が誕生しました」

『えっ?』

皆が啞然とする。そりやあそうだろう、突然の大ニュースである。

「靈子は生命の源です。ここに集まった祝福の靈子で、妊婦が二名産気づきまして、無事この会場の控室で出産いたしました。二人の妊婦は、大事を取って病院に向かいましたが、母子共に健康だそうですので皆さん、温かい祝福と共に、万歳三唱をしましょう。ご起立ください」

全員が起立する。

「ばんざーい!」

『ばんざーい!』

「ばんざーい!」

『ばんざーい!』

「ばんざーい!」

『ばんざーい!』

全員拍手しながら着席する。

「いやあ、クリスマスでウエディングでバースデー、めでたいことづくめですね。今日はとってもいい日になりそうです。ではケーキ入刀とさせていただきます。ケーキは遠く南三陸の武藤氏に作っていただきました」

翼の言葉を合図に、ケーキが中に運ばれて来る。

大きなケーキで、三段重ねになっている。

「それではケーキ入刀ですが、ただの入刀では面白くないので、郷里剛さん秘蔵の三池典太で入刀させていただきます。もちろん、洗って消毒をしておりますので、衛生面も大丈夫です。まあこれも、鎮守府の自由裁量と言うことで」

秋也をチラッと見ると、秋也は笑いながら頷いた。

二人は、用意してあった三池典太を手にとって鞘から抜くと、ケー



キに刃を入れる。

そして、添えてあつたおしぼりでクリームを丁寧拭うと、待機していた刀工に鞘ごと渡す。

きちんとメンテナンスしてくれるのだ。

「それではファーストバイトです。新郎から新婦へのファーストバイトは『一生食べ物には困らせないよ』、という意味だそうです。新婦には、スプーンを用意しました」

そう言うと、係員がスプーンを手渡し、剛がスプーンで掬ってケーキを花梨に食べさせる。

「それでは新婦から新郎へのファーストバイトです。これは『一生美味しいものを作ります』、という意味だそうです。新郎には、軍用スコップを用意しました。きちんと新品を消毒しましたので、ご安心ください」

今度は、花梨にスコップを手渡し。スコップ一杯に掬うと剛に食べさせる。

剛が、口の周りをクリームだらけにしながら食べ切ると、どつと笑いが溢れる。

「それでは次にブーケトスですが、新婦から一言あります。どうぞ」

マイクを渡すと、花梨が立ち上がる。

「愛ちゃん、健太くん。健太くんの深海棲艦化で、一応は成人認定されたので、三年後、二人が結婚できるように愛ちゃんにブーケを渡します。皆、良いですか？」

独身女子の陸戦隊員が『オツケー！』と叫ぶと、愛に手渡し。

「愛ちゃんの結婚式も期待してますね？」

「はいっ、有難うございますー！」

その手渡しに、万雷の拍手が沸き起こる。

その後お色直しがあり、キャンドルサービスがあつて、ツリーの上のロウソクに火が灯される。

剛は再び儀礼服に戻り、花梨は赤と緑のクリスマスカラーのウェディングドレスに身を包んでいる。

再入場の時には、ジングルベルがBGMとなっている。

そして、余興等が行われ再び翼がマイクを握る。

「それでは、両親へ新郎新婦からの挨拶があります。異例ではございますが、新婦より先に挨拶させていただきます」

そう言うと、自らマイクを花梨に手渡す。

「私は婚外子で、認知していただいて命を頂いた恩はあれど、育てて頂いた恩はありません」

その言葉に、会場がざわつく。

「ですが、貴方の背中を、過去を見てこんなに深い愛を求めている人を、私は知りません。お父さん、貴方のお側でお仕えして数年、いろんなことを学びました。本当にありがとうございました。妙高さん、那智さん、足柄さん、羽黒さん、扶桑さん、山城さん。そして、いま病院にいる紗花さん。父はご覧の通り深い愛情を持って、欲しがる方です。父のことをよろしくお願いします」

その言葉と共に、深々と頭を下げる。この様子は、那智のスマホのテレビ電話で、病院にも中継されている。

「私は郷里家に嫁ぎますが、貴方の娘で良かった。今はそう思っています。鐵太郎お義父さん、小夜子お義母さん、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いました」

その後、剛の挨拶が続く。

そして、翼が再びマイクを握る。

「それでは両家を代表しまして、異例ではございますが新婦の父親である、羽佐間眞一郎さんより皆様へご挨拶があります」

眞一郎がマイクを手に取ると、原稿を取り出す。

「只今ご紹介にあずかりました、新婦の父羽佐間眞一郎でございます。本日、無事にこの日を迎えることができ、感無量の思いでいっぱいです」

そう言うと、原稿を折り畳んでポケットに入れる。

「私は、花梨に何もしてやれませんでした。養育費が掛からなかったいい娘だ、と嘯いてはおりましたが、娘の言うとおりで育てた恩を感じさせない父親でございました。そんな父親が、敢えて僭越ながら、お

礼のご挨拶を申し上げます。皆さま方にはお忙しい中、二人の為に  
集まりいただきました。改めてお礼を申し上げます。また、媒酌の  
労をお取りいただいた笹野 愛、大石健太両氏にも厚く御礼申し上げ  
ます」

一同に深々と頭を下げながら、愛と健太にも深々と頭を下げる。

「まだまだ至らぬところばかりの二人でございます。勝手なお願  
いではございますが、どうかこれからも温かく見守り、叱咤激励  
いただくと幸いです。ご臨席の皆様のご健勝とご多幸をお祈り  
申し上げます。本日はお忙しい中、誠にありがとうございます」

再び眞一郎が頭を下げる。

一同が再び席に着いたところで、翼がマイクを握る。

「それでは、新郎より皆様へご挨拶があります」

その言葉に新郎新婦の二人が立ち上がり、剛がマイクを握る。

「本日は、ご予定の多いクリスマス・イヴの貴重なお時間を、私達の  
為に都合付けていただき、ありがとうございます」

二人が一礼する。

「職場で知り合った私達ですが、仕事を通じて築いてきた信頼を、今  
後は新生活の中で育てて行きたいと思っています。まだまだ未熟な私  
達ですが、どうか皆様には末長く見守っていただきたく、よろしくお  
願い申し上げます。拙い挨拶ではございましたが、もう一度皆様に心  
より感謝申し上げます」

深々と頭を二人が下げると、万雷の拍手が響く。

レ級が、

「オッサン、一生花梨を守ってやれよー！」

と声を飛ばして、暁に頭を引っ叩かれている。

二人が再び席に着いたところで、翼がマイクを握る。

「これを持ちまして、郷里家・羽佐間家の結婚披露宴を、めでたくお開  
きとさせていただきます。本日はご結婚誠におめでとう御座います」

翼が一礼すると、

「本日誕生しましたご夫婦に、盛大な拍手をお送りください」

皆の拍手の中、剛と花梨が立ち上がると手を取り合って、入り口に向かつて行く。

「お二人から映像が届いておりますので、スクリーンにご注目ください」

翼の言葉で、スクリーンに映像が映し出される。

映像は、それぞれ赤ちゃんを抱っこした、剛と花梨の姿である。

『皆様、本日は私共の同僚大垣 翼の司会にご協力いただきまして、ありがとうございます。無事に、お開きを迎えることが出来ました』  
エンドロールのように、室戸・土佐鎮守府での写真が流れて、出席者の名前とメッセージが流されて行く。

最後に、皆様ありがとうございます。という文字と共に明るくなる。

「それではこれより、新郎新婦が皆様をお見送りさせていただきます。お持物等、お忘れ物がございませんようお確かめいただき、ご準備が整われた方からお開き口にお進みください。本日はありがとうございます。ありがとうございました」

「いやあー、緊張して疲れたよ」

翼の第一声が、これである。

二次会は、土佐鎮守府の大会議室にてクリスマスパーティー形式で行われた。

参加者も、土佐鎮守府の仲間達のみで、身内で行った。

宮戸島の愉快的仲間達は、それぞれのカップルで過ごしたい、と言うことで遠慮した。

眞一郎等岩沼の面々と足立総監達は、結婚式場から病院へ向かった。

紗花と眞一郎の間にできた女の子は、両親と姉から一字ずつ取って眞梨紗、春人と秋奈の間にできた男の子は、春と秋の間の夏を思わせる海人と名付けられた、と連絡が入った。両方共に母子共々元気だそうだ。

「お疲れ様です、翼さん」

翼のグラスに、ビールを注ぐ愛。

「いやあ、司会ってすごい緊張すんのね。まあ異例づくめだったけど、楽しい結婚式でよかったよ」

「そうですね」

ちらりと見遣ると、主役席では陸戦隊の面々が次々にお酌にやって来るのを、剛が笑いながら飲んでいる。

「そろそろ、アレを渡しても良いんじゃない?」

「そうですね」

燿子の耳打ちに頷くと、愛は声を上げる。

「全員注目!」

その言葉に、全員席に戻って司令官の方を見る。

「明日発令する辞令を発表します。私は、鎮守府基地司令兼駐留艦隊司令官となります。ビスマルクは駐留艦隊副司令官、郷里二佐には鎮守府基地副司令を任命します。よって、官舎への駐留義務が消滅します。鎮守府基地防衛指揮官に、小杉三佐を任命します。陸戦隊は基地防衛隊に改め、第1第2艦隊は駐留第1・第2艦隊に改めます。それと、クリスマスプレゼントです。郷里家に、官舎一式を支給します」  
二人で、いつかの為に家探しをしているのを知っていて、この家いいな、と言っていた一軒家を、先に買い上げたのだ。

スクリーンに映し出される、物件情報のPC画面を見ると、花梨と剛が、

「あつ、この家……この間二人で良いねって言った……」

「そうだな……」

と声を上げる。

「はい、自衛隊で買い上げて官舎として支給します。鍵をどうぞ」

愛は、二人にそれぞれ家の鍵を渡す。

「尚、引越しは年内に完了すること。引越し費用は、全て自衛隊が持ちます。基地防衛隊が引越し任務を引き受けます。以上!」

『ええっ!?!』

その無茶振りに、全員が驚愕の声を上げた。

2019年終了まで、後七日……

早速、翌日から引っ越しが始まった。防御隊員のおかげで、一日で済んだ。

家具と家電は、最初から一通り揃っており、後から秋也より、全部愛が大本営と予算折衝をしてくれて買い揃えた新品だ、と聞かされることになる。

気の利いた司令官に、感謝の念を抱きながら二人……四人の新生活がスタートした。

## お引越しと年末のひとつき

結婚式翌日から、慌しい日々が始まった。

花梨と剛の、新居引っ越しである。

「お手伝いに来ました!」

鎮守府司令官・駐留艦隊司令官の笹野 愛が、笑顔と共に花梨の官舎を訪れたのは、朝七時<sup>07.00</sup>の事だった。

「おはようございます。メリークリスマス」

「はい、メリークリスマスです」

結婚式当日から、竜馬と向日葵はリーヴェが預かっていて、真愛と二人で面倒を見ている。

早速二人で、官舎の荷物をダンボールに詰める作業が始まる。

と言っても、最初から殺風景な部屋なので、思ったよりも早く作業が進む。

そんな時、愛はふと机の上に飾られていた、若き日の眞一郎と母親の写真に目が留まった。

「きれいな人ですね」

「はい。私の憧れの人でした、母は。……乳がんで、発見した時にはもう……」

「……………そうだったんですか」

愛は、もしも早期に発見していたら、花梨はどう生きていたのだろう? そう考えて、首を振る。

師匠の言葉である「歴史にもしもは付き物で、禁忌<sup>タブー</sup>」という言葉を思い出して。

「ところで、健太君はどうしたんです?」

「ああ、今耀子と郷里二佐と一緒に、京都の実家に荷物を取りに行きました。何でも、趣味のものを持って来たい、と」

「趣味のもの……………」

『趣味のもの』で、大体察してしまうのは、ちよくちよく剛の官舎に行っているからである。

郷里 剛は武器収集家の一面を持っている。美術刀や現代刀を集

めて飾ったり、猟銃免許も取得しており、散弾銃やライフル銃を多数持っている。

それに、仕留めた獲物の剥製も作っている。

剥製は官舎にもあって、ル級の剥製がダイニングに鎮座していたのを見た瞬間、花梨は腰を抜かしかけたと言う。

ケーキ入刀の際に用いられた、三池典太光世もその一つであり、郷里家代々の家宝である。

因みに郷里家は、徳川家重臣で譜代大名の郷里能登守剛康家ごうりのとかみかたやすがルーツだと言われている。

怪力無双の大男であり、戦場では家臣が止めるのも無視して、足軽よりも前に飛び出では七尺もある特製の太刀『斬艦刀』——即ち艦船を斬る刀——を振り回し、一振り豊臣方の足軽を十数人撫で斬りしたと言う『戦場いくさばで剛康通った後、血と肉と屍の山が残る』との伝説も残る、要するにご先祖様からミンチメーカーなのである。

残念ながら、斬艦刀は太平洋戦争の金属類回収令により失われてしまっている。きっと現存していたら、剛は今でも使っているに違いない。

三池典太光世は、その武勇を称賛して晩年の徳川家康公から拝領した刀、と言う伝説が残っており、茎なかごに葵の御紋が刻まれており、『葵典太』と呼ばれている……らしい。

伝説の真偽は、確たる史料が少ない為定かではないが、高菜源一郎が徳川家康伝説を著した際、大典太に言及し『現存する大典太と、葵典太のいずれかが贋作ニセモノであろう』と結論付け、明言を避けた。

もしその伝説が本当だったら、そんな天下五剣の名刀を、何百年も後に子孫にウエディングケーキ入刀に使われた、今は東照大権現様となっている家康公は、草葉の陰でどう思っているだろう？

きっと、大いに笑っているに違いない。

「はい。何でも、いろいろ面白いものがあるそうですよ？地元では、サバイバルゲーム同好会にも入っていたらしくて、エアガンやモデルガンもいっぱい持ってるらしいです」

「でしようねえ」



愛の言葉に、花梨は大きな溜め息を吐いた。

新居は4LDKで、二階の二間を子供部屋に残し、一階の居室をそれぞれ寝室と、剛の書斎にする予定だ。

それぞれの居室も広く、一階の居室は12畳で、二階の居室も八畳間である。

LDKも広く、オープンキッチンになっている。

「そうだ、調理器具も買わないといけないですね?」

「えっ?今までどうしてたんですか?」

「外食専門でした」

「……………」

そう答える花梨を、じーつと見ている愛に、花梨は慌てて付け足す。

「料理ができない訳じゃなくて。その、一人だと作るのが億劫で……」

「分かります……………」

愛も、料理はできない訳ではなかったが、外食でも賄える給料なので、外食やコンビニ飯で済ませていたのだ。

最近では、リーヴエが料理をしてくれるおかげで助かっている。

たまに愛も料理を作るが、それはストレス発散の為で、殆どはお菓子類である。

そんなガールズトークをしながら荷物をダンボールに詰め終わると、据え付けの家具だけ、と言う更に殺風景な部屋になる。

早速ダンボールを、女子陸戦隊員がトラックに積み込んで行く。

そして、新居に運んでくれるのだ。

「さあ、愛ちゃん。岩沼に行きましょう?」

「えっ?」

「岩沼鎮守府<sup>実家</sup>に残して来た荷物も多少ありますし、車も取りに行かないと」

「そうになると、神戸に出て新幹線ですか?」

「いえ。羽田までのチケットが取れましたので、飛行機で行きます」

「ひゃあ…………その資金は、どこから出て来たんですか?」

驚愕の表情になる愛。直哉達から、遠方の人達には航空券を送ったことを聞いていたのだ。

「他の人には秘密ですよ。特に岩沼の皆には……父が、生前贈与と言う形で1000万ほど、慰謝料で振り込んで来たんです」

「慰謝料ですか……」

「はい、父は慰謝料と言っていました。これだけの金額どうしたのか？と訊いたら、雪絵さんの話をされました」

「雪絵さん……ですか？」

「はい、父の恋人だった人です。雪絵さんのご両親は、自衛隊に反対する政治思想の方で、雪絵さんは叶わぬ恋に絶望し、亡くなったそうです」

「そうなんですか……」

眞一郎の背景に、そんな悲恋があったと思わなかった愛は、漸く眞一郎の行動の意味が、少しだけ理解できた。

「羽佐間准将は、さぞ悲しんだでしょうね？」

「はい。それ以後の人生は空虚だ、と言っていました。ようやく七人の嫁と眞梨沙ちゃんのおかげで満たされた、と昨日の夜話してくれました」

「昨日のクリスマスパーティーの後、病院に行かれたんですって？」

「はい。七原さんの子供の海人くんも元気そうでした。明日にも、それぞれの掛かり付けに転院するそうです」

その花梨の言葉に、愛は自然と笑みが零れる。

「それは良かったです。昨日は、いろいろな記念日になりましたね？」

「そうですね」

花梨も、自然と笑みが零れる。

「話を戻しましょう。それで、三尉の頃からずっとお金を貯めていたんだそうです。何に使うつもりだったかは、教えてくれませんでした。が、慰謝料代わりで受け取れ、と。流石に受け取れないと、剛さんが固辞したのですが、掛からなかった私の養育費と孫の養育費だ、と」

「羽佐間准将も、不器用な人ですね？」

苦笑いを浮かべる愛に、花梨は楽しそうに笑う。

「器用な人だったら、宮戸島パニックを起こしてませんよ」

「ですね」

二人はベッドに腰掛けていたが、時計を見ると花梨が立ち上がり、  
「さあ、行きましよう」

「はい」

と言う言葉に、愛も立ち上がった。

その頃、健太と燿子は剛の私室に入って、腰を抜かしかけていた。  
虎や熊の剥製や鳥の剥製等が、こつちを睨んでいるようだった。

「……………これは」

「剥製……………よね？」

「ぐわははは、ワシが仕留めた獲物でな。猟が趣味で、北海道で仕留めたヒグマだよ」

「素手で……………ですか？」

「郷里二佐なら、有り得るわね」

最近、郷里アレルギーも薄らいだ燿子だったが、やっぱり苦手意識は消えていない。

この、燿子には悪趣味に思える部屋から、早く出て行きたかった。  
逆に、男子の健太は部屋に飾られているレプリカの古式銃等を、目をキラキラさせて見ている。

「ぐわははは、まさか。ツキノワグマはともかく、いくらワシでもヒグマは不可能だよ」

「……………ツキノワグマは殺ったんですか？」

「うむ」

「やっぱり人間じゃないわ」

「ぐわはははは。最近、体の調子もより良くなったから、今ならヒグマも行けるかもしれないな？」

燿子の失礼な言葉にも豪快に笑いながら、美術刀剣の数々を箱に仕舞い始める剛。

健太に、「これはどれどれの刀のレプリカで」と説明しながら仕舞っている。

レプリカの方は多種多様であり、エクスカリバー等伝説の名剣等も収蔵している。

耀子はさっさと部屋を出て行き、鐵太郎と小夜子とお茶を飲んでい

る。「そうだ、健太君。今度、陸戦隊でサバイバルゲームをやるんだが、来ないかね?」

「サバゲーですか?」

「うむ。どれ、銃はワシが好きな銃モウを買ってあげよう」

「いいんですか!」

「うむ」

「FN F2000とかありますか?」

「また珍しいチョイスをするな?普通なら、M16とかM4とかを選ぶんだが……」

「かつこいいいやないですか!?!近未来っぽくて」

「確かに。確かあった筈だから、クリスマスプレゼントに買ってあげよう」

「有難うございます!」

嬉しそうにしている、健太の頭を撫でる剛。

「今度、猟にも連れて行ってあげよう。イノシシなど、美味しいぞ?」

「猟かあ、僕も猟銃免許取れるかなあ?」

「成人扱いになってるし、大丈夫だろう」

「猟銃で、PSG-1とか許可下りないですか?」

「ああ。ワシも申請したけど、駄目だったよ」

所謂軍用ライフルは、猟銃申請をしても、許可が下りないのだ。

口径の理由で、バレット対物狙撃銃も、猟銃としては許可が下りない。

「それに、まずは散弾銃だからな。本気で猟銃免許を取るなら、申請を手伝おう」

「有難うございます!」

健太が、どんどんサバイバルボーイになって行く。

そして、健太が散弾銃免許を取得するのは、もうちよつと先の話である。

「今夜は泊まって行って、明日は京都を案内しよう」

「いいんですか？花梨さん達は……？」

「うむ。花梨も、明後日に土佐に戻るしな」

「なるほど」

翌日、健太と燿子は、剛と京都観光を楽しむことになった。

愛と花梨は、岩沼鎮守府に立ち寄った。

もちろん、岩沼の面々はまだ土佐に滞在しているので、花梨は合鍵で、岩沼鎮守府の横に併設されている眞一郎の自宅の鍵を開けると、自分の部屋に入る。

「こっちでは断捨離をしながら、運ぶ荷物を選定しましょう」

「はいっ」

「それでは……」

花梨の私物をいくつかもらいながら、以前の引っ越しの際に残っていたダンボールで荷造りを始める。

「ところで、家の前に大きな車とセダンが停まってたけど、どっちが花梨さんの車なんですか？」

「ああ、ランクルですよ」

「らんくる？」

「ランドクルーザー。大きい方ですから、荷物もたくさん積めますよ？」

「大きい方なんですか？意外だなあ」

「車は、大きい方が好きなんです」

「そうなんですなあ」

こっちでも、和気藹々と話をしながら、荷物を詰めて行く。

詰め終わったら、土佐までの超ロングドライブの始まりである。

「余裕を持って行くので、途中東京まで行ったら泊まりましょう。そして明日は神戸、明後日に土佐に戻ります」

「了解です」

そして五人が新居に合流したのは、28日である。

もう鎮守府は、仕事納めを済ませており、輪番で鎮守府常駐義務がある隊員や艦娘や深海棲艦がいるものの、今日から四日までは年末年始休暇である。

「おーい、ゴリ。手伝いに来たぞー感謝しろ」

「おっさん。暇だから、手伝いに来たよ」

レ級と秋也が、仲良く手伝いにやって来た。暁と翼は、当番艦娘・士官ではない。

翼と秋也、レ級と暁はそれぞれお付き合いが始まって、二カップル四人で仲良くなっている。

翼とレ級の頭の中がアレなので、こうやってカップル交換して行動を共にしても、浮気扱いされない。

「交換プレイとか、燃えるじゃん？」

とは、翼とレ級の言である。秋也は面白ければいいと言う性格で、暁もそういう部分ではレ級に染められて、拒否しなかった。

出かける際に、翼と暁は士官当直室で仲良くテレビ見てた、とはレ級の言である。

五人掛かりで、荷物を搬入して行く。

レ級は、私室にある深海棲艦やヒグマの剥製にギョツとするも、秋也は「おー、おっさんいい趣味だな」

と言いながら、壁に刀剣類を飾り始める。

レ級は寝室に、燿子と愛と共に洋服を仕舞いに向かった。

「ああ、おっさん。転居祝い」

秋也が、ポケットから封筒を出す。

中には、ホームセンターの商品券が入っていた。

「調理器具とかも新調しようぜ？折角のIHだしな」

キッチンにはIHコンロで、据え付け型食器洗淨乾燥機も付いている。

「おお、先輩。有難うございます」

「有難うございます……でも、何で商品券なんですか？」

「ばっか。現金渡したら、賄賂になるだろうが？」

結婚式では、きちんと現金を渡している為、秋也ならでのユーモアな行動なのだろう。

「おーい、花梨。パンティとか、どこにしまえば良いんだ？」

レ級の声で、顔を真っ赤にして、慌てて寝室にダッシュする花梨。

「し、下着は自分でやりますから、触らないでくださいー！」

「あは、これ見つけちゃった」

「っ!!」

レ級が取り出したのは、所謂セクシーランジェリー、と言うやつだ。

「あの……それは……」

「勝負パンツ？」

「……………はい」

顔を真っ赤にして、か細い声で答える。

そんな様子を、下着以外の服を畳んで仕舞っている愛と燿子は、生暖かく見守っている。

「良いじゃないですか？勝負パンツくらい、誰だって持ってますよ？」

「そうよ」

「えう…………」

援護射撃の形のフレンドリーファイアに、更に顔を真っ赤にする花梨。

ばしつと奪い取るように下着を受け取ると、顔が真っ赤なまま仕舞い始める。

「顔真っ赤だね」

「それな」

愛と燿子は、そんな花梨を見てくすつと笑っていた。

ドタバタしながら引越しの荷物運びが終わり、燿子と愛とレ級は剛の書斎でミリタリー・武器話で盛り上がる男子達を放っておいて、ホームセンターに買い物に向かう。

もちろん、商品券は剛から預かっている。

「炊飯器はあったし、オーブンレンジもあったろ？冷蔵庫もでっかいのがあって、鍋とかフライパンとか食器とかかねえ？」

レ級が、顎に手をやりながら考えている。

もちろん、外に出る時は露出度の高い服ではなく、ブラウスにスカート姿である。今は黒頭巾もなく、広島カープ野球帽を逆被りに被っている。

「ホットプレートも買いましたよ。今日は焼き肉パーティーしましょう？」

「六人掛けダイニングテーブルセットもありますからね。さすがはお値段以上の家具屋ですね」

「焼き肉か！あたし、土佐あかうし食べたい！」

「良いわね。それじゃあ、食料品も買い出しましょうか？」

食器等を買って揃えて、次に向かったのはスーパーである。

「おーい、おっさん。土佐あかうしのうまいところ10kgくらい用意して！焼肉用！はよ！」

「えっ？」

「えっ？じゃなくて、はよ」

レ級は、遠慮なくスーパーに入っているお肉屋さん、無茶振りをする。

ステーキ肉から焼肉用の肉まで、どつかりとカートに乗せる。

ストツパー役の暁がない為、歯止めが効かない。

愛と燿子も、お菓子やジュースをポンポン籠に入れて行く。

花梨は、野菜を籠に入れている。

そんなそれぞれのお買い物をした後、レジにて合流すると、価格を見て愛の動きが固まる。

「よっ……43万8590円です……」

「えっ？」

愛は、自分が払うつもりだった。

そんな現金は持ち合わせていないから、仕方なくデビットカードを取り出そうとすると、それより先に花梨がカードを出す。

「今日は、私が持ちます。司令官のお気持ちだけ、頂いておきます」

花梨が優しい笑顔を向けると愛は、

「すみません、ゴチになります」

と、頭を下げる。



家に帰ると、剛達は近くの酒屋で酒を買い出しに行つて来たよう  
で、

ダイニングで酒を飲みながら、武器の歴史について談義している。  
まだ午後四時<sup>16.00</sup>である。

健太は、酒がものすごく強く、成人認定もされてるから、大手を振つ  
て飲めるのだ。

艦娘・深海棲艦基本法の穴を突いたものであるが、成人認定された  
からには仕方がない。

と言う訳で、珍しい成人の中学一年生なのである。

「おーう！お帰り」

「おかえり、愛ちゃん、燿子、花梨さん、レーちゃん」

「ぐわははは、お帰り」

もう飲んでいる男子組に、女子組はレ級以外呆れ顔である。

「はいはい。今日は焼き肉にしますから、ホットプレートを買つて来  
ましたよ」

「健太君、昼から飲んだの？」

「秋也さんも何してんのよ？」

そんな女子組の呆れ顔に、

「ぐわははは。思ったより、引越し作業が早く終わってな」

「おうよ」

「うん、こっちは終わったよ。何か手伝うことある？」

豪快に笑う剛、それに同意する秋也、そして何か手伝おうとする健  
太である。

「それじゃあ、早いけど夕飯にしましょうか？」

『はーい！』

花梨の号令で、夕飯の焼き肉が始まる。

早速、健太の手伝いで野菜を切り始める愛と燿子と花梨。

既にレ級と秋也と剛は、肉を焼きながら酒を飲んでいる。

「ゴリは、夜の生活どうなん？」

「おっさんはやばいだろ？」

「ぐわははは。そう言うのは、花梨に『言うな』と言われててな」

「そりやそうだ。それより武器談義しようぜ、やっぱ最強は槍だろ？  
ローコスト武器だぜ」

再び武器談義が始まる。

野菜を持って来た花梨達も席に着くと、予備の椅子を持って来て八人で食べ始める。

女子達は過激なガールズトークが始まるし、男子達は相変わらずの  
武具談義である。

お酒もジュースも足りずに、愛が曜子と買い物に行くことになる。  
最終的に日本酒を花梨に飲ませ続けた結果、花梨は泥酔してしまっ  
た。

「あんのクソ親父、かつこつけやがってえ。あたしはもう立派なオト  
ナなのよ」

徳利ごと日本酒を一気飲みした後、ドンツと徳利を置く花梨。もは  
や人が変わっている。

「ところで、夜の生活はどうなん？」

「夜の生活う？」

とろくんとした目でレ級を見ると、何かを耳で囁く。

「で、毎回気絶しちゃってさあ」

「マジで?！」

レ級が、目を見開いて驚愕して聞き返すと、花梨は既にレ級に凭れ  
掛かって眠っていた。

「すう……すう……」

「ありや、電池切れだね」

「ぐわははは、ワシが寝室まで運ぶよ」

剛が笑いながら、花梨をお姫様抱っこして寝室に運ぶ。

肉も主にレ級が食らい尽くして、後は酒だけである。

「今日は皆、泊まって行くと良い」

そんな剛の言葉に甘えて、残った七人は、花梨の話を夜遅くまでし  
ていた。

翌朝。

花梨は、強烈な頭痛と共に目を覚ましたのは、言うまでもない。

「……………頭痛い……………何も覚えてない……………」

因みに、レ級に囁かれた内容を囁き返されて真っ赤になりながら、二度と泥酔するまい、と誓う花梨であった。

大晦日、愛達は司令官官舎と執務室の大掃除をしている。

真愛もお手伝いしている。

「おそうじー、おそうじー」

雑巾片手に、きゅつきゅと窓拭きを健太としている姿を見ながら、愛は去年の鎮守府大掃除を思い出していた。

「あれからもう一年かあ……………いろいろあり過ぎてあつという間だったなあ」

感慨に耽っていると、司令官官舎の扉が開かれる。秋也とレ級がやって来た。

最近秋也とレ級は、何かとセットでやって来る。暁と翼は、艦娘達と女子隊員と共に女子寮の大掃除である。

「おつす、大掃除の手伝いに来たぜ」

「手伝いに来たぞー、感謝しろー」

「足立さん、レーちゃん、助かります」

秋也とレ級を加えた七人で、大掃除の開始である。

「あきやさま。まなね、お掃除できたの」

「おお、偉い偉い」

頭をナデナデする秋也に、ニパツと笑顔を見せる推定六歳児。

真愛も、秋也には懐いている。

「れーちゃんもほめてほめて」

「うん、偉い偉い。ママのお手伝いができていい子だね」

レ級も、真愛には優しい。

大掃除が終わると、おせちとお寿司を取りに行つて、お夕飯である。

「よしー行けー！」

「ああつバカ!!右だ!右を殴れ!!」

いつもの年末恒例の総合格闘技を見ながら、秋也とレ級がエキサイトしている。

真愛も、

「あのはげたおじさんっおい！でもどうしてかみのけないの？もうこんしんじやったの？」

と、目をキラキラさせている。

因みに、選手の名誉の為に言っておくが、スキンヘッドでまだ20代である。

毛根とかそういう単語を誰が吹き込んだかは、謎である。

「はい、健太君」

「ありがとう」

健太は、愛に日本酒を注いでもらってぐいっと飲み干す。

漸く子ども達を寝かし付けたリーヴェもやって来る。

「お疲れ様。リーヴェの分も取ってあるからね、お寿司」

「ありがとう……」

ちよこんと座ると、燿子からお酒を注がれ、くいっと飲み干す。

「今年も一年、いろいろあったわね」

燿子が感慨深げに話す。

「悲しいこともいっぱいあったけど、愛ちゃんと燿子、それにリーヴェの旦那さんになれたのが嬉しいよ」

健太はジレーネ戦役を思い出す。

「……………私は、また健太君に会えて、一緒にいられるのが幸せ」

リーヴェもニコつと笑って、健太を見る。

「今年は学校での思い出は倶楽部だけだったけど、来年は学校での思い出もたくさん作りたいね？」

愛がジュースを飲みながら、しみじみと語る。

「そうだな、学校での思い出は大事だからな。オレなんか親泣かせ、先公泣かせ、他人泣かせで……」

秋也も缶ビールを飲み干しながら、学生時代の悪行の数々を自慢する。

そんな秋也に、愛はふふつと笑って、変わらない人だな、と感じて

いた。

レ級もしみじみと酒を飲みながら、  
「いやはや、茶番も終わって深海棲艦も人類と一緒に暮らし始めて、来年もいい年になりそうだ」

と、笑いながら語っている。

深海棲艦と人間と艦娘の共存が叶って半年。

来年もいい年になりそうだ。

ゴーン ゴーン

2019年が終わり、2020年になる。

今年は、東京でオリンピックが開かれる年だ。

「さて、お参りに行きましょう」

眠ってしまった真愛をベッドに寝かせると、愛は皆を振り返った。

『お〜!』

近くの神社には、艦娘達もお詣りに来ていた。

「提督、今年も宜しくね」

「New Yearも宜しくね」

「今年もお世話になります。いい年でありますように」

「去年はいろいろあり過ぎたからね」

「そうですね」

「そうだね」

「レーちゃん、みんなにご迷惑掛けてない?」

今年も喪中だから、あけましておめでとは使わない。

愛達も、

『今年もよろしく願いします!』

と、頭を下げる。

レ級は、暁に抱き付くと公衆の面前でキスをする。

「はい、新年チュー」

「なっ?」

暁の顔は真っ赤である。

レ級を含めた艦娘達と別れると、神社にお詣りに行く。  
皆で祈った願いは、一緒だった。

(今年こそ平和な一年でありますように)

しかし、おそらく今年も、ドタバタは続くだろう。

主にレ級と翼が問題を起こすに違いないのだ。

余談だが、その翼は女子隊員達と、大阪で行われる男性アイドルの年越しカウントダウンコンサートにお出掛け中である。

真愛ちゃんとまゆちゃんととしちゃん

『ねえ、真愛ちゃんは遠くに行っちゃうの?』

いつもどおりにリヴァを背負い、ひなた陽を抱っこして、真愛と児童公園にやって来たリーヴェは、公園に入った途端駆け寄って来たとし子と麻由良に、涙目で見上げられた。

「えっ?何の話ですか?」

助けを求めるように麻由良のお母さんに視線を向けると、麻由良のお母さんはいつもの天然な笑顔でニコニコと答える。

「ほら、真愛ちゃんすすくと大きくなってるでしょう?私が『真愛ちゃんは鎮守府の子だから、海に出るかもしれない』と言ったのが切っ掛けで、遠くに行っちゃうと思込んで……」

その言葉に、リーヴェは頭痛がする思いがした。

何て余計なことを子供に言ってるんだ?と。

「い、いや、二人共いい?真愛は遠くに行ったりしないよ」

真愛も二人の頭を撫でるも、二人共首をブンブン振ってイヤイヤをする。

「ちんじゅふに行つて、真愛ちゃんのママに遠くに行かないで!つて言うー!」

「うん!言わないと!」

「だから、真愛は遠くには……」

『嘘ついちゃ嫌だ!!』

二人共泣き出して、真愛も対応に困って三人共に泣き出してしま

う。

『うわあああああん!!!』

三人共に抱き付いて、わんわん泣いているのを見ながら、リーヴェは頭を抱えた。

「どうするのこれ……」

「……で、連れて来たのか?このチビ助達を?」

「そうなります」

丁度、監査と言う名の職務放棄で鎮守府に居座っていた秋也に、ちびっこトリオを連れて戻って来たリーヴェは、経緯を話した。

「真愛ちゃんのパパはどっ!？」

「すぐ出して!」

すごい剣幕で秋也に迫る、麻由良とし子。

秋也は苦笑いしながら、

「ああ、真愛ちゃんのパパは会議中……って分からねえか?今、お仕事のお話をしてんだ。ちびっこ達はそこで座って待ってな。おじちゃんがジュース持って来てやつから」

「だめっ!そうやって逃げるんでしょ!？」

「大人はそうやって逃げるんだい!」

「そーだそーだ!」

そう立ち上がるも、二人で通せんぼする。

正確には、真愛も通せんぼしている。

「おっ!」

秋也も困ってリーヴェを見るも、リーヴェの姿はない。

おそらく、こっちはこっちで秋也に押し付けて、二人の赤ん坊の世話モードに入ったようだ。

ガチャツと扉が開く。

そんな中入って来たのが、問題児レ級である。

「おっす、秋也。って何だ?このガキ共は?」

「おー、丁度いいところに来た。後任せるわ」

「は?」

キョトンとするレ級に秋也は、

「ばっか。俺も、警務隊の仕事で忙しいんだよ」

と言いつつ、さっさと通せんぼをすり抜けて敵前逃亡してしまう。

「ちよ、何が何だか説明してから行けよ!」

ボタンと閉じられた扉に向かって叫ぶレ級に、二人のちびっこが迫る。

「山田麻由良です!」



「今田とし子です！」

「大石真愛です！」

三人共ペコリと挨拶する。

「おー、まゆちゃんとしちゃんね。んで、真愛は知ってる」  
「それな」

最近覚えた言葉を、よく使ってる真愛。

「それで、雁首揃えてどうしたん？」

しゃがんで笑顔を向けるレ級。大人の男には鬼畜だが、ちっちゃい子には優しいレ級である。

「真愛ちゃんが遠くに行っちゃうって」

「本当なの!？」

「それな！」

三人の言葉に、レ級はふむ……と首を捻る。

「真愛ちゃん、どんどん大きくなって行って……」

「このままじゃ、遠くの海に行っちゃうかも?」

「それな」

レ級はそれぞれの顔を見回すと、真愛にチョップを入れる。

「あたっ」

真愛が頭を抑えると、二人のちびっこが真愛の前に立って、レ級に立ちほだかる。

「真愛ちゃんをいじめないで！」

「まゆちゃん、この人悪いお姉さんかも！」

身構える二人にレ級はあっはっはと笑うと、二人の勇敢なちびっこ達の頭を撫でる。

「まゆちゃんとしちゃんは、小学校はいつ？」

『4月だよ!』

「うん。そのな、ちよつと大きいけど真愛も四月から小学生だ。成長も安定して来て、どんなに霊子を吸い取っても大きくならないみたいだよ?」

そう言うと、真愛がレ級にギューっと抱き付いて、全力で霊子を奪い取る。

「ちよ、やめ……ぎやああああ!!!」

数秒後、レ級は寝れた顔になっていた。

「だ、大丈夫?おねえちゃん?」

「目の周りが真っ黒だよ?」

対して真愛は、肌ツヤツヤでおめキラキラしている。

成長していたのも打ち止めになって、これ以上急激な成長はしていない。

「ほらね!」

えっへんと胸を張る真愛に、レ級は明石印の栄養ドリシク霊子回復薬を飲んでから大きな溜め息を吐く。

「真愛、霊子吸い取りはやり過ぎんな、って言ったよね?ママに報告するよ?」

「ふえ、それだけはやめて!」

「それじゃ、ごめんなさいは?」

「ごめんなさい……」

シユンとなつている真愛に、二人のちびっこは頭をナデナデしている。

「元気だして、真愛ちゃん」

「そうだよ。きちんとごめんなさい出来たね?」

「うん……!」

二人に撫でられると、笑顔に戻る真愛。

「それで、同じ小学校に行くことになるんじゃないかな?」

『そうなの?』

「そうなの」

目をキラキラさせて見つめる二人に、レ級は優しい笑みを浮かべてふうつと吐息を吐いて、今度は二人の頭を両手でナデナデする。

「そう、おんなじ小学一年生。心配ならママの所に行こうか?」

「えっ?今、お仕事のお話してるんじゃないの?」

「いいの?」

「それな」

三人のちびっこ問い掛けに、レ級はニヤアと笑うと、

「良いわけ無いじゃん。でも行くぞー」

『おー!』

レ級と愉快なちびっこ達の四人は、司令官執務室を後にした。

「最近、流入して来るDSビースト以外は特に問題もなく……」

副官の花梨が、資料を説明している所に、バタアンと勢いよく扉が開いた。

「おっす！愛ちゃん。ちびっこ共が質問に来たぞー」

『きましたー!』

全員の視線が、入って来た四人に注がれる。

「真愛ちゃんのパパ、真愛ちゃんも来年小学校って本当ですか!？」

「遠くに行っちゃうって嘘だよね!？」

「それな」

三人の真剣な顔——と言っても真愛は半分巫山戯ているが——に、愛は優しい笑みを浮かべる。

「うん。真愛は、今度小学校に上がることになったんだよ？遠くには行ったりしないよ」

愛は、心の中で（私が解任されない限り）と、付け加えた。

「ほんと!？」

「やったあー!」

ぎゅっと真愛に抱き付く二人のちびっこを見ながら、皆の顔がホンワカ顔になる。

いつもは渋い顔をしている筈の大塚二佐も、笑顔になっている。

「まあ、今日の議題はこの辺ですから、会議は解散しましょうか?」

副官の花梨がコホンと咳払いをすると、皆ぞろぞろと持ち場に戻って行く。

「あの、ごめんなさい、お仕事中に」

「ごめんなさい」

申し訳なさそうにする二人のちびっこに、愛はしゃがんで目線を合わせて、頭を撫でる。

「初めまして、私が真愛のパパ。真愛とこれから仲良くしてあげて

ね？」

『はいっ！』

この友情が、ここからずっと続いて行くことを、三人は何となく確信していた。

意気揚々と、三人で児童公園に戻って来る。

そんな三人に、男の子が立ちはだかった。

「やいやい、待て」

その男の子は小学校中学年くらいで、野球のバットを持っている。

「あっ」

「帰ろ？」

その男の子は暴れん坊で有名で、小さい子をいじめている拓君と言う子だった。

「何なの、あの子？」

くいつと二人に引つ張られるのを振り払って、じいつと拓を見つめている。

「おい、チビ？何か俺様に用か？」

「用なんて無いよ。ここで遊びたいから退いて！」

「うるせえ！ここはオレが占領したんだよ！」

木製のバットを振り上げて威嚇する。

後ろの二人の女の子は、怯えて涙を浮かべる。

「怖い……」

「ううう……」

「あっ!!男の子が女の子を泣かせるなんていけないんだ!」

真愛は、二人を庇うように両手を広げて、拓を睨み付ける。

「うるせえ!!オレの言うことを聞かないやつはこうだ!」

そのままバットを振り下ろす。

「……っ!」

真愛は、ギラツとバットを睨み付けると、虚空からたこ焼き型艦戦が現れて、バット目掛けて機銃を乱射する。

ズダダダダダ!!

バットは根元から圧し折れると、カランと音を立てて転がった。放ったのは実弾である。

人間に当たれば、殺してしまえるほどの殺傷力を持った武器を、真愛はバットに向けた。

「な……!?!」

何が起こったかわからない拓に、真愛は上空を周回しているたこ焼き型艦載機に向けて命令する。

「ペイント弾装填、ファイアー!」

ズダダダダダ!!!

「うわああああああ!!!」

パシヤパシヤパシヤ!!!

拓の体は、色とりどりの水性絵の具で染め上げられて行く。

真愛の真っ白なワンピースも、近くにいた為に跳ねた絵の具で汚れて行く。

後ろの二人にかからないように、真愛は両手を広げて守っている。

「うわああ!!!助けてくれえ!!!」

「第二弾装填……ファイ」

逃げ出す拓に向かって追撃をしようと、指を上げて振り下ろそうとすると、二人がガシツと押さえる。

「もうだめ!」

「これ以上やっちゃうと、真愛ちゃんがいじめっ子だよ!」

「あつ……」

真愛は気づいてしまった……拓が泣きながら逃げて行ったのを

……

「うちの娘が申し訳ありませんでした」

「申し訳ありません」

ペイント塗れで帰って来た真愛と麻由良ととし子を見て、経緯を聞いた愛はすぐに真愛をゲンコツの刑に処し、麻由良の母経由で住所を

聞き出して、健太と共に拓の家にお詫びの茶菓子を持って来ていた。もちろん制服での謝罪である。

「はっはっは、うちのバカ息子がまた悪さをしたんだらう？いい葉さね」

そんな母の隣で、拓は神妙にしている。この恰幅のいい拓のお母さんにこつてり叱られていたのだから。

「いや、いくらなんでもやり過ぎで……本当に申し訳ありません」

隣で、同じく神妙にしている真愛の頭をぐいと下げて謝る。

「……ごめんなさい」

不満そうに謝る真愛に、拓のお母さんは豪快に笑ってから、

「うちの人は死んじやってねえ、何年も前に深海棲艦にやられて。それで女手一つで育ててただけど、まだまだ教育が足りなかったみたいだね？申し訳ないよ」

同じく、ぐいと拓の頭を下げる。

「ごめんな」

拓も不満そうに謝る。

『……………』

それから、じーっと拓の顔を上目遣いで見上げる真愛。

拓は、そんな真愛を可愛いと思ったのか、

「……そ、そんなに謝るなら、家来にしてやってもいいぞ？」

「としちゃんやまゆちゃんにも意地悪しない？」

「お、おう」

「わあい！やったあ！ありがとう！」

真愛は喜ぶと、拓に抱き付いてほっぺにキスをする。

拓は、顔を真っ赤にして振り解こうとするが、姫クラスの深海棲艦を振り解くなんて出来ない。

「わっ、ばか！よせよ!?!」

そんな様子を、三人は楽しそうに眺めていた。

因みに帰った後は、秋也を含めた大人一同による説教と、実弾使用禁止命令が下されたの言うまでもない。

遠い未来。

「なんてことがあったね?」

海沿いの道路を、並んで帰る中学生の二人。

「そうだな」

男の子の方が思い出して、少し顔を背ける。

「ちゅーしれ」

女の子の方が男の子の前に立ちはだかると、顔を突き出すと目を閉じる。

「はいはい」

男の子の方は大きな溜め息を吐くと、女の子を抱き寄せて軽く唇にキスをする。

『んっ……』

ぱっと目を開けると、するりと抱き寄せた男の子から抜け出して、

「それじゃあ、また明日ね?」

そう言つて、走つて行つてしまう。

「おうっ!!またな」

そんな彼女を見送る男の子……

これは、一つの未来のカタチである。

## 鐵太郎さんと小夜子さんの土佐鎮守府訪問記

仕事始めも終わり、一月中旬になった。

レ級は、退屈そうに門番をやっていた。

これは、この間の会議中突撃のペナルティである。

「ふぁーあ、退屈だあ」

欠伸なんかしながら、ダラダラと門の横の詰め所でスマホを弄っていると、

鐵太郎・小夜子夫婦がやって来たのが目に入った。

「じいさんばあさん、こっから先は自衛隊敷地。立入禁止だよ」

「ここには息子と嫁が働いてるでな。郷里……」

鐵太郎がにこやかに語ろうとすると、レ級の目がギロリと光って鐵太郎に襲い掛かる。

「あの化物の親父ってことは、ソートー強いんだろっうなあつ!？」

爪で切り裂こうとした瞬間、レ級の視界がグルッと回って尻餅を着いていた。

尻餅を着いた衝撃とお尻に感じる痛み……投げられた、と言うことだけは判った。

だが、どう投げられたかが理解できていない。

頭が追いついていなかった。

「えっ?」

何が起こったか解らない。呆然とした顔で、鐵太郎を見上げる。

鐵太郎はにこやかにしている。

隣の小夜子は、同じく笑いながら鐵太郎から離れる。

「何をしたか知らないけど、面白いじゃん!」

レ級は立ち上がると、再び爪を出して襲い掛かろうとし……

その直後、鐵太郎はすつと前に出ると爪を躲し、すれ違いながらチョンツとレ級の軸足を引つ掛けた。

「わつと……うわああああ!!!」

キキーツ ガシャーン!

丁度走って来たダンプカーに撥ねられて、レ級の体は数10m吹き



飛ばされ、地面に叩き付けられた。

「ばつきやろー！死にてえのか!？」

ドライバーが怒鳴る中、レ級がよろよろと立ち上がる。

普通の人間だったら、死亡案件である。頑丈な深海棲艦の体だから、中破で済んでいるのだ。

「くっ……あの爺……!!」

「ホッホッホ、敵意が見え見えだの」

「このクソジジイがああああ!!!」

三度爪を出して襲い掛かると、今度は躲されて、そのまま親指を掴まれ、後ろ手に回された。

そして、軸足を絡めながら踏ん付けた。

「いだだだだだだ!!!」

力が入らない。と言うか、力を入れると激痛である。足を踏み付けられて右肩、右肘、右手首、右親指と四点を極められているのである。

「あらあら、合気道師範の腕は錆び付いてませんか？」

小夜子は、ニコニコと鐵太郎に話し掛ける。

「ほっほっほ、まだやるかね？お嬢さん」

「いやー降参、降参するから、解いてー！マジ痛い」

左手でタップタップすると、鐵太郎はレ級とダンスを踊るように技を解く。

「はあ……はあ……さすがは郷里二佐の親父さん……」

息一つ乱してない鐵太郎に比べ、両膝に手を突いてゼエゼエしているレ級。

「ところで、爺さんたちは何しに来たん？」

「おお、そうじゃった。龍馬と向日葵ひまりの顔を見に来たんだよ」

その言葉に、レ級はポンと手を打った。

「ああー。龍馬と向日葵はいるけど、司令官のお供で母親は出張中。父親もその護衛でお供をして、今はリーヴエと真愛が面倒見てる筈だけどなあ？それに司令官の許可がないと……ん？」

頭をポリポリ掻きながらレ級が答えると、暫し考え込んだ。

「ちよつと、司令官の上司に話を付けて来るよ。まあ、事後承諾ってこ

とで、従いて来てくださいいな?」

そう言つて、司令官執務室に向かうレ級と鐵太郎と小夜子。

「と言う訳で、連れて来た、と?」

「そういう事」

今日も、査察という名の怠業サボタージュに精を出している足立秋也が、呆れた顔でレ級の顔を見る。

「まあ、俺の方で入構許可は出しておくけど、お前隊の規律何だと思つてんの?」

「おまいう」

そんな掛け合いをしている、仲のいい二人である。

もう片方の交換ペアは、只今イケナイ女子会とやらを翼の部屋で開催している。

そんな中、彼氏の秋也は自前のMacBookを持ち込んで、動画を見つつケーキを食べながら、コーヒーを飲んでいる。

司令官も副官も居ない中、割とやりたい放題である。

もちろん、普段は円城寺が回収に来るのだが、今日は円城寺は有休中で居ない。

副官の佐伯三尉は、レ級にいじめられて以来、土佐鎮守府には近付こうとしない。

秋也にとつては、土佐鎮守府は正々堂々とサボることができいい場所なのである。

「それで、司令官官舎案内しても良い?」

「良いんじゃない?」

そんな会話が交わされて、隣の司令官官舎をノックして扉を開けるレ級。

中では、リヴァと陽ひなたと龍馬と向日葵が仲良くお昼寝をしている。

「あ、こんにちはレ級さん。そちらは?」

「こんにちはーつす、れーちゃん」

それぞれ挨拶するリヴァエと真愛。

「ああ、郷里さんところのじさまとばさま。孫の顔を見に来たんだと」「そうだったんですか……」

レ級の答えにそう言うと、ふわりと温かい笑みを鐵太郎と小夜子に向ける。

「散らかってますけど、どうか寛いでくださいね?」

子ども達がやって来てからは、リビング・ダイニングテーブルはロータイプソファになっている。

鐵太郎は、早速スマホを取り出して孫の寝顔を撮り始める。

「おお、爺さんスマホ使いこなせてるのね?」

「ホッホッホ、この間教えてもらってね。今じゃインスタなんかも始めているよ」

「インスタで何を撮るのさ?」

「ほら、旅行に行ったり、猟に入ったりした時の風景や獲物を撮るんだよ」

「へー……」

一頻り孫の写真を撮り終えた鐵太郎は、風景の写真をレ級に見せて行く。

レ級も興味を示して、一緒に眺めている。

そんな様子に、小夜子がニコニコしていた。

そんな中、真愛が時計を見遣ると立ち上がる。

「リーヴェママ、おやぶんとのお約束だから、行って来るね?」

「車に気を付けるんですよ?」

「秋也様が、公園まで従いてつてくれる、つて今朝言つてた!」

「それなら安心ですね」

真愛は、自分で扉を開けると外に出て行った。

「秋也様ー、公園連れてつてー」

「おう。送つてやるぜ」

そんな声と共に、扉が閉められた。

「元気のいい子じゃのう」

真愛を見送ると、鐵太郎がしみじみと語る。

「あはは、元気が良過ぎる子で」

先日的一件を思い出して、苦笑いを浮かべているリーヴエだった。

「しかし、剛に似ず可愛いねえ？」

「そうですね、鐵太郎さん」

二人共、それぞれ眠っている龍馬と向日葵を抱っこしながら眺めている。

「しかし、何で突然来たんだ？」

レ級が、ソファに寝転んで鐵太郎とLINE交換しながら問うと、鐵太郎は笑いながら、

「突然孫の顔が見たくなってね。老後の楽しみと言ったら、旅行と孫を見るくらいしかなくてねえ」

「そうなんですよ。突然言い出したもんですから、今晚の宿も決まっていますよ」

「マジで？すぐにホテル手配するわ。その代り、アタイにも合気道教えて？」

「お安い御用」

鐵太郎の答えに、にいつと笑ってすぐにホテル検索サイトでホテルを手配すると、リビングのプリンタから予約用紙を印刷して取り出す。

「ほい、予約終わったよ」

「それじゃあ、早速合気道の手解きだね」

結局合気道講座は、守備隊員や艦娘まで受けることになり、大規模なものになることになった。

みつちりと、二日間の詰め込み講座で、守備隊員や真愛も合気道のイロハを覚えることになった。

また真愛に、余計な能力を付けてしまった……

「何だ、親父。来るなら来るで連絡の一本でも……」

「すみません、大したおもてなしも出来ずに」

高知龍馬空港で、帰って行く二人を、漸く帰って来た剛と花梨が見送りに来ていた。

「ホッホッホ、良いんだよ。孫の顔を見に来たかった、それだけだから」

「そうだよ、剛もたまには顔を出しに来なさいな？」

老夫婦は、にこやかに笑ったまま旅立って行った。

「しかし、鐵太郎さんはお強いと聞きましたが……」

「花梨、本当に怖いのは……お袋さ。あの歳で目が良くて、軸をブレさせずに物を投げる達人なんだ」

「そうなんです……今度ダーツを一緒にしませんと」

そんな会話をしながら、同じく出入り口に向かって行った。

そして翌日、郷里夫婦を青褪めさせる出来事が発生した。

鐵太郎達を乗せた飛行機がハイジャックされたのだ。しかし、それは短時間で鎮圧された。

キャビンアテンダントにナイフを突き付けて人質を取るハイジャック犯目掛けて、小夜子が投げたフォークが目命中し、突き刺さって悶絶している間に、鐵太郎が駆け寄って、裏投げで犯人を仕留めたのだった。

翌朝の新聞では「老夫婦お見事！」と見出しが付けられ、写真までデカデカと全国紙に載ることとなった。

その新聞を見た土佐鎮守府一同は「ああ、郷里二佐のご両親もまた凄かった……」と、納得するのだった。

余談だが、小夜子を京都のダーツバーに連れて行った花梨は、自身もダーツが趣味でAフライトと言う腕前なのに対し、

「ダーツなんてハイカラなもの初めてなのよねえ」

と言いつつ、ダーツバーで買った初心者向けダーツで花梨に容易く勝ってしまう、と言う『物を投げる』達人ぶりをまざまざと見せ付けることとなった。

以後小夜子はダーツが趣味となり、史上最年長のプロダーツプレイヤーとなるのだが、それはもう少し先の話である。

## 辞令

愛は、二月初めに発令された人事辞令に困惑していた。

曰く「四月一日より、笹野 愛特任一等海佐を宮戸島鎮守府司令官に任ず」と言うことだった。

愛にとっては故郷に戻る機会だったが、せつかくできた友達や、真愛のお友達のことを考えると気が重くなってきた。

人事辞令は副官や健太達も対象で、大塚二佐が土佐鎮守府司令官を引き継ぐ運びになりそうだ。

「はあ……」

愛は大きく溜め息を吐いてから、FAXで送られて来た辞令をテーブルに置いた。

「どうしたの？愛」

耀子がコーヒートを淹れてやって来ると、愛は苦笑いを浮かべながら顔を上げる。

「いやあ。宮戸島に帰れ、と辞令を受けて、ちよつと困ってるんですよ」

「良いじゃない。因みに、私は従って行くわよ」

コーヒートを差し出しながら辞令に目を通すと、愛は「そうじゃなくて……」

と付け加えてから、再び大きく溜め息を吐く。

「恵奈ちゃん達と遠く離れてしまうのはしょうがないとしても、真愛のお友達にどう説明しようか？と思って……ね」

「なるほどね。まゆちゃんにとしちゃん、それに拓くん、ちゃんと四月までに……いいえ、なるだけ早く説明しないといけないわね？」

耀子は、腰に手を当てながら辞令を手取る。

辞令対象者は愛、それに健太、耀子、そして副官の花梨、航空隊長の翼、それに暁を除く艦娘達である。

残るのは、それ以外の全員。

土佐鎮守府は、改ル級ことジエニファア率いる深海棲艦メインの鎮守府となるのだ。

大問題児のレ級が残るのは、愛にとっては気懸かりだが、暁と常識人の大塚二佐が仕切ってくれるだろう。

それに、四国警務隊長の足立秋也もいる。

……………答だった。

「おつす！警務隊長のローテーションで、東北に行くことになったぜ！」

と、届いた辞令と共に秋也がやって来なければ。

「……………」

問題児だらけの東北エリアに、問題児が東北地区警務隊長として乗り込んで来るのだ。

「それで、後任の人事はどなたが？」

「幸田美紅一佐が入れ替わりで赴任するってよ」

「ところで、元宮戸島司令官の高菜先生はどうなるんですか？」

「ああ、つけもんは昇進するぜ。大本営幕僚総監補として、大本営のナンバー2として准将に昇進らしい。数年立ったら、史上初の40代の将補の誕生だ。親父も幕僚長たる陸将に昇進だ。それで、七原のいやっさんは引退して、中岡さんが大本営警務本部長にスライドする。まあ、このへんは予定通りの人事だな」

「ですね」

そんなこんなしていると、遊びに出掛けていた真愛が帰って来る。

「ただいまー！秋也お兄ちゃん、こんにちはー！」

「おつす、おかえり」

「おかえり、真愛」

「おかえり、真愛。ジュースを用意するから、手を洗って来るのよ」

「はい」

耀子に元気よく応えて、手を洗いに執務室を後にする真愛を見送ると、愛は立ち上がって、

「立ち話もなんですから」

と、接客用のソファアーに移動して腰を下ろす。

「だな」

秋也もその対面のソファに腰掛けると、手を洗い終わった真愛が戻って来て秋也の隣に座る。

それを見計らって、燿子がコーヒーとオレンジジュースをそれぞれに差し出すと、愛の隣に腰掛ける。

副官の花梨は、副官デスクで黙々と仕事を熟している。

郷里二佐の人事は未定である。

「ところで、花梨さん」

それを思い出した愛は、そんな花梨に声を掛ける。

「はい？」

「郷里二佐の処遇ですが……」

「……少し考えさせてください。私の異動も含めて」

花梨の異動に関して、彼女なりに困惑していた。

生まれたばかりの竜馬と向日葵ひまりを祖父母の近い場所で育てるか、或いは土佐の地に落ち着いて育てて行くか。

ただ、今現在育児を担当しているリーヴエが、陽ひなた、リヴァと共に宮戸島に戻ってしまう為、戻った方が良いのではないか？

そして、私事わたくしごとに裁量権を使って、夫の人事に介入して良いものかどうか。

「ばっか、考えるなら一択だろう？使えるもんは使っとけ」

秋也は、そんな彼女の悩みを見透かしたように口を挟んだ。

そんな秋也の態度に、花梨は大きな溜め息を吐いた。

「はあ……皆さん、自衛隊の人事を何だと思ってるんですか？」

「そうは言いますけど……」

愛も秋也と同じ考えを持っていた。そして、自由裁量で一つの人事案を大本営に提案しようと思っていた。

花梨と剛を岩沼鎮守府に戻す、と言う人事案である。

「抑々私は、花梨さんを連れて行く気はないです」

「えっ？」

そう言っていると、立ち上がってデスクに戻り、司令官パソコンを使って足立陸将総監にメールを入力した。

——この機会に、郷里夫妻を岩沼鎮守府に配置出来ませんでしよう



か?——

「と言うメール内容だった。」

それを送信すると、直ぐに足立陸将から返事が返って来た。

——大本営としてはこれを可とするも、岩沼鎮守府司令官の了解を得て欲しい——

と言う返信内容だった。

直ぐに受話器を手に取ると、岩沼鎮守府に電話を掛けた。

『はい、岩沼鎮守府、秘書艦の妙高です』

『もしもし、妙高さん、お久しぶりです。土佐の笹野です』

『愛ちゃん、急にどうしましたか?』

『羽佐間准将をお願いできますか?』

『はい、直ぐに准将にお繋ぎします』

その会話内容で、花梨はもしや?と思いつつながら愛の方を見ている。秋也は、愛のやろうとしていることが判ったようで、ニヤニヤし始める。

『羽佐間だ。愛ちゃん、何か用かね?』

『四月の人事異動で、宮戸島鎮守府に異動になりそうです』

『それは高菜から聞いている。それで、本題は何かね?』

『その人事異動で、岩沼鎮守府副官と……そうですね、副司令官に補職したい人物がいるんです』

『花梨と剛君か。良いだろう、了解した。本人が希望したら、そのように計らおう』

『ありがとうございます』

愛が電話を切ると、花梨はその予感が的中して、ジト目で自分の司令官を見遣った。

『そういう事ですか……』

「土佐に残り、大塚新司令官の副官になるか、岩沼に行くかは、花梨さんと剛さんと相談して決めてください」

真面目な顔をして花梨に向き直ると、花梨は立ち上がった。

「……剛さんと相談します。席を外してよろしいでしょうか?」

「はい、副司令官執務室で相談して来てください」

愛のその返事に敬礼すると、花梨は執務室を辞去した。

「何れにせよ」

それを見送ったあと、秋也が口を開いた。

「全ては大貫 悟のせいだな」

「……大貫……さんですか？」

「大貫 悟……いや、大垣 守は死んだのよ？」

秋也は、あまり理解が追いついていない愛と燿子に向き直ると、

「大貫 悟はどこかで生きています。犯人の目星はついてんだよな。丁度政界には長女<sup>優衣</sup>、財界には長男<sup>直樹</sup>、そして大本営のナンバー2に次男<sup>直哉</sup>が充てられる。そういうこった」

「……………」

「大体、浦の星転移事件も大貫 悟の仕出かした事なんじゃねーの？」

「……あれは事故ではなかった、と言うことですか？」

「まあね」

「そうになると、秋也さんは高菜源一郎が大貫 悟だと？」

「さあね。別にどうでもいいよ、そんな事は。つ<sup>高菜</sup>け<sup>直哉</sup>もんが『未完の大貫 悟伝が完成した時、反艦娘派に致命的な一撃を与えるだろうね』と言っていたよ」

「……………」

「どつちにせよ、どうでもいいよ」

「ジレーネ戦役は……本当に必要な犠牲だったんでしようか？」

愛は、問い掛けずにはいられなかった。

「……………さあね。少なくとも『無駄に死んだ』奴は誰一人いなかった、と思うほかないよ。心情的には」

「……………」

秋也は、少し遠い目をしてから再び愛に向き直りそう言うと、愛は何も言えなくなっていた。

「まあ、今現在脱柵した艦娘が海賊行為を働いたり、害獣化してる深海棲艦が暴れていた。何より、こつちが重要だ。全世界的な深海棲艦の危機が去った今、テロリズムの危険もある。死んだ奴等には悪いが、茶番を続けてたほうがマシだった、と言う見方まである」

「……………」

「テロねえ……中東では過激派武装組織が反政府勢力として大きな勢力を伸ばしているって聞いてるわ」

そう。全世界的な深海棲艦の危機やジレーネ戦役の後、世界を待っていたのは、過激派による世界的な治安の悪化である。

ソマリア沖では日常のように海賊が略奪行為を働いており、脱柵した艦娘やハーフェンに従わない深海棲艦の一部がそれに加わっているのだ。

「日本が例外だと思ふなよ。テロと言うのは何時何処で起きるか判んねえ。だからこそ、艦娘は必要だし、浜松警備保障と言う民間軍事企業がなんだ」

「……………」

「そうね……………」

二人は、秋也が珍しく真面目に語るのを、真剣な顔つきで聞いている。

隣の真愛は首を傾げたままだが、秋也の方を見ている。

「厄介なのは、反艦娘派の残党だ。自衛隊内にもそう言う勢力がないとは言えないからな、クーデターと言うこともゼロじゃねえよな。その時に艦娘が相手をするのは、人間なのかもしれない。『艦娘の艦砲が人を殺す日』が来るかもしれない」

「そんな未来は嫌ですね」

「そうね……………」

二人が返す言葉に秋也は頷くと、コーヒーを飲んでから口を開く。

「大貫 悟は今影となった。親父やつけもんを中央に配置するのは、<sup>大貫 悟</sup>やつの予定通りなのかもしねえな。つけもんは、結局『導き手』だったんだらうね。そして、いずれは大本営幕僚総監として指導者になるのも、予定通りなんだらうよ」

「……………見て来たような嘘、にも聞こえますね」

「そうね」

その愛と燿子の言葉に、秋也はフツツと笑うと言葉を続ける。

「嘘だよ」

「えっ？」

二人が絶句するのを気にせずに、秋也は続けた。

「証拠はどこにもないんだ。高菜源一郎が全ての黒幕だったとしても、大垣 守が世界線を超えてやって来たとしても、別世界で黒澤ルビイという子が提督をしている世界があつたとしても、物的証拠はない」

「でも、私は確かにルビイちゃんと出会って！」

「ばっか、そんなの誰が信じる？」

愛が立ち上がり言葉を荒げるのを、秋也はピシヤリと斬つて捨てた。

「もしかしたら、マルチバーストラベルが実現するかもしれないけど、そうなるまでは愛ちゃん達が体験した出来事はお伽噺に過ぎない、つてこつた」

「むう……よくわからないよお」

黙った愛と燿子の代わりに真愛が口を開くと、秋也は真愛の頭を撫でた。

「結局は『分からないものは分からないものとして、ありのままに受け入れる』事しかないんだろうね」

秋也はそう言うと、すっかり冷めてしまったコーヒーを飲み干した。

「大事なものは、今俺達にできることをすることなんじゃないかな？愛ちゃんは何れ防大に進むんだろ？三尉からやり直すだろ？それで――」

秋也は、敢えてその言葉の先を言わなかった。

「まあ、次世代の期待の星って訳だ。愛ちゃんだろ？大村んところのなっちゃんだろ？真愛だろ？もしかしたらその頃には、自衛隊は正式に軍になってるかもしれないねえな」

「今の政権で、そういう動きがありますからね」

「それを見届けたら、俺は退役しようと思ってるよ」

「……全ては」

愛は、口を開いてから少し躊躇して、

「大貫 悟の仕業だった、ってことですね」

そう言うと、自分の人生設計をここまで狂わせた、大貫 悟なるクソジジイを殴りたくなる思いだった。

---

結局、花梨は岩沼行きを承諾することになった。

郷里夫婦の新居は、三ヶ月と少し、と言う短い期間で別れを告げる事となった。

「なあに、岩沼でどこかマンションを借りれば良からうて。それに、竜馬も向日葵も眞梨紗ちゃんと一緒に育ったほうが良いだろう」

この剛の言葉で、花梨は再び父の副官に戻ることを決意したのだ。

戻って来た花梨は、一言だけ「岩沼に赴任します」と愛に告げると、再び副官の仕事に戻った。

そんな花梨の姿を見て、秋也と愛は悪戯っぽい笑みを花梨に向けていた。

## 春は別れの季節

「真愛」

「なあに？」

その翌日だった。

司令官執務室のソファーに向かい合って座る、愛と真愛の母娘の姿があった。

隣には健太が腰掛けていて、真愛の隣には燿子が座っている。

「ちよつと大事な話があるから聞きなさい」

「うん」

「四月から宮戸島に帰ることになったの。辞令が出て、宮戸島の司令官になれ、って」

「……………えっ？」

真愛の動きが固まった。まだ未成熟で、小さな世界の彼女にとっては衝撃的な言葉だった。

「真愛、としちゃんとまゆちゃんと拓くんとはお別れしなきゃならぬのよ」

燿子の言葉に、真愛の瞳からは自然と涙が溢れている。

「悲しいよね……………としちゃん達のママには伝えてあるんだけど、どう伝えたらいいかって。真愛のお口から伝えられる？」

愛の問い掛けに、真愛は首を横に振った。

「だよねえ、やっぱり私から……………」

ばたんっ！

「こんにちはー！」

「……………うっす」

元気なとしちゃんとまゆちゃんとは対照的に、元気がない拓くん。

「こんにちは、直ぐにジュースを用意するわね。健太、愛ちゃん、真愛、この話はまた後でね？」

「そうだね」

「うん」

「……」

燿子の言葉でソファアを明け渡し、愛は司令官デスクに着席し、健太はその隣のパイプ椅子に座る。

冷蔵庫からオレンジジュースを取り出してグラスに注ぐと、小さなお客様に差し出してから、燿子も愛の反対隣のパイプ椅子に腰掛けて、すっかり冷めてしまったコーヒーに口を付ける。

ソファは、真愛の隣に拓くんが座り、その対面にまゆちゃんとしちちゃんが座る。

「どうしたの？真愛ちゃん。元気ないね？」

異変に気づいたまゆちゃんが声を掛ける。

「おやぶんも朝から元気ないから、心配だったんだよね」

「うんうん」

「……………」

「……………」

話を始める二人を他所に、何も言えない二人。

「それで、拓くんが用事があるんだって」

「そうそう」

その言葉に、真愛が意を決したように三人に向かって言った。

「まゆちゃん、としちゃん、真愛ね、お別れしないといけなくなっちゃったの」

「えっ？」

「ママに、じれーつてのが出て、ママの生まれたところにお引越しいないといけなくなっちゃったの」

「……………」

まゆちゃんとしちゃんは、衝撃を受けて言葉が出なくなっていた。

「……………皆、おれもなんだ。おれも皆とお別れしなきゃならないんだ」

「「ええっ!?!」」

拓くんの告白に、今度は真愛を含めた三人が衝撃を受ける。

「拓くんはどこに行っちゃおうの?」

「遠く。お父さんが『させん』されて、北の北の方の東松島ってところに転勤になって、宮戸島ってところに引っ越しを……」

「「えええっ!?!」」

今度は、愛達が衝撃を受ける番だった。

「おやぶん、真愛が行くところも宮戸島だよ?」

「そうなのか!?!」

「うんっ! 親分とは一緒だね、よか……」

「よくない!」

としちゃんとまゆちゃんは、二人共立ち上がって愛に詰め寄る。

「その、じれーってやつは取り消せないんですか!?!」

「そう、真愛ちゃんならうちで預かって!!」

そんな二人をまつすぐ見つめると、愛は話し始めた。

「ごめんね。それは取り消すことはできないんだ。二人にとっては遠くに離れちゃうけど、お手紙を遣り取りできるように、二人のママには引越し先を教えるし、遊びにも来ていいからね」

「「……………」」

涙目になる二人を、真愛も立ち上がってぎゅっと抱き締める。

「真愛もいやだけど、ママと離れるのはもつとつらいから……ごめんね……………」

とうとう真愛は堪え切れずに、声を上げて泣き出した。

釣られて、としちゃんとまゆちゃんも泣き始める。

「と、言うことがあってね」

「そうなんだ」

倶楽部の面々にその経緯を話すと、恵奈が代表して答える。

「と言う訳で、転校することになりそうなんだ、私達も」

「僕もだね」

「あたしもよ」

その言葉に恵奈は、



「そつか……ちやんとメールするからね、返事してね」と笑顔を作る。

美雪も、

「休みの時には皆で遊びに行くからね！」

杏子も、

「東北の美味しいもの食べに行くからね」

最後に真由が、

「寂しくなりますね」

そう言うと、全員コクリと頷いた。

「さあ、残り短い倶楽部の活動をやろうか？」

部長の恵奈の言葉に全員が、

『おーっ！』

と声を上げた。

その頃、四国警務隊オフィスでは、秋也が引き継ぎの為の資料を作成していた。

「隊長」

「何だ、円城寺か」

珍しく真面目に仕事をしている上官に、副隊長である円城寺が声を掛けた。

「小官にも、正式に辞令が下りました」

「そうかそうか、お前とお別れだな？」

「はい。東北管区警務隊副隊長として、辞令が下りました」

「……………お別れじゃねえじゃん。お前の後任は？」

「軽巡洋艦球磨が、警務隊副隊長としてやって来るそうです」

「そうかそうか。それなりに真面目な幸田をよく支えてくれるだろうな」

その言葉に、円城寺が頷いた。

「しかし、隊長」

「あんだ？」

「真面目に仕事をなさるとは珍しいですね。雪でも降りますかな？」

「しようがねえだろ。佐伯が人事部に呼び出されてるんだから」

「佐伯とはお別れかもしれないな」

「かもな。あいつには幸田の副官をやってもらった方がいいかもな？」

そんな中、佐伯三尉が辞令を持って戻って来た。

「隊長、副隊長。四月より、東北管区警務隊副官を拜命することになりました」

「そうかそうか。あつちは、問題児だらけだぞ」

「そうなんですか？」

きよとんと首を傾げる佐伯に、秋也はニヤニヤと笑う。

「おうよ、お前さんは押しが弱いから、羽佐間准将に食われないうように気をつけるんだな。どうせ、恋人いない処女ヴァージンだろう？」

「隊長お、その言葉はセクハラですよ。それに私にだって、恋人の一人くらいいますよう」

「で？誰と付き合ってるの？」

「円城寺さんです」

「ですな」

「……………えっ？」

知らぬは秋也ばかりである。

「何、お前等付き合ってるの？」

「はい。それで人事部に掛け合って、副官が空席になる東北での勤務を希望した訳です。人事部にも、あの問題児の副官を喜んで引き受けるなら、と快諾していただきました」

「お、おう……………」

自分のことは棚に上げて、こいつ等自由過ぎるんじゃないか？と思う、秋也だった。

「で、ヤツたの？」

「それこそ、セクハラですよ」

「円城寺は？」

「ノーコメントですな」

黙秘を貫く二人に、秋也は大きな溜め息を吐いた。

「はー、初々しいな、くっそ」

「隊長だつて大垣三佐がいらっしゃいますよう？」

「ぼつか、あれは彼女と言うよりセフレだ」

「……………セクハラですよ」

セフレと言う単語と共に、顔を赤くする佐伯。

「ぼつか、事実を述べたまでだよ」

「それを、七原妹の旦那本部長が受け入れるとは思えませんかね？」

円城寺の言葉に、秋也は七原の義弟の顔を思い出すと、

「うん、俺が悪かった」

と謝ると、佐伯も笑顔に戻る。

「うん、それでいいですよ。今日の夕飯は隊長がご馳走してくれるんですよね？ 私焼き肉がいいですよ」

「お、おう」

「私もご馳走になりますかな？」

佐伯も、この半年間でずいぶん強くなったな、と秋也は考えていた。何れにせよ、信頼できる部下と東北に行けることは喜ばしいことだろう、と考えながら、秋也は執務を再開した。

---

遠い未来。

「なんてことがあったね？ 皆で泣いて…………」

宮戸島の海沿いの道路を、並んで帰る中学生の二人。

「そうだな」

男の子の方が思い出して懐かしそうにする。

「ちゅーしれ」

女の子の方が男の子の前に立ちはだかると、顔を突き出すと目を閉じる。

「はいはい」

男の子の方は大きな溜め息を吐くと、女の子を抱き寄せて軽く唇にキスをする。

『んっ……』

ぱつと目を開けると、するりと抱き寄せた男の子から抜け出して、腕を組む。

「じゃあ、行こうか？」

そう言つて足を進める。

「おうっ!!」

そんな彼女と共に歩き始める。

そして、やって来た宮戸島鎮守府。

そこでは、女性提督が執務をしていた。

彼女は顔を上げると、にこやかに笑顔を向ける。

「ああ、いらっしやい、おかえり」

これは、一つの未来のカタチである。

## 帰郷への旅立ち

三月は、慌しく過ぎて行った。

終業式を終えた愛達は、帰って来るとすぐに引越し作業に追われていた。

艦娘達も、自分のお引越しの準備で大忙しである。

借りている大型トラックに荷物を積み込み始めている。

既に郷里家の荷物は積み込み終えて、あとは艦娘達と愛達の荷物だけだった。

そんな中、倶楽部の皆も手伝いに来ていた。

「寂しくなるね」

恵奈が、引越し作業中にぽつりと漏らす。

「そうだね」

ダンボールを仕舞いながら、愛も答える。

「ま、夏休みには東京で会おうって決めてるしき！」

美雪が、元気付けるように明るく言う。

続けて杏子も、

「そうだよ、東京でも、ボーチャでもお話できるよ」

「そうですね」

更に真由も頷く。

「愛ちゃん、そろそろ挨拶回りしない？」

「そうよ、皆に挨拶回りに行きましよう」

健太と耀子がやって来ると、そんな倶楽部のカルテットに荷物を任せて、まずは港へと向かった。

港では、陸戦隊員達が日々の鍛錬を行っていた。

愛達三人がやって来るのを見つけると、小杉三佐が気づき、陸戦隊員達も揃ってやって来て敬礼する。

三人も、姿勢を正して答礼を行う。

「笹野一佐達は挨拶回りかい？」

「はい、本日が最終日ですから」

愛が答え、健太が一步前に出ると、小杉三佐は手を差し出す。

「健太君も頑張つてやりなさい」

「小杉三佐の教えは、あつちでも実践します」

その差し出された手を両手で握り返すと、陸戦隊員達からも「頑張れよ」だの「末永く幸せにやってけよ」だの、やんややんやの大騒ぎになる。

それを咳払い一つで収めると、小杉三佐は続ける。

「君達の年齢にしては、多くの血を流し過ぎた。それはきつと、何らかの形で人に貢献できる優しさに繋がる、と信じたい。人は、辛い思いをするとその分だけ優しくできる、と言われてるからな」

『はいっ』

小杉三佐は続ける。

「土佐鎮守府でのいい思い出も悪い思い出も、大人になったら青春の一ページとなる。『俺』もそうだったからな」

「小杉三佐の青春時代はどんな思い出だったんですか？」

愛が問うてみると、小杉三佐は軽く肩を竦めた。

「俺の趣味は絵でね、元々あまり裕福ではない家庭に育ったから、美大は諦めざるを得なかった。そこで、防衛大学校に入りながらも、独学で絵を学んだんだ。……そうだ、忘れていた。ちよつと饞別を渡すから待っていてくれ」

そう言うと、小杉三佐は官舎へと走って行ってしまった。

戻って来ると、一冊のスケッチブックを差し出した。

「これを渡そうと思っていたが、何かと郷里一佐から引き継ぐことが多くてね、今日になってしまったよ。君達も、東京で予定外の滞在を強いられていたし」

「あり……がとうございます」

愛が受け取って開いてみると、そこには在りし日の歓迎会の光景や、皆の日常を描いたスケッチだった。

愛は段々と司令官の顔へと行って行き、そして母親の顔になって行ったのが判る。

そして健太も、段々男の顔になって行く成長記録になっている。

そこには、今はもう死んでしまった笠原や岩崎の姿も、記録されていた。

「……………」

「下手な絵で申し訳ないが、受け取ってもらいたい」

「はいっ、大事にしますね!」

「うむ、では俺は訓練に戻るよ。見送りには顔を出すがあつちでも元気でな」

「はいっ」

---

続いてやって来たのは艦娘・女子寮である。

ロビーでは、暁と愉快的な深海棲艦達がティータイムをしていた。

「お、司令官じゃん」

レ級がその姿に気づくと、暁と立ち上がって、空いているソファーに腰掛けさせる。

その間に、ジェニファアが急須でお茶を淹れる。

「司令官達は挨拶回りかしら?」

暁が再び腰掛けると、三人は頷いた。

「そうだ、司令官。土佐への留任許可ありがとうね」

暁が切り出した。

暁はレ級と恋仲であり、そしてレ級を一人にすると碌な事がないと判って、この土佐への留任を強く望んだのだった。

そこで愛は、大本営に連絡を取って、土佐鎮守府艦隊の秘書艦として残すように、交渉していたのだった。

大本営も、硫黄島事変の一件で大きな借りを作っている為、快諾しての人事となったのだった。

「レーちゃんと離れ離れになるのも可愛そうですし、最初からそのつもりでいました。硫黄島事変の一件で足立さんをお願いし易かったのもありますし、何よりレーちゃんだけだと何やらかすか……」

「あー、そうやってボクを問題児扱いする」

「実際問題児でしょうが」

愛の言葉に不満顔のレ級に、嗜めるように暁が口を挟むと、ジェニフアーヤル級達はどつと笑う。

更に不満顔になりながら、羊羹を頬張るレ級に愛は、

「まあまあ、機嫌を直して。暁と仲良くやってね?」

「そうよ、暁の言うことをきちんと聞くのよ?」

愛と燿子の言葉に、レ級は笑顔に戻る。

「うんうん、暁のいうことなら何でも聞いちゃう」

「もう、照れるじゃない」

今度は暁が顔を赤らめると、一同がどつと笑った。

ジェニフアーが頃合いを見計らって、

「この鎮守府は、艦娘と深海棲艦の合同鎮守府になるわ。戦艦水鬼姉さんはいなくなってしまうけど、姉さんの代わりに皆でこの土佐の海を守って行くわ」

そう言って、ロビーに飾られた戦艦水鬼の肖像画を見上げると、全員視線がそこに向かった。

小杉三佐に頼んで、描いてもらったものなのだ。

記録映像を元に描かれたそれは、彼女の遺影と言っても差し支えないものだった。

愛と健太と燿子は立ち上がると、肖像画それに敬礼する。

「これからも、皆を見守っていてください。戦艦水鬼さん」

数十秒続いた敬礼を解くと、再び腰掛ける。

その後は、女子会トークのノリで健太が只管詭われて、健太の顔が真っ赤になったのは言うまでもない。

参謀長執務室にやって来ると、本日まで参謀長、そして四月からは土佐鎮守府司令官となる大塚二佐が執務をしていた。

「失礼します」

「司令官ですか、挨拶回りと言ったところですか?」

「はい。大塚二佐には、いろいろとお世話になりました」

愛がそう言うと、「まあ掛けなさい」とソフアーを勧める。

三人がソフアーに腰掛けると、大塚二佐も立ち上がり、愛達の対面



に腰掛ける。

「私は、愛ちゃん、君の引き立て役だったと思っている」

そう言うと、三人はその発言の意図を図りかねて首を傾げる。

「私が、この中学生提督の参謀長として赴任した時に、如何にして君の顔を立てながら職務を遂行するか考えていた。だが君は、努力と才能で私の予想以上のことをやってのけていた。異世界では、あの高菜提督に降参をさせるくらいに成長した。その努力を忘れないように、頑張ってやって行ってくれと嬉しい」

「はいっ。頑張ります！」

「よろしい。君達が土佐から離れると寂しくなるなあ。私も岩崎、笠原と僚友を失ってしまったが、死んだ人間の為にしてやれることは、生きている人間が歩みを止めないことだ」

参謀長執務室に飾られている、室戸鎮守府時代の主だった戦死者と坂本や葵の遺影を見上げる。

「この鎮守府にも、四月には異動でやって来る人員もいる。君が守つて来た海を、今度は私が守つて行く番だ、と思つている。君には及ばないが、私も頑張つてみるでしょう」

「はい、またどこかで会いましょう」

誰もいない司令官執務室にやって来た。

そして隣の司令官官舎に入ると、もう全てがなくなっていた。

娯楽部カルテットが、荷物の運び出しを終えていた。

「……………」

「春は別れの季節ね」

「そうだね」

三人が司令官執務室に戻ったところで、娯楽部カルテットが入って来る。

「荷物の積み込み終わったよ！もういつでも出発できる、って郷里夫妻が待ってるよ」

恵奈の言葉に、愛はニコツと笑顔を向けて、

「ありがとう」

と言って、軽く抱擁する。

それから美雪、真由、杏子にも軽く抱擁すると、皆で外へと出て行った。

「ちよつと先に行っていて」

愛は、司令官執務室に残った。

「今まで、お世話になりました」

そう言って、司令官デスクに振り返ると敬礼した。

外から燿子の、

「皆お見送りに集まってるわよ！」

と言う声で敬礼を解くと、その誰もいない執務室をあとにした。

完